
First Kiss

式部雪花々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F i r s t K i s s

【Nコード】

N O 5 9 5 E

【作者名】

式部雪花々

【あらすじ】

ずっと片思いだった彼にフラれた琴美。そして雨の中で出会った少年。ド近眼の琴美は少年の顔が見えなくて・・・本編完結済み。
1,000,000 HIT記念企画特別番外編をサイトにて公開中
デス！ 電子コミック化されました！詳細は当サイトにて <http://www.cherry-sozai.com/>

- P r o l o g u e -

3月14日。

ホワイト・デー。

・・・そして、あたしの誕生日。

今日・・・この日が一番嫌いな日になった。

たった今、失恋したから・・・。

中学を卒業するこの春、3年間ずっと好きだった男の子・高杉和也
くんに

バレンタイン・デーにチョコを渡して告白した。

その返事がホワイト・デーの今日返ってきた。

“ タイプじゃないから。”

たった一言。

それだけ。

そんなワケであたしは自分の誕生日が大嫌いになった・・・。

“タイプじゃないから。”

そう言っただけだった彼・高杉和也くんは踵を返し、

あたしに背を向けると颯爽と歩いていった。

少し離れて待っていた彼女のところへ。

なんだ・・・彼女いるんじゃない。

・・・わかってたコトだけ。

何人目の彼女なんだろう・・・？

たった今、フラれたばかりなのにそんな疑問が頭に浮かんだ。

はっきり言っただけ高杉くんはカッコイイ。

背がスラっと高く、顔も鼻筋が通っていて所謂イケメン。

サッカー部のエースで女の子に優しいからモテる。

・・・てゆーか、モテまくる。

だから連れて歩いている彼女はいつも違っていたりする。

チャラ男。

・・・なんでそんな人を好きになっただんだろう？

彼女がいるのに“タイプじゃないから。”と、あたしに言った。

普通ならここは“彼女がいるから・・・”とかでしょ？

もし・・・あたしがタイプだったら？

どうなっていたんだろうか・・・？

さっきの子と別れてあたしと付き合ってたのかな？

・・・そんなワケ・・・ないか。

あの子・・・綺麗な子だったな。

髪が長くてミニスカートがよく似合う細くて綺麗な足だった。

高杉くんと手を繋いで歩いて行く時にもっこり笑って、

すごく可愛いな・・・と同性のあたしが見てもそう思った。

それに比べてあたしはミニスカートはあまりはかないし、

目が悪いから眼鏡だっけかけてる。

髪は長いけど・・・。

友達みんな「琴美は眼鏡さえかけてなきゃ絶対モテる！」

と言っけれど・・・

そんなコトないと思う・・・。

高杉くんと彼女が去って行った後、さっきまで青々と晴れていた空がいつの間にかどんよりと薄暗く曇っていた。

降り出しそうな空・・・。

あたしの心の中とリンクしてるみたい・・・。

ゆっくりと空を見上げると大粒の雫がポタポタと落ちてきた。

あたしの涙と一緒に頬を伝って顔を濡らしていく・・・。

このままずっと立っていても仕方がない。

あたしはで雨宿りをしようとすぐ近くにあつた雑貨屋のテントの下に駆け込んだ。

雨に濡れた眼鏡を外して、バッグの中を手探りでハンカチを探した。

・・・チリン・・・。

バッグの中で小さな鈴の音が鳴った。

携帯につけている恋愛成就のお守り。

ハート型の小さな鈴のストラップ。

きれいな桜色とかわいい鈴の音がすごく気に入って、

バレンタイン・デーの時にチョコと一緒に

買ったんだっけ……。

全然きかなかったじゃん……。

あたしは携帯からお守りを外した。

……捨てようかな。

でも……どこに？

このまま家に持って帰りたくないし……。

どうしよう・・・。

掌に乗せたままのストラップをじっと眺めていると、

突然、雷が鳴った。

その大きな音に驚いてあたしの体がビクツとした瞬間、

掌からずりりとストラップが滑り落ちた。

あ・・・。

・・・チリン。

ハート型の鈴が小さく鳴って地面に落ちたのがわかった。

けど・・・拾う気にならない。

どうせ捨てるつもりだったし・・・。

・・・とは言え、こんなとくに放置して行くのも気がひけるな。

拾おうか・・・拾うまいか・・・

「・・・はい。」

え・・・？

ボーッとしたまま考えていると頭上から声がした。

その声の主を確認すべくあたしは顔をあげた。

う・・・眼鏡外してるから全然見えない・・・。

辛うじてわかるのは、あたしが見上げるほどの長身に茶髪。

そして・・・手には桜色の小さな“何か”を持っているのがぼんやりと見えた。

あたしが落としたストラップみたいだ。

その人はストラップをなかなか受け取ろうとしないあたしの手を取ると、

「落ちたよ。」と言って、あたしの掌にストラップを乗せた。

あたたかい手……。

優しい声……。

……チリン。

ストラップは小さく鈴の音を鳴らしてまたあたしの手に戻ってきた。ただど受け取る気がないあたしの掌はストラップを握る事さえしない。

チリン……。

また地面にストラップが落ちた。

すると、その人はまたすぐに拾った。

いらないのに・・・。

「いらないの？」

その人は少し笑いながらそう言った。

うん・・・いらない・・・。

・・・なんてコトは言えるワケがない。

でも・・・受け取る気もない。

「・・・。」

あたしが黙ったまま俯いていると、

その人はストラップをブラブラさせながら

「じゃあ、これ俺がもらっていい？」

と言った。

は・・・？

あたしは驚いてハッと顔をあげた。

「いないんでしょう？」

そう言ってまたあたしの目の前でストラップをブラブラとさせる。

うん、いない。

あたしはコクッと小さく頷いた。

「じゃあ、貰う。」

その人はそう言うところり笑った。

・・・よーな気がした。

眼鏡をかけていないからよくわからない・・・。

「貰ったお礼にさ・・・」

その人は自分の携帯を出した。

「これ・・・あげる。」

そう言っつて、今まで携帯につけていたらしきストラップを

あたしの掌に置いてぎゅっと握らせてくれた。

「え・・・いいんですか？」

「うん。」

しばし、その人の顔をじっと見つめた。

でも・・・どんな顔をしているかわからない。

「ここでわざわざ眼鏡をかけて見るのもナンだし・・・。

「・・・あ、ありがとうございます。」

あたしはとりあえずお礼を言った。

「こっちこそ。コレありがとうございます。」

その人は優しい声でそう言つと、

「それじゃ！」

と、いつの間にか小降りになった雨の中を走っていった。

あたしの手の中には彼がくれたストラップがあった。

眼鏡をかけてそのストラップを見る。

目に入ってきたのはきれいな緑色の天然石。

翡翠・・・かな？

透明な石は水晶？

水晶と翡翠・・・あとは羽根をモチーフにしたシルバーのパーツ。

これ・・・ホントに貰ってよかったのかな？

あたしは今さらながらそう思った。

だって・・・あたしがあげたのは小さなハート型の鈴がついているだけだよ？

あたしはその人が走っていった方角に目を向けた。

けど、やっぱり・・・もういるはずもない。

あたしはまだ手の中にある翡翠のストラップを眺めていた。

大事なモノだったんじゃないのかな？

なんとなくそんな気がした。

けどどこへ行ったかもわからないし、

何より眼鏡をかけていなかったから顔がまったくわからない。

こーゆー時、目が悪いと損だな・・・と、つくづく思う。

・・・かと言って、いつまでも手に持っても仕方がない。

“貰ったお礼に・・・”

彼はそう言った。

あたしも“ありがとうございます。”と言って、受け取っちゃった
ワケだし。

あたしは携帯を出して、翡翠のストラップをつけた。

なんだか、ついさっき失恋したコトなんてすぐに忘れられる気がした。

ついでに髪・・・切ろうかな。

中1の頃から伸ばしはじめた髪。

高杉くんが長い髪の子のほうが好きって噂で聞いたから・・・。

実際、今まで高杉くんと一緒に歩いていた女の子はみんな髪が長かったし。

あたしは、そのまま勢いに任せて髪を切るコトにした。

どうせなら思いっきりショートにしてみようか。

人生初のショート。

似合わないかなあ？

結局、あたしは胸の上あたりまであつた髪をバツサリと切った。

・・・でも、ショートじゃなくて・・・一応ボブ。

ショートに近いボブ・・・と言った感じ。

美容師のお兄さんも“せっかくきれいな髪なのにもったいない。”

と、言ってくれた。

でも切りたかったの。

バツサリと。

そうすれば高杉くんのコトなんてすんなりと忘れられる気がした。

現に失恋したばかりなのにもう涙も出てくる気配もない。

3年間片思いだったのにな。

だけでももう会うコトもない・・・。

・・・4月、高校の入学式。

真新しい制服に身を包んで、小学校の頃からの親友・藤村恵ちゃんと一緒に

クラスの振り分けが張り出されている掲示板を見に行った。

「琴美！あたし達同じクラスだよ！」

メグちゃんはあたしより先に自分の名前とあたしの名前を見つけ出したようだ。

「えっ！？ホント？どこ、どこ？何組？」

「3組だよ。」

メグちゃんの言ってた通り、3組にあたしとメグちゃんの名前があった。

さっそくメグちゃんと一緒に1年3組の教室へ行った。

中にはすでに何人かの生徒達が座っていた。

とりあえずみんなテキトーに座っているらしい。

あたしとメグちゃんも窓際の席に並んで座った。

時間が経つにつれ、教室には次々と生徒が入ってきた。

そして・・・その中にはあの高杉和也くんの姿もあった。

え・・・？

なんで？

なんで高杉くんがいるの？

あたしが啞然としていると、

「高杉くん、第一志望の高校に落ちたらしいよ。」

メグちゃんがそう耳打ちしてくれた。

「そう・・・なんだ。」

あたしはとりあえずそう答えるしかなかった。

てゆーか・・・よりもよって同じクラス？

もう会えないと思って告白した・・・。

・・・で、見事に失恋した。

その相手が目の前にいる・・・。

正直・・・どんな顔していいかわからない。

ここは・・・気がついていないフリでもする・・・？

そう思つて高杉くと目を合わさないようにしていると

「ようっ！」

高杉くんのほうから声をかけてきた。

バカバカバカーーーーーーッ！

なんで声なんかかけるのよ？

「……。」

あたしは引き攣つた顔のまま高杉くんを見上げた。

「平野さんと藤村さんも同じクラスだったんだ？」

そう言つて笑顔を浮かべる彼は相変わらず爽やかだ。

彼とは中学の時、同じクラスになるコトはなかった。

3週間前のあたしなら彼と同じ高校・・・同じクラスになったコトを

泣いて喜んだんだろうな。

だけど・・・今はどつちかと言うと地獄。

つい3週間前にあたしをフツた人。

メグちゃんにもそのコトは話した。

だからメグちゃんも顔が引き攣っている。

何もフラれてから彼と同じクラスになるコトはないのに・・・。

高杉くんが何かを言おうと口を開きかけた時、担任の先生が教室に入ってきた。

助かった・・・。

あたしはメグちゃんと顔を見合わせて苦笑した。

H Rの前にさっそく席決め。

各自自由に席移動。

早い物勝ち。

あたしとメグちゃんはそのまま座っていた窓際から動かなかった。

別にどこでもよかったから。

高杉さんの周りは女の子ばかりになった。

まあ・・・予想はしていたけど・・・。

そして、クラスの中にはもう一人イケメンがいた。

二ノ宮宗くん。

高杉くんとはまた違うタイプのイケメン。

高杉くんより少し背が高くて、可愛い顔をしている。

当然、二ノ宮くんの周りも女の子がいつぱいになった。

そんなワケでクラスの中の女子は“高杉くん派”と“二ノ宮くん派”の二手に分かれた。

あたしとメグちゃんを除いて・・・。

高杉くんと二ノ宮くんがど真ん中の席に前後に並んで、

その周りを取り囲むように女子が座り、

さらにその女子の周りに男子。

おかげであたしとメグちゃんは男子に囲まれた。

高杉くんと二ノ宮くんがハーレム状態なら

あたしとメグちゃんは逆ハーレムだ。

無事(?)に席決めも終わって、やっとHRが始まった。

担任の先生からあれやこれやと校則の話に始まり、後は年間行事、

クラブ活動、選択授業についての説明があった。

あたしはどのクラブに入るかもう決めていた。

美術部。

絵を描くことが好きだから。

というか“モノを作るコト”が好きだから。

メグちゃんはバレー部。

中学の時から始めて、この高校に入ったのもバレー部が強い事で有名だから。

選択授業は音楽か美術のどちらかを選択する。

あたしはもちろん美術。

この高校の美術の授業は絵を描くだけじゃなくて彫刻や粘土、シルバークレイでアクセサリを作ったり、陶芸なんかもやるらしい。

あたしがこの高校に進学を決めた理由が実はこれだったりする。

メグちゃんも、とりあえずどっちでもいいからと

あたしと一緒に美術を選択する事に決めた。

高杉くんは音楽を選択するらしい。

よかった・・・楽しみにしてた選択授業まで一緒だったらホント地獄。

しかも、高杉くん派の女子まで一緒になったりなんかしたら、うるさくて授業になりそうにないもん。

ちなみに、二ノ宮くんも音楽を選択すると公言していた。

これでほとんどの女子は音楽の方に行く。

男子も半数は音楽に行くみたいだ。

というのも、音楽の方はいくつかのグループに分かれてバンドを組んだりするらしい。

“モノを作る”という事に関心がない人はだいたい音楽へ行く。

・・・と言うワケで美術の方は余計な邪魔が入りそうにない。

今から選択授業が楽しみになってきた。

週末の金曜日。

楽しみにしていた週に一度の選択授業の日がやってきた。

あたし達のクラスは6時限目と7時限目。

2時限続けて時間割してあるのは音楽はともかく、

美術のほうは製作に時間がかかるものもあるからだろう。

メグちゃんと一緒に美術室に移動し、ドアを開けると数人の男子がいた。

女子は一人もない。

案の定、みんな高杉くんと二ノ宮くんを追いかけて音楽の方を選択したようだ。

予鈴が鳴って、さらに数人の男子がわらわら入ってきた。

あたしは何気なく入ってくる人物を眺めていた。

・・・あれ？

二ノ宮くん？

最後に二ノ宮くんが入ってきた。

音楽の方を選択したんじゃないの？

「二ノ宮、おまえ音楽の方行ったんじゃなかったのか？」

・・・と、誰かが二ノ宮くんにつっ込みを入れた。

そーだ、そーだ。

「いや、こっちの方がおもしろそうだったから、昨日こっそり変えた。」

そう言って二ノ宮くんはにやりと悪戯っぽく笑った。

要するに女子を騙して自分だけこっちに流れてきたのね。

なかなかやるな・・・。

・・・二ノ宮くん派の女子・・・かわいそ。

数日後。

今日は遠足。

気持ちのいい五月晴れになった。

バスに乗って『大自然公園』とやらに行くらしい。

園内には植物園とか池とか運動場とか展望台とか

サイクリングコースがあったり、ハイキングコースがあったり……。

とにかくいろいろあるらしい。

あたしは小さなスケッチブックとデジカメを持って行った。

メグちゃんと一緒にバスに乗り込むと一番後ろの座席に高杉くんと二ノ宮くんが座っていた。

そして女子はもちろん全員後ろに固まっている。

そんなワケで前の方は担任の先生とあたしとメグちゃん、

後は男子ばかりになった。

ここでもまた逆ハーレム状態。

午前10時に『大自然公園』に着いて、そこから午前中は植物園の中を見学。

普段あまり見られない花や木がたくさんあって、

ホントは全部スケッチしたいところだけど時間が限られているから
そうもいかない。

そんな時の為にあたしはデジカメを持ってきたのだ。

『描きたい!』と思った花や木をバシバシ撮っていく。

帰ってからゆっくりスケッチしよう。

「相変わらず撮りまくってるねー。」

メグちゃんは隣でクスクス笑っていた。

それはそうだろう。

だってフツーは友達とか撮るしね。

「メグちゃん、後で西山ちゃんと撮ってあげるね。」

あたしがそう言つとメグちゃんは嬉しそうに「うん！」と笑った。

西山くんとはメグちゃんの彼氏。

メグちゃんと同じく中学からバレーをしている。

クラスは違うけど西山くんも男子のバレー部が強いこの高校に入っ
た。

二人ともバレーをやっているせいか気も合うみたいで

いつも仲良し。

昼食の時間になり、あたしとメグちゃんは西山くんと合流した。

なんとなく、あたしは邪魔者のよーな気がするけど・・・まあ、いいか。

お弁当の後は帰りの集合時間まで別行動するつもりだし。

お弁当を食べ終わって、しばし三人で撮影会。

その後、あたしはメグちゃんと西山くんと別れて

絶景ポイントを探しにハイキングコースへと向かった。

もちろんスケッチをする為。

ハイキングコースならあまり人が来そうにないし、

一人で静かにスケッチするにはいいかも。

だけど・・・ハイキングコースとは言え、結構キツイ・・・。

登山・・・？

そんな感じだ。

“登山”を始めて約30分くらい経ったところで

少し開けた場所に着いた。

何もないトコだけど見晴らしは良さそうだ。

下を見下ろせる位置まで歩いていくと

思ったとおりの絶景が広がっていた。

クリスタルを思わせる植物園の建物、

その横に広がる色とりどりの花壇。

そしてさらにあちこちに緑があって、大きな池も見える。

ここがいい、ここがいい。

結構登ってきたからこんなトコ誰もこないだろうし。

ゆっくりスケッチできそうだ。

集合時間から逆算し、早めに下りる事を考えても

2時間くらいはここにいられそうだ。

あたしはさっそくスケッチブックを開いて描き始めた。

勢いで描き始めたせいか、いつもより鉛筆のスピードが速い。

それでもスケッチを始めてずいぶん時間が経ったと思う。

「すげーっ！絵、上手いじゃん！」

突然、後ろから声がした。

あたしはその声に驚いて振り返った。

あ
・
・
・
。

「こんなトコで何してるのかと思ったら、絵描いてたんだ？」

振り返ると爽やかな笑顔で立っている二ノ宮くんがいた。

あたしがあんぐりと口を開けたままでいると、

「そんなに驚いた？」

とクスクス笑いながら、あたしの隣に腰を下ろした。

・・・だって、誰も来ないと思ってたんだもん。

「一人？藤村さんは？」

「あ・・・彼氏とデートしてるよ。」

メグちゃんに用事でもあったのかな？

「へえー、藤村さん彼氏いるんだ？」

二ノ宮くんはそう言つと

「平野さんは？デートしないの？」

と、有り得ない事を聞いてきた。

する相手がいませんけど・・・？

「・・・彼氏なんていないし。」

「えっ！？そうなの？意外！」

・・・はあ？

あたしは二ノ宮くんのそのリアクションの方が意外なんだけど？

「平野さん、絶対彼氏いると思ってた。」

何を根拠に？

「なんで？」

「だって、可愛いし。」

・・・はい？

「誰が？」

「平野さんが。」

「どこが？」

「顔。」

「またまた冗談ばかり。」

「なんで？」

二ノ宮くんはそう言つと、ずっとあたしに顔を近づけた。

「うん・・・やっぱり・・・目とか大きくてすごく綺麗だよ？可愛
いじゃん。」

あたしは正直、どうしていいかわからなかった。

こんな風に真っ直ぐ見つめられて可愛いとか言われた事なんかない
し。

てゆーか・・・誰にでも言ってるんじゃないの？

二ノ宮くんも結構チャラ男ばいし。

真に受けるほうがバカバカしいか・・・。

「・・・そ、そういえば、二ノ宮くん一人？」

あたしは動揺しているのをなんとか誤魔化した。

「うん、逃げてきた。」

逃げてきた？

「なんか、他のクラスの子まで来ちゃってさー。」

なんだ・・・自慢か。

「せつかく、こんな晴れた日に綺麗な場所に来てるっていうのに
ずっとバスの中で捕まっててさ。」

外に行こうって言っても日焼けするからイヤだとか、
疲れるからイヤだとか・・・そんなんばっか。」

確かにこんなに気持ちのいい空の下にしながら、ずっとバスの中は
ね。

「んで、トイレに行くって言ってバスから脱走してきた。」

そう言うと二ノ宮くんはにやりと悪戯っぽく笑った。

「それで・・・こんなところまで？」

「うん。だってすぐ見つかるようなところだったら

またバスに監禁されちゃうだろ？」

「確かに・・・。」

それはそうだ・・・せっかく逃げ出せたと思ったら、

またすぐに捕まったら地獄だもんね。

「けど、びつくりしたよ。」

誰もいないと思ってここまで来てみたら平野さんがいたから。」

すみませんねえ・・・。

「あ……がっかりしたって意味じゃないよ？」

二ノ宮くんは苦笑しながら言った。

あたし……顔に出てたのかな？

「むしろ俺的にはラッキーだし。」

ラッキー？

「どうして？」

「平野さんと話したコトってまだ一度もなかったから。」

そういえば、そうだね。

「・・・もしかして・・・俺の事嫌い？」

へ・・・？

「なんでそう思っの？」

別に嫌いじゃないよ？

「だって、同じクラスなのに全然話しかけてきてくれないし。」

だって、用がないんだもん。

「用事がないし。」

「他の女の子はなくても話しかけてきてくれるよ?」

そりゃ、他の女の子はね。

でも、あたしは違うもん。

・・・てか、チャラ男のクセに意外とそーゆートコ気にするんだ?

「嫌いだったら今こうして話してないよ。」

あたしは二ノ宮くんがそんなのを気にしていたんだと思うと

なんだか可笑しくてつい笑ってしまった。

「そっか。」

二ノ宮くんも柔らかい笑みをあたしに向けた。

・・・ペ。ペ。ペ。ッ。ペ。ペ。ッ。ペ。ペ。ッ。ペ。ペ。ッ。...

時計のアラーム……。

そういえば集合時間に間に合うように早めに下りようとして
セットして置いたんだ。

「そろそろ戻らなきゃ。」

あたしはスケッチブックを閉じた。

「もう、そんな時間？」

「下りるの時間かかりそうだから、早めに戻らないと集合時間に遅れちゃう。」

「えー、まだ平気だろ？」

そう言って二ノ宮くんは動く気配がない。

そりゃ二ノ宮くんの足ならあたしより随分早く下りられるだろうけど。

「二ノ宮くんはせっかくここまで登ってきたんだし、ごゆっくり。」

あたしが笑いながらそう言っ立ち上がると、

「いいよ。俺も一緒に下りる。」

と言って、二ノ宮くんも立ち上がった。

「行こう。」

「・・・うん。」

二人で登って来た道を戻った。

バスが止まっている駐車場が見えてきた。

「あ、あの・・・ありがとう。」

あたしは二ノ宮くんにお礼を言った。

途中、段差があって危なそうな所や滑りやすそうな斜面で二ノ宮くんが手を貸してくれた。

あたしのペースに合わせてゆっくり一緒に下りてくれたし。

「うん。」

二ノ宮くんは小さく頷くとにっこり笑った。

やっぱり・・・チャラ男は優しい。

- 5 -

5月、校外学習。

所謂、林間学校。

2泊3日のキャンプ生活を山の中でする。

今日のHRと一時限目はその日程説明とグループ分け。

だけど・・・なかなかグループが決まらない・・・

なぜ・・・

どうしてグループ分けがこんなに時間がかかっているか・・・

それは・・・

高杉くんと同じグループじゃなきゃダ。

二ノ宮くんと同じグループじゃなきゃヤダ。

・・・て女子全員が騒いでいるから。

あたしとメグちゃんを除いて。

男子の方はと言うと、特に誰と一緒にじゃなきゃヤダ・・・とかはない。

結局、高杉くんと二ノ宮くんのグループの女子は

あみだで決める事になった。

黒板いっぱい縦線を書いて一人一本横線を書き加えていく。

「ココまでやるとなんかの大イベントみたいだな。」

あたしの真後ろの席に座っている武田くんが頬杖をつきながら言った。

ホント……。

でも……女子にとっては大イベントなんだよ。

あたしとメグちゃんを除いて。

黒板にはなぜか、あたしとメグちゃんの名も縦線が引かれていた。

えー。

二ノ宮くんはともかく、高杉くんとは絶対一緒にいたくないから
いないのにー。

だけど結局、公平を期す為だとかなんとかで

あみだに参加された。

あたしとメグちゃんは正直どこでもいい。

一番最後に横線をテキトーに書き加えて

縦線的位置もテキトーに選んだ。

その結果・・・。

・・・。

神様はなんて意地悪なんだろう・・・。

残り物には福があるなんて絶対嘘だ・・・。

だって今のあたしにとっては残り物は最悪・・・。

高杉くんと同じグループって・・・。

メグちゃんはと言うと高杉くんのグループにも

二ノ宮くんのグループにもならなかったようだ。

いいな・・・。

あたし、メグちゃんとも離れるのか。

誰か代わってくれないかなー・・・。

「琴美、ちよつと。」

がつくり肩を落としたあたしのところにメグちゃんが来た。

「メグちゃん・・・。」

慰めてー・・・。

あたしは涙目で無言の訴え。

「あたしと同じグループの安藤さんがね、

どうしても高杉くんと一緒がいいんだって、代わってもらったら？」

メグちゃんはそうあたしに耳打ちした。

・・・へ？

「ホ、ホント・・・？」

「うん。」

メグちゃんにはっこり笑うと安藤さんに視線を移して手招きをした。

「「ホントにいいの？」」「」

あたしと安藤さんは同時に口を開いた。

「ホントに代わってくれる？」

あたしは安藤さんが女神様に見えてきた。

「あたしの方こそホントにいいの？」

安藤さんもあたしと同じ様な目をしている。

お互い女神様に見えているらしい。

そんなワケであたしは無事、メグちゃんと同じグループで

しかも高杉くんのグループにも入らずに済んだ。

めでたし、めでたし。

ちなみにさつき後ろでボヤいていた武田くんも同じグループ。

後は堀口くんと、菊池くん、それに浜田くん。

女子はあたしとメグちゃんだけ。

ホントは男子と女子3人ずつの6人グループだけど、

女子は高杉くと二ノ宮くんのグループに多めに入ったので

こうなった。

そして、当日の朝・・・出発するまでがまた大変だった。

高杉くと二ノ宮くんのグループに入れなかった女子達が

せめてバスの中だけでも隣に座らせると騒いでいたから。

どーでもいいなあ・・・。

あたしとメグちゃんは例によって前の方の席で担任の先生と男子に

囲まれて

逆ハーレム状態。

今回は遠足の時みたいに小一時間の移動じゃなくて結構距離がある。

日程表によれば2時間30分の移動らしい。

どんだけ山奥に行く気だ？

出発して1時間半くらい経った頃、周りの男子はほとんど寝てしまった。

担任の先生も鼾をかいて寝ている。

隣にいるメグちゃんも最初の1時間はあたしとしゃべってたけど

今は小さな寝息を立ててすやすやと寝ていた。

後ろの席は・・・まだまだ元気。

でも・・・さすがに高杉くんも二ノ宮くんもちょっと疲れたみたい。
ずっとしゃべりっぱなしだもんね。

そうかと言って女の子達はまだまだ二人を眠らせてはくれないみたいだ。

あーあ・・・かわいそ。

モテるのもつらいね。

そんなコトを思いながらあたしもうつうつと・・・いつの間にか寝てしまった。

「・・・美。」

・・・ん？

「・・・琴美。」

メグちゃんの声。

「琴美、起きてー。」

あたしはメグちゃんの声で目が覚めた。

・・・あれ？

「着いたよ。」

メグちゃんにそう言われ、周りを見ると
みんなバスから降り始めていた。

バスから降りて、グループ毎に固まって点呼。

先生の話がちょこつとあつて、その後さっそく

グループ毎に分かれて昼食作り。

メニューはナポリタンと野菜スープ。

あたし達のグループの男子はわりと協力的で結構テキパキと動いてくれていた。

体育会系が多いから、合宿とかでこーゆーの慣れてるのかな？

こっちが一々言わなくても動いてくれている。

パスタが茹で上がってざるに移すときもあたしとメグちゃんの力じゃ

とても大きな鍋は持ち上げられないので男子がやってくれた。

他のグループはと言うと・・・

右隣のグループは、ざるに上げたパスタが固まって悪戦苦闘。

ちゃんとオイルを垂らしておかないからだよ。

さらに左隣のグループは女子に任せて男子が遊んでいるせいで

ちつとも進んでいない。

そーゆーのを見るとうちのグループの男子がいかにかに優しいかがわかる。

おかげで予定よりも早く出来上がった。

「うまいっ!」

武田くんはナポリタンを一口食べてにんまり笑った。

「うん、おいしいね。」

そう言って堀口くんもパクパク食べている。

「野菜スープってまだ残ってるの？」

浜田くんはよほどおながすいていたのかすでにスープを完食しそ
うだ。

「うん、まだ残ってるからおかわりできるよ。」

メグちゃんがそう言つと

「「「「やつたーっ！」「」「」

と言つて、男子達四人は喜んだ。

そこまで喜んでくれると作った甲斐がある。

「平野さんと藤村さんて料理上手いなだね。」

二杯目の野菜スープに手をつけながら菊池くんが言った。

「あたしはサポートしただけ。最終的な味付けは琴美がやったから。」

「みんなが協力してくれたから上手く出来たんだよ。」

「同じグループなんだし、みんなで協力するのは当たり前だろ?」

「そうそう、それに俺らそんなたいした事してないよ?」

武田くん達にはこにこしながら言った。

一足先に食べ始めたあたし達があと少しで完食する中、

周りのグループがやっと食べ始めた。

だけど高杉くんのグループと二ノ宮くんのグループだけが

まだ何かやっている。

他のグループより女の子が多いのが仇になって、

協力するどころか競うようにやっているみたいだ。

あれじゃ、完成するのはいつになるやら・・・。

武田くん達は昼食の後片付けも手伝ってくれた。

てっきり食い逃げのごとく、食べ終わったらさっさと

どこかへ遊びに行っちゃうかと思ってたのに。

現に他のグループの男子はそーゆーのが多いみたいだ。

このグループはかなり当たりかも。

あたしの女神様・安藤さんに感謝、感謝。

昼食の後はオリエンテーリング。

渡された地図と方位磁石を使って指示されたポイントに行き、

通過した証にスタンプを押して目的地まで行く。

一応、上位20位までとブービー賞があるらしい。

といっても学校が出す賞品だからみんなあまり期待はしていない。

だから、あたし達のグループはゆっくり散策しながら行こうという事になった。

デジカメを持っていたあたしはスケッチ用に撮ったり、

グループのみんなで撮ったり・・・

・・・で、あちこち寄り道をしたわりには思ったより早くゴールし、

あたし達はギリギリ20位以内に入った。

一応、リーダーの武田くんが賞品を受け取りに行った。

賞品の中身は意外にもシャープン。

色違いで6色あってちょっと細身で軽い。

よくあるフツートのじゃなくて、セレクトショップで買ってきたみたいだ。

なかなか可愛い。

「20位だし、学校の賞品だから全然期待してなかったけど、なかなかいいね。」

武田くんはみんなの前にシャープンを並べた。

スカイブルー、ジェードグリーン、サーモンピンク、
クリームイエロー、ホワイト、ブラックの6色。

「レディーファーストってコトで平野さんと藤村さん、

先に好きな色取っていいよ。」

武田くん達がそう言うてくれたのでメグちゃんとあたしは先に選ぶことにした。

ずらりと並んだ6本の中で一番先に目に付いたのは

ジェードグリーン。

“ジェード”・・・て翡翠だよね？

翡翠みたいなきれいな緑色。

あのストラップみたい・・・。

あたしはジェードグリーンのシャープペンを手を取った。

これにしよう。

メグちゃんはサーモンピンクにしたみたいだ。

そして、武田くんはスカイブルー、菊池くんはクリームイエロー、

堀口くんはホワイト、浜田くんはブラックをそれぞれ手に取った。

夕方5時。

今度は夕食の準備。

メニューはカレーライスとマカロニサラダ。

武田くん達は昼食の時と同じ様に火を熾したり、

重い食材を運んだりしてくれた。

あたしとメグちゃんはもちろん調理担当。

そしてあたし達のグループは絶妙のチームワークで

昼食の時と同様、一番に出来上がった。

「いただきます。」を言ったと同時に武田くん達は勢い良く食べ始めた。

さすがに食べ盛りの男子四人の食べっぷりはすごい。

・・・てゆーか、飢えた野獣？

あつとゆー間にカレーのルーは完売。

けど、ごはんがちょっと残ってしまった。

多めに炊いたけどさすがに多かったかな？

「ごはん中途半端にあまっちゃったね。」

あたしは御櫃の中を覗きながら、どーしたもんかと考えた。

「このまま、残しとくワケにもいかないしね。」

メグちゃんも考え込んだ。

「うーん・・・おむすびにしちゃう?」

あたしがそう言うと、武田くん達は

「」「」「それ、グットアイデア!」「」「」

と口を揃えて喜んだ。

「あー・・・でも、具は高菜があるけど海苔がない。」

「海苔なんかなくても全然OK!」

「あ、そお?」

「うん!だからおむすびお願いします!」

「らじゃー。」

というわけで、あたしとメグちゃんは“高菜入り海苔なしおむすび

”を作った。

ちょうど4つ。

「これで夜食に困らない。」

武田くん達はにんまりと笑った。

え・・・。

夜食・・・？

どんな胃袋してんの？

さすが男の子。

翌日。

朝食の後は登山。

あたしは例によってデジカメ持参。

頂上はきっと絶景なんだろうなと思いつつ、

だけどスケッチブックはさすがに持っていけそうにない。

登山を始めて一時間を過ぎた頃、

体育会系ではないあたしはまだ半分しか登っていないのに

すでに体力をかなり消耗していた。

武田くん達とメグちゃんはまだまだ元気。

さすが体育会系。

「琴美、大丈夫？」

少しずつ距離が開き始めたあたしを

メグちゃんはさっきから何度も振り返って気にしてくれていた。

「・・・うん・・・大丈夫・・・。」

・・・で、ホントはちょっとキツイ。

「メグちゃん、気にしないで先に行つてー。」

あたしがそう言つと、

「でもー・・・。」

とメグちゃんは足を止めた。

すると、メグちゃんと一緒にいた武田くんも足を止めた。

「琴美ちゃん、手。」

武田くんはそう言ってあたしに微笑んだ。

「・・・？」

・・・手？

手がかした？

そう思っていると、武田くんはあたしの左手を取った。

「・・・っ！」

「こうすれば少しは楽だろ？」

武田くんはあたしの手を軽く引っ張ってゆっくり歩き始めた。

「あ、ありがと・・・。」

あたしは顔が赤くなっているのがバレないように俯いた。

結局、武田くんは頂上まであたしの手を引いて登ってくれた。

「武田くん、ありがとう。疲れたでしょ？」

「こんなの全然平気、体力には自信あるから。」

武田くんはニツと笑った。

昼食の時間、あたし達のグループと二ノ宮くんのグループが隣同士になった。

そしてここでも二ノ宮くんの隣の席をめぐって

二ノ宮くんのグループの女子がなにやら騒いでいる。

「そんなのもうどーでもいいから早く食おうぜ？」

あたしの席のちょうど真後ろに二ノ宮くんが座っている。
背中合わせになっていて二ノ宮くんの顔は見えないけど
ちよつとウンザリしてる感じの声が聞こえた・・・。

「隣は大変だな。」

菊池くんは苦笑いしながら隣のテーブルをちらりと見た。

「俺らは実に平和だねえー。」

堀口くんも同じ様に隣をチラ見して苦笑している。

「メシの度にアレじゃあな？」

浜田くんはなんだか二ノ宮くんに同情しているみたいだ。

「ホント、琴美ちゃんと藤村さんが一緒でよかった。」

あたしの隣に座っている武田くんはニコニコしながら言った。

昼食の後はしばらく自由時間。

もちろんメグちゃんは西山くんの所へ行った。

あたしは絶景ポイントを探しにウロウロウロウロ・・・

すでに30分くらい徘徊。

だけど、なかなかいい場所が見つからない。

このまま徘徊だけで自由時間が終わるのはヤダな・・・。

そう思っていた時、

「平野さん。」

と、あたしを呼ぶ声がした。

声の主を確認するべく振り向くと

二ノ宮くんが立っていた。

なんとなくそんな気がしたのよね・・・。

「ちょっと来て。」

二ノ宮くんはそう言うなり、いきなりあたしの手首を掴んで歩き始めた。

・・・え？

・・・何？

何なの？

何かなんだかわからず慌てるあたしに構わずに

二ノ宮くんはぐいぐいとあたしの手を引っ張って

どンドン歩いていく。

「・・・二ノ宮くん？」

「いいから、いいから。」

どこへ連れて行く気？

ワケがわからず、不安なまま二ノ宮くんは茂みの中へと入って行き、更に少し進んだところで足を止めた。

「着いた！ここ！」

・・・そこは、眼下に広がる森林を見渡せる絶景ポイント。

遠くの方に太陽の光に反射してキラキラ光る海も見えていた。

うあー・・・、すごい・・・きれい・・・。

「ここ、スケッチするのにいいかなと思って。」

二ノ宮くんは言葉を失ってその景色に吸い込まれてそうになっているあたしに微笑んだ。

「うん・・・すごい・・・綺麗。」

あたしはただただ景色に見惚れていた。

さっそくデジカメに収める。

「ありがとう、二ノ宮くん。」

あたしがそう言つと、二ノ宮くんはニコッと笑った。

「さっき逃げてる途中で偶然ここ見つけたんだ。」

「また逃げてるんだ？」

「うん。」

「今度はなんて言って逃げてきたの？」

あたしはクスクス笑いながら腰を下ろした。

「強行突破。」

二ノ宮くんもあたしの隣に腰を下ろすとニヤリと笑った。

よーするに撒いたのか。

二人で並んで景色を眺めているとふわりと風が吹いた。

「・・・気持ちいい・・・。」

大自然の中を拭きぬける風をあたしは目を閉じて感じていた。

「・・・うん。」

二ノ宮くんもそう言って大きく息を吸い込んだ。

「そういえばさ・・・」

「うん？」

「なんで武田のヤツ、平野さんのコト“琴美ちゃん”て呼んでんの？」

あ・・・そういえば。

登山始めた時からそう呼ばれてる気がする。

・・・なんでだろ？

「俺も名前で呼んでいい？」

・・・？

別にいいけど。

「うん・・・別に構わないけど？」

「んじゃ、今度から名前で呼ぶ。」

二ノ宮くんはニツと笑った。

「あ、俺のコトも名前で呼んでね？」

はあ？

・・・まあ、それも別にいいけど・・・。

「・・・“ソウ”君・・・だっけ？」

「シュウ。」

・・・え？

“ソウ”じゃないの？

「だってみんな“ソウ”君て呼んでない？」

「うん、でもホントは“シュウ”が正解。」

「えー、なんでみんなに違うつて言わないの？」

「訂正するのが面倒くさいから。」

「はぁ・・・。」

「琴美。」

・・・およっ!?

いきなり呼び捨て?

「・・・宗くん。」

・・・あたしはいきなり呼び捨てなんてできない。

「“君”付けはダメ。」

「え・・・じゃ・・・」

「“さん”付けもダメ。」

う・・・先に言われた。

「・・・なら・・・」

「ちゃん”もイヤ。」

・・・むむむ。

「・・・宗。」

あたしは仕方なく呼び捨てにした。

すると宗は満足そうににんまりと笑った。

こーゆー可愛い笑顔をするトコが女子に人気があるんだろうな。

それから、あたしと宗はまたしばらくボーツと景色を一緒に眺めた。

・・・ピピピッ、ピピピッ、ピピピッ・・・

あたしの時計のアラームが鳴った・・・そろそろ下山する時間だ。

「戻ろうぜ。」

そう言って宗が立ち上がった。

「うん。」

結局、この場所には誰も来なかった。

茂みの奥にあるから誰も気がつかなかったのかな？

あたしと宗の二人だけの秘密の場所・・・かな。

夕方。

今日の夕食はバーベキュー。

野菜を洗って切るだけだから簡単。

後は飯盒でごはんを炊くだけ。

登山で疲れていたから助かった・・・。

武田くん達も登山で体力を消耗して空腹なのか“飢えた野獣” 4人・

いや、4匹はすでにお箸とお皿を片手に戦闘態勢にはいつている。

“野獣4匹 vs 食べながらしかも焼く係2人”

この闘いに絶対勝ち目は・・・ない・・・。

「いただきますーす！」のゴングの後、4匹の野獣は一斉に食べ始め

た。

あたしとメグちゃんも食べながら焼いていく。

だけど、ひたすら食べている野獣共には勝てるワケがなく、

半ばやけくそ気味にお肉や野菜をどんどん焼いていった。

あっという間に試合終了・・・。

そして夕食の後はキャンプファイア。

焚き火を背にあたし達のグループはまたまた撮影大会。

あたしは女神様・安藤さんのおかげですごく楽しい校外学習になった。

校外学習から数日が過ぎたある日の昼休憩。

今日のお弁当タイムはちょっと豪華。

・・・と言うのも、4時限目の調理実習でクッキーを作ったから。

当然、女子は高杉さんと宗にきれいにラッピングしてプレゼント。

メグちゃんはもちろん彼氏の西山くんにあげる。

あたしはと言うと・・・

別に誰にもあげる予定はないので、昼休憩にメグちゃんと

食後のデザートとして食べることにした。

お弁当を食べ終わって、クッキーを出すとバターのいい香りが鼻にくすぶった。

「お、琴美ちゃんが作ったクッキー？」

武田くんが匂いにつられてやってきた。

「うん。」

「俺にも食べさせて！」

「どうぞ。」

クッキーはメグちゃんと二人で食べるには少し多いかな？

と思っていたからちょうどいい。

あたしがにつこり笑ってそう言っていると武田くんは嬉しそうに

「いただきまーす！」

と、さっそく一口サイズのクッキーをパクリと口に放り込んだ。

「うまいー！」

武田くんはあたしにっこり笑って言ってくれた。

「そお？」

「うん、甘さもちょうどいいし、サクサクしてる。」

武田くんがそう言つと、周りにいた男子達が

「俺にも味見させて！」

と集まってきた。

そして、クッキーはあっという間に完売。

なかなか好評だった・・・と思う。

放課後、美術部の部活が終わってすっかり暗くなった道を帰っていると

後ろから誰かに呼び止められた。

「琴美。」

・・・？

誰だろう？

そう思いながらあたしが振り向くと、

宗が手を振りながら近づいてきた。

・・・あれ？

まだ学校にいたんだ？

「こんな遅くまで部活？」

宗はあたしの隣に並ぶと爽やかな笑顔で聞いてきた。

「うん。宗は？」

「俺も今、部活終わって帰るト」。

え？

部活？

クラブ・・・入ってたんだ。

あたしがキョトンとしていると、

「帰宅部だと思ってた？」

そう言って苦笑いされた。

うへ・・・っ、バレバレ。

「何部？」

「バスケ。」

へえー、へえー、へえー。

「意外？」

「うん・・・まあ。」

けど、考えてみればこれだけ背が高いんだし、

そう言われてみればバスケ部のよーな気がしないでもない。

「そつえば・・・俺もクッキー食べたかったなー。」

宗はちらりと横目であたしを見た。

・・・？

クッキー？

あ・・・昼休憩にみんなで食べた調理実習で作ったヤツね。

「いっぱいもらってたじゃない。」

あたしは宗の机の上に山積みになったクッキーを思い出し、
つい吹き出してしまった。

「琴美のが食べたかったの。」

「あたしのより、みんなから貰ったクッキーの方がおいしいと思うよ?。」

「武田は琴美の方が全然うまいって言ってたもん。」

え?・・・武田くん?

いつ、そんな話したの？

あたしが不思議に思っているよ

「さっき部活が終わって腹が減ったからバスケ部のみんなで

もらったクッキー食べたんだ。」

と、宗が言った。

そういえば武田くんもバスケ部に入ったとか言ってたなー。
だからか。

「もうクッキー作らないの？」

「うん、次の調理実習はまた別のメニューだし。」

「えー。」

そんなに食べたいのかな？

「家で作ったりしないの？」

「時々、作ってるけど・・・」

「マジッ！？今度いつ作る予定？」

「い、いつって・・・」

いつ作るとかそんなのは特に決めていない。

いつも気が向いたら作ってるだけ。

「・・・そ、そんなに・・・食べたい？」

「うん！」

宗はにんまりと笑った。

この笑顔は何・・・？

「・・・。」

あたしは黙ったまま宗を見つめ返していた。

宗で・・・綺麗な目してるな。

遠足の時、二人で話してる時に気付いたけど、

目の色がみんなと違う・・・。

綺麗な緑色・・・翡翠みたい・・・。

カラーコンタクト・・・？

「俺の顔になんかついてる？」

あたしがじつと見つめてたまましていると宗は苦笑いした。

「目・・・。」

「目？」

「カラーコンタクト？」

「あ、目の色？」

「うん。」

「コンタクトじゃないよ。自前。」

そう言つと宗は思いっきり顔をあたしに近づけた。

「ほら、コンタクトなんか入れてないでしょ？」

あたしは急に顔が近づいてきてびっくりしたけど、

コンタクトは入れてないのがわかった。

「俺、ハーフなんだよ。知らなかった？」

はーふ？

あー、どうりで髪もきれいな茶髪だと思った。

それで目の色も黒じゃないんだ。

「綺麗な色だね。翡翠みたい。」

あたしがそう言つと宗は少し驚いていた。

あれ？

あたしなんか変なコト言つたのかな？

「エメラルドみたい」とはよく言われるけど、

翡翠って言われたのは初めてかも。」

エメラルド・・・。

うーん・・・あたしの中では翡翠のイメージなんだよね。

「俺は翡翠の方が好きだから、そう言われて嬉しいけど。」

宗はニコツと笑った。

チャラ男は・・・笑顔がいい・・・。

週末の日曜日。

あたしはクッキーを焼いた。

別にその後、拝み倒されたワケじゃないけれど。

遠足の時、滑りやすい所や段差の激しい所で手を貸してくれたから。

校外学習の登山の時も絶景ポイントを教えてくれたし。

・・・というのは、こじつけ・・・かなあ？

調理実習で作ったのはただのバタークッキーだった。

同じクッキーだと芸がないから、今回は紅茶クッキーにした。

一応、プレゼントだからきれいにラッピングもした。

ここまで気合を入れなくてもいいよーな気もするけど・・・。

さて・・・問題はどーやって渡すか。

教室ではもちろんみんながいるから渡せるワケがないし、

わざわざ呼び出すのも・・・ね。

かといって机や下駄箱に突っ込んだまま放置・・・ても・・・。

・・・うーん・・・明日・・・考えよう。

翌日、月曜日。

授業を受けながら一日中考えた結果、

宗の部活が終わるのを待つコトにした。

美術室からは第一体育館がバッチリ見える。

今までは部活に夢中になっていて、目を向ける事がなかったけど、
気をつけて見ていれば、部活が終わったタイミングがわかる。

男子バスケ部が第二体育館の方でやっていたらアウトだけど・・・。

先週、偶然一緒になった時間より少し前に

あたしが第一体育館の方をチラリと見ると、

ちょうど男子バスケ部が出てくるのが見えた。

・・・あ、出てきた。

その中に宗もいる。

あたしは急いで帰り支度を済ませ、美術室を後にした。

正門を出ると宗はすでにかなり前の方を歩いていた。

足・・・早っ!?

さすが男子・・・。

というか、先週あたしと一緒に歩いていた時は
歩調を合わせてくれてたんだな・・・と思った。

さて・・・渡さないと・・・。

いざ、追いかけて渡そうとするとなかなか勇気が出ない。

でも、せっかく今まで待つてたんだし、

何よりクッキーを作った意味がなくなる。

「宗。」

あたしは思い切って、声をかけた。

すると振り向いた彼はちよつと驚いた顔をしていた。

考えてみれば、あたしから声をかけたのって初めてかも。

驚くのも無理ないか。

宗は立ち止まってあたしが追いつくのを待っていていた。

「今日も遅くまでやってたんだね。」

宗は柔らかな笑みをあたしに向けた。

「……うん。」

……てゆーか、待ってたんだけどね。

「宗、いつもこの時間までやってるの?」

いきなりクツキーを渡したらバレバレになりそうな気がした。

とりあえず、ちょっと会話をしてみる。

「うん。」

「よく体力続くね。」

「まあ、中学の時からやってるからね。」

「そーなんだ。」

「琴美はずっと美術部?」

「うん。」

・・・で、あれ?

「あたし美術部って言ったっけ?」

「いや、聞いてないけど、武田が言ってたから。」

あ．．．なるほど。

てか、二人の間であたしの話が出てくるのか。

「武田と仲良いんだね。」

「真後ろの席だから。」

「そーゆー問題？」

「うん。」

他に何が？

「．．．あ、そうだ。コレ．．．」

会話が途切れた所であたしは例のクッキーを宗に渡した。

「？」

なんだろう・・・？

と言った感じの顔をしている宗の顔がなんだかすごく可愛かった。

「クッキー。」

あたしがクスクス笑いながらそう言つと、

「マジッ!？」

と言つて、大きな翡翠色の瞳をパチパチとさせながら驚いていた。

「マジ。」

「やったーっ!!」

そんなに喜ぶとは・・・

「ありがとう!」

宗はそう言つと「最高の誕生日プレゼント!」と嬉しそうな笑顔をあたしに向けた。

・・・へ？

今度はあたしがキョトンとしていると

「実は今日、俺の誕生日なんだ。」

と言った。

「そうなのー？」

「うん。」

「だったら、もっと豪華なお菓子にすればよかった。」

「でも、コレ俺の為に焼いてくれたんでしょ？」

「うん。」

・・・まあ、確かにそーだけど・・・。

「だから最高の誕生日プレゼント。」

宗は満面の笑みで言った。

・・・チャラ男は意外なもので喜ぶ。

5月17日・・・5月生まれ・・・

そういえば・・・

「翡翠って・・・5月の誕生石だよね？」

「うん。」

「じゃあ・・・誕生石と同じ色だね。」

「うん？」

「宗の瞳の色。」

「うん。」

宗はまた嬉しそうに笑った。

・・・もしかして、あの翡翠のストラップをくれた人も5月生まれなのかな・・・？

次の日。

放課後、部活に没頭していたあたしは

昨日よりも遅い時間に美術室を後にした。

集中してた所為かなんだか疲れたなあ・・・。

そんな事を思いながら正門まで来ると、

門柱によりかかって立っている人影が見えた。

誰だろう？

薄暗い灯りに照らされて男子生徒という事だけはわかった。

そして段々と正門に近づくにつれ、男子生徒の顔が

ハッキリと見えた。

・・・あれ？・・・宗？

彼女でも待ってるのかな？

そう思っていると

「遅かったね。」

宗は門柱から体を離してあたしの目の前に来た。

・・・へ？

あたしはキョロキョロと周りを見回した。

あたししかいないよね・・・？

あたしのリアクションが面白かったのか宗はプツと吹き出し、

「琴美の事、待ってたんだよ。」

と、あたしに爽やかな笑顔を向けた。

えええええええつつ！？

・・・あたし？

「・・・な、なんで？」

「昨日のクッキーのお礼が言いたかったから。」

「べ、別によかったのに・・・。」

「どうしても直接言いたかったし・・・かといって、

教室で言つと女子が騒ぐと思つて。」

そこまで気を使つてくれなくても……。

「あのクッキーすごくおいかつたよ。ありがとう。」

宗はにっこりと笑つた。

「……あの場所……教えてくれたお礼だし。」

あたしもちよつとだけ笑みを返した。

「あれ紅茶が入つてた？」

「うん、バタークッキーは食べ飽きたかな……と思つて。」

「そつか、あーゆーのも作れるのつてすごいな。」

「そお？」

「うん。」

「普通だよ?」

「そうか?クッキーくれた女子のほとんどは“初めて作った”とか言ってたぞ?」

「ふーん。」

「てか、みんな家で料理とかしないみたいだし。」

「そーなの?」

「この間の校外学習の時だつて最悪。」

「・・・?」

「俺でも作れるメニューばっかだったのに。」

「そんなに酷かったの?」

「卵割れないヤツまでいたし。」

「え・・・。」

確かにそれは酷いかも・・・。

だからあんなに時間かかってたんだ。

「武田がさー、琴美と藤村さんが同じグループでよかったって言うた。」

・・・へー、そんなコト言ってたんだ。

「高菜おにぎりまで作ってくれたって喜んでたし。」

「あれは、ご飯が中途半端にあまっちゃったから。」

「俺んトコの女子共はそんな事してくれなかったぞ？」

「ご飯が余らなかったとか・・・。」

「めっちゃめっちゃ余ってた。」

「そんなに余るほど炊いたの？」

「炊く量はフツーだったんだけど、水加減間違えたらしくて固くて食えなかった。」

・・・え。

「カレー・・・どうやって食べたの？」

「最初の一杯目はなんとかご飯と一緒に食べたけど、

二杯目からはルーだけ。」

「うわ・・・。」

「まあ、その後武田の高菜おにぎりを半分もらったけど。」

宗はニツと悪戯っぽく笑った。

「飯盒で炊こうと思ったら意外と難しいから仕方ないよ。」

「でも、武田はずっとご飯がおいしかったって言ってた。」

「・・・たまたまだよ。」

「俺も琴美と一緒にグループがよかったなー。」

「今回がたまたま酷かったただだよー。」

あたしはクスクスと笑って宥めるように言った。

「他のグループも同じ様なもんだったぞ？」

「けど、女の子の所為だけじゃないトコもあつたよ？」

「・・・というと？」

「あたしの左隣のグループの男子なんて女子を放つたらかしにして
ずっと遊んでたし。あれじゃ、出来る物も出来ないよ。」

「はは、そりや確かにそうだな。」

「でしょ？けど、あたし達のグループは何も言わなくても

武田くん達がすごく手伝ってくれたから。」

「俺だってちゃんと手伝ってたぞ？」

けど上手くできなかったってコトはやっぱり女子の問題。」

「・・・そんなに言わなくても。」

あたしがそう言って笑うと

「・・・そういえば・・・」

宗は不意に何かを思い出したようにあたしの顔をじっと見た。

「・・・？」

なんだろう？

「琴美・・・最初、高杉と同じグループにならなかったっけ？」

・・・ギクッ。

「なんで変わったんだ？」

・・・聞くな。

「アイツのコト、嫌いななの？」

「別に・・・嫌いじゃないよ。」

むしろ好き・・・だった。

2ヶ月前までは。

今はどちらかと言うとどうでもいいと言っか・・・

出来れば顔を合わせたくないだけ。

「・・・変わって欲しいって言われたから。」

この答えはちょっとズルいかな？

「それであっさり変わっちゃったんだ？」

「うん。」

「じゃ、もし俺と同じグループになって、誰かに変わってくれって言われてたら変わってた？」

・・・多分。

「うん。」

「えー、それじゃ今度またこーゆーグループ分けとかあっても琴美と一緒にになれる確率超低いじゃん。」

「宗も競争率高いもんね？」

あたしはちよつと意地悪く言ってみた。

「じゃあ俺が琴美を指名するとしたら？」

「んー・・・。」

「それでも断る？」

「んー・・・断る理由がなかったら断らない。」

「絶対？」

「・・・うん。うん。」

「おっし！その言葉忘れんなよ？」

宗はそう言つとにやりとした。

・・・え？

なんか・・・嫌な予感・・・。

・・・とは言え、この後の行事でグループ分けするような事なんて

すぐになかったよーな気がするし・・・あるとすれば11月の学園祭？

・・・ま、いつか。

その頃には宗も忘れてるだろうし。

「約束な？」

宗はさらに念を押した。

「う、うん。」

あたしはとりあえず“うん”と言った。

「破ったら俺とキス。」

・・・はあ？

啞然としたあたしに宗は「破らなきゃいいんだしー。」

と言つてにやにやしていた。

・・・なんか・・・ハメられた？

そして約一カ月後・・・、あたしはとんでもなく後悔するハメになった・・・。

6月、そろそろ体育祭の時期。

・・・で、今はみんなで誰がどの種目に出るかを決めている。

最低、一人一種目出場する事になっていて、

運動神経のいいメグちゃんは何種目が出るみたいだ。

けど、あたしは運動系は苦手。

・・・なので一種目しか出る気がない。

みんなの出場種目がどんどん決まっていくな、

あたしは何に出ようか決めかねていた。

だって、どれも出たくないから。

・・・そして、とうとう決められないまま

最後の種目。

二人三脚。

しかも男女ペア。

うーん・・・一番ビミョーなのが残ったな・・・。

男子は誰が出るのかな？

「じゃ、最後。二人三脚に出場したい人、挙手してください。」

進行役の体育委員・小宮くんがそう言つと、

パラパラと何人かが手を挙げた。

男子は・・・お、堀口くんが挙げてる。

・・・あとは・・・

・・・あ。

宗もか・・・。

あたしはまだ一種目も出る予定がないから、

ここで手を挙げようかと思ったけどやめた。

宗との“例の約束”が頭を過ぎったから。

“アレ”がここで発動したらまずいしね・・・。

・・・と、思っていると

「平野さん、まだ一種目も決まってるじゃないよね？これ出ない？」

小宮くんに言われてしまった・・・。

気づくなよ・・・。

けど、ここで出なかったら出なかったで、せつかく決まっている
他の種目を決め直さなきゃいけなくなるしな・・・。

「・・・あ、じゃ・・・出る・・・。」

あたしは仕方なく挙手した。

「えーと、じゃ二組選出するから・・・男子はこのまま

二ノ宮と堀口をお願い。」

小宮くんにそう言われ、宗と堀口くんの出場が決定した。

そしてその瞬間、さっきまで手を挙げていなかった女子達が

「じゃあ、私も出る！」と一斉に挙手を始めた。

小宮くんは、そうなる事を予想していたのか、

「今さら挙手してもダメ。平野さんはこれ以外に出る予定ないから
確定ね。後は最初に挙手してた女子の中から決めるから。」

とバツサリ斬った。

えー。

こんなに出たい人がいるんだから、そっちから選んでよー。

そう思っていると何やら視線を感じて、その方向に目を向けると

宗がにやりと不敵な笑みを浮かべていた。

・・・ま、まさか・・・ね？

最初に拳手した女子はもちろん全員宗狙い。

さっそく何で決めるか話している。

前回のあみだで、まんまとあたしが“当たり”を引いてしまったから
今回は別の方法で決めるらしい。

てゆーか、あたしは堀口くんがいい。

変に騒がれなくて済むから。

そう思っで、あたしから堀口くんを指名をしようと思口を開きかけた
時、

「俺が指名しちゃダメ？」

と宗が言った。

・・・うげ。

小宮くん・・・

お願い・・・駄目って言うて・・・！

「いいよ。」

あたしの願いとは裏腹に小宮くんはあっさりOKした。

ガン・・・。

「むしろその方が早い。」

そう言つて、小宮くんは「女子もそれでいいね？」と

有無を言わさないような顔をした。

立候補した女子達は何か言いたそうな顔をしていたけど

宗の指名なら・・・と言う事でおとなしく首を縦に振った。

「言っておくけど、指名された人は拒否権なしね？」

宗はニツと笑って候補者の女子達に視線を向けた。

“候補者の女子達”・・・

もちろん、あたしもそこに含まれているワケで・・・。

・・・けど、考えてみれば宗があたしを指名するとは限らない。

だって、候補者の中には可愛い子もたくさんいるし。

うんうん。

そうよ、そうよ。

「じゃ、琴美。」

・・・え。

宗は他の候補者には全然目もくれないでいた。

・・・まだ？

クラス中の女子が騒ぎ始める。

そして、なにやら漂う不穏な空気・・・。

「・・・え、えーと・・・、あたし・・・堀口く・・・」

「拒否権なし。」

宗は涼しい顔であたしの言葉を打つ手切った。

ひど・・・っ。

「じゃ、二ノ宮の相手は平野さんでいいね？」

小宮くんは嫌だとは言わないよね？と言った顔であたしに視線を向けた。

あたしが引き攣った顔で宗を軽く睨むと

“約束忘れたの？”と言った顔をされた。

う・・・。

「・・・。」

あたしは無言で頷くしか出来なかった。

・
・
・宗・
・
・オボエテロ。

・
・
・チャラ男は悪知恵も働く。

次の日。

お弁当を食べ終わってメグちゃんとおしゃべりしていると

「琴美！二人三脚の練習しに行こうぜ！」

と、宗が目の前にやって来た。

ひえー。

女子の視線がすごいんですけど？

「た、体育祭までまだ日にちあるし・・・。」

「何言ってるんだよ。そんな暢気な事言ったら、

1位なんて獲れないぞ？」

ぐは・・・っ。

1位取る気？

「やるからには1位にならないとな？」

宗はニツと笑い、

「というワケでさーさー練習、練習。」

・・・と、あたしの手首をガシツと掴んだ。

そしてそのまま、あたしは宗に手を掴まれたまま
教室から連れ出されてしまった。

宗はあたしを屋上に連れて来ると、

「もしかして怒ってる？」

と、あたしの顔を覗き込んだ。

「・・・。」

あたしは無言で宗を睨みつけた。

「あ、別にいいよ？ 琴美が嫌なら誰かと変わってもらっても。」

宗はそう言つと、

「そのかわり・・・俺とキス。」

翡翠色の瞳を意地悪く輝かせて、

あたしの顎に手をかけると、クイツと軽く顔を上に向かせた。

このチャラ男め・・・。

「・・・する。」

「え・・・キスする？」

宗はニヤツと笑って顔を近づけてきた。

ばか。

「二人三脚。」

あたしはスルリと宗の腕の中から抜け出した。

「あ、二人三脚ね。」

すると宗はちよつと残念そうな顔をした。

アタリマエダロ……。

「……んー、それにしても、やっぱり屋上は気持ちいいなあー。」

宗は軽く伸びをしてフェンスに寄り掛かり、空を見上げた。

そーだねー。

今日はいい天気だしねー。

・・・て、あら？

「宗、練習やらないの？」

「えー、だって体育祭までまだ日にちあるじゃん。」

・・・おい。

さっきあたしが同じ事言った時、なんて言ったのよ？

「1位獲るんじゃないの？」

「大丈夫、大丈夫。」

・・・何が？

「俺と琴美なら練習しなくても1位獲れるって。」

「うらうら。」

「あたし、運動神経皆無なんだけど・・・。」

「そこは俺の愛でカバーするから平気。」

「・・・よくもまあ、そんなセリフがしれつとした顔で言えるなあ・・・。」

「じゃ、何の為にココへ来たの？」

「琴美とおしゃべりする為。」

「・・・へ？」

・・・で、結局、あたしと宗は練習もしないで他愛もない話をした。

青空が広がる屋上で。

まあ・・・たまにはこーゆーのもいいかもね。

あたしも別に二人三脚の練習がしたかったわけじゃないし。

それから一週間後、私と宗はようやく真面目に二人三脚の練習を開始した。

体育祭の3日前になってから・・・というのはもちろんクラスの女子達には言えない。

体育祭当日。

二人三脚しか出来ないあたしは、ひたすらみんなの応援。

うちのクラスのチャラ男二人は結構いろんな種目に出ていた。

その度に黄色い声援が飛び交う。

チャラ男は基本的に運動神経がいいのか、

高杉くんも宗もだいたいどの種目に出ても1位か2位でゴールしていた。

そういえば中学の体育祭では高杉くんが何かの種目に出る度に

一タドキドキしてたっけ……。

今はなんとも思わないなー。

こんなにすんなりと高杉くんのコト、吹っ切れたのはなんでだろう？

高杉くんの為に伸ばしてた髪を思い切ってばっさり切ったからかな・
・・・？

それとも・・・あの翡翠のストラップの人のおかげかな・・・？

そーいえばあの、あの恋愛成就のストラップどうしたんだろ？

「・・・美。」

まさか携帯に着けてるワケないよね？

「・・・琴美。」

てゆーか、そもそもなんで貰ってくれたんだろ？

「琴美！」

名前を呼ばれておでこを指でコツンと叩かれた。

「・・・っ！？」

びっくりした・・・。

いつの間にか目の前に宗が立っていた。

「・・・あ・・・何？」

「何？じゃねえよ。二人三脚、

次だからそろそろ準備しとかないと。」

「・・・あ、うん。」

「高杉に見惚れてたみたいだけど何考えてたの？」

宗はあたしの顔を覗き込んだ。

「・・・え・・・あー、なんでもない。」

あたしはなるべく平静を装った。

やばい、やばい。

傍から見れば見惚れてるように思われたのかな？

「……………」

宗が黙ったままじつとあたしを見つめていた。

「宗？」

あたしが名前を呼ぶと宗は黙ったままあたしの手を取って歩き始めた。

なんか怒ってる……？

「宗……なんで怒ってんの？」

「怒ってない。」

「怒ってるよ。」

「怒ってないってば。」

「だって言い方がすでもう怒ってるもん。」

「そんな事ない。」

「そんな事あるから言っただけど？」

「……。」

宗がまた黙り込んだ。

「……確かに……さっきは考え事してたよ。」

「やっぱしてたんじゃない。」

拗ねた口調で宗が言う。

「でも……しょーもない事だから。」

「……高杉の事？」

「違うよー。」

あたしはクスッと笑った。

「ホントに？」

宗がまたあたしの顔を覗き込んだ。

「ホント。」

あたしがそう言つと

宗は「そっか。」と言った。

変なの。

なんでそんな事気にするんだらう？

今、あたしと宗はぴったりと体をくっつけている。

それはなぜか・・・？

二人三脚のスタート位置にいるから。

宗の左足首とあたしの右足首は鉢巻でぐるぐる巻きにされ、

宗はあたしの肩を抱き、あたしは宗の腰に手をまわしていた。

さっきまで不機嫌モードだった宗はニコニコしているし・・・。

てゆーか、女子の視線が・・・。

ゴールしたらすぐに解いてやるっ！

先にあたしと宗がスタートし、堀口くんと相方の南さんは後のグループ。

「琴美ちゃん、二ノ宮がんばって！」

堀口くんは拳を上突き上げてあたし達に声援を送ってくれた。

「おうっ！」

宗は軽く手を挙げながらニコッと笑い、

あたしも堀口くん達に手を振った。

スタートピストルが鳴って、あたしと宗は

「せーの。」の掛け声で一緒に走り出した。

練習の甲斐があつてなかなかいい調子。

しかも他のペアは呼吸が全然合っていないみたいで

スピードが出ていないし、こけたりしている。

これならホントに1位になれるかも。

だけど油断は禁物。

てか、宗に向けられる声援のすごい事。

学校内の女子全員がキヤーキヤー言ってる感じだ。

さすが、モテる男は違うね。

あたしはちらりと宗の顔を見た。

お・・・結構真剣な顔して走ってる。

さっきまでデレデレしてたのに。

そんな事を考えていたらいつの間にかゴールテープを切っていた。

1着だー。

「だから言つたろ？愛の力。」

宗はニカツと白い歯を見せながら笑った。

まったく息が乱れてない。

あたしは結構本気で走ったからしゃべれないんですけど？

ゼーゼーと肩で息をしているあたしを見て、宗は「大丈夫？」と笑った。

笑うなー。

あ、そうだ。

足首・・・解こう。

あたしはまだ繋がったままの足首の鉢巻を解こうと

結び目に手をかけた。

・・・あれ？

解けない。

この結び目固つ。

そういえば、宗がやったんだった・・・。

どれだけ固く結んでんの？

「解けない・・・。」

あたしは宗の顔を見上げた。

宗はなんだかにやにやしている。

絶対ワザとだ・・・。

「解いて。」

「いいじゃん、まだこのままで。」

「解いて。」

「俺、疲れたから動きたくねー。」

・・・このチャラ男めー。

「解け。」

「ヤダ。」

「いいから解け。」

「もう少し休んでから。」

「足痛い。」

「俺は平気。」

「……。」

宗はまったく解こうとしない。

仕方がない……

こうなったら……。

「……痛い……。」

「琴美っ!？」

「……お願い……解いて……?」

「ごめんっ、そんなに痛かったとは思わなかったから……。」

宗はまんまと“泣き真似作戦”に引っかった。

慌てて結び目を解いている。

「琴美、足大丈夫か？」

宗はあたしの顔を心配そうに覗き込んだ。

うほー。

あたしって結構女優？

やっと足が自由になった。

「宗、ありがとっ。」

あたしは満面の笑みを宗に向けた。

「な・・・っ!？」

宗は絶句した。

「はーか。」

「・・・おまえ・・・」

「だって、こうでもしないと解いてくれなさそうだったんだもん。」

「騙された・・・。」

「まあ、お互い様ってコトで。」

「ひでえー・・・。」

「あ、次堀口さんと南さんが走るよ。」

「そんなのどうでもいい。」

「なんで？さっきあたし達が走る時も堀口くん、応援してくれたのに。」

「・・・。」

宗は黙り込んでそっぽを向いてしまった。

そんなに拗ねなくても・・・。

「宗・・・？」

「・・・。」

「宗ってば。」

「・・・。」

本気で怒っちゃったかな？

「ごめん・・・。」

とりあえず謝ってみる。

「・・・。」

「宗。」

あたしは宗の顔を覗き込んだ。

すると宗は・・・

・・・。

笑っていた。

なんだあー？

「宗……。」

「琴美おもしれえー。」

宗はケラケラと声を上げて笑い始めた。

「……。」

「本気で怒ったかと思った？」

「……うん。」

「あんな事されたくらいじゃ怒んないよ。」

その後も宗はしばらくお腹をかかえて笑っていた……。

このヤロウ……。

いつか絶対シバくつ。

体育祭から数日後。

放課後、部活が終わって今日もあたしは宗と一緒に帰っていた。

別に待ち合わせをしていたワケじゃないけれど。

たまたま一緒になった。

いや・・・またまた・・・かな？

ちなみに宗もあたしと同じ駅で降りる。

だから帰りが一緒になると自然と並んでそのまま駅に向かう。

そして同じ駅で降りてそれぞれ違う方向へ。

「琴美って、誕生日いつ？」

駅のホームで電車を待っている時、

宗が誕生日を聞いてきた。

「3月14日。」

あたしの一番嫌いな日。

「お。ホワイト・デーの日かー。」

そうとも言っね。

「いいな、俺なんか普通になんにもない日。」

あたしはむしろそっちの方がいいかも。

「ホワイト・デーだからって、なんにもいい事ないよ。」

「なんで？ “愛の告白”と“おめでとう”がいつぺんに聞けるじゃん。」

モテる男の辞書には“失恋”の二文字がないからそんなコト言えるんだよ。

「“愛の告白”どころか“失恋記念日”になる可能性もあるでしょう？」

あたしがまさにそうだもん。

「琴美は失恋した事なんてないだろ？」

宗はくすりと笑ってあたしの顔をちらりと見た。

だから・・・それが大有りなんだよね・・・つい3ヶ月前の話だけど・・・。

「・・・ある。」

「またまた。」

「ホント。」

「だから髪切ったのか？」

「・・・う。」

やっぱり髪切ったらみんなに失恋したと思われちゃうのかな？

高杉くんにもそう思われてるのかな・・・？

まあ、高杉くんは今さうどう思われようが別にいいけど。

・・・て。

・・・ん？

あれ・・・？

あたし・・・

高校入る前までは髪が長かったとか

宗に話したことあるっけ？

「宗・・・なんで、あたしが髪長かったの知ってるの？」

あたしがそう聞くと宗はちよつと驚いた顔をした。

「やっぱ、憶えてなかったんだ？」

宗は苦笑しながらあたしの顔を覗き込んだ。

あ・・・やっぱ、あたしが憶えていないだけで

話したことあったのかな？

「あの時・・・」

宗が何か言いかけた時、ちょうどホームに電車が入ってきた。

その音で宗の声がかき消された。

口の動きでなんて言ってるのか読み取ろうとしたけど・・・

・・・無理だった。

なんて言ったの？

電車のドアが開いて、何人かの乗客が降りてきた。

「宗、今なん・・・」

「姉ちゃん。」

あたしが宗になんて言ったか聞こうとしていたら
毎日聞いている声に呼ばれた。

「誠。」

弟の誠だった。

「姉ちゃん、友達？」

誠と一緒に電車に乗ってきた宗に視線を向けた。

「うん、同じクラスの二ノ宮宗くん。」

「ふーん。」

「宗、弟の誠。」

あたしが誠を紹介すると宗は爽やかな笑顔で、

「よろしく。」と言った。

「今日の試合どうだった？」

誠は今日、練習試合で他の中学校に遠征していた。

遠征・・・と言っても隣の隣町だけ。

「・・・負けた。」

「そっか・・・。」

「俺のシュートが全然決まらなくてさ。」

練習だめっちゃめっちゃ調子良かったのに・・・。」

「そんな日もあるよ。」

誠はバスケット部に入っている。

今年、2年生になってレギュラーになれたと喜んでいた。

「俺って本番に弱いのかな・・・？」

「いつも練習通りに上手くいってれば天才だよ。」

「まあ・・・そーだけど。」

あ・・・

そーいえば、ここにバスケット部がもう一人いるじゃない。

「宗もそついう時、ある？」

「ん？練習通りにいかない事？」

「うん。」

「そりゃ、あるよ。俺もいつもそうだし。」

「ほら、誠。バスケの先輩もそう言ってるよ？」

「シュウさんもバスケやってるの？」

「うん。」

宗は柔らかい笑みを誠に向けた。

それから二人はバスケの話で盛り上がっていた。

部活ではどんな練習をしているとか、家ではどんな事しているとか。

宗は1年生だけど既にレギュラーらしく、

家ではテレビで放送されたバスケの試合を

プロ・アマ問わずDVDに全部録っていて

繰り返し見ながら研究しているとか。

・・・宗ってバスケに対しては意外と真面目なんだね。

「姉ちゃん、シュウさんていい人だね。」

宗と別れてから、家に向かってあたしの自転車を二人乗りで帰っている途中、

誠が満面の笑みで言った。

宗からいろいろ教えてもらって元気になったみたいだ。

「悪いヤツではないね。」

時々、ムカつくほど悪知恵が働くけど。

「姉ちゃんの彼氏？」

ぶはっ。

「そんなワケないじゃん。」

「でも、シュウさんずっと姉ちゃんのコト守るように立ってたよ？」

そういえば、電車の中は結構混んでいたのに全然窮屈じゃなかったし、

押しつぶされそうになる事もなかったな・・・。

宗がガードしてくれてたのか。

あたしは今さらながら気がついた。

「姉ちゃん今頃気づいたのかよー。」

誠が呆れたように言った。

そしてボソリと呟いた。

「姉ちゃんて・・・結構鈍かったんだな・・・。」

宗は誰にでも優しいんですっ。

7月。

週に一度の選択授業の日。

今週はあたしが楽しみにしていたシルバークレイで

アクセサリー作り。

何を作ろうかな・・・？

今日は朝からその事で頭がいっぱいだった。

ちなみにメグちゃんは西山くんにバングルを作ってあげるらしい。

あたしは自分用にしようか、それとも誰かの為に

作ってみようか・・・悩んでいた。

“誰かの為に”・・・と言っても相手がいないか・・・。

結局、あたしは自分用にペンダントトップを作る事にした。

後でストラップやキーホルダーにもできそうなモノ。

デザインは夏だというのに真逆をいく“雪の結晶”にした。

6時限目になり、いよいよ製作開始。

昼休憩の間に集めた資料やデザイン画を元に形を作ったからか、
案外あっさりいい形が出来た。

と、いうワケであたしは遊びでもう一つ簡単なモノを作るコトにした。

そしてドライヤーでひたすら乾燥。

乾いたところで今度は形の修正。

少しずつ削ったりしながら細かく形を整える。

よしよし・・・なかなかいい感じ。

次はガスバーナーで焼成。

ホント、ココの学校は何でもあるな。

後は仕上げ。

磨いて磨いてキラキラに。

遊びで作った方もピカピカにした。

「わあっ！琴美、すごい。」

隣でバングルを磨いていたメグちゃんが
手を休めて話しかけてきた。

「やっぱり琴美は手先が器用だね。」

「そお？」

「うん、すごく綺麗にできてるもん。」

「えへへ、ありがとう。」

「ところで・・・コレ何？」

メグちゃんはあたしが遊びで作ったモノを掌に乗せた。

「メタルスライム。」

「メタルスライム？」

メグちゃんはゲームをやらないからわからないか。

「ドラクエシリーズに出てくるモンスターだよ。」

「ゲーム？」

「うん。」

「ふーん、なんかよくわかんないけど、かわいいね。」

メグちゃんは掌の上でメタルスライムをコロコロと転がして笑った。

「お、メタルスライム。」

突然、後ろから声がして振り向くと宗が覗き込んでいた。

宗はゲームやるのかな？

「あはは、すげー、そっくり。」

そう言ってメグちゃんの掌の上のメタルスライムをツンツンつついた。

「琴美が作ったの？」

「うん。」

「俺にくれ！」

「へ？」

「メタルスライム。」

宗はニツと笑った。

相変わらず可愛い顔で笑うなあ・・・。

「ん・・・まあ、いいけど・・・どーせ遊びで作った方だし。」

「本気で作った方は？」

「こっちだよ。」

あたしは出来上がったばかりの“雪の結晶”を見せた。

「おおっ！ すごいっ！ 琴美って手先が器用だなー。」

メグちゃんと同じコト言ってる。

「宗は何作ったの？」

「ふふん・・・内緒。」

宗はそう言ってニヤリと笑うとメタルスライムと共に

そそくさと去って行った。

・・・？

彼女にでもあげるつもりなのかな？

それで照れくさくて言わなかったとか。

プププッ・・・案外可愛いところあるじゃない。

放課後。

HRが終わるなりメグちゃんは丁寧にラッピングしたバングルを持つて

西山くんの所へ行った。

部活が終わった後、いつも一緒に帰っているのに、

よっぽど早く渡したかったんだね。

さて・・・あたしも部活へ行こうかな。

あたしは帰り支度をしながらふとメグちゃんの机の上に

何かがあるのを視界の端で捕らえた。

・・・あれ？

メグちゃん、お弁当箱忘れてる。

メグちゃんの机の上にいつもお弁当箱を入れている小さなバッグがあった。

西山くんにバングル渡すのに頭がいっぱいで忘れていったのかな？

あたしはメグちゃんのお弁当バッグを持って

女子バレー部がいつも使っている第一体育館の中に入った。

あ・・・宗がいる。

そういえば男子バスケット部も第一体育館でやってるんだった。

宗はあたしに気が付いていないみたいで、シュート練習をしていた。いつもの宗と違ってすごく真剣な顔でやっている。

あたしはその真剣な横顔に少しドキツとした。

・・・で、何ときめいちゃってんだろ。

メグちゃんよ、メグちゃん。

男子バスケット部の横を通って、奥でやっている女子バレー部のコートに近づいた。

メグちゃんはレシーブ練習の真っ最中だった。

邪魔しちゃ悪いからしばしこのまま待つてよう・・・。

と、思っていたらメグちゃんと目が合った。

あたしがお弁当バッグを少し持ち上げてブラブラと振って

忘れて行ったよサインを送ると、メグちゃんは両手を合わせて

ありがとうサインを返してきた。

メグちゃんにお弁当バッグを渡して部活に行くと

顧問の長谷川先生が学園祭の話をしにきた。

ちなみに選択授業の美術の先生でもある。

美術部は毎年、学園祭でいろいろ作品を展示しているらしい。
最低一人一点。

作品は絵でも粘土細工でも彫刻でも何でもよし。

学園祭は11月。

まだまだ先だけど製作に夏休みを使う人もいるから

早めに告知・・・てコトかな。

そして今日の部活はさつきまであたしのクラスでやっていた

シルバークレイでアクセサリを作った。

長谷川先生が余ったシルバークレイをくれたから。

何を作ろうかまたまた迷ったけれど・・・無難にペンダントトップにした。

ペンダントトップといっても、コレもまた後でストラップなんかに見えるように

少し小さめに作った。

翼のペンダントトップ。

中抜きのデザインにして軽い感じに天使の翼をイメージ。

これも“雪の結晶”と同じ様にキラキラピカピカに仕上げた。

我ながら満足な出来。

窓の外に目をやるとすっかり暗くなっていた。

今日もまた結構な時間になってしまったかも。

美術室の時計を見ると、むしろ今までで一番遅い時間だった。

さすがにもう帰る。

疲れたし・・・。

美術室を出て、薄暗い廊下を足早に歩いて

昇降口に行くと宗がいた・・・。

・・・あれ？

宗はあたしに気が付かなかったみたいでそのまま昇降口を出て、
正門に向かって歩き始めた。

宗、昇降口で何してたのかな？

・・・あ、わかった。

彼女の下駄箱に今日の授業で作ったモノ置いて行っただな。

ぶぶぶつ。

なんか宗の秘密を知ってしまった気分。

全然たいした事でもないけど。

だけど、靴を履き替えて正門まで来たところで

また宗に出くわした。

あれれ？

彼女にプレゼントを置いてもう帰ったのかと思っていたあたしは
ちょっとびっくりした。

「あ、きたきた。」

宗はあたしに気がつくのにやりとした。

へ？

誰が来たの？

周りをキョロキョロ。

でも、やっぱりあたししかいない・・・よね？

「毎回同じコトするんだな？」

宗はクスツと笑うと

「琴美を待ってたんだよ。」

と言った。

えええええっ！？

「あ、あたし・・・？」

「うん。」

なんか約束・・・してたっけ？

「遅いから今日はもう帰ったのかと思ってたけど、

さっき下駄箱見に行ったらまだ靴があったから。」

え・・・じゃ、さっき昇降口にいたのって・・・。

あ、いやいや・・・プレゼント置いてついで見ただけかも。

「琴美にこれ渡そうと思って。」

宗はあたしの目の前にラッピングされた何かを出した。

「？」

なんだろう・・・？

あたしは不思議に思いながら目の前に差し出されたモノを受け取った。

「開けてみてもいい？」

「うん。」

何かな？何かな？

あたしはラッピングを丁寧にはがし、

中から出てきたモノに驚いた。

・・・これは・・・。

ハートをモチーフにしたペンダントトップだった。

片方だけ中抜きになっていて、そこにチェーンを通す感じ。
中抜きになっていないもう片方には四葉が刻まれていた。

すごい・・・。

「今日の授業で作ったヤツ。」

そう言って宗はニカツと笑った。

「え・・・っ!?!」

「琴美にプレゼントしようと思って。」

うそぉ・・・?

彼女にあげたんじゃなかったの・・・?

「な、なんで・・・？」

「体育祭の時、強引に二人三脚指名したから。」

「そ、それでなの・・・？」

「うん、それにこれからもずっと指名するから。」

え・・・。

あたしはぼかんと口を開けたまま絶句した。

これからずっと・・・って・・・。

つまり・・・

多少強引に指名しても断るなよってコト？

・・・あ、でも・・・

「・・・てか、コレあたしがもらってもいいの？」

こんなに綺麗に出来てるんだし彼女にあげたほうが良くない？

「琴美の為に作ったんだし。」

「えっ！？うそっ！？」

「ホント。」

宗はにんまりと笑った。

う・・・

そんなコト言われたら受け取るしかないじゃない・・・。

なんかまたハメられてる気がするなー。

「それずっとつけててね。」

え．．．ずっと．．．で。

まあ．．．いいけど．．．。

「早く言ってくればあたしも宗の為に何か作ったのに。」

「ホント?」

「うん、そしたらあんなメタルスライムじゃなくて

もっと別のものプレゼント出来ただけだな。」

「でも、あのスライムすっげえカワイイし、気に入ってるけど?」

「そお?」

「うん。」

宗は嬉しそうに笑っている。

「そういえば、今日の部活何してたの？」

「んとな、長谷川先生が余ったシルバークレイくれたから
それでまたアクセ作ってたの。」

「へえー。」

「メタルスライム量産しようと思ったけど、さすがにそれはやめた。」

「あはは、・・・で？結局、何作ったの？」

「コレ。」

あたしはカバンの中から翼のペンダントトップを出した。

「・・・すげえー。」

「宗が作ってくれたのよりは簡単だよ？」

「でも、いいじゃん。コレ、かついい。」

お。

男の子の目から見て“カッコイイ”って言葉が出るのは結構嬉しいな。

あ・・・そうだ。

「宗、お礼にコレあげる。」

「えっ！？マジ！？」

「マジ。」

あたしはにっこりと微笑んでみせた。

「やったーっ！！」

宗は嬉しそうに言つと「ありがと、琴美。」とあたしに笑みを向けた。

ふふふ・・・。

受け取つたな。

これで強引に指名されても多少は逃げ道が出来た。

夏休み。

あたしは毎年、湘南にある親戚の民宿を手伝いに行っている。

近くに海も水族館もあつてスケッチのネタには事欠かない。

しかも、遊びついでにお手伝いしているのにバイト代までくれる。

そんなワケで、今年も8月いっぱいずっとお手伝い・・・そして居候。

あたしの仕事は朝6時に起きて朝食の仕込みのお手伝い、

それから後片付け。

午前中は客室の掃除とか昼食の仕込みのお手伝いで終わる。

午後からは昼食の後片付けが終わると夕方5時まで自由。

5時からまた夕食の仕込みのお手伝いと後片付け。

それからまた夜は自由。

スケッチに出かけるにも散策に出かけるにも充分だったりする。

ココの民宿の利用者はほとんどが学生。

・・・というのも、体育館やグラウンド、テニスコートなんかが
民宿と併設してあるから合宿に訪れるのだ。

今日もこれから都内の高校の男子バスケットとサッカー部が来るらしい。

2週間の合宿予定だとか。

朝10時、一台のバスが民宿に到着した。

そのすぐ後にもう一台。

お、いよいよ到着。

だけど、あたしは基本的に裏方専門だから

お出迎えはしなくてもいい。

男子バスケット部とサッカー部の皆さんは着いた早々ミーティング。

二部屋ある大広間でそれぞれやっている。

ちなみにこの大広間でみんな雑魚寝状態で2週間を共にするらしい。

さすがに顧問の先生は別室だけど。

12時。

昼食の時間。

食堂にわらわらと男子バスケット部とサッカー部の皆さんが入ってきた。

食事は基本的にセルフだったりなんかする。

おかずが乗ったお皿をひたすらカウンターに並べておいて、後はごはんと汁物は自分で好きなだけどうぞと言った感じ。

顧問の先生は上げ膳据え膳。

一年生が用意している。

そして、3年生の次に2年生、最後は1年生の順番で行列を作っている。

この辺はどこの学校も一緒なんだねー。

カウンターの上的なおかずが減ってきて、あたしが補充するべくせっせとおかずを並べていると、

「琴美!？」

「琴美ちゃん!？」

「平野さんっ!？」

と誰かに呼ばれた。

・・・ん？

あたしはパツと顔をあげて声がした方を見た。

およっ!？

「宗!？」

びっくりした。

都内の高校で・・・うちの学校だったのか・・・。

宗の後ろには武田くんと、さらに後ろの方に高杉くんもいた。

「琴美ちゃん、なんでココにいるの？」

武田くんは目を丸くしたまま宗を追いついてあたしの目の前に来た。

「あ、ココ親戚がやってて、毎年お手伝いに来てるの。」

「へー、そーなんだ。」

武田くんがそう言ってテーブルにつくと、

上級生の先輩達から「誰？誰？」と聞かれていた。

宗はあたしの顔を見るとニコツと笑った。

なんか視線が首あたりに感じるんだけど・・・

・・・あ、そういえば。

宗にもらったペンダントトップ・・・

ずっとつけててって言われたからバカ正直に

チェーンネックレスに通してつけてるんだった・・・。

まあ、見られたからと言ってどうってコトないけど。

宗もあたしがあげたあの翼のペンダントトップをチェーンに通してつけていた。

“俺もずっとつけとく。”なんて言っただけど

ホントにつけてたんだ・・・。

「なんか合宿楽しくなってきた。」

宗はニコニコしながら武田くんの隣に行った。

高杉くんもあたしの顔を見るとにっこりと笑った。

てゆーか、“にやり”・・・て感じ？

今の笑顔は何・・・？

昼食が終わると顧問の先生達が従兄弟のお兄ちゃんに

ショッピングモールの場所を聞いていた。

従兄弟のお兄ちゃんとはココの民宿の長男・貴裕くん。

5歳年上の大学3年生。

大学を卒業したらココの民宿を継ぐらしい。

ここからショッピングモールまでは近くもなく、遠くもなく。

ビミョーな位置。

ここら辺の地理がわからない人が行くにはちょっと難しい。

・・・というワケでなぜかあたしが道案内でバスケット部とサッカー部から

それぞれ一人ずつ連れて行く事になった。

バスケット部からは武田くん。

そしてサッカー部からは・・・

高杉くん。

えー、やだな。

まあ・・・武田くんがいてくれるだけでもマシか。

あたしと武田くん、高杉くんの三人は仲良く(?) 並んで

ショッピングモールへと歩き始めた。

しかも、あたしが真ん中。

なるべく武田くんと話をしようと思うけど

こんな時に限って、話題が思いつかないし、

高杉くんがあれやこれやと話しかけてくる。

「平野さん、髪長かったのになんで切ったの？」

「・・・なんとなく、イメチェン・・・かな。」

おまえのせいじゃ、ボケ。

・・・なんてコトは言えない。

てゆうか、やっぱり髪が長かった子が突然切るとそんなに気になるモノなのかな？

「短いのも似合うね。」

高杉くんはそう言ってあたしに爽やかな笑顔を向けた。

・・・全然ときめかないな。

キュンとこない。

数ヶ月前のあたしならまちがはなく失神でもしてるところだ。

ショッピングモールに着くと武田くん和高杉くんはいろいろと買い込んでいた。

練習の合い間に飲む麦茶用のパックとかアイシング用品、酸素補給用のスプレー、

テーピング用品・・・他。

あたしが「荷物持つの手伝うよ？」

と言ったら、「大丈夫、大丈夫。」と

二人とも軽々と持っていた。

さすが・・・。

民宿に戻ると宗が荷物運びを手伝いに来た。

なかなかいいところあるじゃん。

夕食が終わるとバスケット部とサッカー部のみんなはまた大広間でミーティング。

その日の練習で気づいたことや反省点を確認するらしい。

その後は顧問の先生、3年生、2年生、1年生の順でお風呂。

夜11時に消灯、朝6時に起床。

朝は軽いストレッチの後、ジョギング。

その後、民宿に帰ってきて朝食。

そしてまたお昼まで練習。

結構ハードだね。

だけど昼食の後は午後2時まで休憩らしい。

練習で疲れるせいか、だいたいみんなお昼寝するんだとか。

そしてまた夕方7時まで練習。

その繰り返し。

体力のないあたしだったら・・・絶対死ぬ！

と、思った。

宗達が合宿に来て5日が過ぎた頃。

夕食の時間、いつものようにカウンターにおかずを並べながら

なんとなく目に入った高杉くんを見ていると、

なんだか様子が変なのに気が付いた。

今朝から食欲がなさそうだった高杉くんは

お昼もあまり食べていなかった。

そして夜・・・おかずもご飯も食べていないし、

顔色も悪い。

あたしは高杉くんに近づき、おでこに手を当てて見た。

・・・やっぱり。

熱がある。

風邪ひいたな。

「平野さん、どうかした?」

高杉くんの隣に座ってガツガツとご飯を食べていた同じ1年生の長

野くんが

あたしの顔を覗き込んだ。

「高杉くん、熱ある。」

「えっ!？」

長野くんは箸を置くとあたしと同じ様に高杉くんのおでこに手を当てた。

「ホントだ。」

長野くんはそのまま顧問の先生の所に行った。

それから高杉くんはすぐに大広間から隣の小部屋に移された。

熱を測ると38.5。

そりゃ食欲もなくなるよ。

高杉くんはクーラーの一番近くで寝ていて、

もろに風があたっていたらしい。

風邪をひくのも無理はない。

あたしは、お粥を作って高杉くんの所へ持っていった。

少しでも食べてくれるといいけど・・・。

「高杉くん、起きられる?」

熱がある所為か少し赤い顔をして寝ている高杉くんに声をかけた。

「・・・うん。」

「お粥作って来たんだけど食べられそう?」

「あー・・・ありがとうございます。」

「食べられるトコまででいいから食べてね。」

後、これ薬持ってきたから。」

そう言っつて薬とお水を置くと

「・・・うん。」

と、力なく頷いていた。

相当我慢してたんだな・・・。

あのまま放っておいたら倒れてたな。

その後、再びあたしが様子を見に行くと高杉くんは

お粥を全部平らげていた。

よしよし。

薬もちゃんと飲んだみたいだし。

後はこのまま寝てれば明日には熱が下がるだろう。

翌日。

朝、あたしが高杉くんの様子を見に行くと

熱は37.3 まで下がっていた。

「まだ熱が下がりきってないから、今日一日は大人しく寝てたほうがいいね。」

あたしがそう言うと高杉くんは残念そうな顔をした。

練習に参加したいのはわかるけど、この熱じゃね・・・。

「高杉くん、朝ごはん何がいい？」

お粥が嫌だったらうどんも出来るよ？」

「お粥がいいかも・・・。」

「じゃあ、何味がいい？卵粥とか梅粥とか・・・。」

「梅・・・。」

「おっけー。じゃ、もう少し寝ててね。」

そう言ってあたしが部屋を出ると食堂の前で宗に会った。

「おはよう。」

宗は朝から爽やかな笑顔をあたしに向ける。

チャラ男はいつ会っても笑顔がいいね。

「おはよう。」

あたしも宗に笑顔を返すと、

「高杉が羨ましい……。」

と、なにやらボソツと呟いた。

「なんで？」

「琴美に優しくしてもらえるから。」

「え……、普通だと思っけど？」

「俺も風邪ひいたら同じコトしてくれる？」

「うん・・・そりゃ、まあ・・・。」

・・・て、風邪ひく気？

「だからって風邪ひかないでね。」

あたしがそう言い放つと宗は、むむむっと言った顔をした。

図星かよ。

それから高杉くんはお昼になってようやく熱が下がった。

でも昼食はうどん。

食欲はだいぶ出てきたみたいであっという間にぺろりと平らげた。

よかった、よかった。

夜、みんなと一緒に食堂で夕食を食べ終わった高杉くんが

後片付けをしているあたしに

「平野さん、いろいろありがとう。」

と、笑顔で言ってくれた。

「いえいえ。」

あたしはとりあえず高杉くんに笑顔を向けた。

まあ・・・一応、クラスメイトだしね。

そしてお風呂上り、あたしは団扇を片手に外に出た。

民宿の目の前には海が広がっていて、

涼みながら夜の海を眺めるのが結構好きだったりする。

夜空を見上げると満天の星達・・・。

きれい・・・

流れ星見えないかなー・・・。

しばらくボーツと眺めていると、

「首痛くなるよ?」

と、後ろから誰かの声がした。

あ・・・

高杉くんだ。

高杉くんもお風呂上りみたいで髪が濡れたままだ。

「隣、いい？」

「う、うん……。」「

ヤダ。

とは言えないよね？さすがに……。。

高杉くんはあたしの隣に腰を下ろすと

「平野さんとうしてまともに二人きりになるのって初めてだね。」
と小さく笑った。

あー、そうだね。

「・・・。」

「・・・。」

そのまま何を話すワケでもなくしばしの沈黙・・・。

そして突然、高杉くんは予想もしていなかった事を聞いてきた。

「平野さん・・・今、彼氏っている？」

「いないけど？」

いたら、そもそもこんなトコに来ないよ・・・。

「・・・じゃあ・・・」

高杉くんはじつとあたしを見つめてきた。

な、何・・・？

「好きになってもいい？」

・・・え？

聞き間違いかな・・・？

「平野さんの事・・・好きになってもいい？」

幻聴？

てか、あたしの事タイプじゃないって言ったじゃん。

「・・・。」

だけどダメとも言えない。

だって別に理由がないから。

5ヶ月前にあたしを振った人が今・・・

あたしを好きになってもいい？と言った。

夢・・・？

それとも現実・・・？

あ・・・わかった！

熱、ぶり返した？

あたしは高杉くんのおでこに手を当ててみた。

「・・・ん？」

高杉くんは不思議そうな顔をしている。

「いや・・・熱、ぶり返したのかと思って・・・。」

「俺、そんなにおかしな事言っただ？」

高杉くんはプツと吹き出して、クスクスと笑い始めた。

「だって・・・。」

・・・あれ？

そんな事より高杉くん・・・

「彼女いるんじゃないの？」

だって現にあたしを振った時だって・・・。

「いるよ。」

・・・やっぱ、いるんじゃない。

なんだ・・・あたしからかわれただけじゃん。

「いるけど・・・平野さんの事がすごく気になる。」

「・・・。」

そんな事を言われ慣れていないあたしは

なんて答えていいかわからなかった・・・。

「じゃ・・・俺に彼女がいなかったらいいの?」

また黙り込んだあたしに高杉くんはどうなの?と言う顔で聞いてきた。

「・・・。」

なんて答えればいいかわかんないよ・・・。

高杉くんは相変わらず黙り込んだままのあたしを見つめている。

本気で言ってるの・・・かな?

「・・・は、早く寝ないとまた風邪ぶり返しちゃうよ?」

あたしは逃げることにした。

だって、このままずっとここにいても、

きつとあたしは何も答えられないから。

「おやすみ。」

なんでもないフリをしてそのまま部屋に戻ったあたしは

高杉くんのおかげで変な汗をかいた。

だからあたしはその後、もう一回お風呂に入った。

何やってんだろ・・・あたし。

次の日。

朝食の時も、昼食の時も、夕食の時も高杉くんは

まるで何もなかったような顔であたしに話しかけてきた。

そしてまた昨日と同じ様にお風呂上り、

海を眺めに来たあたしの後を追うように

高杉くんが来た。

だけど今、高杉くんはあたしの目の前で彼女と電話で話している。

楽しそうにしゃべってケラケラ笑っている。

やっぱり昨日のあれはあたしをからかっただけ・・・？

きっとそうだよな？

チャラ男のやる事はよくわかんないな。

あたしなんかをからかったところで、

別におもしろくともなんでしょうに。

・・・で、ゆーか。

高杉くん・・・何しに来たんだろ？

彼女の方からかかってきたとはいえ、

あたしになんか用があるなら、後で掛け直すだろうし。

だけど高杉くんは一向に電話を切る様子がない。

あたしはそろそろ部屋に戻ろうと立ち上がって、

おやすみの意味で高杉くんに一応、手だけ振った。

部屋に戻る途中、宗に会った。

お、もう一人のチャラ男だ。

宗はお風呂からあがったばかりらしい。

暑い暑いと言いながら、あたしに近づいてきた。

「琴美、いい物持ってるじゃん。」

宗はにっこり笑うとあたしの手から団扇を奪い取った。

“水も滴るいい男”・・・とは宗みたいな事を言っただろうな。

高杉くんもそうだけど、お風呂あがりには濡れ髪が普段と違う印象を与える。

ちょっと色っぽい・・・とさえ思ってしまう。

「何？俺に見惚れてるの？」

宗はにやりとした。

チャラ男って・・・どーしてこうもしれっとした顔で

こんな事が平気で言えるんだろ？

「別に見惚れてたワケじゃないけど。」

我ながらちよつと冷たい言い方。

「・・・なんか琴美、機嫌悪い？」

宗はあたしの顔を覗き込んだ。

機嫌が悪い・・・というか、高杉くんにからかわれて

ムカついてただけ。

「何やってんの?」

・・・と、そこへ高杉くんが外から戻ってきた。

うげ。

チャラ男二人の相手を同時にするのはキツいな・・・。

あたしは宗の手から団扇を奪い返し、

「おやすみ。」と言って急いで部屋に戻った。

ただ高杉くんから逃げたかっただけなのに、

宗に悪いことしたかな・・・。

数日後、今日は地元の神社でお祭りがある。

バスケット部もサッカー部も今日はちょっと早めに練習を切り上げて

夕食までの間にミーティング。

夕食を食べた後は自由時間という事になったらしい。

「琴美、一緒にお祭り行こうぜ。」

夕食の後、宗があたしのところに来た。

この間、ちょっと冷たい態度とっちゃったしな・・・。

「うん。」

あたしがそう返事をする、宗はにっこり笑った。

「あ、二ノ宮ズルい！俺も一緒に行く！」

突然、武田くんがどこからともなくすっ飛んできた。

一体どこから出てきたの？

「琴美と二人で行くからダメ。」

宗は武田くんを一蹴するとあたしの手を取り、

スタスタと歩き出した。

武田くんがなにやら背後で文句を言っているのも

宗は聞こえていないかのように無視をしている。

武田くん・・・ちょっとかわいそ。

神社にはサッカー部とバスケット部の人ですでに何人が来ていた。

高杉くんは・・・来てないみたい・・・

よかった・・・。

なんだかホッとした。

またここで高杉くんに捕まったりしたら面倒だし。

「誰探してんの？」

宗はあたしの顔をちらりと横目で見た。

探してたというか警戒してたんだけどね。

「高杉？」

・・・むむむ。

「なんで高杉くんなの？」

「この間、夜、高杉と二人きりで海にいたし。」

見てたんだ……。

「……何、話してたの？」

宗はあたしの顔をじっと見つめると

ちよつと真顔になった。

まさか告白まがいの事言われました……なんて言えない。

まあ、高杉くんにしてみればからかったつもりなんだし……

宗に言うほどの事でもないもんね。

「世間話。」

「ふーん。」

宗はそう言って、すぐに前を向いたけど全然信じてなさそう。

ちゃんと言った方がよかったのかな？

少しだけ気になったあたしは宗の顔をチラッと見た。

すると、宗はまったく気にしている様子もなく、

すでにフツの顔をしていた。

なんだ・・・そんなに気にすることもなかったかも。

そう思っていると、宗が何かを見つけた。

「あっ！琴美、オバケ屋敷あるよ？」

「え。」

ホントだ・・・

目の前にオバケ屋敷。

「入ってみようぜ。」

宗は悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

「や、やだっ。」

オバケ屋敷なんてヤダよ。

逃げようとして、あたしは宗に手首を捕まれたままだったのを
思い出した。

あう・・・。

「大丈夫、大丈夫。俺がいるから怖くないって。」

「えーっ！」

宗はあたしが逃げられないのをいい事にグイグイと引っ張っていく。

・・・で、結局オバケ屋敷の中へ。

うー・・・。

中はトーゼン真っ暗。

宗は掴んでいたあたしの手首を離して、そつと手を繋いできた。

「この方がいいだろ？」

宗はそう言つと優しく微笑んだ・・・よーな気がした。

実際には真っ暗だからよくわかんない。

「・・・うん。」

確かにただ手首を捕まれてるよりも、

こうしてちゃんと手を繋いでいてくれるのでは

何倍も安心感が違う。

宗・・・こーゆーのも慣れてそうだな。

チャラ男だから当たり前といえは当たり前か。

薄っすらと明かりが照らされている方にゆっくり進んで行くと、

いきなり生首（当然作り物）がぶら下げてあったり、

壁から手がいつぱい出てきたり、人が出てきたり・・・。

あたしはその度に一々反応して悲鳴をあげていた。

そんなあたしを見て宗はケラケラ笑っていたけど。

だからオバケ屋敷は嫌だって言ったのに！。

・・・そして最後の部屋。

いかにも最後に何かありますって感じの雰囲気。

この部屋で最後・・・と言っても今までと違った雰囲気が余計に恐怖心を煽ってなかなか足が前に進まない。

「ほら、琴美いくよ。」

宗はそう言っ て足を前に進める。

あたしは両目をギュッと瞑ったまま恐る恐る足を前に少し出した。

中に入ると突然背後のドアがバタンツと大きな音を立てて閉まった。

「きゃあっ!?!」

あたしは今までよりも一番大きな声で悲鳴をあげた。

「おおっ!?!」

さっきまで笑っていた宗もさすがにこれには驚いたようだ。

「もぉ・・・ヤダ・・・。」

あたしが半ベソ状態でそう言つと

「ははは、後5m歩けば出口だよ。」

と、宗は笑った。

後5m・・・。

一歩・・・また一歩足を進めて

ようやく後2mの所まで来た。

でも・・・何も起こらない。

よかった・・・。

後ろでドアが閉まっただけで終わった・・・。

なんて事を思っていたら甘かった。

「ぐわあーっ！」

背後からゾンビが襲ってきた。

しかも10人くらい。

襲ってきた・・・と言ってももちろん殴りかかってくる訳じゃないけど。

一体、どこにこれだけ隠れてたんだか・・・。

最後の最後まで脅かされ続け、あたしと宗はようやく逃げるように出口から外に出た。

「琴美、大丈夫？」

宗は半べそ状態のあたしの顔をクスクスと笑いながら覗き込んだ。

「うー．．．。」

「琴美がこんなに怖がりだとは思わなかった。」

宗は楽しそうにニコニコしている。

「やっぱりオバケ屋敷はいいなあー。」

「どこがー？」

「だって、俺が何もしなくても琴美の方から抱きついてきてくれたし。」

宗にそう言われ、あたしはいつの間にか宗の腕にしがみついていた事に気が付いた。

「あ……ご、ごめん……。」

あたしは急いで宗の腕から離れた。

「別にそのままでもいいのにー。」

宗はにやにやしている。

まさか……宗……

「もしかして……その為にオバケ屋敷に入ろって言ったの？」

「うん、当たり前じゃん。」

なんですとっ!?

涼しい顔で言った宗に、あたしがあんぐりと口を開けていると、

「男がオバケ屋敷に誘う理由は一つしかない!」

と、にやりと笑った。

・・・ホント、チャラ男って悪知恵が働く。

オバケ屋敷から出て、あたしと宗が

いろいろ露店巡りをしていると

武田くんと高杉くんが一緒に歩いていた。

あたしはちょっと気づかないフリ・・・。

武田くんはともかく高杉くんがいるからな！。

だけど、こーゆー時に限って向こうから気付くんだよね。

「お、二ノ宮と平野さんだ。」

・・・ほら、ね。

しかも武田くんじゃなくて高杉くんに見つかったみたい。

「お、高杉と武田が一緒なんて珍しいな。」

宗は武田くんと高杉くんに近づいた。

あたしと手を繋いだまま。

「平野さん誘おうと思ったたらおまえと一緒に出かけたって言うてたから、

武田もあぶれたって言うてたし。」

高杉くんは苦笑した後、あたしと宗の繋いだ手をちらりと見た。

「俺も琴美ちゃんと一緒に行きたかったのになー。」

武田くんはちよつと膨れっ面をしている。

「早い者勝ち。」

そんな武田くんに宗はにやりとしてみせた。

「一緒に店回ろうぜ。」

高杉くんは爽やかな笑顔を宗に向けて言った。

え・・・。

「あ、それいい！二ノ宮はもう琴美ちゃんを充分独り占めしただろ？」

武田くんもにこにこしながら言った。

えー。

合流するんなら武田くんだけでお願いします。

「えー、やだ。」

宗は意外にもあっさり断った。

「嫌ならおまえは先に帰れよ。俺らは平野さんと一緒に回るから。」

そして高杉くんもあっさり宗に言い放つ。

それを聞いて宗がちょっとムツとした。

「琴美はどうしたいんだ？」

「……。」

どうしたいって……。

「……そろそろ……帰ろうかな……と。」

短時間の間に脳内をフル回転させて出た答え。

“逃げるべし……。”

「「えー。」」

武田くん和高杉くんは口を揃えて不満そうに言った。

だって・・・このまま宗だけ帰って、武田くん和高杉くんと一緒に
行ったとして・・・

なんだかんだと武田くんがどっかに行かされたりなんかして

高杉くんと二人きりになつたら最悪だもん。

「・・・んじゃ、そーゆーコトだから。」

宗は武田くん和高杉くんにそう言い放つとあたしの手を引いて歩き出した。

しばらく歩いたところで宗が前を向いたまま口を開いた。

「武田はともかく、高杉と一緒にいたかったんじゃないのか？」

「なんで？」

「さっき、高杉のコト搜してたみたいだし。」

「……。」

まだ言うか。

「一緒にいたかったら最初から宗とじゃなくて高杉くんと来るし。」

「……それもそうか。」

宗はそう言って納得すると

「お土産買って帰ろうぜ。」

とにっこり笑った。

「うん。」

あたしと宗は貴兄と顧問の先生達に焼き鳥を買って帰った。

次の日。

朝から大雨になった。

昨日のお祭りの時に降らなくてよかった。

朝、いつもジョギングに出かけるバスケット部とサッカー部のみんなは
体育館の中をぐるぐる走っていた。

さすがに雨の中、走れないもんね。

朝食の後、バスケット部のみんなはいつも通り体育館で練習。

グラウンドが使えないサッカー部のみんなは大広間で勉強会をしていた。

昼食の後、あたしはいつもスケッチブックとデジカメを持って出か

ける。

今日も出かけるつもりで一応、スケッチブックとデジカメは片手に持っていた。

ただどさすがに今日はこの雨の中どこへも出かける気にならない。

どしや降りだもんなあ・・・。

そーいえば・・・

あの“翡翠の人”と出会ったのもこんな大雨の中だったな・・・。

あたしは雨が降る度に“翡翠の人”の事を思い出していた。

実はあの後、“翡翠の人”と出会った場所にも何度か行ってみた。

なぜかすごく気になったから。

ただ顔が見えなかったから気になるだけかもしれない。

だけど、例え“翡翠の人”がまたあそこにいたとしても

あたしは顔がわからないんだからどうしようもない。

「何物思いにふけてんの？」

不意に誰かの声が頭上からした。

その声にあたしは現実に取り戻される。

声の主はやっぱり宗だった。

宗はあたしの目の前に座ると置いていたスケッチブックに手を伸ばした。

「見てもいい？」

「うん。」

宗はあたしから閲覧許可が出ると興味深そうにスケッチブックを開いた。

「琴美ってさー、よく物思いにふけるといつか、考え事してるよね。」

「そお？」

「うん。」

・・・そーかもしれない。

最近、だいたいそんな時は“翡翠の人”の事を考えてる時が多いけど、

絵を描くときや、何か“モノを作る”時にどんなモノを作るか・・・とか

じっくり考えてる事が多いから。

「風景ばっかじゃないんだな。」

宗はスケッチブックに視線を落としたまま言った。

「うん、その時“描きたい”って思ったモノを描いてるから。」

「じゃ、これも?」

宗は顔をあげ、あるページに描かれた人物の絵をあたしに見せた。

あ・・・。

それは・・・

中学を卒業する直前に描いた高杉くんの絵だった。

何冊もあるスケッチブックの中のどれかに描いたのは憶えてるけど

これだったか・・・。

「これ・・・高杉？」

宗にそう聞かれ、何も答えることができない。

だって・・・そうだと言ってしまえば、やっぱり高杉くんのこと

好きなんじゃないかと言われる気がするし、

違うと言ってもなんかバレバレな気がするから。

「・・・。」

・・・なんて答えよう？

「おい、二ノ宮。そろそろ練習行くぞー！」

少し離れた所から武田くんの声がした。

なんてタイミング・・・。

「おう！」

宗は武田くんに軽く手を上げるとスケッチブックを閉じて立ち上がった。

「んじやな。」

あたしの方に小さく笑みを浮かべ、宗は武田くんと体育館の方へと歩いていった。

きつと・・・なんか誤解されたような気がする。

9月。

夏休みが終わって学校が始まった。

久しぶりの学校。

「おはよー。」

メグちゃんとも久しぶりに会った。

「おはよう、琴美ちゃん。」

真後ろの席の武田くんは・・・

合宿以来だからたいして久しぶりでもないけど、

あたしもとりあえず「おはよう。」と、笑顔を返した。

宗と高杉くんにわらわらと女子が群がっている光景も久しぶりに見る。

今日は始業式の後、サッカー部の練習試合があるらしい。

高杉くん派の女子がキャーキャー言いながら話している。

以前のあたしならこの後、こっそり見に行ってたな……。

そんな事を思いつつ、改めて高杉くんの事はもう好きじゃないと確信した。

ちなみにあの高杉くんのスケッチを見られて以来、

宗はあたしに話しかけて来なくなった。

用事がある時以外は……。

完璧に誤解されてるな……と思いつつ、

わざわざ否定するの难道ーなのか……？

そう思っている内に合宿が終わり……夏休みが終わり、

……で、現在に至る……。

誤解されたまま……と言つのは、ちょっと嫌だけど。

翌日、5時限目。

体育の時間。

今日はグラウンドでソフトボール。

あたし達のクラスと隣の1年2組との対戦。

男子と女子で別れて試合をしている。

だけど運動が苦手なあたしはもっぱら観戦。

どーせ出たって足を引っ張るだけだし。

・・・て、ゆーか。

女子の方は高杉さんと宗に気を取られて

ほとんどまともな試合になっていない感じ。

試合中の女子も男子の試合を観戦してるし。

体育なのにこんなに退屈な授業も珍しい。

それでもあたしはボーッと女子の試合を眺めていた。

まったく進展していない試合を・・・。

「琴美、あぶないっ！」

メグちゃんの声がして、あたしはハッとした。

だけど、時すでに遅し・・・

次の瞬間、頭にものすごい衝撃が走った。

あれ・・・？

何かぶつかった・・・？

一瞬にして目の前にキラキラと星が瞬き始めた。

なんだろう・・・？

そう思ったら、今度は生暖かい土の感触が頬に当たった。

太陽の日差しに照らされた生暖かい地面・・・。

あれ・・・？

・・・なんだろう？

あたしの意識はそこでプツンと途切れた。

目が覚めた時にはベッドの上だった。

見慣れない天井・・・

ここはどこだろう・・・？

あたしがパチパチと瞬きをしていると誰かが
視界に入ってきた。

誰？

「気分はどう？」

気分・・・？

「・・・。」

とりあえずキョロキョロと辺りを見回す。

「ここは保健室よ。」

保健室……。

て、ことはこの人は保健室の先生？

……と言っても、眼鏡をかけていないから確証はない。

それに何故あたしが保健室にいるのかもまったくわからない。

「体育の時間にソフトボールの打球が当たって、脳震盪を起こしたのよ。」

保健室の先生は、おそらくまだ状況が把握できていないあたしに説明してくれた。

そっか……。それで保健室に運ばれたんだ。

体を起こしてとりあえず眼鏡をかけようと置いてありそうな場所を手探りで探した。

だけど眼鏡がどこにもない。

「おでこに打球が直撃した時に眼鏡が割れちゃったみたい。」

あたしが眼鏡を探してるのがわかったのか保健室の先生は、

さらに説明してくれた。

え．．．。

．．．て事は．．．眼鏡がない．．．？

「割れたレンズで顔に少し怪我してるけど、かすり傷だし、痕は残らないから大丈夫よ。」

保健室の先生（多分）はそう言うてにっこり微笑んだ・・・気がした。

確かに頬の辺りとか、目の下あたりに絆創膏が貼られている感覚がある。

眼鏡がないあたしは何も見えない。

困ったな・・・。

しばらくベッドの上でどうしたもんかと考える。

とりあえず教室に戻ろうかな。

腕時計で時間を確認するとちょうど5時限目が終わった後の休憩時間。

けど・・・制服がない。

あー、そうだ・・・更衣室だ。

一旦、更衣室に戻って着替えようかと思っていると

保健室のドアが開いて、誰かが入ってきた。

「琴美、大丈夫？」

メグちゃんだった。

心配して様子を見に来てくれたんだ。

「もう起きて大丈夫なの？」

「うん、気分も悪くないし全然平気。」

あたしがそう言うつとメグちゃんは安心したみたいだった。

「はい、コレ制服持って来たよ。」

メグちゃんはあたしの制服を持ってきてくれていた。

「ありがとー、メグちゃん。」

助かった・・・。

眼鏡がないおかげで四苦八苦しながら

なんとか制服に着替えたあたしはメグちゃんと一緒に保健室を出た。
教室に戻る時、あたしの目がいかに悪いか知っているメグちゃんは、
手を取って席まで誘導してくれた。

「ノートはあたしが取ってあげるから、無理しなくていいからね。」
そして、眼鏡がないと何もできないあたしをメグちゃんは気遣ってくれた。

放課後。

眼鏡なしのあたしはさすがに今日は部活に出ても何もできない。
なにより、新しい眼鏡を作りに行かないと。

そんなワケであたしは一人で教室を出て昇降口に向かった。

ちなみに、あたし達1年生の教室は3階にある。

さて・・・問題はここから。

階段が怖いなー。

窓から入ってくる日差しに照らされて、足元が真っ白にしか見えな
い。

眼鏡なしで1階まで下りるのは結構ツライ・・・。

命懸け・・・と言うのは大袈裟でもなかったりする。

それでも降りないワケにもいかないの、あたしは一步步階段を下りる事にした。

なんとか2階まで下り、ホッとしてまた降りようとした瞬間、

あたしは見事に足を踏み外した。

「きゃっ!?!」

落ちる・・・!

そう思った瞬間、後ろから誰かの腕に支えられた。

おかげであたしは体勢を崩す事無く踏み留まった。

・・・あれ?

あたしは支えてくれた人物を確認しようと振り返った。

・・・え？

“翡翠の人”・・・？

顔は見えないけれど・・・あの“翡翠の人”だとわかった。

眼鏡をかけていないからわかる事・・・。

あの時と同じ雰囲気。

同じ目線。

思いつきりばやけているけど、絶対あの“翡翠の人”だと確信できた。

「大丈夫か？」

ほら・・・やっぱりあの時と同じ声。

同じ・・・優しい声。

「琴美？」

え・・・？

どうして・・・あたしの名前を知っているの？

キョトンとしたまま固まっているあたしに“翡翠の人”は

「琴美？」と、もう一度あたしの名前を呼んだ。

「どうして・・・あたしの名前を知っているの？」

あたしがそう聞くと“翡翠の人”は「え・・・？」と

小さく言った。

「琴美・・・俺がわからないのか・・・？」

・・・誰？

“翡翠の人”はそつとあたしの頬を包み込んだ。

暖かい手・・・。

あの時と同じ・・・。

「琴美・・・？」

名前を呼ばれても、あたしは誰だかわからなかった。

・・・でも・・・この声・・・

「俺だよ。」

そう言つて“翡翠の人”は顔を近づけた。

・・・あれ？

さっきよりは少しだけ顔が近づいて、おおよその顔がわかるようになった。

まだばやけたままだけど。

・・・宗？

そっだ・・・この声、宗の声だ。

「シュ・・・ウ・・・？」

この茶髪・・・

この顔の輪郭・・・

そして・・・薄っすらとだけわかるこの翡翠色の瞳・・・。

「うん・・・俺だよ。」

じゃあ・・・あの時、あの雨の中で出会ったのって・・・

「琴美・・・もしかして・・・俺の顔、覚えてない？」

「うん・・・。」

「そっか・・・どつりで・・・。」

宗はそう言つとあたしの手を取つて、1階まで連れて行つてくれた。

「ありがとう・・・。」

「・・・うん。」

宗が“翡翠の人”だったなんて・・・。

「家まで送っていくよ。」

「あ、大丈夫。お母さんに迎えに来てもらって、
そのまま眼鏡屋さんに行くから。」

「そっか・・・なら大丈夫だな。」

「うん、ありがとう。」

「けど・・・さっきはびっくりしたよ。」

「・・・なんで？」

「琴美が“なんであたしの名前を知ってるの？”とか、俺の顔を

じつと見たまま動かないし、“誰？”みたいな顔してるから、

頭打っておかしくなったのかと思った。」

「あー・・・ごめん。」

だっで見えないんだもん。

「琴美、視力いくつ？」

「んと・・・右が0・05で左が0・06。」

「えっ！？そんなに悪いのか!？」

視力が0・1もないのがそんなに驚いたんだろうか・・・。

「じゃあ・・・あの雨の日の時も全然俺の顔見えてなかったんだ？」

「っ!？」

雨の日の時って・・・宗はあたしだって気がついてたって事？

「憶えてない？」

憶えてる・・・。

「3月14日。突然大雨が降り出してさ、雑貨屋の前で雨宿りしてた時。」

日付まで憶えてたんだ・・・。

「宗・・・憶えてたの・・・？」

「うん。」

・・・チリン・・・。

あ・・・

「これ・・・くれただろ？」

宗はそう言って携帯についているあの恋愛成就のハートの鈴を

あたしに見せた。

「・・・つけてたんだ？」

「うん。」

あたしはまさか“翡翠の人”・・・宗がホントに携帯につけているとは思わなかった。

「だってコレ恋愛成就のお守りだろ？」

・・・そこまで知ってたんだ・・・。

正直びつくり。

「だからつけてる。」

「宗はそんなのつけなくても成就するでしょ？」

あたしは宗みたいなイケメンでもそんなモノに頼る事があるのかと思うと、

なんだかちよつと可笑しくて笑ってしまった。

「そんな事ないよ？」

宗はそう言ってるけど、実際女子にいつも囲まれてるのはどこの誰ですかー？

「あ、そういえば・・・あたしもつけてるんだよ。」

あたしはカバンの中から手探りで携帯を出して宗に見せた。

「ホントだ。」

「てか、今さらだけど・・・あたしがもらってよかったの？」

「ははっ、ホントに今さらだなー。」

宗はケラケラと笑った。

だって・・・。

「宗のお気に入りだったんじゃないの？」

「確かに俺のお気に入りだったよ。」

「えー、じゃ、やっぱりあたしがもらっちゃマズかったんじゃないの？」

「違うよ。お気に入りだから琴美にあげたんだよ。」

・・・？

センサー、意味がまったくわかりませんけど・・・？

「どーゆー意味？」

「・・・俺の恋愛が成就したら教えてあげる。」

「・・・すぐじゃん？」

「うん、わかった。」

あたしは宗の恋愛成就是きつとすぐ叶うだろうと思って納得した。

だって明日にでも聞けるかもしれないもんね？

「ところで宗はいつから気がついてたの？」

「んー、最初しばらくは全然わかんなくって、

だけどなんかあの時の女の子に似てるなって思い始めて、

遠足の時に確信した。」

「遠足の時？」

「うん、二人きりで話してて、俺が思いっきり顔近づけた時だよ。」

そーいえば、そんな事あったな・・・。

「髪も短くなってるし、眼鏡もかけてるからもしかして違うのかな？」

で、思ってたんだけど・・・やっぱりあの時は琴美だったんだな。」

「早く言ってくればよかったのに。」

「だって、琴美は俺の顔見てもまったく無反応だったから・・・
てっきりもうあの時の事は忘れたのかと思って。」

「忘れたんじゃないかって・・・」

「まさか、見えてなかったんだとは思わなかった。」

「それじゃ、気がつく訳ないよなー。」

宗は苦笑いした。

「あ、そだ・・・前から聞きたかったんだけどさ・・・」

「ん？」

「携帯番号教えて？」

「・・・誰の？」

メグちゃんのかな？

「琴美のに決まってるじゃん。」

宗はプツと吹き出した。

「え・・・あ、うん。」

男の子に携帯番号を聞かれることに慣れていないあたしは
ちよつと驚いた。

宗はあたしから番号を聞くと、すぐにメモリーに入れて
あたしの携帯へさっそくかけてきた。

そして、あたしの手の中で一回だけ携帯が鳴って切れた。

「俺の携帯番号。」

あ……なるほど……言うより鳴らしたほうが早いと思ったのね。

「ちょっと携帯貸して。」

宗はそう言つと自分の携帯をあたしに持たせ、あたしの携帯をいじり始めた。

「……?」

なんだろう?

「俺の番号、メモリーに入れといたから。」

「あ……ありがとう。」

「丁寧にメモリー登録までしてくれたんだ。」

「へへーっ、琴美の番号げっと！」

宗は嬉しそうに言った。

あたしの番号をゲットしてそんなに喜ぶことがあるのかな？

・・・てか、宗の携帯のメモリーよく空きがあつたなあ。

てっきり空気がないくらい女の子の携帯番号で埋まっているのかと思つてた。

週末、金曜日の夜。

お風呂上りに自分の部屋でボーッとテレビを見ていると携帯が鳴った。

・・・聞いたことない着メロが鳴ってるんだけど・・・？

こんなの設定した覚えないけどなー？

そんな事を思いながら、着信表示を見た。

“ シュウ ”

・・・ん？

シュウ？

・・・宗？

「もしもし？」

『もしもし、宗だけど。』

「あ・・・うん。」

宗の声だ。

あたし、宗の携帯番号カタカナで登録したっけ？

しかも着メロ変えた覚えもないし！。

『あ・・・今、マズかった？』

あたしがちょっと沈黙して“電話しちゃマズかった空気”が流れたのか、

宗が少し気まずそうに言った。

「あ、ううん。なんか聞いたことない着メロが鳴ったから、

こんなの設定した覚えがないけどなーって考えてたの。」

『あ、それ俺。』

「え？」

『俺の携帯番号、琴美の携帯のメモリーに入れたときに俺が設定したの。』

「あー、そーゆーコト？」

そっか・・・なるほど。

そーいえば宗が自分であたしの携帯に入れたんだった。

宗のやりそうなコトだわ。

『びっくりした？』

宗は電話の向こうでクスクスと笑っている。

『あ、ところでさ・・・琴美、明日は暇?』

「明日?・・・うーん、特に何も無いけど?」

『あのさ・・・明日、バスケット部の練習試合があるんだけど・・・』

応援に来てくれないかなー?って・・・。

そーいえば、今日、休憩時間に武田くんがそんなコト言ってたな。

宗の周りで女子も騒いでたし。

「・・・応援ならいっぱい来るんじゃないの?」

あたしが行くまでもなさそうじゃん。

『俺、琴美に来て欲しいんだもん。』

う・・・。

そんなキツパリ言われると・・・。

『・・・ダメ?』

「・・・うん、行く。」

『ホント?』

「うん。」

だってねえ・・・そんな風に言われちゃイヤとは言えないし、
わざわざ、こうして電話してきてくれてるしね。

「どこでやるの?」

『3時からうちの学校の第一体育館。』

「うん、わかった。」

『俺はスタメンじゃないけど試合には出るから。』

「そっか、頑張ってね。」

『うん・・・それじゃ、明日。』

「うん・・・おやすみ。」

『おやすみ。』

電話を切った後、明日差し入れにレモンの蜂蜜漬けを作って持っていくと

キッチンに行くと弟の誠がお風呂上りに牛乳を一气飲みしていた。

「姉ちゃん、こんな時間から何作るの？」

「レモンの蜂蜜漬け。」

「そんなにたくさん？」

テーブルの上に並べたタッパを見て誠は驚いた。

レモンの蜂蜜漬けは普段からよく作っているけど、

いつもはタッパ一つ分。

でも、今テーブルの上に並んでいるタッパは3つ。

「明日、うちのバスケット部の練習試合の応援に行くから、

差し入れに持って行くと思って。」

「男子の?」

「うん。」

「シユウさんも出るの?」

「うん、スタメンじゃないけど出るって言ってたよ。」

「俺も連れてって!」

なぬっ!?

「俺も見たい!」

まあ・・・男子バスケット部の試合だしね。

「じゃあ、明日一緒に行こ。」

「うん！」

誠はあたしからお供の許可が下りると小躍りして喜んだ。

翌日。

あたしと誠はレモンの蜂蜜漬けを持って、宗達の練習試合の応援に行った。

第一体育館に入ると入口のところで武田くんにバッタリ会った。

「武田くん。」

「あ、琴美ちゃん。」

武田くんはあたしに気が付くとニコツと笑った。

「琴美ちゃん……もしかして……彼氏？」

武田くんはあたしのすぐ後ろにくっついてきていた誠をちらりと見た。

「あはは、まさかつ！弟だよ。」

「あ、・・・そなの？」

弟と聞いて武田くんはちょっと拍子抜けしたみたいだった。

武田くんに差し入れを渡して、あたしと誠は試合がよく見えそうなところを探した。

だけど、いい場所はとくに宗の取り巻きが陣取ってたりする。

「最前列はすっかり埋まってるね。」

あたしと誠は二階の観客席の少し後ろに座った。

「あの女の子達みんなシュウさんのファン？」

誠はキャー、キャー言っている女の子達に視線を向け、

さらにその女の子達の視線の先にいる宗の姿が目に入ったようだった。

「うん。」

「すげっ！……てか、相手チームの人達かわいそーだね。」

「なんで？」

「だって、ただでさえアウェー戦なのに、こんなに取り巻きがいたんじゃない？」

より一層アウェーな感じじゃん？」

「あはは、確かにそうだね。」

「ところで、なんでみんなシュウさんの事“ソウ”君て呼んでるの？」

「宗の漢字は宗教の“宗”なんだけど、みんな“ソウ”だと思っているみたい。」

「シュウさんは何も言わないの？」

「なんか訂正するのが面倒臭いんだって。」

「ふーん。」

あたしと誠がそんな会話をしていると、ユニフォーム姿で

ストレッチをしていた宗と目が合った。

宗はあたしと誠に手を振ってニツと笑った。

そしてそんな爽やかな笑顔を見せて手を振るもんだから

あたしの前にいた女の子達は一斉に後ろを振り返った。

「姉ちゃん・・・なんか・・・怖いよ？」

「き、気にしなきゃいいの・・・。」

誠に向けて言ってるつもり・・・でも、ホントは自分にも言い聞かせてる感じ。

しばらくして両チームがコートに集合。

そして試合開始。

宗の言っていた通り、スタメンの中に宗はいない。

ちなみに武田くんもいない。

けど、誠はあたしの隣で真剣な表情で試合をじっと見ていた。

そんな弟の姿はちょっと意外・・・かな。

第2クォーターが始まり、宗がメンバーに加わった。

その瞬間、女の子達の黄色い声援が飛び交う。

すーっ・・・っ。

「いよいよシュウさんの出番だね。」

誠は嬉しそうに笑った。

誠も宗がプレイするところ、楽しみにしてたのかな？

相手チームの選手はまだ宗にはノーマーク。

1年生だと思つて油断してるのかな？

それをいい事に次々とパスが宗に回される。

そして宗は華麗なフォームでシュートを決めていく。

その度に沸き起こる歓声・・・て、ゆーか黄色い声？

だけど・・・宗はその黄色い声も耳に入っていないかのように

真剣な顔で試合をしている。

あたしは、その真剣な表情にドキツとした。

いつもはチャラチャラしている顔が今はコートの中ですごく真剣な顔をしている。

その表情にドキドキしているあたし・・・。

なんでこんなにドキドキしてるんだろ？

あの時と同じ・・・。

高杉くんを好きになった瞬間と同じ・・・

「シュウさんで、左利き？」

へ？

宗に見惚れているあたしを現実に戻したのは誠の声だった。

「なんで？」

「フォームがなんか俺と真逆だから。」

そう言われてみれば宗がパスする時もドリブルする時も、

シュートをする時も他の選手と違う。

逆のフォーム。

まるで・・・鏡に映したみたいに。

宗って・・・左利きだっけ？

今さらながら宗が左利きなのか右利きなのかわからない。

「後で宗に聞いてみれば？」

「話せるかな？」

あ・・・確かにこんなに取り巻きがいるんじゃ無理かもね。

「ちあ・・・？」

「あ……でも、シュウさん、姉ちゃんのトコには来るかな？」

どーゆー意味？

あたしは意味もわからず、ただ黙っていた。

誠はあたしに謎かけみたいな事を言っておきながら、
すでに試合を食い入るように見ていた。

“ 姉ちゃんのトコには…… ”

その言葉がちよっと引っかかる。

でも……宗はきつと彼女のトコに行くよ。

そう思うとちょっと胸がチクリとした・・・。

ハーフタイム。

宗と他のメンバーはあたしが差し入れたレモンの蜂蜜漬けを口に放り込んでいた。

一応食べてくれてるってコトは・・・少しは役に立ってるのかな？

第3クォーター。

試合は30対46。

うちの学校が勝っている。

でも、この第3クォーターで気を抜いてしまうとヤバイ。

現に気が緩んだのか、スタメンから出ているメンバーに疲れが出ているのか、

うちのバスケ部の動きが少しずつ鈍くなってきた。

それに相手チームも宗へのパスを遮断すべくぴったりとマークし始めている。

頑張って・・・っ！

ただ、ひたすらにそれだけを願った。

宗・・・頑張って・・・っ！

第3クォーターに入ってから宗へのパスが全然回っていない。

完璧にマークされて動きを封じられている宗は少し苛立った顔をしている。

だけど、宗にぴったりくっついていて分、他の選手は手薄。

宗の動きを封じても他の選手がシュートを決めていく。

点数は40対50。

まだうちのバスケ部が勝っている。

ここで第3クォーターが終わってインターバル。

相手チームもかなり疲れてきている。

うちのバスケ部は・・・少しマシ・・・かな？

両チームともメンバーを少し入れ替えて第4クォーターが始まった。

宗は引き続き試合に出るみたいだ。

相手チームは宗にだけ気を取られていてはマズいと思ったのか、

宗へのマークが少し外された。

だけど、宗はほとんどフル出場に近い状態だし、

マークに張り付いてる相手の選手は交代したばかりの人。

素早い動きでなかなか宗にシュートを決めさせてくれない。

しかもそれに加えて、相手チームも最後の攻めと言う感じで

次々とシュートをうつ。

52対50。

・・・とうとう逆転された。

試合も終わりに近づき宗も最後の攻め。

シュートするのかな？と思ったら普通にドリブルしたり、ドリブルかな？と思ったらいきなりシュートをした。

フェイクを挟んで相手のマークを外してからシュート。

ボールがバスケットの中をすりりと通り過ぎた瞬間、

女の子達の湧き上がる黄色い声の中、

審判のホイッスルが鳴り響いた。

すると相手チームの選手がちょっと顔を顰めた。

「今の何？」

バスケのルールがよくわからないあたしは誠に聞いた。

「パーソナル・ファウル。」

なんじゃそりゃ？

「今のシュウさんがシュートうつてる時に相手チームの人がわざと邪魔したでしょ？」

あー、そー言われてみれば。

宗のマークに張り付いていた人が押してたね。

あたしから見てももろ故意にやった感じ。

「どーなるの？」

「今はシュートが決まったから1本のフリースロー。」

試合は後、残り30秒きっていた。

52対52。

ここで宗のフリースローが入れば勝つ。

宗は審判からボールを受け取ると、フリースローラインに立った。

そしてボールを軽くおでこに当てて、祈るように目を閉じてから

ゆっくりとシュートの体勢に入った。

宗の手から放たれたボールは弧を描いてバックボードに当たり、
クルクルとバスケットのリングを縁取って吸い込まれていった。

入った・・・！

「やった！」

「うん！」

あたしと誠は顔を見合わせた。

コートの中では宗もチームのメンバーと一緒に笑みを浮かべていた。

その笑顔は汗でキラキラと光ってさえいる。

すごく綺麗で・・・すごく嬉しそう。

あたしはその笑顔にまたやられた。

なんか・・・やばいよ・・・あたし。

そして見惚れたままボーツとしているあたしをまた現実に戻したの
たのは

試合終了を告げるホイッスルの音だった。

「姉ちゃん、勝ったね！」

誠は嬉しそうにコート中央に集合した宗達バスケット部のメンバーを見

つめていた。

「うん！」

あたしも宗の姿を目で追った。

相手チームの選手と握手をして、仲間の選手とハイタッチしている。

そして・・・

宗はあたしと誠に視線を向けるとにっこり笑って手を振ってくれた。

誠は手を思いつきりブンブンと振っている。

・・・あたしはちょっとだけ笑って小さく手を振った。

だって・・・

ほら、ほら、ほらっ！

目の前にいる女の子達の視線がすごいしー。

「姉ちゃん……こ、怖いよ……。」

「……だ、だから……気にしなきゃいいんだってば……。」

あたしがそう言い終わるか終わらないかぐらいに

女の子達はまたすぐに宗へと視線を戻した。

試合が終わった後、あたしと誠はそのまま帰る事にした。

宗もバスケット部で反省会とかミーティングあるだろうし、

なにより女の子達がいるし……

それに……当然、彼女も来てるだろうし……。

・ ・ ・ ｝ # ｝ ・ ・ ・

あたしと誠が駅に向かって歩いていると、

宗から電話がかかってきた。

「もしもし。」

『もしもし、宗だけど・・・今どこ？』

「あー、えーと・・・もうすぐ駅・・・かな。」

『えーっ！もう、帰ってんの？』

「あ・・・うん。」

『琴美の事探してたのにー。』

「え・・・いや、だって・・・女の子達いっぱいいたから、

きつとそっちに行くと思って。」

それに彼女も来てるでしょ？

『琴美と話したかったのに！』

・・・で、そんなコト言われても・・・ねえ？

『ちゃんと会ってお礼も言いたかったのにな。』

「あはは、いいよ・・・そんなの。」

『だって、わざわざ差し入れまで持ってきてくれたのに。』

宗って・・・意外と律儀だな。

『後、誠も一緒に応援に来てくれてただろ？』

「あ、うん。」

『ありがとな。』

「ううん。」

『・・・じゃあ、誠にもよろしく言っておいて。』

「うん、わかった。お疲れ様・・・じゃあね。」

それだけで電話は終わってしまったけど、

宗がわざわざ電話をくれたのは正直嬉しかった。

「今のシユウさん？」

「うん。」

「姉ちゃんのコト、探してたんじゃないの？」

さつさと帰っちゃったからがっかりしてたでしょ？」

「うん、なんかそうみたい。」

弟よ・・・いつからそんなに鋭くなったんだ？

「誠にもよろしく言うておいてって言うてたよ。」

「ホント？」

「うん。」

「俺もシュウさんみたいにバスケット上手になりたいなあー。」

「頑張ればなれるんじゃない？」

「そうかな？」

「うん、誠はあたしと違って運動神経はいい方だしね？」

「はは、確かに。」

「うんうん。」

月曜日。

部活が終わると、またまたいつものように？

正門で宗に待ち伏せをされていた。

「琴美を待ってたんだよ。」

あたしがキヨロキヨロする前に宗はニヤツとした。

て、ゆーか・・・

隣にはなぜか高杉くんもいる・・・。

なんで・・・？

「コレ、ありがとう。」

宗はそう言っであたしがレモンの蜂蜜漬けを入れて行ったタッパを返してくれた。

「あ・・・うん。」

きれいに洗ってある・・・。

「わざわざ洗ってくれたんだ？」

「当たり前だろー？」

宗はククツと笑った。

別にそのままでもよかったのに。

「すごく助かったよ、ありがとう。」

宗は柔らかい笑顔をあたしに向けた。

・・・キュン。

その笑顔にときめくあたし・・・。

「琴美のおかげで試合に勝てた。」

キュン

そんなコト言われると・・・

「琴美の差し入れがなかったら俺、頑張れなかったし。」

「そ、そんなコトないでしょ。」

頑張れたのは彼女の応援のおかげ・・・じゃないの？

「先輩達もすごく喜んでたよ。」

あー、そーゆー意味ね。

レモンの蜂蜜漬けはスタミナ回復にはいいって言うしね。

「んじゃ、言いたい事はそれだから俺は先に帰るよ。」

そう言つと宗は一人でさつさと歩き始めた。

はあっ！？

なんでっ！？

一緒の方角なのにつ。

一緒の駅で降りるのにつ。

「ちょ・・・宗、待つ・・・」

宗を追いかけてようとして、腕を掴まれた。

「せっかく気い使ってくれてんだし、いいじゃん。」

高杉くんだった。

そーいえば高杉くんもいたんだった・・・。

“ 氣い使ってくれた ” っ て、何に？

むしろ、あたし的には高杉くんと二人きりにされる事のほうが地獄
なんだけどっ！

再び宗に目を向けると、宗はどんどん小さくなって、

あっという間に見えなくなっていった。

歩くの早いよ・・・宗。

あたしはなんだかこのまま、また宗が離れて行ってしまっ気がした・
・。

宗の後姿が見えなくなっても、あたしがずっとその方向に

目を向けたまましていると高杉くんが話しかけてきた。

「土曜日、アイツの練習試合見に行つたんだ？」

「あ、・・・うん。」

「じゃあ、今度は俺の方にも来て？」

「都合が合えば・・・。」

とりあえずそう言って誤魔化す。

だって・・・あまり見に行きたいとは思わないから。

「あ・・・ところで、高杉くんがこの時間に帰るって珍しいね？」

「うん、いつもはもう少し早いんだけど今日はたまたま

部活が長引いたから。」

「そーなんだ。」

「そしたら二ノ宮が正門のところに突っ立ってるから、何やってんだ？」

「って、聞いたら平野さん待ってるって言ったから俺も一緒に帰ろうと思って。」

それで宗と一緒にいたんだ。

「平野さん、いつも二ノ宮と一緒に帰ってるの？」

「別にそーゆーワケじゃないけど。」

「二ノ宮が勝手に待ってただけ？」

勝手に・・・

まあ、勝手にと言えばそうだけど・・・。

「付き合ってるの？」

「へ？」

「二ノ宮と。」

「うっん。」

そんなワケないじゃん。

宗には彼女いるんだし。

あんな恋愛成就のお守り付けてるくらいだし・・・で、

あれ？

そーいえば・・・彼女がいるんならあのお守りいらさないじゃん？

あ・・・でも、宗の口から彼女がいるとは聞いたことがないし・・・

それなら彼女はいないとしても好きな子はあるって事だよな。

・・・そーだよな。

て、コトは・・・早々とあたし・・・失恋？

でも今回は高杉くんの時みたいに3年間片想いしたワケじゃないし。

傷は浅い・・・のかな？

今年、2度目の失恋・・・。

しかもまたまたイケメンのチャラ男。

・・・それからの高杉くんとの会話は正直まったく憶えていない。

多分、全部テキトーに返事をしてた。

一緒に駅の改札を出て、また明日・・・と言ったのは憶えてるけど。

そして、高杉くんにフラれた時よりも傷は浅いはずなのに、

まだ告白もしていないうちから失恋したショックは

あたしが思っていたより大きかった・・・。

宗に失恋してから一週間が過ぎた月曜日の放課後。

あたしは部活に出る気力もなかった。

て、ゆーか・・・ここ一週間まともに部活に出ていない。

いまいち創作意欲がわかないし、それどころか全てにおいて無気力。

自分でもこんなに重症だとは思わなかった。

そんなワケで今日も部活にも出ずに帰ろうかな・・・

なんて考えつつ、帰り支度をしていると、

「平野さん、先輩来てるよー。」

と、クラスメイトの声がした。

・・・先輩？

誰だろう？

あたしは教室の入口に視線を向けた。

すると、そこには・・・

美術部の部長・姉川俊介さんがいた。

3年生の先輩で長身でイケメン。

後輩の面倒見も良くて優しくて頼れるアニキ的な人。

だからめっちゃめっちゃモテる。

それでいて全然チャラ男じゃないから、あたしも結構頼っていたりする。

先輩目当てに美術部に入ってきた女の子も少なくない。

けど実は姉川先輩は同じ3年生の水本千里さんと付き合っていたりする。

これがまためっちゃめっちゃ美人。

ちなみに美術部の副部長。

美男美女のカップル。

それであっさり辞めていった女の子も少なくないけど・・・。

姉川先輩は教室のドアに寄りかかって腕組みをしていた。

・・・ひいつ。

なんか・・・怒ってる？

そしてあたしが突っ立ったままでいると、つかつかと歩み寄ってきた。

「迎えに来た。」

先輩はそう言うと、あたしの手首を掴んで

「行くぞ。」

と教室の外に向かって歩き始めた。

・・・ええええええっ！？

「い、行くつてどこにですかっ？」

「部活に決まってんだろ。」

うひっ！？

要するにサボらないように拉致しに来たの？

姉川先輩はあたしの手首を掴んだまま屋上へと来た。

屋上で部活？

そんなワケないよね？

「どうしたんだ？一体？」

そう言う姉川先輩はあたしの手をやつと離してくれた。

「ここ一週間くらいずっと元気がないみたいだし、

選択授業の時も全然、絵を描いてなかったって

長谷川先生から聞いたから・・・なんかあったのか？」

・・・実は失恋しました・・・なんて言えないよ。

「体調不良・・・で、ワケでもなさそうだし。」

その通り、いたって健康です。

「・・・失恋でもしたか？」

姉川先輩は、ちょっと冗談っぽく笑った。

ぐはっ。

いきなり当てないで……。

あたしの微妙な表情の変化で気付いたのか

姉川先輩は一瞬にして真顔になった。

「まさか……凶星……だった？」

手を口にあてて後悔したように姉川先輩はあたしの顔を覗き込んだ。

そのまさかですよー。

「ごめん……冗談のつもりだったんだけど……

ホントにそうだとは思わなかったから……。」

「あ、いえ……。」

先輩・・・鋭すぎる男は時に嫌われますよ？

「まあ・・・最初から無理な相手でしたし・・・。」

そうだよ・・・宗みたいなカッコいい子が

あたしと話をしてたのもおかしい話なんだし。

「なんだよ・・・それ。」

姉川先輩は苦笑いした。

「だって・・・すごくカッコ良くて、運動神経もよくて

誰にでも優しくて、女の子にいつも囲まれてるんですよ？」

「そんな事言ったら、千里だってそうだぞ？」

「え、そうなんですか？」

「千里だっけいつも男に囲まれてる。」

あー、確かにあれだけの美人ならね。

「それでも俺は諦めなかったけど？」

そりゃ・・・先輩だっけカッコいいし、

正直、その辺の男子じゃ相手にならないんじゃない？・・・。

「そいつに告白したの？」

「いえ・・・。」

「告白してないの？」

先輩はちよつと呆れた顔をした。

「告白もしてないなら失恋じゃないだろ。」

「でも・・・その人好きな子がいるんですよ。」

「本人がそう言ったのか？」

「いえ、けど恋愛成就のお守り持ってます。」

「・・・なら、失恋って決め付けるのは早いんじゃないのか？」

「そうですかー？」

「俺はそう思うけど？」

「どうしてですか？」

「本人の口から聞いた訳じゃないから。」

確かに宗の口からハッキリ“好きな子がいる”とは聞いていない。

「そいつのコト・・・まだ好きなんだろう？」

まだ・・・

そうかもしれない・・・。

いや、きっとそうだ。

「はい・・・。」

「好きなら、告白もしないで諦めるなよ。」

先輩はあたしの頭をポンポンと優しく撫でてくれた。

「俺だってダメ元で千里に告ったんだぞ？」

・・・え？

「そうなん・・・ですか？」

「うん。」

意外・・・。

「・・・だからって、おまえも今すぐそいつに告白してみろって意味じゃないからな？」

「あ・・・はい。」

「まあ・・・要するにだ・・・相手の口からハッキリ聞くまでは諦めるなって言つか・・・好きなら玉砕するまで諦めるなって」

玉砕って・・・。

でも・・・そうだね。

「はい。」

てか、先輩ってやっぱり優しいな・・・
なんとなく元気が出てきた。

「先輩ありがとうございました。」

「うん。」

もう少しだけ宗の事、好きでいたい・・・
玉砕するまで・・・。

「まあー、玉砕した時は全力で慰めてやるから。」

姉川先輩はにやりとした。

「えー、それ玉砕するコト前提で言ってるでしょ？」

あたしは頬を膨らませた。

「ははは、ちがう、ちがう。」

そう言いながら先輩は大笑いしている。

「俺はおまえの事、応援してるから・・・てか、そろそろ部活行こう。」

みんなが待ってる。」

先輩は優しい笑顔をあたしに向けた。

“みんなが待ってる。”

その言葉が素直に嬉しかった。

「はいつ。」

あたしはちよつと足早に歩き始めた先輩の後を追った。

10月。

学園祭が行われる一ヶ月前。

そろそろクラスで出し物をやるのか、模擬店をやるのか決めなければならぬ。

そんなワケで今日のHRは学園祭実行委員に選ばれた鈴木くんの進行で

何をやるか決める事になった。

みんなの意見は模擬店をやる事で決定。

理由は簡単。

演劇とかだと男子の主役はまちがいなく高杉くんか宗。

そしてそれによって女子の相手役争いが起こるから。

余計な争いを避けるために演劇の類はなしという事になった。

「じゃあー、なんの模擬店がいいかみんな希望を言ってみてくれる

？」

たこ焼き、焼きそば、もんじゃ焼き、ベビーカーステラ・・・

進行役の鈴木くんはチョークで黒板に模擬店の候補を次々と書いていった。

「メイド喫茶とかは？」

あたしのすぐ後ろから声がした。

振り向いて確認はしていないけど多分、武田くん。

「おー、それいいねえ！」

「それ男子が楽しいだけでしょ？」

「そうよ、そんなの却下！」

男子からは支持されたけど女子からの圧倒的な苦情で“メイド喫茶”はあっさり却下。

「でもさー、なんか食べ物系だと他のクラスもやりそうだし、

一部の女子しかまともに料理できねーの校外学習の時に実証済みだしなー。」

そんな声がどこからともなくあがった。

「あー、確かに。」

そう言って男子達は頷いた。

そしてそれに何も反論できない女子達……。

「じゃあ……駄菓子屋さんとか……どうかな？」

みんながどうするか悩んでいる中、少し小さな声で言ったのは、

あたしの女神・安藤さんだった。

「それなら、別に火を使う訳じゃないし……。」

「けど、それだと面白味に欠けててお客さん入らなそう。」

安藤さんの言葉を榎本さんが遮った。

ちなみに熱烈な高杉くん派の女子。

だから同じ高杉くん派の安藤さんをライバル視しているっぽい。

やな感じ・・・。

安藤さんは榎本さんに否定されてちょっとヘコんだ。

「面白味がないなら、面白くすればいいんじゃない？」

あたしは女神を助太刀するべく反撃に出た。

「ただ駄菓子を並べて置いとくんじゃなくて、くじとか作って

1等とか2等とかの詰め合わせを用意したり、女の子向けに

かわいいパッケージのチョコとかキャンディーの袋詰めを作るとか。」

「それだと手間がかからない？」

榎本さんは今度はあたしに噛み付いてきた。

「手間がかかるのは何やったって一緒だろ？」

あたしがまた反撃しようと思口を開きかけた瞬間、宗が擁護してくれた。

「下準備に手間がかかるか、当日調理したりで手間がかかるかの違い。」

それに駄菓子なら当日は店番くらいだから、むしろ楽だと思うけど？」

「……。」

宗にそう言われ、榎本さんは何も言えず黙り込んだ。

「俺もそう思う。」

今度は高杉くんが口を開いた。

「安藤さんと平野さんの案、いいと思うよ。」

もはや高杉くんにまでそう言われ、榎本さんは引き下がるしかなく

なつた。

「じゃ・・・駄菓子屋で決定でいい？」

鈴木くんはクラス全員の同意を求めた。

模擬店はそのまま駄菓子屋で決定し、あとはグループ分け。

買出し部隊、経理部隊、店番部隊、装飾部隊・・・とか。

あたしはもちろん装飾部隊を希望した。

看板を作ったり、店内のレイアウトを考えたりするグループ。

メグちゃんもあたしと同じ装飾部隊を希望した。

他の女子はと言うと・・・例によって宗と高杉くんが

どこのグループを希望するのか様子を伺っている。

だから、女子はまだどこのグループになるか決まっていない。

まったく一々面倒臭いな……。

「俺、装飾がいい。」

装飾部隊の空きがあと二人になった時、同時に口を開いたのは宗と高杉くんだった。

えー。

宗はウェルカムだけど……高杉くんは……。

あたしはメグちゃんと顔を見合わせた。

そして、直後に沸き起こる「あたしも！」の声。

女子が全員装飾希望になった。

げー。

「装飾のほうは高杉と二ノ宮が入ってもう定員数揃ったからダメ。」

鈴木くんは騒いでいる女子達にピシャリと言い放った。

そしてブーイングの嵐。

「文句言うなら最初から装飾希望すればいいじゃん。」

鈴木くんはさらに冷たく言い放った。

ごもつとも。

その後、女子達はしぶしぶ他のグループへ。

榎本さんはずっと、あたしを睨みつけていた・・・ような気がした。

後、一週間で学園祭。

そんなある日の放課後、あたしと宗、高杉くんの三人は学園祭実行委員の鈴木くんにミーティングルームへと連れて来られた。

中に入ると、美術部の姉川先輩と水本先輩のカップル、

それに同じく美術部の先輩で2年生の秋川遥さん、

後は知らない人たちばかりがいた。

・・・一体何が始まるの？

姉川先輩は何かの書類を片手に全員の顔をぐるりと見渡し、人数を確認し終えると

「えーと、んじゃ全員揃ったみたいだから始めようか。」

と、口を開いた。

そーいえば姉川先輩、学園祭実行委員長になったとか言ってたな！。

「今ここに集ってもらったのは今月の初めから行われていた

『校内コンテスト』の上位12人の皆さんです。」

・・・へ？

『校内コンテスト』？

それに・・・上位って？

確かに『校内コンテスト』は今月の1日から昨日までが投票期間だった。

男子は女子に、女子は男子に自分が好きな人、若しくは付き合いたいと

思っている人に投票する。

もちろんあたしは宗に投票した。

・・・で、そんな『校内コンテスト』の上位12人の集まりに
なんであたしが・・・？

宗と高杉くんはわかるけど・・・。

「それで、これから学園祭までの一週間はこの12人で

さらに校内での投票が行われ、学園祭2日目に多目的ホールで

アピールタイムと来場者全員による最終投票が行われて結果発表
があります。」

な、な、なにーっ！？

「『校内コンテスト』の開催時間とか後の詳しい事は今配ったプリ

ントに

書かれてるので模擬店などで交代に入る人は時間等を各自調整して下さい。

以上で簡単だけど説明は終わり・・・何か質問は？」

姉川先輩は持っていた書類からみんなの方へ顔を向けた。

「あ・・・あの・・・。」

あたしはちよつと躊躇しながら挙手をした。

「・・・ん？何？」

「あたしが選ばれてるのって・・・なんかのまちがいじゃない・・・ですか？」

「投票は知つての通り、全てパソコンで一人一票しか投票できないようになつてるし、

集計も学園祭実行委員の全員で確認しながらやったからまちがい

ないよ？」

姉川先輩はにっこり笑った。

そんなバカな……。

そう思っていると、

「サッカー部の人たちはほとんど平野さんに投票したって言うんだよ？」

と、高杉くんが言った。

嘘！？

「バスケット部もほとんどが琴美に投票したって言うてたな！」

宗もそう言うてにこっと笑った。

えええええええーっ！？

「な、な、なんで・・・？」

「夏の合宿の時にみんな世話になったからじゃないか？」

「俺らが麦茶作り忘れてたりしてもフォローしてくれたもんな？」

宗と高杉くんは、うんうんと頷き合った。

「それに俺らのクラスの男子もほとんど琴美に入れてるぞ？」

「え・・・。」

「夏休み明けてすぐに平野さん、眼鏡してない時があったでしょ？」

あの時、クラスの中で平野さんて実は可愛いって噂になったんだよ。

てか、他のクラスの奴らも結構噂してたから、平野さんに投票したの

うちの男子だけじゃないと思うな。」

あのソフトボールの打球が当たった時か！。

「だから琴美が入ってるのは全然不思議じゃないけど？」

宗にそう言われてもあたしは世の中の七不思議の一つに入るんじゃないかと

思ってるくらいなんだけど。

「これで納得できただろ？」

姉川先輩はニツと笑った。

・・・できません！

「他に質問は・・・ないみたいだね。

それじゃ、解散します。」

姉川先輩からあっさり解散と言われてもあたしはまだブーツと座ったままでいた。

「ほら、部活行くぞ。」

先輩があたしの頭にポンと軽く手を乗せた。

「・・・せ、先輩・・・コンテストって辞退できないんですか？」

コンテストなんてあたしはまったく出る気がなかった。

「できない。」

だけど姉川先輩はキッパリとあたしに言い放った。

う・・・。

「琴美出たくないの？」

「なんで？」

すると、宗と高杉くんがあたしの顔を覗き込んできた。

「だつて・・・」

あたしが出るなんて絶対おかしいって・・・

場違いだよ・・・。

「ただのお祭りなんだから気楽に出ようぜ。」

「そそ、俺らも一緒なんだし。」

宗と高杉くんはにこにこしながら言った。

だから・・・宗と高杉くん達みたいなイケメンとか

水本先輩みたいな美人や秋川先輩みたいな可愛い人達と

一緒に出なきゃいけないのが嫌なんだってば・・・！

「しょうがないなあ・・・」

渋るあたしに姉川先輩はため息をつきながら信じられない言葉を吐いた。

「部長命令”発動。”」

姉川先輩はしれつとした顔で言い放ち、にやりとした。

「えーっ!？」

「コンテスト出なかったら、お仕置き。」

「せ、先輩ズルいですよっ!」

「ちなみにお仕置きはなんですか？」

宗がにやにやしながら姉川先輩に聞いた。

「そっだなー・・・」

「あっ、こんなのはどうですか?“水着で校内一周”。」

姉川先輩がお仕置きを考えていると、高杉くんがとんでもないコトを言った。

“市中引き回しの刑”じゃあるまいし！

「それいい！」

「もちろん水着は赤のビキニ。」

「黒でもいいぞ。」

そう言って宗と高杉くんは勝手に盛り上がっている。

せ、先輩・・・こんなお仕置き却下だよね？

「じゃ、お仕置きはそれに決定。」

姉川先輩の楽しそうな声が虚しくあたしの耳に入ってきた。

がつくり・・・。

「ひどい……。」

あたしが小さな声で呟くと姉川先輩は意地悪な顔でケラケラ笑った。

「先輩の才……。」

「はいはい、そんな可愛い顔で睨んだってちつとも怖くないぞ?」

「先輩の悪魔。」

「なんとも言えー。」

「先輩の人でなし。」

「ほら、部活おいてくぞ?」

宗と高杉くん、水本先輩と秋川先輩はあたしと姉川先輩の会話を

笑いながら見ていた。

ううー……。

「まあまあ、琴美ちゃん、当日はあたしと遙ちゃんでもっと可愛くしてあげるから。」

水本先輩が涙目になっているあたしの頭をよしよしと撫でてくれた。

「そうそう、だからそんな顔しないの。」

秋川先輩も膨れたあたしの頬をつんつんした。

「琴美ちゃんの目って大きいし、すごく綺麗だから眼鏡をはずして

髪もこう・・・」

「あ、それなら先輩、こんな風に髪をあげてみたらどうですか？」

「きゃー、それいい！」

「でしょ？それでそれで・・・」

「ちょ・・・あ、あの・・・先輩・・・やめ・・・」

「あー、琴美ちゃん動いちゃダメよ。」

「ほらほら、おとなしくしてて。」

水本先輩と秋川先輩の二人に囲まれ、

あたしは身動きができなくなっていました・・・。

「二人ともそのくらいでやめといてやれよ?」

そんなあたし達を見て、姉川先輩がククツと笑いながら言った。

「当日、じっくりやればいいだろ?」

マジでそろそろ部活いくぞ?」

そう言つと姉川先輩はミーティングルームのドアを開けた。

「んじゃ、俺らも部活行こつぜ。」

「おう。」

宗と高杉くんはあたしに手を振り、仲良く部活へと行った。

・・・てか、宗と高杉くんてあんなに仲良かったっけ?

そして、その後　　。

あたし達もようやく部活に行った。

だけど、あたしが絵を描いてる間も水本先輩と秋川先輩は

あーでもない、こーでもないと言いながら

ずっとあたしの髪をいじりまわしていた。

一週間後、11月の初め。

毎年2日間の日程で学園祭が行われる。

1日目。

あたし達、装飾部隊はお昼の12時から1時までの一時間、
店番部隊のお昼休憩の間だけ店番をお手伝いする事になった。

だけどこれがまた結構忙しい。

だって宗と高杉くんのダブルイケメンコンビがいるから、

女の子達がわらわらと入ってくる。

そして、駄菓子をゆるゆると選んでもんだから

店内はものすごいごった返し。

。。
なんだか空気が薄くなって来ているし、高山病にでもなりそうだ・・

息苦しっ！

あたしの隣にいるメグちゃんもげんなりした顔をしている。

そして、そろそろ限界だな・・・と思っていると、

ちょうど1時になり、店番部隊が休憩を終えて模擬店の裏側から出てきた。

「うわー、すごいな・・・。」

裏側から出てきて開口一番、店番部隊が

集まった女の子の数に驚きながら言った。

「さすが、高杉と二ノ宮がいると集客力が全然違うな。」

苦笑しながらダブルイケメンコンビをしばし眺め、

「平野さん、藤村さん、ありがとう助かったよ。」

と、菊池くんが交代に来てくれた。

「もういいの？」

「うん、だって約束の1時だし。」

「お客さんいっぱいいるからもう少し手伝おうか？」

「でも、この後藤村さんと模擬店廻るんでしょ？」

「メグちゃんに行くけど、あたしは特に誰かと行く予定はないよ。」

「そうなの？・・・んー、じゃ、お言葉に甘えてもう少しだけいてもらおうかな。」

「うん。」

メグちゃんはこの後はトーゼン、西山ちゃんとデート。

特に予定のないあたしはもう少しだけお手伝いすることにした。

「じゃ、あたしももう少し手伝うよ。」

その会話を隣で聞いていたメグちゃんも残ると言い出した。

「メグちゃんはいいよ。西山くんも待ってるし。」

「でもー……」

「大丈夫だよ、平野さんには念の為もう少しだけ残ってもらっただけだから。」

菊池くんはそう言うつと渋るメグちゃんにニツと笑った。

「うん……わかった。」

メグちゃんは納得するとじゃあねと言って、西山くんのところへと行った。

宗と高杉くんも店番を交代して模擬店の裏側へと行ったようだ。

その途端、女の子達は一斉にレジの方に来た。

早く会計を済ませて宗達と一緒に校内廻りをしたいみたいだ。

レジにはあたしと菊池くんの二人。

それでもギリギリなんとか対応できている状況。

こりゃ、菊池くんだけじゃ大変だったわ・・・

残っててよかったかも。

しばらくして、ようやくほとんどの女の子達がなくなった。

「高杉と二ノ宮が店番からいなくなった途端、お客が減り始めたね。」

ダブルイケメンコンビの後を追うように次々と店を後にする女の子達を見て

菊池くんは苦笑いをした。

「これくらいなら、もう一人で大丈夫。」

「そお？」

「うん、ホント助かったよ、ありがとう。」

「いえいえ・・・それじゃあ、頑張ってね。」

あたしは菊池くんに手を振って模擬店の裏側へと行った。

さて・・・あたしもお昼ご飯食べよつと。

けど、ここだと人の出入りが激しいから落ち着いて食べれなさそうだなー。

美術部の部室に行こうかな。

あそこだと静かだし、誰がいるかもしれない。

ご飯を食べた後は美術室でやっている美術部の展示会を見に行こうかな。

・・・と、いうワケであたしは美術部の部室に向かう事にした。

誰もいないかもしれないけど、とりあえず部室のドアをノック。

・・・コンコン。

「はい、どうぞ。」

すると、中から男子の声が聞こえた。

誰かな？

そう思ってドアを開けると、あたしと同じ一年生の田中くんがお弁当を食べていた。

「あれ？田中くんもここで昼ごはん？」

「・・・“も”って事は平野さんも？」

「うん、模擬店の裏側だとなんか落ち着かないから。」

「あはは、一緒だ。」

田中さんと雑談しながら一緒にお弁当を食べた後は、
部室の窓からしばらく人間ウォッチング。

要するに二人とも暇人。

「あ、姉川先輩と水本先輩だ。」

田中くんが美術部の美男美女カップルを見つけた。

「ん？どこ、どこ？」

「ほら、あそこ第一体育館の横歩いてる。」

「あ、ホントだー。相変わらず絵になる二人だね。」

「うんうん。」

そんな会話をしていると、その美男美女カップルの横を
猛スピードで駆け抜ける人物がいた。

・・・ん？

宗？

宗の後ろからは女の子がずらずらり。

また逃げてんだ・・・。

あたしはその姿が少し可笑しくてププツと吹き出した。

「どうしたの？」

あたしが笑っている横で田中くんが不思議そうな顔をしていた。

「ん？クラスメイトの男子が逃げた。」

あたしがクスクス笑いながらそう言うと、

「あー、二ノ宮だろ？」

と、田中くんも見ていたのかククツと笑った。

「あいつ、相変わらず逃げてんだな。」

相変わらず？

「田中くん、宗の事知ってるの？」

「うん、あいつとは同じ中学だったんだよ。」

「へえー。」

「だけどさ・・・不思議なんだよねー。」

田中くんはあたしの顔を覗き込んだ。

「何が？」

「二ノ宮ってさ、女の子の名前は絶対苗字で呼んでるのに、

平野さんだけ下の名前で呼び捨てにしてるでしょ？」

「あー・・・」

そういえば・・・そうかも？

「それに自分の名前も下の名前で呼び捨てにさせないし、

“ソウ”って呼ばれてても訂正しないくせに

平野さんだけには“宗”ってちゃんと呼ばせてるしね？」

「う、うん・・・。」

確かに宗の事を“宗^{シュウ}”と呼んでいる女の子はあたししかない。

「なんでだろうね？」

田中くんはにやつと笑った。

な、何・・・？

この怪しげな笑みは・・・。

「なんでって・・・あたしに聞かれても・・・。」

こっちが教えて欲しいくらいなんだけど。

田中くんの質問に答えられないまましていると、

「ところで美術部の展示会は覗いてみた？」

と、田中くんはもう次の話題へと行っていた。

「あ、ううん、ただけど。」

「じゃ、俺もまだだから一緒に見ようよ。」

「うん。」

あたしと田中くんは部室を出て、隣の隣・・・美術室に向かった。

その後、あたしと田中くんの“暇人コンビ”は一緒に模擬店巡りをした。

途中、姉川先輩と水本先輩のカップルに遭遇したり、

メグちゃんと西山くんのカップルにも遭遇した。

もちろん、高杉くんと彼女にも。

そして・・・宗にも・・・。

宗は特定の誰かと二人きりではなくて、逃げ切れなかったのか
再び捕まったのか、女子をたくさん引き連れていた。

学園祭2日目。

今日はあの『校内コンテスト』がある。

ちよつと気が重い・・・。

コンテストは多目的ホールで午後2時から。

一時間前の1時には多目的ホールの控室に集合しなければいけない。

昼食を済ませた後、模擬店の裏側でポーズしていると

榎本さんから店番を頼まれた。

お昼ごはんを食べてくる間だけお願いと拝み倒されて

1時には帰って来ると言っただからとりあえず引き受けたけど・・・

・・・すでに1時15分。

一向に帰って来る気配がまるでありませんが・・・？

まあ・・・いいか。

帰って来なかったら来ないでコンテストに出なくて済む。

一応“交代の人が来ませんでした。” と言えば正当な理由にはなる、

・・・だろう。

1時20分。

宗と高杉くんが慌てた様子で模擬店に入ってきた。

「琴美、何やってんだよ!？」

「集合時間とつくに過ぎてるよ?」

二人とも走ってきたのか少し息を切らせながら口を開いた。

「・・・何って・・・店番。」

「なんで、そんなのやってんだよ?」

宗が少し呆れた口調で言った。

「なんでって・・・榎本さんにお昼ごはん食べてくる間だけお願い
って頼まれたから。」

「はあ？榎本さんなら多目的ホールの最前列の席に陣取ってたぞ？」

高杉くんも呆れた口調で言った。

「あー、そーなんだ。」

やっぱりな。

そんな気はしないでもなかった。

なんせ大好きな高杉くんが出るコンテストに“あの”榎本さんが

おとなしく店番やってるとは思えないもんね。

「あー、そーなんだ。」・・・て、何暢気なコト言ってただよ。」

「そーだよ、急いで行かないとコンテスト間に合わないぞ?」

宗と高杉くんはまったく動く気配のないあたしを急かした。

「“水着で校内一周”したい?」

あたしは突然聞こえた声にちょっと驚き、声がした方に振り向いた。

げげっ。

姉川先輩だ。

「店番の時間は各自で調整しろって言ったよな?」

う．．．。

「で、でも．．．交代の人来ないみたいですし．．．。」

「じゃ、おまえの交代を捜せばいいだろ?」

「えー、みんなコンテスト見に行っていないですよー？」

「じゃ、“水着で校内一周”決定。」

そ、そんな・・・。

「平野さん、店番なら大丈夫だよ？」

困っているあたしに助け舟(?)を出してくれたのは菊池くんだった。

「元々、この時間帯はほとんどコンテストの方にお客が集中するだろうから、

一人くらい減らそうかって言ってたんだけど、一応念の為そのままでの人数で

店番する事になってただけだから、平野さんが抜けても大丈夫だよ。」

「そ、そーなの？」

「うん、それにそもそも任されてる店番を人に押し付けて

遊びに行く榎本さんが悪いんだから。」

「そそ、菊池の言う通り。」

宗と高杉くんも、うんうんと頷いている。

「だから、気にしないでコンテスト行っておいで。」

菊池くんはそう言うてにっこり笑った。

「う、うん……。」

ここまで言われたんじゃ行かないワケにもいかないよね？

「……じゃ、行ってくる。」

あたしは宗と高杉くん、姉川先輩と一緒に多目的ホールにダッシュした。

控室に入ると水本先輩と秋川先輩がすでにメイク道具を片手に
あたしを待ち構えていた。

ひえええつつ！？

「あー、やっと来た！」

その言葉と同時にあたしは二人に囲まれ、
着せ替え人形のごとくいじくり回された。

メイクはもちろんの事、どうやらウィッグをつけられたあたしは、
中学の頃と同じ様に長い髪になっていた。

そして、眼鏡を外された。

「きゃーっ！琴美ちゃん、思った通りすっごく可愛い！」

「大成功！」

水本先輩と秋川先輩がパチパチと手を叩いて喜んでいる声が聞こえる・・・

でも、眼鏡がないおかげで何も見えない。

「出場者の皆さん、そろそろステージに出てくださーい！」

コンテストを取り仕切っている学園祭実行委員の誰か声が聞こえたけど・・・

このままじゃ歩けない。

どうしよう・・・。

眼鏡どこに置いてあるかわかんないし・・・。

そう思っていると、誰かがあたしの手を取った。

「手、繋いでたら歩けるだろ？」

宗の声。

「宗・・・？」

わかっているけど一応聞いてみる。

「うん。」

よかった・・・宗だ。

「琴美ちゃん、もしかして眼鏡なしじゃ歩けないの？」

少し前の方で水本先輩の声がした。

「それじゃ、ランウェイ歩けくない？」

秋川先輩の心配そうな声も聞こえてきた。

アピールタイムには特別にセットで組まれた20m程のランウェイを歩く。

眼鏡なしで歩けば多分・・・落ちる。

「それなら、高杉と二ノ宮が琴美ちゃんの手を引いて三人でランウェイ歩けば？」

すると、姉川先輩がビミョーな提案を出した。

高杉くんもー？

「同じクラスの三人組ってコトなら全然不自然じゃないだろ？」

「あ、はい・・・。」

確かに・・・あたしと宗だけじゃちょっと不自然かも。

別に付き合ってるワケじゃないしね。

午後2時。

コンテスト開催時刻。

まずは1年生の男子と女子が交互に登場。

ランウェイを歩いてポーズング。

これがまた結構恥ずかしかったりする。

あたしは姉川先輩の提案通り左手を高杉くん、右手を宗に引かれ、
三人でランウェイを歩いた。

眼鏡をかけてても一人じゃ恥ずかしくて歩けなかったかもしれない。
・
・

それを思つと二人がいてくれて正解だったかも？

1年生の次は2年生。

秋川先輩は去年も出場したらしく、すでにファンもたくさんいたりする。

でも特定の彼氏はいないとか・・・なんでだろう？

そして最後は3年生。

しかもトリは姉川先輩と水本先輩の美男美女カップル。

3年連続出場の二人。

そりゃあね・・・。

校内でも有名な二人は手を繋いでランウェイを歩いた。

ものすごい歓声。

優勝はやっぱりこの二人じゃないかな？

投票の結果がでるまではプラスバンド部による演奏会。

あたし達はその間、控室で雑談タイム。

「平野さん、なんか中学の時に戻ったみたいだね。」

高杉くんは長い髪だった頃のあたしを知っている。

「琴美が髪長かったの高杉知ってんの？」

宗が不思議そうな顔で言った。

「うん、平野さんと同じ中学だったし。」

「ふーん・・・そーなんだ。」

宗はあたしと高杉くんが同じ中学だったのを初めて知ったみたいだった。

そして・・・

結果発表　。

まずは男子の3位から。

「第三位・・・、高杉和也くん！」

司会役の男子生徒が高杉くんの名前を呼ぶと大きな歓声が沸き起こった。

おお・・・さすがチャラ男一号。

全校で三位かあ・・・。

すごいね。

榎本さんが最前列でキヤー、キヤー言ってる姿が目には浮かぶなあ・・・。

次は女子の3位。

「女子の三位は・・・」

水本先輩と秋川先輩が一位と二位だとして・・・

三位は隣のクラスの畑山さんあたりかな？

「・・・平野琴美さん！」

それとも・・・二年生の・・・

て・・・へ？

「平野さん、こちらどうぞー！」

司会者のハイテンションな声に呼ばれ、ハッと顔をあげると

あたしはスポットライトで照らされていた。

え、えええええーっ！？

そんなバカな・・・。

ぽかんと口を開けていると、「こっち。」と、
手を引かれて司会者の前に連れて行かれた。

この人、誰？

多分、声と雰囲気が高杉くんのような気がするけど・・・。

司会者の人から3位の賞状とトロフィーを受け取った後も

高杉くん（多分）がエスコートしてくれた。

ちなみに副賞はQ.U.Oカード。

あたしはもう何がなんだか・・・わからない・・・。

なんで・・・あたし・・・？

そして・・・男子の2位は姉川先輩。

女子の2位は秋川先輩。

男子の1位は・・・

なんと！？

宗。

チャラ男二号。

・・・やるな。

女子の1位は予想通り、水本先輩。

おー、美術部は好成績だねえー。

あたしはともかく先輩達目当てに男子の入部希望者が急増したりして。

そして最後はステージの上で出場者全員で記念撮影。

男子と女子の上位3位までの6人で記念撮影なんかもあった。

こうして『校内コンテスト』は、無事に(?)終わった・・・。

コンテストが終わって、あたしは校舎の屋上でまったりしていた。

なんか・・・疲れたな・・・。

フェンスに少し凭れかかってグラウンドを眺めていると

「どこにいるかと思ったら、ここにいたんだ？」

と、突然後ろから声をかけられた。

・・・嫌な予感。

あたしはゆっくり振り向いた。

・・・やっぱり・・・な。

高杉くんが爽やかな笑みを浮かべてあたしに近づいてきていた。

「捜してたんだ。」

「・・・？」

あたしになんか用なのかな？

「・・・前に話してた事なんだけどさ・・・」

前に話してた事・・・？

なんだっけ？

「俺と一緒に帰った時に話したでしょ？」

???

それって・・・いつ？

「二ノ宮が俺達に気を使って先に帰った時だよ。」

「あ・・・。」

あの時の事は正直まったく憶えていなかった。

だって・・・失恋したと思って、そのショックで

高杉くんの声もまったく耳に入っていなかったから。

会話も全部適当に返事をしてたよーな気がする・・・。

「俺に彼女がいなかったら・・・て話・・・、

夏の合宿の時にもしたでしょ・・・？」

あの話……。

「考えてくれた？」

本気だったの？

てつきり、あたしをからかってるんだと思ってた。

「……で、でも高杉くん、彼女いるでしょ？

昨日も一緒に模擬店廻ってたじゃない。」

「それがさー、昨日別れちゃったんだよねー。」

「え……。」

「それです・・・」

「で、でも、もう新しい子がいるんじゃないの？」

「まだ今のところフリー。」

「・・・。」

“今のところ”・・・ね。

「平野さん・・・前に俺の事、好きって言ってくれたよね？」

確かに言ったよ？

でも、今はもうそんな気持ちありませんからっ！

「俺と付き合わない？」

まるで断る気なんてトーゼンないよね？と言った顔で高杉くんは言
った。

「……。」

断る気満々なんですけど……？

「……高杉くん……あたし……」

「高杉！」

他に好きな人がいる……そう言おうとした時、宗が現れた。

ひょっとして……今の話……聞かれた……？

「……なんだよっ？」

高杉くんは少しムツとした顔をした。

「模擬店、そろそろ終わるってよ。」

「あ、そう。」

「ついさっきから榎本さんが『高杉くん、どこに行った？』って騒いでたから早く戻ってやれよ。」

「えー。」

高杉くんはげんりした顔を見ると「んじゃ、行こうぜ。」

と、あたしに言った。

「あ、えーと・・・あたし、先に美術部の方に行くから・・・。」

高杉くんとはなんとなく、一緒に戻りたくなかった。

「そう・・・じゃあ先に戻るわ。」

そう言う和高杉くんは教室へと戻っていった。

高杉くんが教室に戻った後、あたしは宗と二人きりになった。

「・・・琴美。」

「ん？」

「高杉と何話してたの？」

「・・・何って・・・」

「せ・・・」

「世間話？」

世間話・・・と言おうとしたら先に宗に言われた。

「・・・うん。」

あたしは宗と目を合わせないまま答えた。

「・・・なんで嘘つくんだよ？」

「っ！」

あたしはその言葉にドキツとして思わず宗の顔を見上げた。

「・・・あいつと付き合うのか？」

「宗・・・聞いてたの・・・？」

「・・・ごめん・・・立ち聞きするつもりはなかったんだけど・・・」

やっぱり聞こえてたんだ・・・。

「琴美・・・高杉と本気で付き合うつもりなのか？」

「・・・宗には・・・関係ないじゃない・・・。」

「高杉がどんなヤツかくらい琴美だっ てわかってんだろ？」

わかってるよ。

「あいつなんかと付き合うのやめろよ。」

・・・なんでそんな事言うの？

他に好きな子がいるくせに、

思わせぶりな事言わないでよ・・・。

「そろそろ、行かなきゃ・・・。」

あたしはこれ以上、ここに居たくなって逃げるように踵を返した。

「琴美・・・！」

すると後ろから宗があたしの腕を掴んだ。

そして強く引つ張られたかと思うと次の瞬間、

宗の顔で視界が塞がれた。

・・・っ！？

一瞬、何が起こったのか全然わからなくて・・・

でも、目の前には宗の顔・・・というより、

あたしの唇を宗の唇が塞いでいた。

・・・で、キス・・・されてる・・・！？

「何すんのよっ！」

パシーンッ！！

「いてっ！」

宗の唇があたしの唇を解放した瞬間、思わず平手打ちをした。

「宗のバカッ！」

あたしは宗を置いて走り出した。

最低、最低、サイテーーーーーッ！

なんで好きな子がいるのに、あたしと平気でキスなんかできるの？

やっぱり、宗も高杉くんと同じじゃない・・・。

ファーストキスだったのに・・・

ファーストキスだったのに・・・！

涙がポロポロと勝手に溢れてくる・・・。

ファーストキスを奪われた事もショックだったけれど、

宗が高杉くんとやっぱり同じだった事がショックだった・・・。

放課後。

あたしは結局、クラスの模擬店の方には戻らなかった。

美術部の片付けが終わっても教室には戻らないでずっと部室にいた。

だって・・・一体どんな顔して宗と会えばいいのかわからなかった

から。

それに高杉くんとも・・・。

そして、姉川先輩も他の部員のみんなも帰って、
部室の中にはあたししかいなかった。

クラスみんなはまだ教室にいるのかな？

今日はどのクラブも部活はやらないみたいだし、
今、教室に戻っちゃうと宗や高杉くんに会うかもしれない。

もう少しここにしよう・・・。

そんな事を考えながら窓から人間ウォッチングしていると

数人の女の子に囲まれた高杉くんが正門に向かっているのが見えた。

その中には榎本さんもいる。

高杉くん、誰でもいいのなら榎本さんと付き合えばいいのに。

「また高杉の事見てんのかよ……。」

……っ！

その声に振り向くと、いつの間にか後ろに宗が立っていた。

「姉川先輩がまだ部屋に琴美がいるって言うから来て見たら……。」

宗は少し拗ねた口調で言った。

なんだか少し怒っている。

てか、怒ってんのはむしろこっちなんですけどー？

「別に高杉くんを見てたワケじゃないけど？」

「でも今、高杉を見てただろ？」

「そんな事よりなんの用？」

「……。」

「わざわざこんなトコまで来るくらいなんだから、

なんか言いたい事でもあるんじゃないの？」

我ながらちよつと棘のある言い方で言うと、

「……さつきは、そのー……ごめん……。」

宗はバツが悪そうに少し俯いた。

「……。」

「悪かったよ・・・いきなりキスなんかして・・・。」

ホントにそう思ってる？

「琴美は・・・やっぱり高杉の事が好きなのか？」

「・・・だから・・・宗には関係ないってば・・・。」

「いいから、ちゃんと答えるよ。」

宗は真っ直ぐにあたしを見つめた。

「・・・好きじゃないよ。」

「ホントに？」

宗はあたしの顔を真剣な表情で覗き込んだ。

「ホント。」

「・・・じゃあ、あのスケッチブックに描いてあったの誰？」

・・・う。

そ、それは・・・

「やっぱり高杉なんだろう？」

そうだけど・・・

あたしはこのまま誤解され続けるのも嫌だし、

あまりにも宗が真剣に聞いてくるので全部正直に話すことにした。

「確かに高杉くんの事は好きだったよ。」

「やっぱ、そうなんじゃん……。」

「中学の時、3年間ずっと……。」

「……。」

「宗が見たスケッチは中学の卒業前に描いたものだよ。」

「……今も……好きなんだろう……?」

「今はなんとも思っていないよ……宗と初めて会ったあの日にね

……フラれたんだ……高杉くん……。」

「え……3月14日?」

「うん、そう。」

「でも……さっき、アイツ……。」

「自分からフツておきながら今さら……だよな?」

「……。」

「だから、高杉くんとは付き合うつもりなんて全然ないよ。」

「そのわりには……よく高杉の事見惚れてたりしないか?」

「それは見惚れてるんじゃないかって・・・なんていうか・・・

高杉くんの姿を見てもなんか中学の時みたいに

もう全然キュンとこないなーとか思ってたたりしてたの。」

「・・・ホント？」

宗は不安そうな顔であたしの顔を覗き込んだ。

「ホント・・・てか、宗・・・顔近いっ！」

あたしは宗の顔を手で押し退けた。

「大丈夫だよっ！もういきなりキスしないからっ。」

「信じられません。」

「うー・・・。」

「ホント・・・信じらんない。」

「だから・・・ごめんてば・・・。」

「・・・。」

「琴美・・・?」

「・・・彼女がいるのに他の子とキスするのなんて

信じらないよ・・・。」

「高杉の事・・・?」

「はあ?」

「宗の事言ってるんだけど?」

「は?なんで俺なんだよ?」

「そりゃ、高杉くんもそうだろうけど、宗もさっき同じ事したでしょ?」

「誰とっ!?!」

「だから、あたしと!」

「な・・・っ!あれは・・・っ。」

「宗も・・・高杉くんと同じじゃない・・・。」

「同じじゃねえよっ!」

「・・・同じだよ。」

「俺をアイツなんかと一緒にすんなよ!」

「・・・。」

「俺はアイツとは違う。」

「どう違うの・・・？」

「どうって・・・」

「彼女がいたり、好きな子がいるのに他の女の子と
キスしてるあたりは一緒でしょ？」

「・・・。」

「宗だって・・・彼女いるんじゃないの？」

「いないよ・・・彼女なんて。」

「・・・でも、好きな子がいるんでしょ？」

「うん。」

・
・
・ほら、やっぱりいるんじゃないの・
・
・。

「・・・なら、同じだよ。」

「違う!」

「なんでよ?」

「だから・・・っ!俺が好きなのは・・・」

「・・・聞きたくない。」

あたしは宗の口から出る他の女の子の名前を聞きたくなかった。

「なんで?」

「・・・。」

「いいから聞いて?」

「やだ。」

「聞けって。」

「やだって。」

「もう、いいから黙って聞け!」

宗は耳を塞ぐうとするあたしの両手首を掴んだ。

そして、小さく息を吐き出してから、

「俺が好きなのは・・・琴美だよ。」

と言った。

「え・・・。」

嘘・・・

そんなの嘘だよな？

宗はぽかんと口を開けたままのあたしにさらに続けて言った。

「俺・・・初めて琴美と会った時からずっと好きだったんだ。」

「うそ・・・。」

「ホントだって……。」

「……。」

「いきなりキスしたのは悪かったと思ってる……でも……

俺はアイツみたいにゲーム感覚の恋愛はしない。」

「あんなにモテるのに？」

「そんなの関係ないだろ？」

宗は眉間に皺を寄せた。

いや……関係あると思うよ？

「焦ってたんだ……。」

「？」

何を？

「琴美は高杉の事、好きなんだと思ってたし、高杉も夏の合宿以来、
琴美を狙ってたみたいだし・・・。」

「・・・。」

「そしたら・・・今日、アイツが屋上で琴美に告ってたから・・・。」

「・・・で、いきなりキス・・・なの・・・？」

「・・・ごめん。」

「・・・。」

「琴美・・・今、好きなヤツいるの？」

「・・・いるよ。」

「え、・・・誰？」

誰・・・て、あなたなんですけどー。

「言いたくない？」

「そついうワケじゃ・・・。」

「じゃ、誰？」

「……。」

「武田？」

「違うよ。」

「田中？」

「なんで田中くんが出てくるの？」

「昨日、一緒に校内廻ってたから。」

「あ、あれは……二人とも暇だったから……。」

「じゃあ……誰なんだよ？」

「……。」

「……。」

「・・・う。」

「え？・・・誰？聞こえなかった。」

思い切って口にしたつもりでも、あたしの声は自分で思ったよりも小さくて・・・宗には聞こえなかったみたいだ。

あたしは深呼吸をした。

「・・・宗。」

そして今度はハッキリと宗の名前を口にした。

その途端、宗は驚いた顔のまま固まった。

そんなにびっくりしたのかな？

「お、俺・・・？」

あたしはコクンと無言で頷いた。

「マジで？」

もう一度コクンと頷くと宗はあたしをガシツと抱きしめて

「なんだよ、それー。」と脱力した。

「ちょ・・・重・・・っ！」

宗の全体重がのしかかってきたあたしはバランスを崩した。

「・・・おっと。」

だけど後ろに倒れる間一髪のところまで宗があたしの体を支えた。

「・・・俺達、実は両想いだった・・・？」

「そう、みたい。」

「えー、じゃ、なんでさっきビンタなんかしたんだよー？」

「だ、だって・・・宗がいきなりキスするから・・・っ！それに・・・」

「それに？」

「・・・初めてだったんだもん・・・。」

「へ？」

「ファーストキスだったのっ。」

「マジで？」

「・・・だから、あんな風にいきなりされたから・・・。」

「い、ごめん・・・。」

「・・・。」

「じゃあ、やり直す。」

「何を・・・？」

「ファーストキス。」

「え？」

あたしが驚いている間に宗はすでに顔を近づけてきていた。

「ちょ、ちよつと待った!」

「えー!なんだよー?このタイミングで“待った”?」

「こ、心の準備が・・・まだ・・・その・・・。」

「じゃ、何秒待てばいい?」

「な、何秒って、そんな・・・。」

「・・・なら、しばらくこうしてる。」

宗はそう言つとまたあたしをぎゅつと抱きしめた。

・・・ドクンッ、ドクンッ・・・

宗の心臓の音・・・。

宗もドキドキしてるのかな・・・?

どれくらい抱きしめられていたのかわからないけれど・・・

多分、結構時間が経っていたんだと思う。

宗はそつとあたしから体を離すと、翡翠色の澄んだ瞳に

あたしが映っているのがわかるくらいまで顔を近づけた。

その後はあたしは目を閉じてしまったから、宗がどんな顔をして

キスをしたのかはわからない・・・。

・・・でも、宗の手が少しだけ震えているのがわかった。

- 33 - (後書き)

最後までお読み下さり、ありがとうございました。

次週より、皆様から多数リクエストがございました宗視点のお話（本編）の連載を開始いたします。

First Love - 本編宗視点・1 -

中学の卒業式が終わって一週間が経った今日・・・

3月14日、ホワイトデー。

この日は朝から快晴だったけれど

ブラブラと街を歩き回っている内、

晴れていた空が急に暗くなり始めた。

雨、降るかな？

空を見上げると、すでに黒くて厚い雲に覆われていた。

・・・ポツ・・・ポツ・・・

そしてとうとう雨が降ってきて、

段々とそれはどしゃ降りへと変わっていった。

通り雨かな・・・？

そう思つて傘をかう気にもなれず、

近くの雑貨屋のテントの下に駆け込んだ。

その瞬間、大きな雷が鳴った。

・・・チリン・・・

鈴の音・・・？

小さく可愛い音を鳴らして地面に落ちたその鈴は

綺麗な桜色のハートの形をしたストラップだった。

恋愛成就のお守りだ。

バレンタインデーの時にどこかの店でチョコレートと一緒に売っていたのを見かけたことがある。

その鈴を落としたのは俺の2、3歩離れたところに立っているあまり背が高くない綺麗な長い黒髪の女の子だった。

その女の子は、そのまま鈴をじっと見つめているだけだなかなか拾おうとしない。

???

なんで拾わないんだろ？

「・・・はい。」

俺はその子の足元に落ちているストラップを拾いあげ、

目の前に差し出した。

だけど、彼女は受け取ろうとしなかった。

「落ちたよ。」

俺はその女の子の掌の上にストラップを乗せた。

・・・チリン。

小さなハートの鈴のストラップは再び可愛い音を鳴らして
彼女の元へと戻っていった。

・・・チリーン・・・。

あれ？

ストラップがまた地面に落ちた。

どうやらホントに受け取る気がないらしい。

「いないの？」

冗談っぽく言いながら俺はまたすぐにストラップを拾い上げ、

少し俯いたままの彼女に

「じゃあ、これ俺がもらっていい？」

と言うと、黙ったままの彼女は少し驚いた顔をしてパツと顔をあげた。

そして、吸い込まれそうなほどの彼女の黒い瞳と視線が絡み合った。

「いないんでしょう？」

俺が彼女の目の高さまでストラップを持ち上げ、

ブラブラさせながら言うと、彼女は小さくコクンと頷いた。

「じゃあ、貰う。」

恋愛成就のストラップ・・・

いらなくなった理由はわからないけれど、

俺はその理由よりもその子自身・・・

彼女の事がすごく気になった。

「貰ったお礼にさ・・・これ・・・あげる。」

だから、俺は携帯につけていたお気に入りストラップを外して彼女の手ギュッと握らせた。

落とさないように。

「え・・・いいんですか？」

「うん。」

「・・・あ、ありがとう・・・ございます。」

「こっちこそ、コレありがとう。・・・それじゃ！」

きつとまた会える・・・

根拠は何もないけれど、なんとなくそう確信して

俺はいつのまにか小降りになり始めた雨の中を走り出した。

夕方。

家に帰った俺はあの子から貰った恋愛成就のストラップを
携帯につけた。

・・・チリン・・・。

小さなハートの鈴が俺の手の中で鳴った。

綺麗な目をした可愛い子だったな・・・。

今までこんなに気なる女の子に出会った事がなかった。

中学の時も何人もの女の子に告白されたし、

その中には一般的に見ても所謂“可愛い子”もいた。

だけど、俺はその誰とも付き合う気にはなれなかった。

それが今日、偶然出会った女の子の事が

ずっと頭を離れないでいる。

その日から俺はこのストラップが目に入る度にあの子の事を思い出していた。

そしてあの子と出会った雑貨屋の前を通る度、彼女の姿を搜した。

ただどあの子に会うことはなかった・・・。

4月、高校の入学式。

構内の掲示板に張り出されたクラスの振り分けの名簿を見に行くと

1年3組に俺の名前があった。

教室に入るとすでにほとんどの生徒が席に座っていた。

みんなテキトーに座ってるのか。

さて・・・俺はどこに座ろうかな・・・？

教室の中を見回して空いている席を探していると、

ちょうど担任の先生が来た。

俺は目の前の空いている席に座った。

・・・で、H Rの前にいきなり席決め。

別にどこでもいい俺は面倒くさいからそのまま動かずにいた。

すると、なぜか周りは女子ばかりになった。

そして、クラスの中には俺と同じ様に女子に囲まれている奴がいた。

高杉和也。

端整な顔立ちをしているいかにもモテそうな男だ。

クラス中の女子達は俺とその高杉の周りに集まった。

・・・と、ある二人を除いて。

一人は藤村恵ちゃん。

一見、優しそうだけど実は少し気が強そうな子だ。

そして、もう一人はその隣にいる平野琴美ちゃん。

平野さんと会うのは実はこの日が初めてじゃなかった。

あの雑貨屋の前を通った時、あの子の事が気になって

姿を捜していた時に何度か彼女を見かけた事があったから。

彼女の方は多分、気付いてないだろうけど。

黒い髪に黒い瞳、黒縁眼鏡が印象的な真面目そうな女の子。

俺は特にその黒縁眼鏡の奥・・・大きくて綺麗な瞳が印象に残った。

平野さんと藤村さんも最初に座った席から動いていなかった。

他の女の子達と違って、俺と高杉には興味がないみたいだ。

だから余計に気になったのかもしれない。

HRが終わった後。

さっそく俺は男子バスケット部の顧問・岡嶋先生の所へ向かった。
もちろん入部する為。

職員室に入って岡嶋先生の姿を探すと、
ちょうど俺の担任の先生と話をしていた。

「岡嶋先生。」

ゲラゲラ笑って雑談しているみたいだから、
大事な話をしているワケでもなさそうだ。
とりあえず声を掛けてみた。

「ん？」

「おう、二ノ宮。」

俺の声に二人が同時に振り向いた。

「岡嶋先生、男子バスケ部の顧問ですよね？」

「ああ、そうだけど？」

「俺、入部したいっす。」

「お、大歓迎。」

岡嶋先生はニヤツと笑い、「じゃ、とりあえずクラスと名前、教えてくれ。」

と言った。

「1年3組の二ノ宮宗です。」

「1年3組？・・・んじゃ、先生のクラス？」

岡嶋先生は目の前にいる担任の先生に視線をやった。

「そうそう、俺のクラス。可愛がってやってね。」

「へえー、結構背高いけど中学の時は何やってたんだ？」

「中学もバスケっす。」

「ポジションはどこだった？」

「主にセンターやってました。」

「ふーん・・・じゃ、センター以外でやってみたい所はある？」

「んー・・・センターも元々自分で希望してやってた訳じゃないですし、

特にここじゃないと嫌だとかもないし・・・今はどこでもやってみたいっす。」

「そうか・・・まあ、いろいろやってみるのもいいな。」

「はい。」

「ところで、二ノ宮はハーフか・・・?」

「ですっ。」

「ほー、男子バスケ部にもいよいよ“イケメンアイドル”が入部するのー。」

「なんすか・・・?それ。」

「野球とかサッカーと違ってバスケはいまいち人気が薄いからな。」

「お前みたいなのが入ってくれど試合の時に女子が応援に来てくれるだろ？」

「・・・。」

「まったく・・・この先生は何考えてんだか・・・。」

「確かにクラスの中でもさっそく人気を集めてるしな？」

担任の先生は俺をちらりと見るとにやりと笑った。

「えー、そんな事ないっすよ。」

「とかなんとか言っつて、選択授業ほとんどの女子が音楽を選択したぞ？」

担任の先生はそう言っつと俺に選択授業のリストを見せた。

「えー。」

確かに俺が選択授業は音楽にするって言ってたら周りの女子は

「じゃあ、私もっ。」とか騒いでたけど・・・ホントに音楽にしたのか・・・。

ちなみに選択授業は音楽か美術のどちらかを選択する。

例の“イケメン高杉”も音楽にしたらしく、

高杉派の女子はみんな音楽にしたらしい。

「まあ、平野さんと藤村さんだけは美術にするみたいだけど。」

「へえー、そうなんすか。」

あの二人、美術にしたんだ・・・。

数日後、木曜日の放課後。

部活に行く前、職員室に向かっていると

ちょうど担任の先生が職員室から出てきた。

「先生。」

俺はどこかへ向かおうとしている担任を呼び止めて近づいた。

「おう、どうした？」

「選択授業の変更ってまだ間に合います？」

「なんだ変えたいのか？」

「はい。」

「ギリギリセーフだったな。ちょうど今から音楽の先生と

美術の先生のところへリストを渡しに行くところだったんだ。」

「うわっ、あぶなかったー。」

「確かおまえは・・・音楽の方を選択してたよな？」

「はい、それを美術の方に変えたいです。」

「はは、気が変わったのか？まあいい・・・それじゃ、

美術の方で提出しとくから。」

担任の先生はそう言うとその場で音楽のリストにある俺の名前のところに横線を引いた。

そして美術のリストの一番下に俺の名前を書き加えた。

翌日。

6時限目と7時限目。

俺達のクラスは金曜日のこの時間に選択授業がある。

5時限目が終わって美術室に移動しようと筆記用具を出していると

「ソウ君、音楽室一緒に行こうよ。」

と、数人の女子が声を掛けてきた。

ちなみに俺は“ソウ”じゃなくて“シュウ”だけど・・・

どうでもいい女の子からはどう呼ばれようが気にしないし、

わざわざ訂正するのも面倒臭いからいつも聞き流している。

「あ、俺、選択授業は美術に変えたから。」

「えー！ーっ！？」

「うそぉっ？」

「なんでー？」

「黙って変えるなんてひどーいっ！」

数人の女子共は口々に好きな事を言い始めた。

そんな事いわれてもなあ・・・元々、一緒にしようって

約束したワケじゃないし。

「んじゃ、そういう事だから。」

俺はブツブツと文句を言っている女子達を置いて美術室に向かった。

俺が美術に変えた理由・・・

それは・・・

平野さんが気になったから。

あの瞳、どこかで・・・どこだったかな・・・？

平野さんにもっと近づけばわかるかもしれないと思った。

だけど俺がまた美術に変えたと言えばまた女子共がくつついてくるかもしれない。

そうなると平野さんと話す切欠もタイミングもまるでなくなってしまう。

だから、昨日こっそり変えたんだ。

数日後。

朝から快晴のこの日は『大自然公園』とか言う場所に遠足に行く。

そういえば・・・“あの子”と出会った日も

こんな風に朝からよく晴れてたな・・・。

俺はふとあのホワイトデーに出会った女の子の事を思い出した。

・・・あ・・・っ!?

そうだ・・・あの瞳・・・

“あの子”だ。

でも、待てよ・・・。

あの時、眼鏡なんてかけてなかったし、髪も長かった。

まあ、切ったのかもしれないけど・・・あんなにバツサリと？

平野さんの顔・・・じっくり見る機会でもあればいいけれど・・・

バスに乗る時、さり気なく近くに座ってみようかな。

・・・と、思っていたら・・・

「ソウ君、一緒に座ろっ。」と、あっさり女子共に捕まってしまった・・・。

俺は結局、一番後ろの席に連れて行かれ、ハーレム状態になった。

そして、俺と同じ様に一番後ろの席でハーレム状態になっているヤツがいた。

高杉だ・・・。

高杉はなんだか嬉しそうな顔をしている。

まあ、こいつはいつも女子共に囲まれててもまったく嫌な顔もしないから

女好きなのかもしれない。

だけど俺は正直、地獄だ。

ふと、前の方を見ると平野さんと藤村さんは後ろに来る様子もなく、むしろ担任と男子達に囲まれ逆ハーレム状態になっていた。

「……………」

平野さんの近くに行きたかったな……。

『大自然公園』に着いてからも俺は女子共から解放される事はなかった。

昼メシを食べた後もずっとバスの中でおしゃべり。

しかもなぜか他のクラスの女子まで来ている。

「なあ、天気いいし外歩かない？」

もう限界だ・・・外の空気が吸いたい・・・。

そう思って提案してみた。

だけど、女子共から返って来た返事は・・・

「えー、疲れるからヤダ。」

「日焼けするのヤダしー。」

「汗かきそー。」

えー・・・。

「・・・あ、そー。」

なんか逃げる方法ねえかなー。

すんなり怪しまれずに抜け出せて、こいつらが追っかけて来れない所・・・

おお・・・っ!?

そーだっ。

「ちとトイレ。」

そーだー、そーだ。

男子トイレならこいつらは入って来ないし、怪しまれない。

「早く帰って来てねー。」

「はいはい。」

集合時間まではもう帰らねえよー。

やっとの事でバスから抜け出した俺は、簡単に捕まらないように

ハイキングコースの方へ逃げた。

結構、勾配があるから追いかけてくるにしても女の子にはちょっとキツイ。

誰も来ないだろうし、いないだろう・・・

そう思いながら登って行くと、人影が見えた。

・・・？

誰だろう？

女の子・・・？

華奢な後姿で女の子だという事はわかった。

どうやらその子はスケッチブックを持っているみたいだ。

絵を描いているらしい。

俺は少しずつ近づいた。

あ・・・平野さんだ。

「すげーっ！絵、上手いじゃん！」

スケッチブックを覗き込んでみると、目の前の風景がそのまま描かれていた。

思わず出た俺の声に振り向いた彼女は驚いた顔で俺を見上げた。

「そんなに驚いた？」

ぽかーんと口を開けている顔がおもしろくてつい吹き出した。

・・・てか、藤村さんがいないな？

「一人？藤村さんは？」

「あ・・・彼氏とデートしてるよ。」

「へえー、藤村さん彼氏いるんだ？」

どうりで俺や高杉に興味がないワケだ。

・・・てコトは平野さんも彼氏いるのかな？

「平野さんは？デートしないの？」

違う学校に彼氏がいるとか？

「・・・彼氏なんていないし。」

「えっ！？そうなの？意外！」

俺がそう言つと平野さんはなんだかビミョーな顔をした。

「平野さん、絶対彼氏いると思ってた。」

「なんで？」

「だって、可愛いし。」

「誰が？」

「平野さんが。」

「どこが？」

「顔。」

「またまた冗談ばかり。」

自分が“可愛い”という自覚がまるでないのか

平野さんは真顔で言った。

「なんで？」

俺はチャンスと思い、平野さんの顔をじっくり見ようと顔を思いっきり近づけた。

「うん・・・やっぱり・・・」

そして確信した。

“あの子”だ・・・。

また会えた・・・っ。

「目とか大きくてすごく綺麗だよ？可愛いじゃん。」

俺がそう言つと平野さんは顔を赤くした。

プツ……可愛い。

「……そ、そういえば、二ノ宮くん一人？」

平野さんはまだ少し赤い顔で話題転換した。

「うん、逃げてきた。なんか、他のクラスの子まで来ちゃってさー。

せつかく、こんな晴れた日に綺麗な場所に来てるっていうのに

ずっとバスの中で捕まってるさ。

外に行こうって言っても日焼けするからイヤだとか、

疲れるからイヤだとか……そんなんばっか。

んで、トイレに行くって言ってバスから脱走してきた。」

「それで・・・こんなトコまで？」

「うん。だつてすぐ見つかるようなトコにいたら

またバスに監禁されちゃうだろ？」

「確かに・・・。」

「けど、びっくりしたよ。」

「誰もいないと思ってここまで来てみたら平野さんがいたから。」

「俺がそう言つと平野さんがまた複雑な表情をした。」

「もしかして俺がっかりしたと思ったのかな？」

「あ・・・がっかりしたって意味じゃないよ？」

「むしろ俺的にはラッキーだし。」

「どうして？」

だって、こうして二人で話が出来たから“あの子”だってわかったし。

「平野さんと話したコトってまだ一度もなかったから。」

てか、平野さん・・・俺の事憶えてないのかな？

すっかり忘れたとか・・・？

それとも・・・

「・・・もしかして・・・俺の事嫌い？」

「なんでそう思っの？」

「だって、同じクラスなのに全然話しかけてきてくれないし。」

「用事がないし。」

「他の女の子はなくても話しかけてきてくれるよ？」

俺がそう言つと平野さんはクスクスと笑いながら

「嫌いだったら今こうして話してないよ。」

と言った。

それもそっか……。

じゃあ、とりあえずは嫌われてはいないのかな。

……ピピピピピピピピピピピピピピピピ……

アラーム？

「そろそろ戻らなきゃ。」

「もう、そんな時間？」

「下りるの時間かかりそうだから、早めに戻らないと集合時間に遅れちゃう。」

「えー、まだ平気だろ？」

せつかく平野さんと打ち解けてきたのにな。

「二ノ宮くんはせつかくここまで登ってきたんだし、ごゆつくり。」

平野さんはそう言うとスケッチブックを持って立ち上がった。

一人で下りる気なのか？

「いいよ。俺も一緒に下りる。」

ここに来るまでは滑りやすいところや大きな段差もあった。

女の子一人で下りるにはちょっと危ない。

だから俺も一緒に下りる事にした。

二人でバスが見える駐車場まで下りると

「あ、あの・・・ありがとう。」

と、少し小さな声で平野さんが言った。

「うん。」

正直、ちゃんと“ありがとう”なんて言ってくれるとは

思っ
てい
な
か
っ
た。

結
構
・
・
・
嬉
し
い
か
も。

5月。

そろそろクラス全員とも仲良くなり始めた頃、

今日のHRと1時限目は校外学習の日程説明とグループ分けに費やされた。

例のごとく、平野さんと藤村さん以外の女子共が

俺と一緒にグループがいいとか

高杉と一緒にグループがいいとか

騒ぎまくっているもんだから決まるものも決まらないでいる。

俺は平野さんと一緒にいいな！。

だけど、神様は意地悪なのか・・・

女子全員参加でやったあみだくじで平野さんは高杉と同じグループになった。

いいなあ・・・高杉。

俺のグループはというと・・・いつも周りで騒いでいる女子共だ。

しかもなぜか他のグループより女子が多いし。

なんだか溜め息が出てきた・・・。

そして、当日の朝。

平野さんの近くに座ろうとした俺の邪魔をしたのはまたしても

女子共だった。

平野さんと同じグループになれなかったんだから

せめてバスの中だけでも近くに座りたかったのに・・・。

・・・で、出発して1時間半・・・ずっと喋りっ放しの女子共は
まだ喋り倒していた。

そろそろ寝かせてくれー。

小さくため息をつきながら前の方を見ると、ほとんどの男子は寝て
いるし、

平野さんと藤村さんも起きている様子もない。

・・・俺も寝たい・・・。

結局、2時間30分の道のりを俺はずっとおしゃべりに付き合わさ
れた。

そしてやっとのことでバスは校外学習が行われる山の中の施設に到
着した。

バスから下りる時、平野さんの方をちらっと見ると

藤村さんが起こしていた。

「琴美、起きてー。」

藤村さんの声に反応してゆっくりと目を開けた平野さんは

なんだかボーッとしてる顔がまた可愛らしかった。

バスを下りてさっそく点呼。

先生の話の後はグループ毎に分かれて昼食作り。

俺は高杉のグループの方へ視線をやった。

・・・あれ？

平野さんがいない。

周りを見回して平野さんの姿を捜すと、高杉と同じグループになったはずの

平野さんはなぜか武田と同じグループにいた。

藤村さんも一緒だ。

なんで？

少し不思議に思いながら昼食の準備を進めてながら目で追っている

平野さんと藤村さんは手際良く動いていた。

それに比べてうちのグループの女子共は・・・

何やってんだ？

しはらく様子を見ているとどうやら一人は包丁も握れないらしく、

そしてもう一人はスープの作り方がわからず、

さらには野菜の切り方もよくわかっていない。

まあ、切り方なんてぶっちゃけどうでもいいが・・・

食べられる物さえ出来ればいい・・・。

俺達があーでもない、こーでもないと言いながら

もたもたしている中、平野さん達はすでにもう食べ始めていた。

早っ！？

っーか、俺らが遅いのか。

ようやく俺達が食べ始めた頃には平野さんのグループはすでに後片付けをしていた。

楽しそうに武田達と一緒に鍋や皿を洗っている。

うちのグループはと言つと・・・

険悪だ・・・。

時間がかかったワりに出来上がった料理がマズいからなおさらだ。

普通に作れば問題なくできるはずなのに・・・なぜこんなにもマズいんだ？

それでも食べないワケにもいかず、とりあえずはノルマ分はなんとか完食した。

昼食の後はオリエンテーリング。

ああ・・・正直もうどうでもいい・・・。

平野さんと同じグループになれなかった上、

ろくに料理もまともにできない女子共にうんざりし、

すっかりやる気をなくした。

ちなみに唯一、同じグループの男子・池内もげんがりしている。

そんなんだから、上位20位なんかに入れるはずもなく、

俺達のグループは全78グループ中、76位と非常にビリミョーな順位でゴールした。

なにが微妙って・・・最下位ならそれはそれでいいけど

76位って・・・ブーヒー賞にも入らない。

平野さん達はと言うとどうやら20位以内に入ったらしく、

武田達と景品を手に楽しそうに笑っていた。

夕方。

今度は夕食作り。

メニューはカレーとマカロニサラダだから普通に考えてもまず失敗はない。

・・・と、思ったら・・・甘かった・・・。

カレーのルーはまともに出来たものの、ご飯は固いし、

マカロニも湯で加減がいまいち芯が残った状態だ。

おいおい・・・アルデンテはパスタだけにしろよー。

結局、カレーライスは一杯目だけはなんとかご飯と一緒に食べた。

けど、二杯目からはひたすらルーだけ。

そんなワケでルーだけではやっぱり満腹にならなかった俺は

中途半端な晩メシの後、なぜかおにぎりを持っている武田に出くわした。

「武田、なんでおにぎりなんか持ってた？」

「あ、これ？平野さんと藤村さんが作ってくれた。」

何っ！？

「半端に余ったご飯を高菜おにぎりにしてくれたんだ。」

武田はそう言つとにんまりと笑った。

「それ半分くれっ！」

「はあっ！？」

「俺らとこのご飯・・・とても食えるモンじゃなかったんだよー。」

「

「なんだ、それ？」

「何をどう間違えたのか、ご飯が固くてさー．．．だから、頼むっ。」

「えー、しょうがねえなー．．．。」

武田はそう言つと高菜おにぎりを半分俺に分けてくれた。

救いの神・武田に感謝、感謝。

翌日。

朝食は昨日の固くて食べられなかったご飯を雑炊にした。

そして、その後は登山。

基本、グループ毎に固まって行動。

だけど、うちのグループの女子共はまったく体力がないのか

まだ1時間くらいしか経っていないのに、もうゼエゼエ言いながら

甘えた声で「ソウくん、待ってえー。」とか言ってる。

「琴美、大丈夫？」

俺の少し後ろの方で藤村さんの声がした。

藤村さんはさらに後ろにいる平野さんを心配そうに見ていた。

平野さんも体力がないのか、辛そうな顔をしていた。

でも、彼女の口からは「メグちゃん、気にしないで先に行ってー。」

「

と言つ言葉。

すると、藤村さんのすぐ近くにいた武田が「琴美ちゃん、手。」と言った。

“琴美ちゃん”？

武田は平野さんの手を取った。

え・・・？

平野さんはキョトンとしながらそのまま武田と手を繋いだまま登り始めた。

「・・・。」

俺も同じグループだったら、あんな風に平野さんと一緒に登れたのにな。

登山の後　　。

昼メシの時間。

平野さんのグループと隣同士のテーブルになった。

そして俺のちょうど真後ろに平野さんが座った。

俺の隣の席争いでなかなか落ち着かないうちのグループ・・・。

それに比べ、平野さん達は武田達と楽しそうに会話しながら

食べている。

おもしろくない・・・

「昨日、ソウ君の隣の席だったんだから、今日はあたしに隣の席譲ってよー。」

「えー、ヤダ。」

「もー、いいじゃん目の前の席でも。」

「ヤダ、隣がいいもん。」

俺のグループの女子共はまだ何やら揉めている。

まったくおもしろくない・・・

おもしろくない、おもしろくない、おもしろくないっ。

つか、平野さん達もう食べ終わっていなくなってるじゃん・・・。

それから30分後。

俺達のグループもようやく食べ終わった。

「ねえ、二ノ宮くん一緒に外歩こ?」

そして例のごとく、俺はまた女子共に捕まりそうになった。

でも、まあうんざり。

たまにはゆっくりさせてくれ。

俺は猛ダッシュで逃げ出した。

「あっ！？待って！」

走り出した俺を女子共はしつこく追いかけてきた。

けど、こっちだって部活で鍛えてるし、何より本気を出せばすぐに撒くことができる。

しかし、追っ手を振り切るために夢中で走っていると、目の前が行き止まりになっていた。

やべ・・・っ。

このまま引き返すとアイツらに捕まる。

仕方なく俺は目の前の茂みの中に隠れた。

すると、その茂みの奥にはまだ道が続いていて

進んでみると一瞬にして目の前に絶景が飛び込んできた。

「すっげえ・・・。」

誰に言うでもなく、思わずそんな言葉が出た。

平野さんに見せたいな・・・。

そう思った俺はまたきつとどこか絵に描けそうな場所にいると思い、茂みの中から女子共が引き返して行くのを確認して、平野さんを捜しに行く事にした。

探し始めて30秒。

意外にあっさりとその姿を見つけることができた。

デジカメ片手に俺の目の前を歩いていた。

「平野さん。」

声を掛けると振り向いた平野さんの少し離れたところに

俺を追いかけている女子共の姿があった。

マズい・・・

「ちょっと来て。」

俺はアイツらに気付かれる前に平野さんの手首を掴み、

少し足早にさっきの場所に向かった。

「・・・二ノ宮くん？」

「いいから、いいから。」

ちょっと荒っぽかったけど、アイツらに邪魔されたくない俺は慌てている平野さんに構わず、強引に引っ張って行った。

「着いた！ここ！」

一見、行き止まりに見える茂みの中に入って行き、足を止めると思っていた通り、平野さんは目の前に広がる景色に目を見開いていた。

「ここ、スケッチするのにいいかなと思って。」

「うん・・・すごい・・・綺麗。」

平野さんはそう言うとデジカメのシャッターを切った。

そして嬉しそうに「ありがとう、二ノ宮くん。」

と、笑った。

「さっき逃げてる途中で偶然ここ見つけたんだ。」

「また逃げてるんだ？」

「うん。」

「今度はなんて言って逃げてきたの？」

平野さんは“また逃げてる”俺が可笑しかったのか

クスクスと笑いながら腰を下ろした。

「強行突破。」

そしてさり気なく俺も隣に座った。

ふわりとやさしい風が俺と平野さんの頬を撫でるように吹き抜けた。

「……気持ちいい……。」

そう言って平野さんは目を閉じて柔らかな笑みを浮かべた。

平野さんのこんな表情・・・初めて見た。

「・・・うん。」

まるで二人だけの世界のように感じた。

とろろで・・・

「そういえば・・・」

「うん？」

「なんで武田のヤツ、平野さんのコト“琴美ちゃん”て呼んでんの？」

俺がそう聞くと平野さん不思議そうな顔をして首を捻った。

・・・なんだ。

別に平野さんがそう呼んでくれて言った訳でもないのか。

「俺も名前で呼んでいい？」

「うん・・・別に構わないけど？」

結構、勇気を出して言った事に平野さんは意外とすんなり“うん”と言った。

「んじゃ、今度から名前で呼ぶ。あ、俺のコトも名前で呼んでね？」

「・・・“ソウ”君・・・だっけ？」

ぶ・・・っ!？

やっぱ、勘違いしてたか。

「シュウ。」

俺は初めて自分の名前を訂正した。

すると彼女は少し驚いていた。

「だってみんな“ソウ”君て呼んでない？」

「うん、でもホントは“シュウ”が正解。」

「えー、なんでみんなに違うつて言わないの？」

「訂正するのが面倒くさいから。」

「はぁ・・・。」

面倒くさいってのもあるけど、ちゃんと名前を呼んでもらいたいの

俺が好きになった女の子だけだから・・・。

「琴美。」

いきなり呼び捨てもどうかと思ったけど“ちゃん”付けだと

武田と同じになるし、“さん”付けもなんだか他人行儀な気がした。

「・・・宗くん。」

琴美は少し戸惑いながら“君”付けで呼んでくれた。

でもやっぱりここは最初から是非呼び捨てにしてもらいたい。

そんなワケで俺は“君”付けも、“さん”付けも、

“ちゃん”付けも却下した。

「・・・宗。」

それで仕方なく琴美はやっと呼び捨てにしてくれた。

二人だけの景色を見ながら二人だけの約束。

アイツらに追いかけれなきゃ見られなかった景色・・・

だから、ちょっとだけアイツらに感謝。

ホントにちょっとだけだけど・・・。

校外学習から数日が過ぎたある日。

昼休憩、女子共から大量にクッキーを渡された。

4時限目の家庭技術の時に調理実習で作ったみたいだ。

ちなみに男子の方はこの時間、電気や機械系の事を学んだり、

木材加工の技術を学ぶ。

琴美も誰かにあげるのかな・・・？

ふと、そんな事を思って琴美の方に目を向けると

ちょうど武田が「お、琴美ちゃんが作ったクッキー？」

と、琴美に話しかけていた。

そして「俺にも食べさせて！」と武田が言つと

琴美はにっこり笑って「どうぞ。」と言った。

えー、ズルい・・・。

俺も琴美のが食べたい・・・。

結局、琴美のクッキーは武田だけじゃなく、

周りの男子達の胃袋の中にも入っていった。

いいなー・・・。

放課後　　。

部活の後、部室で着替えていると3年生の先輩の一人が俺が持っている大量のクッキーに気がついた。

「これ、何？」

「あー、それ、今日うちのクラスの女子が調理実習で作ったクッキーっす。」

「へえー、貰ったんだ？」

「いや・・・貰ったってゆーか強引に渡されたってゆーか・・・」

「お、じゃコレ食っていい？腹減った。」

「あ、いいっすよ、どうぞ。」

正直、琴美のクッキーなら喜んで食べるところだけど

他の女の子が作ったクッキーなんて食べる気がしなかった俺は先輩達にも食べてもらうことにした。

「俺も味見したい。」

隣で一緒に着替えていた武田がにんまりしながら言った。

「うん、いいけど？」

「つか、お前はもう琴美の食べたんだし、いらないだろ？」

「と、思ったけどここは素直に“処理係”に加わってもらうことにした。」

「んー、やっぱり琴美ちゃんが作ったのが一番おいしいなあ。」

武田は全ての袋からクッキーを一つずつ取って食べた後、そう言った。

「そうなんだ？」

先輩達同様、腹が減っていた俺は誰のかわからないけどとりあえず口にクッキーを放り込みながら武田の顔をちらりと見た。

「うん、琴美ちゃんのはもっとバターが効いててこんなにベタベタしてなくて

甘過ぎなかったし、いくらでも食べれるくらいだった。

てか、こんなのと比べ物にならないかも。」

「ふーん……。」「

そんなにおいしかったんだ。

先輩達にクッキーを“処理”してもらって学校を出ると

少し前を女の子が歩いていた。

うちの学校の制服を着ている。

そして、あまり歩くスピードが速くないその女の子に近づくに連れ、
それは琴美だと気がついた。

「琴美。」

俺の声に反応し、その女の子が振り向いた。

やっぱり琴美だ。

「こんな遅くまで部活？」

「うん。宗は？」

「俺も今、部活終わって帰るトコ。」

俺がそう言つと琴美がちょっと驚いた顔をした。

「帰宅部だと思つてた？」

苦笑いしながら琴美の顔を覗き込むと今度は

「ハイ、その通り。」という顔をしていた。

わかりやすつ。

「何部？」

「バスケ。」

俺がそう答えると琴美はまた意外そうな顔で俺を見上げた。

「意外？」

「うん・・・まあ。」

ぶっ・・・琴美って正直だな。

あ、そうだ・・・

「そういえば・・・俺もクッキー食べたかったなー。」

ちらりと横目で琴美を見ると「いっぱいもらってたじゃない。」

と、プツと吹き出した。

まあ、それはそうだけどー。

「琴美のが食べたかったの。」

「あたしのより、みんなから貰ったクッキーの方がおいしいと思うよ?」

「武田は琴美の方が全然うまいって言ってたもん。」

俺がそう切り返すと琴美が不思議そうな顔をした。

「さっき部活が終わって腹が減ったからバスケット部のみんなでもらったクッキー食べたんだ。」

琴美は武田もバスケット部に入った事を知っているはず。

よく一緒に話しているから。

「もうクッキー作らないの?」

「うん、次の調理実習はまた別のメニューだし。」

「えー。」

まあ、そりゃそうか。

「家で作ったりしないの？」

「時々、作ってるけど・・・」

「マジッ！？今度いつ作る予定？」

「い、いつって・・・」

それは是非、食べたいっ！

「・・・そ、そんなに・・・食べたい？」

「うん！」

当たり前だろっ。

「……。」

琴美は俺の顔を見つめたまま黙り込んだ。

そんなに見つめられるとマジ照れるんだけど……。

「俺の顔になんかついてる？」

……で、照れ隠しに言ったセリフ。

「目……。」

「目？」

……？

「カラーコンタクト？」

「あ、目の色？」

「うん。」

「コンタクトじゃないよ。自前。」

そう言っただん足の時みたいに俺がずいっと顔を近づけると

琴美は少し慌てた。

・・・ぷぷつ。

可愛いなあー。

「ほら、コンタクトなんか入れてないでしょ？」

俺、ハーフなんだよ。知らなかった？」

「綺麗な色だね。翡翠みたい。」

琴美はまだ少し赤い顔のまま、意外な事を言った。

「エメラルドみたい」とはよく言われるけど、

翡翠って言われたのは初めてかも。」

でも・・・

「俺は翡翠の方が好きだから、そう言われて嬉しいけど。」

それに・・・琴美に言われたから余計に嬉しい。

週明け、月曜日。

今日はちよつと特別な日。

・・・と言うのは、俺の誕生日だからだ。

まあ、これと言って何もない日だけど、

学校に行けば琴美の顔が見られる。

そして放課後　　。

部活が終わり、正門を出て駅に向かって歩いていると
後ろから誰かに呼び止められた。

「宗。」

少し躊躇したような女の子の声。

・・・琴美？

俺が振り返って見ると琴美が小走りで近づいてきた。

「今日も遅くまでやってたんだね。」

でも、そのおかげで会えたけど。

「・・・うん。・・・宗、いつもこの時間までやってるの？」

「うん。」

「よく体力続くね。」

「まあ、中学の時からやってるからね。」

「そーなんだ。」

「琴美はずっと美術部？」

「うん。・・・あたし美術部って言ったっけ？」

「いや、聞いてないけど、武田が言ってたから。」

この間、琴美は美術部らしいと武田が言っていた。

つか、武田は琴美と基本的に仲が良い。

「武田と仲良いんだね。」

「真後ろの席だから。」

「そーゆー問題？」

「うん。」

で、事は俺も琴美の近くの席ならもつと早く仲良くなれてたのかな？

そんな事を思っていると

「・・・あ、そうだ。コレ・・・」

と、琴美が何かを俺に差し出した。

なんだろう・・・？

「クッキー。」

すると琴美はクスッと笑いながら言った。

「マジッ!？」

「マジ。」

「やったーっ!!」

俺は思わず叫んだ。

「ありがと！最高の誕生日プレゼント!」

まさか琴美がクッキーを作ってくれてくれるとは思ってもみなかった。しかも、今日は俺の誕生日・・・今までで一番嬉しい誕生日プレゼントかも。

琴美は俺が今日、誕生日だと言うと

「だったら、もっと豪華なお菓子にすればよかった。」

と言った。

「でも、コレ俺の為に焼いてくれたんでしょ？」

「うん。」

最初は家でもよく作ってるって言ってたから、

ついでに作ったのかとも思った。

でも、琴美はハッキリ“俺の為に・・・”と言う言葉に頷いた。

それが何よりも嬉しい。

家に着いて、さっそく琴美から貰ったクッキーを開けた。

袋を閉じてあるリボンを解くと中からいい香りがした。

バターの香りと・・・後は紅茶・・・？

よく見るとクッキーには紅茶の茶葉が練りこんであつた。

紅茶クッキーみたいだ。

晩メシの前だけど・・・ちよつと味見。

クッキーを一つ取って口に入れるとサクツと音がした。

んー、うまいっ。

武田が言ってた通り、いくらでも食べれそうだった。

翌日。

俺は朝からずっと琴美に話しかける機会を伺っていた。

昨日のクッキーのお礼が言いたかったから。

でも、俺の周りには女子共がいるし・・・。

わざわざ琴美に近づくと騒ぐだろうしなあ・・・

ここは部活が終わってから待ち伏せでもするか？

てか、逆にその方が二人でゆっくり話せるからいいか。

そう思った俺は放課後、琴美を待ち伏せする事にした。

そして部活が終わった後、俺は正門で琴美を待つことにした。

さつき昇降口の下駄箱を確認しに行ったらまだ琴美の靴があったから
きつと部活をしているはず。

待つこと20分。

校舎の方から薄っすらとだけ琴美が近づいてくるのが見えた。

・・・来たっ。

「遅かったね。」

俺がそう言つと琴美はキョトンとした顔で俺を見上げ、

そしてキョロキョロと周りを見渡し始めた。

まさか、自分を待っていたとは思ってなかったのか？

「琴美の事、待ってたんだよ。」

「・・・な、なんで？」

「昨日のクッキーのお礼が言いたかったから。」

「べ、別によかったのに・・・。」

「どうしても直接言いたかったし・・・かといって、
教室で言つと女子が騒ぐと思つて。」

あのクッキーすごくおいかったよ。ありがとう。」

「・・・あの場所・・・教えてくれたお礼だし。」

例の二人だけの秘密の場所の事か・・・。

それから、俺と琴美は昨日と同じ様に二人で駅に向かって
いろいろ話をしながら歩いた。

・・・ところで・・・

「・・・そういえば・・・琴美・・・最初、

高杉と同じグループにならなかったっけ？

なんで変わったんだ？」

俺がそう聞くと琴美は俺から少しだけ視線を外した。

「アイツのコト、嫌いなのか？」

「別に・・・嫌いじゃないよ。」

・・・変わって欲しいって言われたから。」

「それであっさり変わっちゃったんだ？」

「うん。」

それか。

「じゃ、もし俺と同じグループになって、誰かに変わってくれって言われてたら変わってた？」

「うん。」

なぬー。

「えー、それじゃ今度またこーゆーグループ分けとかあっても

琴美と一緒にになれる確率超低いじゃん。」

「宗も競争率高いもんね？」

琴美はクスツと笑った。

「じゃあ俺が琴美を指名するとしたら？」

「んー……。」「

「それでも断る？」

「んー……。断る理由がなかったら断らない。」

まちか？

「絶対？」

「・・・うん。」

「おっし！その言葉忘れんなよ？」

うひひ・・・もうすぐ体育祭・・・

「約束な？」

「うん。」

俺が念を押すと琴美は少し戸惑いながら返事をした。

よしよしよし・・・っ。

「破ったら俺とキス。」

そこまで言つとさすがに琴美は「はあっ!？」と言つた顔になった。

「破らなきゃいいんだしー。」

プププ・・・ッ、1ヵ月後の体育祭が楽しみだ。

6月のある日。

今日は約二週間後にある体育祭の種目毎の出場者を決める日だ。

一人最低一種目。

琴美と一緒に出られそうな種目は・・・

・・・あつたつ。

『男女混合リレー』

あとは・・・

『二人三脚』

男女ペアの二組選出。

二組かー・・・競争率高そうだな。

それからー・・・

うーん・・・これだけか。

琴美は何に出る気なんだろう？

俺はテキトーに男子リレーや騎馬戦に出る事にして

後は琴美が何に出るのか様子を伺っていた。

だけど、琴美はなかなか立候補しない。

そして、次の種目は『男女混合リレー』。

あれ？

琴美、また手挙げてない。

ずっと立候補していないから琴美はまだ一種目も決まっていらないはずだ。

これで手を挙げていないという事は残る種目はあと一つ。

『二人三脚』だ。

・・・てコトはー・・・俺がここで立候補しなくても

次で必ず琴美は出なくちゃいけない。

あの“約束”を発動させたら間違いなく俺の相手は琴美になるワケだ。

いよいよ『二人三脚』の出場者を決める時、

進行役の体育委員・小宮が

「じゃ、最後。二人三脚に出場したい人、挙手してください。」

と言った瞬間、俺は一番に手を挙げた。

・・・で、琴美挙げてないじゃんっ!?

琴美に視線を移した俺はびっくりした。

てつきり挙手していると思っていた琴美が手を挙げていなかったからだ。

なんとか琴美に挙手させる方法はないかな・・・?

すると、小宮が琴美の出場種目がまだ一種目も決まっていない事に気がついた。

「平野さん、まだ一種目も決まってるじゃないよね?これ出ない?」

おおおっ！

小宮・・・ナイス！

琴美は少しギクリとした顔をして

「・・・あ、じゃ・・・出る・・・。」

と、渋々手を挙げた。

よっしゃー！ーっ！ー！

琴美がようやく手を挙げ、女子の候補者は10人になった。

男子は俺と堀口しか手を挙げていない。

「えーと、じゃ二組選出するから・・・男子はこのまま

二ノ宮と堀口をお願い。」

よしよし・・・じゃ、後はいかに堀口に琴美を

取られないようにするかだな・・・。

なんてコトを考えていると突然、女子共が

「じゃあ、私も出る!」と一斉に挙手を始めた。

なにぃーっ!?

冗談じゃねえ・・・マズい・・・このままじゃ・・・

「今さら挙手してもダメ。平野さんはこれ以外に出る予定ないから

確定ね。後は最初に挙手してた女子の中から決めるから。」

小宮はまるで女子共がそう言い出すのがわかっていたかのように

冷たく言い放った。

おー、小宮・・・やるなあ。

ふふふ・・・さて、もう邪魔は入らなそうだし、

あの“約束”発動させちやおっかなー。

琴美の方に視線をやると目が合った。

すると琴美は少し慌てて目を逸らした。

目を逸らしてもダメですよー。

立候補した女子共は俺のペアの相手を何で決めるか話し始めた。

。そんなの決めなくても俺が琴美を指名するんだから無駄なのに・・・。

「俺が指名しちゃダメ？」

「ごちゃごちゃ言ってる女子共を他所に俺は小宮に提案した。」

小宮は女子共にうんざりしてるからきつといいつて言うはず。

「いいよ、むしろその方が早い。女子もそれでいいね？」

案の定、小宮はあっさり俺の意見を聞き入れた。

“女子もそれでいいね？”と疑問形で言ったにも拘らず、

その顔は有無を言わさぬ顔で。

女子共はそれに反論も出来ず、納得したようだ。

「言っておくけど、指名された人は拒否権なしね？」

俺は少し俯いている琴美に向けて言った。

“候補者の女子”共はコクコクと首を縦に振った。

琴美はまだ俯いたままだ。

俯いててもダメですよー。

「じゃ、琴美。」

俺がそう言った瞬間、“候補者の女子”共の悲鳴が響いた。

「……え、えーと……、あたし……堀口く……」

「拒否権なし。」

琴美が口をパクパクさせながら小さな声で言おうとした事を俺はシャットアウトするべく言い放った。

「じゃ、二ノ宮の相手は平野さんでいいね？」

そして、小宮にまでそう言われ、琴美はとうとう首を縦に振った。

よっしゃーーーーーっ！！！

俺が心に中で歓喜の雄叫びをあげているとなにやら視線を感じて

その方向に顔を向けると琴美がちょっと涙目で俺を睨みつけていた。

あらまー、そんな可愛い顔で睨んじゃって。

約束忘れたのかなぁー？

俺がにやりと笑うと琴美は無言で俯いた。

体育祭当日。

二人三脚しか出ない琴美は朝からずっと応援をしていた。

特に高杉には目立った応援はしないもののじっと見つめている。

なんか、おもしろくねえ……。

そして、次はいよいよ二人三脚。

俺が琴美の所に行くと琴美は誰かを目で追っていた。

視線の先には……

やっぱり高杉の姿があった。

「……琴美。」

高杉を見つめたままの琴美に俺は声を掛けた。

でも、俺の声にはまったく気がつかないのか

ぼーっとしたままだ。

「琴美。」

今度は少し大きな声で呼んでみた。

それでも琴美は気がつかない。

「琴美！」

なんだかムカついて思わず琴美のおでこを指で軽く小突いた。

すると琴美はやっと俺に気付いたのか「・・・あ・・・何？」

と、ポカンと口を開けた。

「何？じゃねえよ。二人三脚、

次だからそろそろ準備しとかないと。」

「・・・あ、うん。」

琴美はおでこを擦りながら返事をした。

・ ・ ・ 琴美 ・ ・ ・

高杉の事が気になるのかな ・ ・ ・ ?

結局、琴美はその後俺が高杉の事を聞いても

「なんでもない。」としか答えなかった。

ホントかな？

ちょっと引つかかるけど琴美とは別に付き合ってるワケでもないし、

それ以上聞くと琴美を怒らせそうだし、

嫌われたくないからやめた。

琴美と一緒に二人三脚のスタート位置に行くと

「これで足首を固定して準備してください。」

と、鉢巻を渡された。

俺は自分の左足首と琴美の右足首に鉢巻を巻きつけた。

琴美はなんだか周りを気にしている。

騒いでいる女子共の視線が気になるみたいだ。

きつと琴美の事だから、ゴールしたらずぐに足首の鉢巻を解くだろう。

そう思った俺は琴美が簡単に解くことができないように

キュッと結び目を固くした。

そしてそのおかげで自ずと二人の体は密着する。

俺は琴美の肩に手を回し、琴美は少し遠慮がちに俺の腰に手を回した。

うきゃきゃっ。

体育祭サイコーッ！

二人三脚バンザイツ！

「琴美ちゃん、二ノ宮がんばって！」

俺達の後走る堀口が声援を送ってくれた。

「おうっ！」

その声援に応えながら堀口の隣にいる南さんをちらりと見ると

なんだか不機嫌そうな顔をしていた。

しかも琴美を恨めしそうに見ている。

そんなに睨まなくても・・・。

スタートピストルが鳴って、俺と琴美は息を合わせ、

一緒に走り出した。

琴美とは3日前からバッチリ練習していたから息もぴったりだ。

俺は琴美の歩幅とスピードに合わせて走った。

琴美はほぼ無理矢理俺に指名されたにも拘らず、

一生懸命走っている。

“運動神経が皆無に等しい”・・・琴美はそう言っていたけど

確かにそうかもしれない。

普通の女の子が走るより遅いから。

それは練習の時からわかってた事。

でも、琴美はいつも一生懸命だった。

運動神経が皆無でもいつも一生懸命。

現に今も思いつきり真剣な顔で走っている。

だから、俺も一生懸命、琴美に合わせて走った。

そのおかげで俺と琴美のペアは一位でゴールテープを切った。

「だから言っただろ？愛の力。」

俺がそう言つと琴美はゼーゼーと肩で息をしながら

俺を見上げた。

どうやら息が切れててしゃべれないらしい。

まったく・・・可愛いな。

そんな琴美の表情が可愛くて思わず吹き出した。

「大丈夫？」

俺が琴美の顔を覗き込むと琴美は何かを思い立ったように

しゃがみこんで足首を固定してある鉢巻の結び目に手を掛けた。

あー、やっぱり思ったとおり・・・

もう解こうとしてる。

でも、琴美に解けるかなー？

案の定、琴美はなかなか解くことができない。

そして、諦めて俺の顔を見上げて

「解けない……。」

と言った。

それはそうだろう？

だって、そう簡単に解けないようにしてんだから。

「解いて。」

ヤダ。

「いいじゃん、まだこのままで。」

「解いて。」

「俺、疲れたから動きたくねー。」

全然疲れてないけどー。

「解け。」

「ヤダ。」

「いいから解け。」

「もう少し休んでから。」

「足痛い。」

「俺は平気。」

だって、せっかく琴美とこうやって密着できたのに
もったいない。

てな事を暢気に思っていたら、琴美が涙目になった。

「・・・痛い・・・。」

え．．．。

「琴美っ！？」

「．．．お願い．．．解いて．．．？」

そして涙を目にいっぱい溜めて俺を見上げた。

やべーっ。

本気で痛かったんだ。

「ごめんっ、そんなに痛かったとは思わなかったから．．．。」

確かにあんだだけ鉢巻をぐるぐる巻いてきつく結んでたら痛いよな。

俺はすぐに結び目を解いて琴美の足を自由にした。

「琴美、足大丈夫か？」

琴美の足首・・・痣とか出来たらどうしよう・・・。

だけど・・・

そんな俺の心配を他所に次の瞬間、

琴美は満面の笑みで「宗、ありがとう。」

と、俺に言った。

はあ・・・っ！？

なんだよ、それ？

「・・・おまえ・・・」

「だって、こうでもしないと解いてくれなさそうだったんだもん。」

絶句した俺に琴美はしれつとした顔で言った。

「騙された……。」「

「まあ、お互い様ってコトで。」「

「ひでえー……。」「

「あ、次堀口くんと南さんが走るよ。」「

「そんなのどうでもいい。」「

「なんで？さっきあたし達が走る時も堀口くん、応援してくれたのに。」「

「……。」「

まだか……。。

「宗……。？」「

琴美も案外やるな・・・。

「宗ってば。」

でも・・・おもしろい。

「ごめん・・・。」

だって、ほら。

俺が怒ったと思ったのか、もう謝ってきてるし。

「宗。」

まったく・・・おもしろえ！。

「宗……。」

「琴美おもしれえー。」

「……。」

琴美が啞然とした顔をした。

「本気で怒ったかと思った？」

「……うん。」

「あんな事されたくらいじゃ怒んないよ。」

ホント、可愛いなあ。

体育祭が終わった数日後。

部活が終わって、疲れた足を引きずりながら

正門に向かって歩いていけると目の前を琴美が歩いていた。

お・・・っ!?

「琴美。」

声を掛けると俺の声に振り返った琴美は小さく笑った。

ラッキー。

琴美と一緒に帰れる。

琴美とは部活が終わる時間が同じくらいなのか
ちよいちよい一緒に帰るようになっていた。

そして、同じ駅で降りるから一緒になった時は
いつも自然と並んで帰っている。

「琴美って、誕生日いつ？」

駅のホームで電車を待っている時、

ふと、琴美の誕生日が気になった俺は
さり気なく聞いてみた。

「3月14日。」

俺はその日付に少し驚いた。

その日は・・・

俺と琴美が出会った日だ・・・。

「お。ホワイト・デーの日かー。

いいな、俺なんか普通になんにもない日。」

「ホワイト・デーだからって、なんにもいい事ないよ。」

「なんで?“愛の告白”と“おめでとう”がいつぺんに聞けるじゃん。」

「“愛の告白”どころか“失恋記念日”になる可能性もあるでしょ？」

「琴美は失恋した事なんてないだろ？」

「・・・ある。」

「またまた。」

「ホント。」

「だから髪切ったのか？」

俺がそう言つと琴美は言葉を詰まらせた。

え・・・星・・・？

マズい事、言つたかな？なんて思っていると

「宗・・・なんで、あたしが髪長かったの知ってるの？」

琴美が不思議そうな顔で言つた。

えー。

「やつぱ、憶えてなかったんだ？」

なんだ・・・。

ちよつとがっかり・・・。

「あの時・・・雑貨屋の前で雨宿りしててさ・・・

琴美、俺にストラップくれたの憶えてない？」

琴美は途中でホームに電車が入ってきた所為か、

俺の言葉が聞き取れなかったみたいだ。

眉間に皺を寄せて首を傾げている。

電車のドアが開いて何人かの乗客が降りると

ドア付近に立っていた中学生が琴美に向かって呼びかけた。

「姉ちゃん。」

姉ちゃん・・・？

「誠。」

「姉ちゃん、友達？」

“誠”と琴美に呼ばれた男の子は琴美と一緒に乗って来た俺をちらりと見た。

夕方、帰宅ラッシュとまで行かないけれど結構な混み具合だ。

だから俺は琴美が押し潰されないようにガードするべく、琴美の真横に立った。

「うん、同じクラスの二ノ宮宗くん。」

「ふーん。」

「宗、弟の誠。」

琴美はその男の子の事を弟だと俺に紹介してくれた。

「今日の試合どうだった？」

「・・・負けた。」

「そっか・・・。」

「俺のシュートが全然決まらなくてさ。」

練習だともちやめちや調子良かったのに・・・。」

弟の誠くんは運動系の部活に入っているらしい。

今日はその試合で負けた所為かちょっとへこんでいるみたいだった。

「そんな日もあるよ。」

琴美はそういう所はやっぱり“お姉さん”なのか

試合に負けた弟を慰めるように優しい口調で言った。

「俺って本番に弱いのかな・・・？」

「いつも練習通りに上手くいってれば天才だよ。」

「まあ・・・そーだけど。」

そして、琴美は何かを思い出したように俺に顔を向けた。

「宗もそういう時、ある？」

「ん？練習通りにいかない事？」

「うん。」

「そりゃ、あるよ。俺もいつもそうだし。」

「ほら、誠。バスケの先輩もそう言ってるよ?。」

「シュウさんもバスケやってるの?。」

「うん。」

どうやら誠くんもバスケをやっているらしく、

その後の会話はもっぱらバスケの事だった。

「シュウさんはいつからバスケやってるの?。」

「やっぱり中学と高校じゃ練習の仕方とか全然違う?。」

「家でできる練習方法って何があるかな?。」

「シュウさんてポジションどこ?。」

・・・その他もろもろ・・・

結局、駅に着くまでの間、ずっとそんな感じで質問攻めに遭った。

7月。

週末の金曜日。

俺が一番楽しみにしている選択授業の日。

だって、他の女子共に邪魔される事なく琴美と話す事が出来るから。

そして、今日の授業はシルバークレイでアクセサリー作り。

俺は何を作るかもう決めていた。

小さなハートのペンダントトップ。

もちろん、俺のじゃなくて琴美へのプレゼント。

体育祭の二人三脚の時に結構無理矢理指名したからって言うのもあるけど、

いつもなかなか話せないから身に付けられる物を渡したかった。

別に付き合ってるワケじゃないし、まだ告つてもないワケだけど・・。

6時限目。

昨夜、ネットでいろいろ検索しながらどんなデザインがいいか

どんなのが琴美に似合いそうか頭の中でイメージしたものを形にしてみた。

最初は上手くいくか不安だったけどなんとか可愛く出来た。

・・・と思う。

琴美の方をちらつと見ると俺よりもすでに一段階先の工程に取り掛かっていた。

さすが、琴美・・・早え・・・。

てか、何作ってんのかな？

後で覗きに行ってみよっと。

7時限目。

一段落ついたところで琴美の所へ行ってみた。

すると、琴美の横で藤村さんが掌に何かを乗せて遊んでいた。

「お、メタルスライム。」

藤村さんの掌の上にはドラクエシリーズに出てくる

メタルスライムが乗っていた。

「琴美が作ったの？」

藤村さんはメタルスライムを珍しそうに見ていたから

きつと琴美が作ったんだろう。

「うん。」

案の定、琴美は笑いながらコクンと頷いた。

「つか、琴美……これを本気で作ってたわけじゃないよな？」

まさか……な？

「俺にくれ!」

「へ？」

「メタルスライム。」

俺がそう言つと琴美は

「ん……まあ、いいけど……どーせ遊びで作った方だし。」

と言った。

やっぱな、さすがに本気でコレはないよな？

「本気で作った方は？」

琴美の事だからきつともっと手の込んだモノを作ってるはず。

「こつちだよ。」

そう言って琴美が俺に見せてくれたのは綺麗な雪の結晶の

ペンダントトップだった。

俺は一瞬、もしかして高杉にあげるつもりで作ったのかと思った。

けど・・・どう見ても女の子仕様のデザイン。

きっと自分用に作ったんだろう。

その事にホッとしていると

「宗は何作ったの？」

と聞かれた。

「ふふん・・・内緒。」

別に素直に答えてもよかった。

だけど、今はまだ内緒。

放課後。

俺はHRが終わると同時にダッシュで教室を飛び出した。

選択授業で作ったペンダントトップを琴美へのプレゼント用にラッピングする為。

教室じゃ女子共がうるさいし、琴美に見られるかもしれない。

そうなると全然サプライズ感ゼロだし。

そんなワケで俺は誰もいない屋上に行った。

後は部活が終わって琴美に渡すだけ。

だけど。

部活が終わってこの間のように正門で待っていても

なかなか琴美は現れなかった。

もしかして、今日はもう帰ったのかな？

そう思って昇降口に行って琴美の下駄箱を覗いて見た。

すると、まだ部活をしているらしく通学用の靴があった。

部活が長引いてるだけか。

俺はそのまま、また正門のところまで歩いて行き、

琴美を待つことにした。

門柱に寄りかかって待っているとそれからすぐに

琴美が正門に向かって歩いてくるのが見えた。

「あ、きたきた。」

俺がそう言つと琴美はまた周りをキョロキョロと見回した。

「毎回同じコトするんだな？琴美を待ってたんだよ。」

そんな琴美の反応が可笑しくて俺はつい吹き出した。

「あ、あたし・・・？」

「うん。」

俺がそう返事をする。琴美は自分を待っていたとは

まったく思っていなかったらしく、少し驚いた顔で俺を見上げた。

「遅いから今日はもう帰ったのかと思ってたけど、

さっき下駄箱見に行ったらまだ靴があったから。

・・・琴美にこれ渡そうと思って。」

ラッピングしたペンダントトップを琴美に差し出すと

不思議そうな顔で遠慮がちに受け取った。

「開けてみてもいい？」

「うん。」

俺が返事をする。琴美はゆっくりとリボンを解いた。

そして中から出てきたペンダントトップに目をパチパチとさせた。

「今日の授業で作ったヤツ。」

「え・・・っ!？」

「琴美にプレゼントしようと思って。」

「な、なんで・・・？」

「体育祭の時、強引に二人三脚指名したから。」

「そ、それでなの・・・？」

「うん、それにこれからもずっと指名するから。」

俺がそう言つと琴美はポカーンと口を開けた。

「・・・てか、コレあたしがもらってもいいの？」

しばしの沈黙の後、琴美はハツとしながら言った。

「琴美の為に作ったんだし。」

「えっ!?!うそっ!?!」

「ホント。・・・それずっとつけててね。」

ちよつとダメ元で言つて見た。

すると・・・

「早く言ってくればあたしも宗の為に何か作ったのに。」

琴美が意外な事を言った。

「ホント?」

「うん、そしたらあんなメタルスライムじゃなくて

もっと別のものプレゼント出来ただけだな。」

「でも、あのスライムすっげえカワイイし、気に入ってるけど?」

「そお?」

「うん。」

だって・・・琴美が作ったモノなんだし。

「そういえば、今日の部活何してたの？」

今日は随分と遅くまでやっていたみたいだから

なんとなく気になった。

「んとね、長谷川先生が余ったシルバークレイくれたから

それでまたアクセ作ってたの。」

「へえー。」

「メタルスライム量産しようと思ったけど、さすがにそれはやめた。」

「あはは、・・・で？結局、何作ったの？」

俺がそう聞くと琴美はカバンの中から何かを取り出した。

それは、少し小さめの翼のペンダントトップだった。

「・・・すげえー。」

中抜きになっていてシンプルなデザインのものだ。

「宗が作ってくれたのよりは簡単だよ？」

「でも、いいじゃん。コレ、かっこいい。」

俺が素直に感想を言うと琴美は少し嬉しそうな顔をした。

そして、「宗、お礼にコレあげる。」と言った。

「えっ！？マジ！？」

俺は思わず琴美に聞き返した。

「マジ。」

琴美はにっこり笑った。

「じゃ、俺もコレずっとつけとく。」

こうして俺と琴美は結果的にお互い作ったものを交換する形になった。

7月の後半。

明日から夏休み。

あゝあ・・・これから約1ヶ月半、琴美に会えないのか・・・。

そんな事を思いながら体育館に移動してずらりと整列。

そして終業式。

俺は女子の列の真ん中あたりにいる琴美の後姿を穴が開くほど見つめた。

教室に戻ってからも琴美の姿を目で追った。

だけど、琴美はちっとも気がつかない。

いつものように藤村さんと武田達と楽しそうに話している。

今日は琴美と一緒に帰れるかな・・・？

夏休みで会えないなら、せめて今日は一緒に帰りたい・・・

だけど・・・

神様はいつも意地悪・・・。

部活が終わって、なかなか来ない琴美の下駄箱を見に行ってみると

通学用の靴はもうなかった・・・。

美術部の方は今日は部活がなかったみたいだ。

「はぁ・・・。」

なんだか溜息が出てきた・・・。

8月、夏休み真っ只中。

今日から二週間バスケット部の合宿がある。

湘南にある民宿でサッカー部と合同でやるらしい。

・・・という事は、高杉も一緒なのか。

バスケットに没頭できる時間が増えるのは正直、嬉しかった・・・
いや、嬉しいというより琴美と会えない分、気が楽だった。

朝10時、民宿に到着。

バスから降りると民宿の従業員が笑顔で出向かえてくれた。

人の良さそうなおじさんとおばさん、その息子らしき大学生と
後はパートのおばちゃんが数人。

バスケットとサッカー部は、さっそく二つの大広間に別れてミーティング。

合宿の細かい予定と、練習についてとか・・・

そしてこの大広間がそのまま俺達の寝る場所になる。

ちなみに岡嶋先生は別室。

まあ、当たり前だけど。

ミーティングが終わり、今度は寝る位置を決める事になった。

俺は別にどこでもいいんだけど。

3年生、2年生、1年生でそれぞれジャンケンをして勝った順に好きな場所を取って行く。

・・・で、俺の隣はなぜか武田になった。

よりもよってコイツが隣かよ・・・。

そんなこんなであつという間に昼食の時間　。

食堂に移動して3年生、2年生、1年生の順に並んで列を作っていると

厨房の中に見覚えのある顔を発見した。

俺・・・幻覚が見えてんのかな？

ゴジゴシと目を擦ってみた。

やっぱり、幻覚・・・？

会いたい気持ちが強すぎて、大きすぎて？

でも・・・俺の目の前には確かに会いたかった人物がいた。

「琴美！？」

「琴美ちゃん！？」

「平野さん！？」

武田も高杉も琴美に気が付いたらしい。

「宗！？」

琴美も驚いた顔で俺達の顔を見つめていた。

「琴美ちゃん、なんでココにいるの？」

「あ、ココ親戚がやってて、毎年お手伝いに来てるの。」

武田の質問に琴美はにっこり笑って答えた。

ここ、琴美の親戚がやってるんだ。

神様は意地悪なんかじゃなかった。

いや、むしろ俺の味方かもしれない。

そう思ったのは、琴美の首元に俺がプレゼントしたあのペンダントトップがチェーンネックレスに通してつけてあったから。

ホントにつけてくれてるんだ。

すごく嬉しかった。

琴美が受け取ってくれたのはいいけれど、

ホントはつけてくれないんじゃないかと思ってた。

「なんか合宿楽しくなってきた。」

そう言つて琴美に笑みを向けるとなんだか顔を赤くしていた。

昼メシの後、近くのショッピングモールに買出しに行く事になった。
バスケ部とサッカー部から一人ずつ案内役の琴美が連れて行ってくれるらしい。

だから、俺は買出し役に立候補するつもりだった。

だけど俺はレギュラーに選ばれているから練習を抜けさせる訳には
いかないと岡嶋先生言われ、買出し役は武田になった。

えー。

仕方なく練習に向かっていると、琴美と武田、

高杉が民宿から出て行くのが見えた。

どうやらサッカー部の買出し役は高杉らしい。

よりもよって高杉かよー。

俺は三人の後姿を見送りながら民宿の隣に併設してある体育館に向かった。

もちろん、練習の間もずっと琴美と高杉の事が気になっていた。

それから2時間くらいして三人が帰って来た。

「おう、おかえり。」

ちょうど休憩していた俺は荷物運びの手伝いをするフリをして近寄った。

琴美の様子を伺ってみても特に変わった様子はない。

高杉も至ってフツーだ。

まあ、武田も一緒にいたワケだし・・・。

俺は琴美と高杉の間に何もなかった事にホッとした。

合宿が始まって5日　　。

高杉が風邪をひいて熱を出した。

その事に一番最初に気がついたのは琴美だった。

琴美は無言で高杉に近づくとおでこに手を当て、

「高杉くん、熱ある。」と言った。

周りにいたチームメイトも誰も気がつかなかったのに

琴美だけが気がついた。

それから高杉は個室に移された　　。

琴美は高杉にお粥を作って持って行ったり、
薬を用意したりいろいろ世話を焼いていた。

高杉が羨ましい・・・。

そんな事を思うのは本当は不謹慎な事だとわかっている。

高杉だって別に好きで風邪をひいたワケじゃないし、

琴美だって民宿の手伝いで来ている以上、従業員の一人として

風邪をひいて苦しんでいる客の看病をするのは

ごく当たり前の事で・・・。

そんな事はわかっている・・・わかってるんだけど・・・

やっぱり高杉の事が羨ましかった。

次の日の夜。

高杉は琴美の看病の甲斐あって、すっかり具合も良くなったようだ。

「平野さん、いろいろありがとう。」

夕食の後、高杉が琴美にそう言つと

「いえいえ。」と、琴美は笑顔で応えていた。

こんな風に琴美が高杉と笑顔で話している姿は初めて見た。

琴美と高杉の距離がすごく近くなっている気がした。

そして風呂上り、何気なく窓の外に目を向けると

海を眺めている琴美の姿が目に入った。

お、琴美だ。

俺も一緒に海を眺めてみようかな・・・なんて思つて外に出ると、

琴美に近づいていく人物がいた。

・・・高杉？

暗くてハッキリとは見えなかったけれど

なんとなくそれは高杉だと思った。

高杉は琴美の隣に座り、何か話し始めた。

何を話しているんだろう？

すごく気になるけど、二人の間には入れない気がした。

高杉は琴美をじっと見つめ、琴美は高杉のおでこに手を当てていた。

「・・・。」

俺はそのまま踵を返した。

さらに次の日。

琴美も高杉も朝から普通だった。

何もなかったような顔で話している。

・・・という事は、昨夜は俺の思い過ごしで

世間話でもしていたんだろうか？

でも・・・あの雰囲気は・・・

「？」

俺がじっと琴美を見つめていると、視線に気付いたのか

琴美が「なあに？」と言った顔で小首を傾げた。

こついう何気ない表情がまた可愛いんだよなあ・・・。

そして夜、また風呂上りに俺が部屋に向かっていると

外から琴美が団扇を片手に戻ってきた。

琴美も風呂上りらしく、髪が濡れたままだ。

「琴美、いい物持ってるじゃん。」

俺はその団扇を奪い取った。

すると、琴美は俺の顔を見上げてじっと見つめてきた。

「何？俺に見惚れてるの？」

照れ隠しに俺がそう言つと

「別に見惚れてたワケじゃないけど。」

と、琴美は不機嫌そうな声で言った。

・・・？

「・・・なんか琴美、機嫌悪い？」

琴美の顔を覗き込むとなんだかムツとした表情をしていた。

どうしたんだろ？

「何やってんの？」

俺が不思議に思っていると外から高杉が戻ってきた。

すると琴美は高杉の声が聞こえた途端、

「おやすみ。」

と、慌てた様子で俺の手から団扇を奪い返し、

そそくさと去って行った。

高杉となんかあったのか・・・？

「なあ、琴美となんかあったの？」

「・・・いや、別に。」

俺が聞いても高杉は特に何も答えなかった。

何もないわりには高杉もなんだか複雑な顔をしているし、

だいたい琴美が慌てて部屋に戻るわけがない。

絶対、何かあったな。

俺はその夜・・・そればかりが気になってなかなか寝付けなかった。

数日後。

今日は近くの神社でお祭りがあるらしく、

バスケット部もサッカー部もいつもより早めに練習を切り上げる事にした。

琴美は高杉と行くのかな？

そう思いながらダメ元で琴美を誘ってみた。

「琴美、一緒にお祭り行こうぜ。」

「うん。」

すると、意外にも琴美はすんなりOKしてくれた。

なんだ・・・別に高杉と約束とかしてたわけじゃないんだ・・・。

「あ、二ノ宮ズルい！俺も一緒に行く！」

俺がホッとしていると、どこから出てきたのか突然武田が現れた。

「琴美と二人で行くからダメ。」

せつかく“お祭りデート”できるのに邪魔されてたまるかつ。

俺は琴美を武田から引き離すべく手を引いて外へ連れ出した。

後ろで武田がごちゃごちゃ言ってたみたいけど

気にしない、気にしない。

だけど、琴美は神社に着くなり誰かを捜しているかのように

キヨロキヨロと周りを見回し始めた。

「誰探してんの？」

俺がそう聞くと琴美は黙り込んだ。

「高杉？」

「なんで高杉くんなの？」

「この間、夜、高杉と二人きりで海にいたし。」

琴美の眉がピクリと動いたのがわかった。

「・・・何、話してたの？」

「世間話。」

嘘だ・・・。

「ふーん。」

だって・・・あれはどう見たってそんな雰囲気じゃなかった・・・。

それでも俺は琴美と二人で来たお祭りを楽しみたくて

気にしない事にした。

気にしたって仕方がない。

それにもし、琴美が高杉と何かあって付き合う事になったとしたら
そもそも俺とこうやって二人でお祭りに来ないしな。

そんな事を思っていると目の前にオバケ屋敷があった。

「あつ！琴美、オバケ屋敷あるよ？」

「え。」

琴美はオバケ屋敷が苦手らしく、俺が「入ってみようぜ。」と言つと、

思いつきり抵抗した。

けど、そこは所詮“女の子”。

力じゃ俺の方が上。

「大丈夫、大丈夫。俺がいるから怖くないって。」

俺がそう言つて琴美を引つ張つていくと

「えーっ！」と、言いながら結局、琴美は俺と一緒に

オバケ屋敷に入った。

「……。」

すっかり黙り込んだ琴美はギュツと目を閉じていた。

俺は掴んでいた琴美の手首を離し、手を繋いだ。

すると、琴美は少しだけ顔を上げた。

「この方がいいだろ？」

「……うん。」

琴美はコクンと頷いた。

……と、言っても真っ暗だからよくわからないけれど。

少しでも琴美が怖がらないように……て、そもそも

こんなトコに連れ込んで怖がらせてる自体どうかと思っけど。

琴美と手を繋いだまま、ゆっくりとオバケ屋敷の中を進んでいくと

次々とオバケが襲い掛かってきた。

けど、そんなのは俺にとってまったくなんでもないモノで。

だって、作り物の生首とか、どのタイミングで

オバケが出てくるかとか大体わかっているし。

だけど琴美は一々全てに反応し、その度に悲鳴を上げていた。

ププッ。

可愛いっ！

そして、最後の部屋　　。

薄暗い灯りに照らされた琴美は涙目になっていた。

そんなだから最後の部屋の前で琴美はぴたりと足を止めて

立ち止まってしまった。

「ほら、琴美いくよ。」

琴美は俺に促され、恐る恐る足を少し前に出した。

そして俺と琴美が最後の部屋の中に入ると、

突然ドアがバタンと大きな音を立てて閉まった。

「おおっ!？」

まさか後ろでドアが閉まるとは思ってなかった。

さすがの俺もこれには驚いた。

琴美も今までで一番大きな声で悲鳴を上げ、

「もぉ・・・ヤダ・・・。」

と半ベソ状態で弱々しく呟いた。

まったく可愛いなあ。

「ははは、後5m歩けば出口だよ。」

俺がそう言つと琴美はギュッと俺の腕にしっかりとしがみついた。

ちなみに琴美はオバケ屋敷に入ってからずっと

俺の腕にしがみついている。

オバケ屋敷はやっぱりこうじゃないとっ。

出口まで後2m・・・。

そこまで進んだところで突然後ろからオバケが出てきた。

・・・で、琴美は案の定、泣き喚くような悲鳴を上げた。

逃げるようにオバケ屋敷から出て「琴美、大丈夫？」

と、俺が琴美の顔を覗き込むと

「うー……。」「

と、琴美は半ベソと言うよりほとんど泣いてる状態だった。

「琴美がこんなに怖がりだとは思わなかった。

やっぱりオバケ屋敷はいいなあー。」「

「どこがー？」

琴美は涙目で俺を見上げた。

「だって、俺が何もしなくても琴美の方から抱きついてきてくれたし。」「

俺がそう言つと琴美はハッとして絡ませていた腕を慌てて放した。

「別にそのままでいいのにー。」「

「もしかして・・・その為にオバケ屋敷に入ろって言ったの？」

琴美は半分呆れたような顔で言った。

「うん、当たり前じゃん。」

今頃気がついたのかー？

それから、琴美は「もう絶対、オバケ屋敷なんか入らないからっ！」

と、しばらく膨れっ面で言っていた。

そんなにイヤだったのか。

でも、俺は「はいはい。」と返事をしつつ、

絶対またいつか琴美とオバケ屋敷に入ろうと思っていた。

膨れっ面の琴美をようやく宥めつかせて、

一緒に露店を回っていると、前方から高杉と武田が近づいてきた。

む・・・邪魔者現る？

「お、二ノ宮と平野さんだ。」

なるべく気付かれないようにそーっと方向転換しようとしていると
運悪く高杉に見つかってしまった。

あちゃー！。

「お、高杉と武田が一緒なんて珍しいな。」

それでも、あからさまに嫌そうな顔をするのもなんだし・・・

そう思って、とりあえず平静を装って二人に近づいた。

「平野さん誘おうと思ったたらおまえと一緒に出かけたって言うてたから、

武田もあぶれたって言うてたし。」

「俺も琴美ちゃんと一緒に行きたかったのになー。」

そう言つて高杉と武田は恨めしそうな顔で俺を見た。

「早い者勝ち。」

俺が二人に向かって言い放つと、

「一緒に店回ろうぜ。」

高杉の口からそんな言葉が出た。

「あ、それいい！二ノ宮はもう琴美ちゃんを充分独り占めしただろ？」

武田も高杉の提案に便乗しやがった。

「えー、やだ。」

そんなの絶対嫌に決まってるだろう！

「嫌ならおまえは先に帰れよ。俺らは平野さんと一緒に回るから。」

俺が嫌だとハッキリ言つと、高杉もキツパリ言い放つた。

む．．．。

「琴美はどうしたいんだ？」

高杉の言葉にかなーリムツと来たけど、

ここは琴美にまず聞いてみることにした。

だって、散々高杉と言い合つて勝つたとして．．．

「あたし、高杉くんと行きたいっ！」なーんで、

あっさり言われたりなんかしたら立ち直れないもんな・・・。

「・・・そろそろ・・・帰ろうかな・・・と。」

少しの間があつた後、琴美が小さな声で言つた。

・・・よかった・・・。

俺はすごくホツとした。

「「えー。」」

高杉と武田が不満そうな声を上げた。

「・・・んじゃ、そーゆーコトだから。」

俺は高杉と武田が食い下がって来ないうちに・・・

というより、琴美の気が変わらないうちに再び手を繋いで歩き始めた。

高杉達の姿が見えなくなった頃、琴美の顔をチラ見してみた。

「武田はともかく、高杉と一緒にいたかったんじゃないのか？」

「なんで？」

「さっき、高杉のコト搜してたみたいだし。」

「……。」

黙り込んだと言つ事は……凶星か？

「一緒にいたかったら最初から宗とじゃなくて高杉くんと来るし。」

「・・・それもそうか。」

そうだな・・・。

学校ならともかく、合宿先の地元のお祭りにはうるさい女子共なんていないんだし、

わざわざ琴美が遠慮して俺や高杉以外のヤツと行かなくてもいい。

まあ、俺が高杉より先に琴美を誘ったからというのもあるんだろうけど。

翌日。

雨の音で目が覚めた。

窓の外を見るとものすごい土砂降りだった。

そういえば・・・琴美と出会った時もこんな風に

激しい雨が降ってたっけ・・・。

突然、雨が降り始めて・・・

突然、雷が鳴って・・・

そして、琴美に出会った・・・。

「二ノ宮、もう起きたのか？」

琴美と出会った時の事を思い出していると

隣で寝ていた武田も目を覚まし、体を起こした。

「なんか・・・雨の音で目が覚めた。」

俺がそう言つと「はは、俺も。」と武田は笑い、大きな欠伸をした。

そして、俺も釣られて欠伸をすると、

「あのさ・・・」と、武田は少し周りを気にして

みんながまだ寝ているのを確認すると

「もしかして・・・琴美ちゃんと付き合ってたりする？」

と、俺に囁いた。

「は？」

「いや・・・昨日も二人でお祭り行っただし。」

高杉が一緒について言っても嫌がってたし。」

「・・・。」

「で？で？付き合ってたの？」

俺が黙ったまましていると武田は顔を覗き込みながら聞いてきた。

「・・・別に付き合っではないけど。」

「ふーん。」

なんだよ、その顔は。

「・・・でも、好きなんだろ？琴美ちゃんの事。」

「・・・。」

「俺は・・・好きだ。」

「え・・・？」

俺はその言葉に驚き、思わず武田の顔をじっと見つめた。

「俺は琴美ちゃんの事、好きだよ。」

武田は俺から目を逸らす事無く言い切った。

俺だって・・・好きだ・・・。

「てか、高杉も琴美ちゃんの事、狙ってるっぽいけど。」

「高杉も?。」

「うん、絶対“落とす”って言うてた。」

「・・・。」

なんだよ・・・それ。

昼休憩。

昼食を食べた後、ちよつとだけ昼寝をして

朝と同じ様に雨の音に起こされた。

そして、食堂に行くと琴美がいた。

「何物思いにふけてんの？」

頬杖をついて窓の外を見つめている琴美に声を掛けた。

すると、琴美はハツとしたように振り返った。

もしかして、また高杉の事でも考えてたのかな？

「見てもいい？」

琴美の目の前に座り、置いてあったスケッチブックに手を伸ばした。

「うん。」

「琴美ってさー、よく物思いにふけるといつか、考え事してるよね。」

「そお？」

「うん。」

ゆっくりページを捲っていくとスケッチブックの中には
いろんな絵が描かれていた。

風景、花、魚、動物・・・そして、人物。

「風景ばかりじゃないんだな。」

「うん、その時“描きたい”って思ったモノを描いてるから。」

そして、琴美のその言葉と同時に“とある絵”が俺の目に留まった。

「じゃ、これも？」

俺はその絵を琴美の方に向けて見せた。

その瞬間、琴美は声も出さずに「あ……。」と言った。

「これ……高杉？」

琴美は絵が上手いからホントは聞かなくてもわかるけど……。

「……。」

「……。」

俺は黙って琴美の反応を待った。

だけど琴美はなかなか「うん。」とは言わない。

でも、この絵はどう見たって高杉だ。

だから「違う。」とも言わない。

「おい、二ノ宮。そろそろ練習行くぞー！」

そうして、俺と琴美の間にビミョーな空気が流れ、

お互い黙ったまましていると武田の声がした。

「おう！」

俺は武田に視線を向け、スケッチブックを閉じた。

・・・琴美・・・やっぱり・・・

「あゝあ．．．雨の所為でなーんか気まで滅入るよなあ！」

武田と一緒に体育館に向かっていると

ダルそうに言いながら武田は俺の顔をちらりと横目で見た。

俺の気が滅入ってんのは雨の所為じゃないけど．．．。

「そーだな．．．。」

とりあえずそう返した。

午後の練習は軽いストレッチの後、パス回しの練習と

ドリブルからのシュート練習とか．．．その他いろいろ。

だけど、どうにも雑念が入ってる所為か集中できないでいた。

「なんか、調子悪そうじゃん？」

練習が始まって2時間が過ぎた頃、休憩に入ったところで

武田が話しかけてきた。

調子が悪いというか・・・琴美の事が気になってるだけなんだけどな。

「シュートだっていつも結構決めてんの、今日は全然だし。」

確かに武田の言うとおり、いつもはちゃんと決められるシュートも

まったく決められないでいた。

それでさっき岡嶋先生にも怒鳴られた。

「なんか“心ここにあらず”って感じだけど。」

つーか、武田から見てもそんな風に見えるのか・・・。

その夜　　。

風呂から上がって部屋に戻る途中、目の前を琴美が歩いていた。

琴美もだいたいいつも俺と同じくらいの時間に風呂に入るからか、

風呂上りによく一緒になる。

今日もまだ濡れたままの髪で団扇を片手に外に向かっていた。

多分、また海を見に行くんだろう。

「平野さん。」

不意に聞こえた声に振り向くと

俺の後ろから高杉が歩いてきていた。

「海、見に行くの？」

振り向いて足を止めた琴美に高杉がそう言いながら近づくと

琴美は俺に気付いたのか一瞬だけ視線を俺に移した。

「あ、ううん・・・。」

琴美は小さく首を横に振ると「おやすみっ。」と言って、

慌てて部屋に戻って行った。

・・・？

俺はてっきり、高杉とまた海を見に行くんだと思っていた。

だけど、琴美は逃げるように去って行った。

高杉もなんだか不思議そうな顔をしている。

俺が居たから・・・？

いや、だけど・・・

あー、もう、わかんねえっ！

俺はそのまま外に出た。

そして、琴美がいつも座って海を眺めている場所に座った。

月明かりだけが照らしている海からは波の音しか聞こえない。

雨はすっかりあがって雲もほとんどなくなっていた。

見上げた空には無数の星・・・。

すげー、星空・・・。

琴美はいつもこれを見ていたのか・・・。

毎日見たくなる訳だ。

琴美と二人で見たかったな・・・。

なんて事を思っていると、きらりと一瞬何かが光った。

あ・・・流れ星・・・。

琴美と・・・で、あら？

俺が心の中で願い事を言っている途中で流れ星は消えた。

「・・・。」

願い事・・・最後まで言えなかった・・・。

「二ノ宮、こんな所で何してんだ？」

星空を見上げたまま動かないでいると後ろから

武田の声が聞こえた。

「流れ星って・・・消えるの早いな・・・。」

「はあ？」

振り向くこともせず、そう言った俺の隣に並びながら

武田は気の抜けた声で言った。

「願い事・・・最後まで言えなかった。」

あんなんじゃない、三回も繰り返して言うのなんてムリ。」

俺がそう言つと武田はプツと吹き出した。

「そんなの、当たり前だろ？」

簡単に言えてたら、流れ星の有り難味がないじゃんか。」

「まあ・・・それもそうだな。」

確かにその通りだ。

「つーか・・・なんでお前が隣なんだろうな？」

どーせなら、琴美ちゃんの隣でこの星空を見たかったな・・・。」

武田はがっかりした様子で言うと不服そうな顔をした。

それは、こっちの台詞だつっのっ！

9月に入って新学期、始業式の翌日。

5時限目の体育の時間。

俺達のクラスvs隣の1年2組で男子と女子に別れて

それぞれソフトボールの試合をやっていた。

俺は試合の最中もチラチラと琴美の方を見ていた。

試合に出たくないのかずっと座ったままだ。

そして、女子共が男子の試合ばかりに気を取られている中、

琴美はずっと女子の試合だけを見ている。

・・・というより、ただ目に入っているだけ。

そんな感じだった。

だから、「琴美、あぶないっ!」と叫ぶように言った藤村さんの声にも

やや鈍い反応しかなかった。

ガコーン ツ!

隣のクラス・2組の山本が打った球が見事に琴美のおでこに直撃した。

「琴美っ!」

藤村さんが琴美に駆け寄り、俺もすぐに琴美に駆け寄った。

打球は額に当たっただけじゃなく、眼鏡にも当たっただけらしい。

レンズが割れて頬や目の下から少しだけだけど血が流れていた。

「琴美!・・・琴美っ!」

地面に崩れ落ちた琴美は何度呼んでもまったく反応しない。

「とりあえず、保健室連れて行く。」

何度も何度も藤村さんが名前を呼び続ける中、

俺は琴美を抱きかかえた。

琴美は俺の腕の中でぐったりしていた。

ぴくりとも動かない。

大丈夫かな？

「・・・脳震盪ね。じきに意識が戻ると思うわ。」

幸い眼鏡のレンズも目の中にも入っていないし、

顔の傷も掠り傷程度だから、大丈夫よ。」

琴美を保健室に連れて行き、先生に診てもらおうと

たいした事じゃなかったのか落ち着いた様子で

俺と藤村さんに安心するように言った。

・・・よかった・・・。

5時限目が終わり、とりあえず俺は体操服から制服に着替えるために

男子更衣室へ向かった。

着替え終わった後、琴美の様子を見に行こうと保健室に向かってい
ると

男子バスケット部の顧問・岡嶋先生に捕まった。

「おうっ、二ノ宮ちようどいいところで会った。」

げー、俺は全然ちようどよくねえけど？

それでも、一応無視するワケにもいかず、

とりあえず適当に相槌を打ちながら話を聞いた。

そのおかげですっかり保健室へ行くタイミングを外し、

6時限目が始まる予鈴が鳴ってようやく解放され、

俺は仕方なく教室へ戻った。

すると、琴美はすでに教室に戻ってきていた。

でも、眼鏡はしていない。

割れちゃったんだから当たり前だけど。

「なあ、平野さんて眼鏡外すと可愛くねえ？」

「うんうん。今まで全然気がつかなかったけど、

実は可愛かったんだなー。」

「正直、その辺の女子よりイケるかも。」

「だなー。」

そんな声がどこからともなく聞こえてきた。

つか、おまえら今頃気がついたのかよー。

放課後。

H R が終わった後、琴美の姿を目で追いながら

大丈夫かな？・・・と、心配していると、

またしても邪魔が入った。

今度はクラスの女子共。

俺が琴美を保健室に連れて行った事で

なんだかんだと聞いてきた。

まったく、一々うるさいな！。

そう思いながら再び琴美の席に視線をやると

すでに琴美の姿はなく、藤村さんも武田の姿もなかった。

「ごめんっ、そろそろ部活行かねえと。」

俺は急いで帰り支度を済ませて教室を出た。

琴美、もう帰ったのかな？

さすがに今日は部活も休むだろうと思っ、

昇降口に向かっていると、2階の踊り場で琴美を発見した。

いた・・・っ。

琴美は階段の手摺に捕まりながらゆっくりと歩いていた。

・・・？

なんでこんなにゆっくり歩いてんだ？

不思議に思いながら近づいていくと、1階に下りようとして

足を前に出した琴美が階段を踏み外した。

危ない・・・っ！

俺は咄嗟に後ろから琴美の体を支えた。

琴美はギュッと目を瞑った後、

ゆっくりと目を開けて俺の方に振り返った。

「大丈夫か？」

琴美の顔を覗き込むと驚いた顔で俺を見上げた。

「琴美？」

俺が名前を呼ぶと、琴美はさらに驚いた顔で

じっと俺の顔を見つめ返したかと思うとそのまましばらくじっとしていた。

・・・？

この状況は・・・

見惚れてるとかそういうんじゃない・・・よなあ？

「琴美？」

「どうして・・・あたしの名前を知っているの？」

俺がもう一度琴美の名前を呼ぶと、琴美は不思議そうな顔で言った。

「え．．．？琴美．．．俺がわからないのか．．．？」

まさか．．．あの打球が当たった所為で．．．。

「琴美・・・？俺だよ。」

ホントに俺がわからないのか・・・？

俺が少しだけ顔を近づけると

「シュ・・・ウ・・・？」と、不安そうな声で琴美が言った。

「うん・・・俺だよ。」

よかった・・・とりあえず、俺だとわかってくれた。

でも・・・

「琴美・・・もしかして・・・俺の顔、見えてない？」

「うん・・・。」

やっぱり・・・。

琴美は眼鏡がない所為か俺の顔が見えていないみたいだった。

「琴美、視力いくつ？」

「んと・・・右が0・05で左が0・06。」

「えっ！？そんなに悪いのか！？」

手を繋いで琴美を昇降口まで連れていった後、
どんだけ視力が悪いのかと思って聞いてみた。

すると、琴美の視力は俺の予想より遙に悪かった。

「じゃあ・・・あの雨の日の時も全然俺の顔見えてなかったんだ？」

あの時も琴美は眼鏡を外していた。

「憶えてない？3月14日。突然大雨が降り出してさ、
雑貨屋の前で雨宿りしてた時。」

「宗・・・憶えてたの・・・？」

琴美は意外そうに言った。

「うん。・・・これ・・・くれただろ？」

俺は携帯を出してあの恋愛成就のハートの鈴のストラップを見せた。

「・・・つけてたんだ？」

「うん。だってコレ恋愛成就のお守りだろ？」

「・・・だからつけてる。」

「宗はそんなのつけなくても成就するでしょ？」

琴美はクスツと笑った。

「そんな事ないよ？」

現に、俺の恋愛はまだ成就してないし・・・。

「あ、そういえば・・・あたしもつけてるんだよ。」

琴美はカバンの中をゴソゴソと手探りで携帯を探し出し、俺に見せた。

「ホントだ。」

あの時、俺が琴美にあげた翡翠のストラップがつけてある。

「てか、今さらだけど・・・あたしがもらってよかったの？」

「ははっ、ホントに今さらだなー。」

「宗のお気に入りだったんじゃないの？」

「確かに俺のお気に入りだったよ。」

「えー、じゃ、やっぱりあたしがもらっちゃマズかったんじゃないの？」

「違うよ。お気に入りだから琴美にあげたんだよ。」

また、きっと会える気がしていた。

また、会いたいって思った。

だから、琴美に持ってもらいたかった。

俺のお気に入りモノを琴美につけててもらいたかったんだ・・・。

「どーゆー意味？」

琴美は俺が言っただ言葉の意味がわからなかったらしい。

ちよつと間があつた後、不思議そうな顔をした。

「・・・俺の恋愛が成就したら教えてあげる。」

「うん、わかつた。」

琴美は俺の片想いの相手が自分だという事に

まったく気付いていないからか、コクコクと頷いた。

「あ、そだ・・・前から聞きたかつたんだけどさ・・・」
「ん？」

「携帯番号教えて？」

「・・・誰の？」

ぶはっ。

またボケた事言ってる。

「琴美のに決まってんじゃん。」

俺が笑いながら言つと「え・・・あ、うん。」と、

琴美はコクンと頷いた。

そして、琴美から番号を聞いた俺はそのままメモリー登録をして、
すぐに琴美の携帯にかけた。

てか、眼鏡がないからきつと帰ってからメモリー登録するんだろう
な。

あ、でも・・・待てよ。

俺がここでメモリー登録して、ついでに着メロ設定までやっちゃおう。

「ちょっと携帯貸して。」

琴美の手に俺の携帯を持たせ、琴美の携帯のメモリーに俺の携帯番号を登録した。

もちろん、俺からの着信の時だけ他とは別の着メロにした。

うひひ。

琴美びつくりするだろうなあー。

「へへーっ、琴美の番号げっ！」

俺は心の中でガッツポーズをした。

週末、金曜日。

明日はライバル校と練習試合がある。

もちろん、俺もレギュラーだから試合には出るワケだけど。

その事が決まっってからずっと琴美に応援に来て欲しくて

琴美の携帯番号がわかればなあ・・・て思って

話しかけるタイミングを狙っていた。

別にまた部活終わりに待ち伏せしてもよかったんだけど、

あんまり待ち伏せしてるとなんかストーカーみたいで

嫌がられるかな・・・?と思った。

だから数日前、琴美に携帯番号を教えてもらった時は

マジで嬉しかった。

休憩時間、いつものように女子共が俺の所に集まってきた。

うぜえー。

どーせなら、お前らみんな高杉のトコに行けよっ。

そんな事を思っていると、

「ねえ、ソウ君、明日練習試合でしょ？あたし応援に行くねー。」

「私も行くー。」

「あたしも行くもん。」

と、数人に言われた。

「え・・・なんで知ってたんだよ？」

琴美にしか応援に来て欲しくないから誰にも言っていないのに・・・。

「さっき武田くんが言ってたよ。」

武田のヤツ・・・余計な事をー。

「……………」

俺は無言で武田を睨みつけた。

すると、武田はにこにこしながら琴美と藤村さんと話していた。

また琴美と喋ってる…………。

てか、もしかして琴美はもう練習試合の事、

武田から聞いたかな？

トーゼン聞いてるだろうなあ…………。

…………て事は、武田がもう先に応援に来て欲しいって言ってるかも
な…………。

ちくしょー、俺から応援に来てって言いたかったのにー。

放課後。

部活が終わって部室で着替えている時、

「明日は二ノ宮目当てに女の子がわんさか来るだろうなー。」

と、武田がにやけた顔で言った。

「琴美ちゃんも来るのか？」

すると、俺のすぐ隣で着替えていた2年生の先輩が言った。

ちなみにこの先輩も琴美に気があるらしい。

といっても、琴美が夏の合宿で俺達バスケ部や高杉達サッカー部を

いろいろと助けてくれたからファンになったみたいだ。

だから合宿以来、バスケ部とサッカー部には

琴美の“ファン”でいっぱいになった。

「あー、どうっすかねー？」

武田は首を捻りながら言った。

「琴美に練習試合の事言っていないの？」

「練習試合があるとは言ったけど、応援に来てくれるとは

言ってなかったよ？」

なぬっ！？

マジかつ。

琴美、まだ部活やってるかな？

俺は急いで着替えを済ませ、部室を後にした。
。

だけど昇降口に行くと琴美の靴はもうなかった。

あー、遅かったか・・・。

まあ、でも携帯の番号もこの間聞いたしな。

帰ってから電話してみるか。

家に帰って、先に風呂に入った後、

さっそく琴美に電話しようと携帯を開いた。

琴美出るかな？

初めて好きな女の子にかける電話・・・心臓がバクバクしている。

メモリーから琴美の携帯番号を呼び出して表示させ、

後は通話ボタンを押すただけだけど・・・

緊張してなかなか押せない。

「頑張れっ、俺！」

一人でそんな事を言いながら、思い切って通話ボタンを押した。

・・・RRRRRRR、RRRRRRR・・・

琴美は数回コール音の後に「もしもし？」と、

少し小さな声で出た。

その声にドキリとしながらなるべく平静を装う為に深呼吸をした。

「もしもし、宗だけど。」

『あ・・・うん。』

返事はあったものの、しばしの沈黙……。

「あ……今、マズかった？」

もしかして、今忙しいのかな？

『あ、ううん。なんか聞いたことない着メロが鳴ったから、

こんなの設定した覚えがないけどなーって考えてたの。』

琴美は数日前に俺が勝手に仕込んだ着メロに驚いたみたいだった。

「びつくりした？……あ、ところでさ……琴美、明日は暇？」

もしかしたら、もう別の予定が入っているかなあ？

『明日？・・・うーん、特に何もないけど？』

すると、琴美からあっさり空いていると言われた。

お、やったっ！

「あのさ・・・明日、バスケ部の練習試合があるんだけど・・・
応援に来てくれないかなー？って・・・。」

『・・・応援ならいっぱい来るんじゃないの？』

う・・・冷たい・・・。

「俺、琴美に来て欲しいんだもん。」

他の女子共の応援なんか正直どうでもいい。

「・・・ダメ？」

やっぱり、高杉達サッカー部の練習試合ならともかく、

俺の方は応援来てくれないかなあ・・・？

諦め半分で聞くと『・・・うん、行く。』と、

意外にも琴美は来てくれると言った。

「ホント？」

『うん。』

よっしゃっ！

やったっ！！

『どっでやるのっ』

「3時からうちの学校の第一体育館。」

『うん、わかった。』

「俺はスタメンじゃないけど試合には出るから。」

『そっか、頑張ってね。』

「うん・・・それじゃ、明日。」

『うん・・・おやすみ。』

「おやすみ。」

用件だけで終わってしまったけれど、電話を切ってからもしばらく俺の心臓はバクバクいていた。

翌日。

午後1時半に学校に着いて一時間程度軽く練習をした。

今日はなかなか調子がいい。

別に琴美の前で良い格好をしたいとかそういうのはないけれど、
せっかく応援に来てくれるんだから出来れば格好悪いところは
見せたくはない。

午後2時半過ぎ。

そろそろ琴美来てるかな？と思ってストレッチをしながら

周りを見回すと、2階の観客席の少し後ろの方に琴美と誠の姿があった。

誠も一緒に来てくれたんだ。

俺が琴美と誠に手を振ると、琴美の前にいた女子共が

キヤーキヤー言いながら俺に手を振り返し、

そして、俺の視線が自分達より後ろにあると気付いた瞬間、

一斉に琴美の方を振り返った。

すると琴美と誠は顔を引き攣らせ、たじろいでいた。

「先生、コレ平野さんが皆でどうぞって持って来てくれました。」

後ろの方で武田の声がして振り向くと、顧問の岡嶋先生に

紙袋を渡していた。

平野さんて・・・琴美からの差し入れっ！？

「お、レモンの蜂蜜漬けだ。」

紙袋から出てきたのはタッパに入ったレモンの蜂蜜漬けだった。

そして岡嶋先生はさっそく摘み食いをした。

「うまいっ。」

「あ、先生ずるいですよっ。」

「先生は試合に出ないから食べなくてもいいでしょう。」

「ちょうどタッパ三つあるし、一年生と二年生と三年生で一個ずつですよ。」

部員からささず突っ込まれた岡嶋先生は

「ちょっと顧問の特権使っただけなのに。」

と肩を竦め、ペロリと舌を出した。

40オーバーのおっさんがそんな顔しても

ちっとも可愛くないけどなっ。」

試合開始直前。

部員全員で円陣を組み、

「おっしっ！んじゃ、差し入れのお礼に今日は琴美ちゃんに勝利を捧げようぜ！」

と部長が言っていると俺達も「おーっ！」と気合を入れた。

そして、スタメンの部員がコートに散って行った。

第1クォーター、琴美の差し入れのおかげですっかり気合入りまくりの

メンバー達は最初から飛ばしていった。

「いつもこれくらい動けば楽勝なのになぁー。」

岡嶋先生は苦笑いしながら試合を見ていた。

・・・確かに。

うちの学校は全国でもそれなりに成績を残してはいるものの、

スバ抜けて強い訳でもなかった。

それでも都内の高校の中では上位だけど、

今日の試合相手のM高とはほぼ互角でここ最近はずちの学校が負け越していた。

それだけに部員全員、M高に苦手意識があつて、この練習試合もいまいち

乗り気じゃなかったというか・・・やる気がなかったというか・・・。

だから正直、第1クォーターからこんな風に動いていけるのは

“俺達のアイドル”琴美が差し入れを持って応援に来てくれたからだろう。

第1クォーターが終わり、岡嶋先生から

「二ノ宮、第2クォーターから入ってくれ。」と言われた。

「はい。」

いよいよ俺の出番。

俺の他にもう一人、メンバーが入れ替わり、

第2クォーターが始まった。

相手チームの奴らはこのメンバーの中で唯一、

一年生の俺にはまだノーマークだ。

マークされる前になるべくシュートを決めておきたい。

パワーフォワードに入った俺にノーマークというのは、
いまいち腑に落ちないけれど、先輩から回されたパスを、
俺は確実にシュートを決める事に専念した。

そして、ハーフタイム　。

「二ノ宮、今日なんか調子いいな。このままラストまでいっとくか？」

「へっ!？」

岡嶋先生がしれっとした顔で言った言葉に俺は驚いた。

俺はレギュラーだけど今まではだいたい第2と第3クォーターだけ。
ラストは先輩達が出ていた。

「今日は琴美ちゃんからの差し入れもあるし、

コレ食って体力回復させてラストまでやってみろ。」

スタメンからずっと出ている部長はそう言つと、

俺の口にレモンの蜂蜜漬けを突っ込んだ。

酸っぱい・・・でも、おいしい。

ドラクエで言うならばHPとMP回復。

「頑張りまっす。」

HPはさすがに全快とまではいかないけれど、

MP全快の俺は引き続きラストまで出る事になった。

第3クォーター。

遂に俺にもぴつたりとマークが付き始めた。

しかも二人って・・・。

けど、まあ俺に張り付いている分、

先輩達がシュートを決めていく訳だけど。

だから、俺は思いっきり引っ掻き回してやろうと

“コバンザメ”二匹を連れて動き回った。

しかし、それにしてもウザい・・・。

つか、動き回ってるおかげでせっかく回復してた体力を消耗した。

失敗・・・。

試合は・・・40対50か。

まだうちが勝ってるな。

けど、先輩達も疲れてきてるし、ちょっとやばいかも。

第3クォーターが終わってインターバル。

またまた琴美の差し入れてHPとMP回復。

第4クォーター。

数人のメンバーが入れ替わった。

そして、俺へのマークも一人になった。

けど、さっきまで試合に出ていたヤツじゃない。

第4クォーターから入れ替わったHPもMPも満タン状態のヤツだ。

だからHPが60%の俺からすると動きも素早い。

パスもカットされるし、シュートも決めさせてくれない。

くっそー。

そしてそれは先輩達も一緒だった。

そのおかげで52対50と、逆転されてしまった。

マズい・・・。

琴美に勝利のプレゼントが出来なくなる。

そう思った俺はパスを受け取った後、ちょっと強引だけど

フェイクをかましてシュートを打った。

けど、その瞬間、俺のマークに張り付いていたヤツが

俺の背中を押した。

あ．．．っ！？

シュート失敗．．．？

俺の手から放たれたボールはバスケットのリングの中を
ストンと通り抜けた。

決まった．．．っ！

湧き上がる声援の中、審判のホイッスルが鳴った。

俺がシュートを打った時に思いっきり背中を押したことに對する
パーソナル・ファウルだ。

て、ことは．．．1本のフリースロー。

試合は残り30秒・・・52対52か・・・。

ここでフリースローを決めれば逆転。

決められなければ延長戦だけど、ここは決めとかないとっ！

俺は軽くドリブルをしながらフリースローラインに立った。

・・・絶対、決めてやる・・・っ！

大きく息を吸い込み、ボールに神経を集中させた。

俺の手を離れたボールはリングの縁をなぞり、

バスケットの中を潜り抜けてバウンドした。

そして、

・・・ピピーーーーッ!!!!

試合終了のホイッスルが鳴り響いた。

・・・やった!

決まった・・・!

チームメンバーとハイタッチをして琴美の方に視線を向けると目が合った。

俺は琴美と誠に手を振った。

すると、誠はブンブンと手を振って笑顔を返してくれたけど

琴美は前列にいる女子共の視線を気にしてか、

小さく手を振るだけだった。

両チームの選手がコート中央に集まり、

握手を交わして練習試合は無事終了。

なんとか、琴美に勝利をプレゼントする事ができた。

「あれ？琴美ちゃんは？」

俺の隣でキョロキョロと周りを見回していた武田が眉間に皺を寄せながら言った。

「ん？琴美なら誠と一緒にあそこに・・・」

俺は琴美と誠がいる二階の観客席に目を向けた。

だけど・・・そこにはすでもう琴美と誠の姿はなかった。

「あれ？いない・・・。」

俺は体育館の入口に走って行き、周りを見回した。

キヤーキヤー言ってる女子共の中に琴美と誠の姿はない。

いない・・・。

正門の方まで行ってみたけれどやっぱりいなかった。

まさか、もう帰った・・・？

俺は急いで琴美の携帯を鳴らした。

『もしもし。』

琴美はすぐに電話に出た。

「もしもし、宗だけど・・・今どこ？」

『あー、えーと・・・もうすぐ駅・・・かな。』

「えーっ！もう、帰ってんの？」

『あ・・・うん。』

な、なにーっ!?

「琴美の事探してたのにー。」

『え・・・いや、だって・・・女の子達いっぱいだから、

きつとそっちに行くと思って。』

行くワケねーじゃんっ!

「琴美と話したかったのにー。」

ちゃんと会ってお礼も言いたかったのにな。」

『あはは、いいよ・・・そんなの。』

「だって、わざわざ差し入れまで持って来てくれたのに。」

後、誠も一緒に応援に来てくれてただろ？」

『あ、うん。』

「ありがとな。」

『ううん。』

「・・・じゃあ、誠にもよろしく言うておいて。」

『うん、わかった。お疲れ様・・・じゃあね。』

本当はもっといっぱい話したかった。

けど、何にも言わずに体育館を出てきてしまったから
すぐに戻らないといけなかった。

「あれえー？琴美ちゃん・・・どこにいるのかな？」

俺が部員みんなの所にもどると武田はまだ琴美を捜していた。

パーカ・・・。

琴美はもうとっくに帰ったよ・・・。

週明け、月曜日。

放課後、部活が終わった後、いつものように琴美を待ち伏せしようと
正門で待っていると「よう、何やってんだ？」と、高杉が話しかけ
てきた。

「あー、えーと・・・琴美を待ってるんだ。」

後からよくよく考えればバカ正直に答えずに
適当な事を言えばよかったと思った。

「平野さん？一緒に帰ってんの？」

「ん、まあ・・・いつもってワケじゃないけど、
ちょっと返したいものがあるから。」

「ふーん、何？」

「たいしたモンじゃないんだけど、土曜日にバスケット部の練習試合に
差し入れ持って応援に来てくれたから、そのお礼と
差し入れが入ってたタッパを返そうと思って。」

「へー、平野さんバスケット部の練習試合見に行ったんだ？」

「うん。」

「・・・俺も一緒に帰ろうかな。」

高杉はそう言つと、俺と同じ様に門柱に寄りかかった。

「・・・。」

思わぬ邪魔が入ってしまった・・・。

それからしばらくして琴美が正門に向かってくるのが見えた。

「琴美を待つてたんだよ。」

俺は琴美がまたキョロキョロし始める前に言った。

すると、案の定琴美はキョトンとした顔で俺を見上げた。
そして、すぐに俺のすぐ後ろにいる高杉に視線を移した。

「コレ、ありがとう。」

俺は琴美にタッパーを返した。

「すごく助かったよ、ありがとう。」

琴美のおかげで試合に勝てた。

琴美の差し入れがなかったら俺、頑張れなかったし。」

俺がそう言つと

「そ、そんなコトないでしょ。」

と、琴美は顔を赤くした。

「先輩達もすっごく喜んでたよ。」

「・・・んじゃ、言いたい事はそれだから俺は先に帰るよ。」

琴美は高杉の事が好きだ。

その高杉が目の前にいたら二人きりになりたいって思うのは当然だろう。

それに・・・

琴美と高杉が仲良く話してるところを見なくなかった。

なるべく早く二人から離れたかった。

だから、いつもは琴美に合わせていた歩幅も速度も

今は全部無視して自分の速度で歩いて一人で駅に向かった。

琴美と高杉を二人きりにして帰った俺はすごく後悔した。

あの後、二人で何を話したのかな？とか、

もしかして、高杉のヤツともう付き合う事になってたりしないよな？とか、

そんな事ばかりが気になった。

そんなに気になるんなら初めから二人を置いて帰らなきゃいいじゃないか。

ごもつとも。

別に誰に突っ込まれたワケじゃないけど、

自分自身に突っ込んで、そして落ち込んだ。

あの時は高杉と楽しそうに話す琴美の顔を見たくなくて

さっさと帰ってしまった。

けど、それが返って後悔を生んだ。

俺って・・・バカ・・・。

そうして一週間が過ぎた月曜日　　。

放課後、俺が部活に行こうと席を立つと

「平野さん、先輩来てるよー。」

と言う声が聞こえた。

教室の入口を見ると、美術部の部長・姉川俊介先輩が

腕組みをして立っていた。

ちなみにこの先輩は校内でも有名人だ。

と言うのも、ただイケメンってだけじゃなく、

めっちゃめっちゃ美人の美術部の副部長・水本千里先輩と

付き合っているから。

誰もが認める美男美女のカップルってやつだ。

クラスの女子共はキャーキャー言いながら姉川先輩を見つめている。

このミスター共がつ！

「迎えに来た。」

と、言つて琴美の手首を掴み、教室を出て行つた。

・・・？

なんだ？今の？

琴美が姉川先輩に引き摺られて行ってから、

俺は部活に行く前、なんとなく気になって琴美の下駄箱を覗いてみた。

琴美はここ一週間部活にちゃんと出ていなかったのか、

すでに通学用の靴がない事がほとんどだった。

だけど、今日はまだ靴がある。

という事は、さっき姉川先輩が“迎えに来た。”と言って

琴美を引き摺って行ったのはきっと部活をサボらないように連れて行っただろう。

・・・て、ゆーか、なんでもそも琴美は部活をサボってたんだ？
あれだけ絵を描くのが好きなヤツなのに。

それに先週末の選択授業の時も、なんだかボーンとしてて、
何もしていなかったし。

いつもは楽しそうにニコニコしながら鉛筆を走らせている琴美が
何も描かずに“心ここにあらず”と言った感じで

溜め息ばかりついていた事がすごく気になっていた。

翌日。

朝、琴美の様子が気になって視線を向けると

いつものように笑いながら藤村さんや、武田と話していた。

一体、なんだったんだろう・・・？

まあ、琴美が元に戻ったからいいけど。

・・・てか、相変わらず可愛いなあー。

ちよつとだけ口元に手を当てて笑う仕草とか、
顔をクシャクシャにして、おなかを抱えて

爆笑しているトコとか・・・全部・・・全部。

やっぱり・・・俺、琴美の事が好きだ。

その日の放課後　　。

部活が終わって部室棟に向かっていると、

少し離れた校舎の影に人影があるのが見えた。

こんな時間にあんなトコで何してんだろ？

なんとなく気になってじっと見ていると

その人物は俺がよく知る人物だった。

高杉・・・？

そしてもう一人・・・高杉より背が低くて髪が長い

女子生徒だという事だけはわかった。

顔はなんとなく薄っすらと灯りに照らされて

見えていたけど俺の知らない子だった。

高杉が校舎の壁に手を突いて

その子の肩を押し付けて立っている。

こりゃまたなんとなく見ちゃいけない感じの場面？

なんてコトを思っていると、高杉はその女の子を

壁に押し付けたままキスをした。

げげっ！？

あいつ・・・確か彼女いたよな？

ある意味高杉も有名人だから、アイツが現在付き合っている

“彼女情報”は何もしなくても耳に入る。

そして、今アイツと付き合っている子はキスをしていた子とは別の子だ。

「・・・。」

俺は次の瞬間、あんなヤツに琴美を取られたくないと思った。

琴美と高杉を二人きりにして帰った時、

正直、琴美の事諦めようかな・・・なんて思っていた。

琴美も高杉もお互い好きみたいだし、

それなら俺が邪魔しないほうがいいと思った。

けれど・・・今、アイツが“彼女”以外の女の子と

キスしてるトコを見て、琴美を取られたくないって思った。

あんなヤツに取られるくらいなら・・・。

それなら、絶対琴美を俺の方に振り向かせてやるっ！

10月に入って、学園祭の準備を始める事になった。

俺達のクラスは駄菓子屋の模擬店で決定。

まあ、その結論に至るまで、

いろいろとごちゃごちゃとあったワケだけど・・・。

まずはさっそくグループ分け。

買出し部隊、経理部隊、店番部隊、装飾部隊など・・・

琴美はもちろん装飾部隊に行くんだろうな。

俺も装飾を希望しよう。

学園祭実行委員の鈴木は黒板に役割分担と

だいたいの必要人数、みんなの希望をそれぞれ書いて行った。

琴美は思ったとおり、藤村さんと装飾を希望した。

装飾の定員数は15人。

今、希望が出ているのは13人・・・後、2人か・・・。
そろそろ、俺もいつとくか。

「俺、装飾がいい。」

え・・・？

俺は同時に聞こえた声の主に視線をやった。

げー、高杉っ！？

こいつもかよー。

絶対、琴美と一緒にがいいからだ。

そして、俺と高杉が装飾を希望した直後、

「あたしも！」

と言う声とともにクラス中の女子が挙手し、

装飾希望者が殺到した。

マジかよー。

・・・が、しかし、鈴木は今までの傾向を把握して

こうなる事を予測していたらしく、

「装飾のほうは高杉と二ノ宮が入ってもう定員数揃ったからダメ。」

と、キッパリ言った。

そして、女子共からの怒涛のブーイングにも

「文句言うなら最初から装飾希望すればいいじゃん。」

と言って、装飾部隊に決まった人に向け、

「じゃ、装飾部隊は今から何がいるとか

教室の中をどんな風に使うか話し合つてで。」

とすでに話を進めていた。

ぐっじょぶ！

装飾部隊に決まった俺達は教室の後ろの方に集まり、

まずは教室の中をどんな風にレイアウトするかを決め、

その後に、だいたい何がどれくらい必要かをリストアップした。

翌日。

放課後、さっそく装飾品の制作に取り掛かった。

今日はポスター作り。

校内に貼る宣伝用だから、一人一枚描いたとしても15枚。

一応、これで足りる予定。

琴美はさすが美術部というか、他の奴らが描いているポスターとは全然違っていた。

何がどう違うって、まず全体のバランス。

目立たせたい箇所とそうでない箇所がハッキリしているし、

バックの絵との文字のバランスにしても俺達“素人”とは違う。

そして、なにより色使い。

派手でもなく、地味でもなく、いかにも『昔の駄菓子屋さん』だ。

色の塗り方一つ取っても綺麗だ。

つか、俺達があーでもない、こーでもないと言っている間にすでにほぼ完成に近い状態になっていた。

それに比べて・・・

俺の隣でポスターを描いているコイツ・・・

高杉、絵ヘタだなーっ!?

まあ、俺も絵は上手いほうじゃないけど、

コレは酷い・・・。

すると、その酷い絵を見た武田が眉間に皺を寄せながら言った。

「高杉、おまえそれ何描いてんの?」

ちなみにコイツも俺と高杉同様、琴美を追いかけて

装飾部隊に入っただと思われる。

「何って・・・見りゃわかるだろ?ビックリマンチョコ。」

は・・・？

コレのどこが“ビックリマンチョコ”なんだよっ！

どこからどう見ても“ただの四角い何か”だろう。

それを聞いた武田は「これがあゝっ？」とゲラゲラと腹を抱えながら笑い始めた。

「そんなに笑う事ないだらー？」

「いや、だって・・・っ、コレは・・・」

「そっいうお前は何描いたんだよ？」

「俺はうまい棒。」

そう言って、ニカッと笑って武田が見せたポスターは・・・

コレもまたどこからどう見ても“ただの棒”だ。

「お前も人の事、言えねーじゃん。」

「そうかあ？」

高杉に突っ込まれ、武田は自分のポスターと高杉のポスターを交互に見た。

どっちもどっち・・・目クソと鼻クソだな。

結局、高杉と武田のポスターの下書きは琴美が手伝う事になった。

「琴美ちゃん、ごめんね。美術部の方も準備あるのに。」

琴美がポスターの下書きをしている横で武田が申し訳なさそうに言った。

美術部の準備って・・・何かあるのかな？

「うっん、大丈夫。展示物はもう完成してるし、

本格的な準備は前日だから。」

琴美はにっこり笑ってそう言った。

「美術部って何やるの？」

「展示会。」

少しだけ琴美の方に視線を向けて言った俺に
下書きの鉛筆を走らせながら琴美が答えた。

「琴美は何を出品すんの？」

「んとな、油絵1点と水彩画1点。」

「へえー、どんな絵？」

「ふふっ、内緒。」

琴美は少し照れたように笑いながら言った。

「？」

俺はどうして琴美がそんな顔で言ったのか、

その時はよくわからなかった。

学園祭当日　　。

朝、クラス全員で店内に商品の陳列をした。

装飾の方はすでに昨日の放課後に済んでいる。

黒板にも琴美が中心になってメインの看板を描いた。

ちなみに店内の装飾も1/3くらい琴美が作ったものだ。

そして、一通り準備が終わって後は開店するだけという時、

いつの間にか琴美の姿が教室から消えていた。

「あれ？琴美は？」

いつも一緒にいる藤村さんに聞くと「美術部の部室に行ったよ。」

という答えが返って来た。

なんだ・・・もう美術部の方に行っちゃったんだ。

がっかり……。

しかし、俺が肩を落としていると教室に琴美が戻ってきた。
しかも、手には何かを持っている。

……？

「琴美、何それ？」

藤村さんは琴美の右手を指差した。

「んとね、昨日中途半端に余った画用紙があつたでしょ？」

捨てるの勿体無かったから、それでこんなの作ってみた。」

そう言うと琴美は小さな飛行機を掌に乗せた。

それはちょうど駄菓子屋に置いてあるようなゼロ戦だった。

きれいにちゃんと色まで塗ってある。

「うわぁっ！すごい！」

藤村さんは琴美の掌に乗っているゼロ戦を見ると感嘆の声をあげた。

余った画用紙で作っただけあって、大きさは掌サイズだけど

精巧な造りだし、色も本物みたいだ。

「えへへー。」

琴美は照れたように笑うと、「どこに置こうかなー？」

と、さっそくどこに置くか考え始めた。

「せっかくだから、みんなの目に付く場所にすれば？」

レジのトコとかは？あそこなら絶対みんな見るし。

その大きさなら邪魔にならないだろ？」

俺がそう言つと「あ、それがいいかも！」と琴美はにっこり笑つた。そして、レジの横のスペースにちょこんと置いた。

開店時間になり、段々模擬店の中は賑やかになってきた。

レジの横に飾られたゼロ戦は誰かの目に留まる度、

女子からは「小っちゃくてかわいい。」とか「きれい。」とか、

男子からは「かっこいい。」とか「すげえ！。」と言つ声が届いてた。

午後12時。

俺達、装飾部隊は店番部隊の休憩の間、

店番をする事になっていた。

俺はちょっと早めに先に昼飯を済ませ、

模擬店に出た。

すると、あのゼロ戦がレジの横からなくなっていた。

「ゼロ戦は？」

「あー、あれならさっき来た小さい男の子にあげたよ。」

そう答えたのは藤村さんだった。

「さっきね、お母さんと一緒に来た５歳くらいの男の子が

ゼロ戦を気に入ったらしくて・・・で、琴美に聞いたなら

『あげてもいいよ。』って言ったからあげちゃった。」

「そーなんだ？」

なーんだ、残念・・・。

俺が貰いたかったんだけどな。

まあ、でも琴美のことだからきつと俺が貰うことになっててもその男の子にあげてたかもしれないしな。

店番の担当は琴美と藤村さんがレジ、俺と高杉は接客になった。後の奴らは駄菓子の補充なんかを手伝う事になった。

店番部隊と入れ替わりで模擬店に出ると店内は

俺と高杉の“ファン”がわらわらと集まってきた。

一体どこからこんなに集まってきたのか・・・。

時間が経つにつれ、人は増えていくのに減っていかない。

みんな俺と高杉の周りをうろつろしながら駄菓子を選んでいる。

ああ・・・うざい・・・。

早く1時にならねえかなー。

1時前　　。

徐々に人が減り始めた。

レジにいる琴美と藤村さんも忙しくなってきた。

そしてようやく1時になり、店番部隊が戻ってきた。

それと入れ替わりで俺と高杉も模擬店の裏側へ行った。

さて、琴美と模擬店巡りでもしようかなー。

どうせ、藤村さんはまた彼氏のトコに行くんだろっし。

そう思って裏で琴美を待っていると藤村さんだけが戻って来た。

「琴美は？」

「今、レジが込んでるから落ち着くまで手伝うって。」

「ふーん。」

じゃあ、まだしばらく戻って来れないか・・・。

ちらりと模擬店の中を覗くとレジ前にはずらりと行列が出来ていた。

これはマズい・・・。

早いトコ逃げとかないと出口を塞がれてしまう。

琴美とは後で合流するか。

とりあえず俺は教室を出て、すでに待ち伏せしていた女子共を振り切る為ダッシュで逃げた。

その甲斐あってなんとか逃げ切れた。

さて・・・どこで時間を潰そうか・・・

そう思っていると目の前から高杉が数人の女子共を引き連れてやって来た。

俺より一足早く教室を出たにも拘らず、いきなり捕まったらしい。

いや・・・違うな。

コイツの場合、捕まるのを承知で・・・というか好きで捕まってる

んだと思った。

だって、すげえにやけた顔してるし。

つか、コイツ彼女いるだろっ？

それに、この間キスしてた女子は？

まあ、俺が気にする事じゃないけど。

そして、高杉の心配なんかして油断して歩いていると

さっき俺を追いかけていた女子に見つかった。

「あっ！ソウ君発見！」

うへっ。

・
・
で、俺はまた逃げるハメになった。

“追っ手”から逃げる為に夢中で走っている

目の前に美術室があつた。

お・・・っ！

ここに逃げ込もう。

俺を追ひ回している女子共はきっとこんな所には来ない。

芸術に興味のない奴らばかりだからな。

美術室の中に入り、ドアを閉めて息を潜めていると

案の定、女子共は美術室の前をスルーして行つた。

まったく・・・冗談じゃねえ。

「はぁー……。」

軽く溜め息をついて落ち着いたところで美術室の中を見回すと、

油絵や水彩画、粘土細工や銀細工が展示してあった。

そっぴえば、美術部の展示会をやってるんだった。

琴美は油絵と水彩画を出展してるって言ってたな。

えーっと……“平野琴美”……“平野琴美”……

琴美の名前を探しながら作品の下に付いているネームプレートを見ていくと

少し奥のほうに二つの並んで展示してあった。

水彩画の方はペンギンの絵だった。

あの夏の合宿の時に描いたと思われる。

琴美の親戚がやっているという民宿の近くには水族館もあったから、多分、そのペンギンを描いたんだろう。

そして、もう一つ・・・

タイトルに『秘密の場所』と付けられた油絵を見て、俺は驚いた。

その油絵は・・・

校外学習で登山した時に琴美と二人きりで見たあの風景だった。

やわらかい風が俺と琴美を包んで、まるで時間が止まったみたい
に二人だけの世界のように感じたあの景色がそのまま描かれていた。

・・・すげえー。

琴美が“内緒”と言っていた意味がなんとなくわかった。

“すごい”という気持ちと“うれしい”という気持ちがあって、

『秘密の場所』というタイトルにも思わず笑みがこぼれた。

琴美も俺と同じ様にあの場所の事……。

そうして、しばらく琴美の絵を見た後、

美術室から出ていきなりまたしても俺を追い回している女子共に見つかった。

あー、もういい加減疲れた……。

数百メートル逃げたところで諦め、俺が走るのを止めて歩き始めると

あっという間に女子共に囲まれた。

そしてダラダラとそのまま歩いていると

高杉と“彼女”が前方から二人で歩いてきた。

お、取り巻きがなくなってる。

でも、彼女の方はちょっと不機嫌そうな顔をしていた。

どうやら一悶着ありそうだ。

・・・というか、すでにあつた後か？

だとしたら・・・高杉と彼女が今日もしくは明日別れる確率が高い。

なぜなら、高杉はちょっと喧嘩しただけで別れるとか

彼女が別れたいと言えはすぐに別れるような

“去る者追わず主義”の奴で有名だから。

そして面倒な事があるとこれまたすぐに別れを切り出し、

次に告つてきた女の子と付き合つらしい。

要するに“来る者拒まず主義”でもある。

しかし、それはあくまで高杉に気になる子がない場合だろう。

もし、今日明日で彼女と別れたとしたら高杉は間違いなく琴美に告る。

アイツの行動に要注意だな。

つーか、琴美は一体どこにいるんだろうか？

テキトーに女子共の話に相槌を打ち、琴美を捜しながら歩いていると目の前から藤村さんと男子生徒が歩いてくるのが見えた。

へえー、あれが藤村さんの彼氏か・・・

確か、バレー部のヤツだったような？

「藤村さん。」

せつかくのデート中、邪魔しちゃ悪いかと思ったけれど

琴美の事が気になっていた俺は藤村さんに声を掛けた。

「あ、二ノ宮くん、琴美ならさっきそこですれ違ったよ？」

「え？」

俺、まだなんも言ってねえのになんでわかったんだろ？

「まだその辺をぶらぶらしてると思っただけ。」

藤村さんはそう言うのにやっと笑った。

「あー、えーと・・・ありがとう。」

俺がそう言っていると藤村さんは手を振って彼氏と歩いて行った。

そして、少し歩いたところで藤村さんが言っていたとおり

琴美がぶらぶらしていた。

けど、一人じゃない。

隣には俺と同じ中学だった田中がいた。

なんでアイツと・・・？

・・・で、そういえば田中も美術部だっけ？

中学も美術部だったみたいだし。

えー。

もしかして、ライバルまた増えた？

っーか、琴美は自分が可愛いっという自覚が

まるでないから無防備過ぎるんだよなー。

俺にとってはそれがなによりやつかいだ。

ああー、もっっ！

琴美への道は険しいなあー・・・。

今日は学園祭2日目 。

午後2時から『校内コンテスト』がある。

10月の初めから20日間の投票期間の後、

途中結果が発表され、その上位12人の中に俺は選ばれた。

美男美女カップルで有名な姉川先輩と水本先輩も選ばれている。

ちなみに当然、高杉も琴美も選ばれたけど。

そして、その上位12人で学園祭の一週間前からまた

校内で投票があり、今日『校内コンテスト』の会場で

来場者の投票と合わせ、集計された最終結果が発表される。

俺は昼メシを食べた後、早々にコンテスト会場の多目的ホールに向かった。

どーせ、その辺をうろつろしてても女子共に捕まるだけだし、
それなら控室で寝ているほうがいい。

ガチャッ
。

誰もいないだろうと思ってノックもしないで
控室のドアを開けると、中には高杉がいた。

「あ．．．。」

「おう。」

まさか高杉がいるとは思っても見なかった。
時計を見てみるとまだ１２時半だ。

「早いな。」

俺がそう言つと高杉は「お前こそ。」と言つた。

「ん、まあ……つか、高杉、彼女放っておいていいのか？」
俺はちよつと探りを入れてみた。

「彼女？あー、昨日、別れた。」

「はあ？」

おいおい、ホントに別れたのかよ。

「なんかさー、昨日、店番した後女の子達に待ち伏せされてて仕方なく一緒に校内をうろついてたら彼女が怒っちゃってさー。」

そんなの当たり前だろっ。

「んで、とりあえず女の子達に離れてもらっただけど
機嫌が直なくてさー、もう面倒臭いから別れた。」

「・・・。」

マズいな・・・。

こりゃ、今日あたり琴美に告るゾ。

「まあ、俺はそろそろ別れたいと思ってたから
ちよつどよかったけどー。」

コイツ・・・最悪。

・・・つーか、オニ。

こんなヤツに琴美を取られたくない・・・絶対っ！

1時少し前。

控室の中に次々とコンテストの出場者が集まってきた。

鏡の前では女子共が陣取ってメイクをしている。

まあ、男子は特にメイクなんてしないし、

軽くワックスなんかで髪を立てたり、流したりする程度だから

トイレの鏡で全然間に合うけど。

「あら？琴美ちゃん、まだ来てないの？」

1時を10分程過ぎた頃、メイクを終えた水本先輩が
キョロキョロしながら琴美を捜していた。

そつえば、琴美がまだ来てないな・・・。

「まさか、ホントに逃げたか？」

姉川先輩が冗談っぽく笑いながら言った。

「そしたら“水着で校内一周”決定ですね。」

高杉はにやりとした。

学園祭の一週間前、コンテストを辞退したいと言った琴美に

美術部の部長で学園祭実行委員の委員長でもある姉川先輩が

“部長命令”を発令した。

“コンテスト出なかったら水着で校内一周”

俺は大歓迎だけど、他の男に琴美の水着姿を拝ませるのは

正直もったいない・・・。

「てか、もうお客さんも入り始めてるのに。」

高杉は控室から客席を覗いた。

確かに客席が随分騒がしくなってきた。

いい席を取るためにみんな早くから来ているんだろう。

俺もちらりと客席を覗いてみるとうちのクラスの榎本さんが

最前列にいた。

さすがは高杉の熱烈ファン。

1時15分。

琴美はまだ来ない。

姉川先輩は携帯を開いた。

「携帯にも出ない。」

でも、琴美の携帯に繋がらなかったらしく眉間に皺を寄せた。

「もしかしたら、模擬店手伝ってるかも。俺、呼んで来ます。」

琴美の事だから、カバンと一緒に携帯放置で手伝ってる事もあり得る。

「俺も行く。」

すると、高杉も一緒に行くと言い出した。

別にコイツも行く必要はないだろう・・・と思いながら、
模擬店に居なかった時その後捜しに行く事を考えて、
とりあえず一緒に行く事にした。

俺と高杉が模擬店に向かって走っていると、
同じクラスの安藤さんとすれ違った。

「あつ、ねえ、安藤さん、琴美見なかった？」
俺がそう聞くと「模擬店にいたよ。」と言った。

やっぱり・・・

「ありがとう。」

俺と高杉は安藤さんに軽く手を挙げて走り出した。

模擬店に行くと琴美は菊池と一緒にレジに入っていた。

「琴美、何やってんだよ!？」

「集合時間とつくに過ぎてるよ?。」

俺と高杉がそう言つと「・・・何って・・・店番。」と、

琴美は特に慌てる様子もなく言つた。

「なんで、そんなのやってんだよ?。」

「なんでって・・・榎本さんにお昼ごはん食べてくる間だけお願い
って頼まれたから。」

「はあ？榎本さんなら多目的ホールの最前列の席に陣取ってたぞ？」

高杉も半分呆れたように言った。

「あー、そーなんだ。」

「あー、そーなんだ。」・・・で、何暢気なコト言ってるんだよ。」

「そーだよ、急いで行かないとコンテスト間に合わないぞ？」

俺と高杉がそう言って急かしても琴美は動こうとしない。

コンテストすっぱかす気か？

あんまり出たくなさそうだったしなあ。

「“水着で校内一周”したい？」

すると、模擬店の入口から突然声がした。

「店番の時間は各自で調整しろって言ったよな？」

姉川先輩だ。

「で、でも・・・交代の人来ないみたいですし・・・。」

琴美は姉川先輩の姿が目に入ると、ようやく少し慌て始めた。

「じゃ、おまえの交代を捜せばいいだろ？」

「えー、みんなコンテスト見に行っていていませんよー？」

「じゃ、“水着で校内一周”決定。」

姉川先輩はしれっとした顔で言い放った。

「平野さん、店番なら大丈夫だよ？」

すると、今度は琴美の隣で話を聞いていた菊池が

困った様子の琴美に言った。

「元々、この時間帯はほとんどコンテストの方にお客が集中するだろうから、

一人くらい減らそうかって言ってたんだけど、一応念の為そのままの人数で

店番する事になってただけだから、平野さんが抜けても大丈夫だよ。」

「そ、そーなの？」

琴美はちよつと複雑な顔をした。

抜けてもいいと言われるとコンテストに出ないといけないからだろう。

「うん、それにそもそも任されてる店番を人に押し付けて

遊びに行く榎本さんが悪いんだから。」

「そそ、菊池の言う通り。」

俺と高杉も菊池の意見に頷いた。

「だから、気にしないでコンテスト行っておいで。」

結局、

琴美は菊池の言葉に背中を押され、

俺達と一緒に多目的ホールへと急いだ。

「あー、やっと来た！」

多目的ホールの控室に入るなり、琴美は水本先輩と

秋川先輩に捕まった。

ちなみにこの秋川先輩も美術部でこのコンテストに出る。

美術部は美女の宝庫だな・・・。

琴美は二人に囲まれると人形のごとくされるがままになった。

その様子を姉川先輩はククツと笑いを堪えながら見ていた。

そして、2時前。

開始時間ギリギリ。

「きゃーっ！琴美ちゃん、思った通りすっごく可愛い！」

「大成功！」

水本先輩と秋川先輩のその声が琴美のメイクの完成を告げた。

すげえ・・・可愛い。

ウィッグをつけ、眼鏡を外した琴美は

初めて会ったあの日に戻ったみたいだった。

「出場者の皆さん、そろそろステージに出てくださーい！」

学園祭実行委員の男子生徒の声がした。

たげと琴美はみんなが控室を出て行く中、動けないでいた。

あ、そうか。

眼鏡がないと歩けないんだっとな。

「手、繋いでたら歩けるだろ？」

俺は琴美と手を繋いだ。

すると、琴美は少し不安そうな顔で俺を見上げながら

「宗・・・？」と言った。

「うん。」

俺がそう返事をするると琴美は安心したように笑みを浮かべた。

「琴美ちゃん、もしかして眼鏡なしじゃ歩けないの？」

「それじゃ、ランウェイ歩けくない？」

その様子を見ていた水本先輩と秋川先輩が心配そうに言った。

コンテストの一番の見せ場、アピールタイムは

20mのランウェイを歩く事になっている。

だいたいはみんな一人で歩くけれど

このまま琴美を歩かせれば間違いなく落ちるだろう。

「それなら、高杉と二ノ宮が琴美ちゃんの手を引いて三人でランウェイ歩けば？」

同じクラスの三人組ってコトなら全然不自然じゃないだろう？」

みんながどうしたものかと考えていると姉川先輩が

なかなかナイスな提案を出した。

俺的には高杉も一緒というのは気に入らないが

琴美を一人で歩かせる訳には行かないし、

かといって、俺と二人だと後から女子共に何を言われるか・・・。

午後2時、コンテスト開始。

まず校内で行われた投票の順位と名前を呼ばれた後、ステージにあがる。

そして、その後にいよいよアピールタイム。

俺と高杉は琴美を挟んで三人並んでランウェイを歩いた。

最前列の席では榎本さんが高杉に声援を送った後、思いつきり琴美を睨んでいた。

そんな顔してたら高杉に嫌われるぞー？

だけど琴美は榎本さんの顔もまったく見えならしい。

少し恥ずかしそうにしながらも笑っている。

しばらくして、秋川先輩がランウェイに進むと

野太い声が会場に響いた。

・・・で、トリは誰もが認める美男美女カップルの姉川先輩と水本先輩。

会場にはものすごい歓声が響き渡っていた。

アピールタイムが終わり、出場者は一旦控室に戻った。

後は結果発表を待つばかり。

「平野さん、なんか中学の時に戻ったみたいだね。」

高杉はウィッグをつけた琴美を見てニツと笑った。

「琴美が髪長かったの高杉知ってんの？」

入学した時はもう髪は短かったはずなのに。

「うん、平野さんと同じ中学だったし。」

「ふーん・・・そーなんだ。」

高杉・・・琴美と同じ中学だったのかよー。

約30分後、いよいよ結果発表。

まずは男子から・・・

「第三位・・・」

姉川先輩か？

高杉か？

「高杉和也くん！」

お、やっぱり。

校内三位かー、やるな。

客席を見ると思ったとおり、榎本さんが絶叫して喜んでいる。

「女子の三位は・・・」

水本先輩・・・は、もっと上だろうな。

琴美か、秋川先輩あたりだろうな。

それ以外の女子はたいしたことないし。

まあ、俺の中では琴美がダントツ一位だけど。

「・・・平野琴美さん！」

おおおっ！

「平野さん、こちらどうぞー！」

司会者に呼ばれ、琴美はようやく顔をあげた。

でも、その表情は驚いて固まっている。

まさか自分が選ばれると思ってなかったといった感じだ。

そつえば、眼鏡外してるから連れて行ってやらないと。

だけど、次の瞬間、

高杉が琴美の手を取った。

え……。

「こっち。」

高杉は司会者の前に琴美を連れて行き、

賞状とトロフィー、副賞を受け取った後も

手を繋いで琴美をエスコートしていた。

むー。

この時ばかりは榎本さんの気持ちがよくわかった。

そして、男子の2位は姉川先輩。

女子の2位は秋川先輩。

1位が予想通り水本先輩。

・・・で、男子の1位が俺。

うおっ！？俺っ？

コンテストが終わって控室に戻ると

琴美はすでにいなかった。

俺が客席で女子共に捕まっているうちに

ウィッグも外し、メイクも落としてもうどこかへ行ったみたいだ。

高杉もいない。

そういえば、客席で榎本さんに「高杉くんは？」って、
聞かれたな。

いつも目敏く高杉を見つけ出すのに。

琴美もいない、

高杉もいない・・・

なんとなく、嫌な予感がした。

俺は急いで模擬店に戻った。

模擬店の裏に行くと榎本さんもいつの間にか戻って来ていた。

そして、「高杉くん、どこー？」と捜し回っていた。

榎本さんが高杉を捜しているという事は

ここに高杉はいないという事か。

琴美は・・・

「あ、ねえ琴美は？戻って来てない？」

俺は近くにいた藤村さんに聞いた。

「んー？まだ戻って来てないと思うけどー？

まあ、そろそろ模擬店も終わるから

そのうち戻ってくるんじゃない？」

「そつか・・・。」

二人ともいない・・・

琴美の携帯を鳴らしてみるけれど出る様子がない。

高杉が琴美に告るとしたら・・・

体育館の裏か校舎の屋上か。

俺達一年生と二年生の教室がある第一校舎の

屋上は確か何かの模擬店をやっている。

だとしたら第二校舎の方か？

第二校舎に向かう途中、第一体育館の裏も覗いてみた。

いないな・・・。

第二体育館の裏もない。

後は第二校舎の屋上だ。

4階建ての校舎の階段がやけに長く感じた。

一段飛ばしで駆け上がって行っても気持ちばかりが焦ってしまう。

そして、階段を上りきり、開けられた扉から風が吹いてきて屋上が

見えた。

そこには高杉がいた。

「考えてくれた？」

すると高杉の声が聞こえてきた。

俺は咄嗟に扉の影に隠れた。

「・・・で、でも高杉くん、彼女いるでしょ？」

昨日も一緒に模擬店廻ってたじゃない。」

琴美の声だ。

「それがさー、昨日別れちゃったんだよねー。」

「え……。」

・・・ヤバい。

ホントに告ってる？

「それでさ……。」

「で、でも、もう新しい子がいるんじゃないの？」

「まだ今のところフリー。」

「……。」

琴美が黙り込んだ。

俺はごくりと息を呑んだ。

マズい……。

「平野さん……前に俺の事、好きって言ってくれたよね？」

え・・・？

琴美が？

琴美の方から高杉に告った事があるのか？

「俺と付き合わない？」

そして高杉は自信満々に言った。

「・・・。」

琴美はすぐには答えないでいた。

「・・・高杉くん・・・あたし・・・」

「高杉！」

居た堪れなくなって俺は扉の影から飛び出した。

すると高杉は「・・・なんだよっ？」と顔を顰めた。

「模擬店、そろそろ終わるってよ。」

とりあえず適当に誤魔化した。

「あ、そう。」

「つか、さっきから榎本さんが『高杉くん、どこに行った？』って騒いでたから早く戻ってやれよ。」

「えー。」

高杉は思いつきり嫌そうな顔をし、「んじゃ、行こうぜ。」と

琴美に視線を向けた。

だけど琴美は高杉と目を合わさないようにしながら、

「あ、えーと・・・あたし、先に美術部の方に行くから・・・。」

と、少しだけ俯いた。

「そう・・・じゃあ先に戻るわ。」

高杉もそんな琴美の様子を察してか、くるりと背を向けると
スタスタと戻っていった。

とりあえず、琴美の高杉への返事は阻止できた。

できたけど・・・

「・・・琴美。」

これ以上、俺も黙っていられないと思った。

「ん？」

「高杉と何話してたの？」

「せ……」

「世間話？」

きつと琴美の事だからまた“世間話”と答える事はわかっていた。

だから、琴美の口からその台詞が出る前に俺が言つと

琴美は俺と目を合わさず「……うん。」と言つた。

「……なんで嘘つくんだよ？」

俺がそう言つと琴美が驚いた顔で俺を見上げた。

「……あいつと付き合うのか？」

「宗・・・聞いてたの・・・？」

「・・・ごめん・・・立ち聞きするつもりはなかったんだけど・・・」

つもりはなかったけど少しの間、隠れて聞いていたのは否めない。

「琴美・・・高杉と本気で付き合うつもりなのか？」

「・・・宗には・・・関係ないじゃない・・・。」

「高杉がどんなヤツかくらい琴美だってわかってんだろ？」

俺には関係ないと言った琴美の言葉に思わずムカッときた。

関係ないワケないだろ？

「あいつなんかと付き合っつのやめろよ。」

「そろそろ、行かなきゃ・・・。」

少しの沈黙の後、琴美は逃げるように踵を返した。

「琴美・・・！」

俺はこのまま琴美を行かせたくなくて腕を掴んだ。

そして、そのまま琴美を抱き寄せてキスをした

。

「何すんのよっ！」

腕を掴んでいた力を弱くした瞬間、

その言葉と同時に俺は平手打ちを喰らった。

「いてっ！」

「宗のバカッ！」

琴美は俺の腕を振り切り、走り出した。

「琴美っ！」

俺はすぐに追いかけようとした。

でも、できなかった。

琴美が泣いていたから・・・。

「・・・。」

やっちまった・・・。

「ハア・・・。」

思わず溜め息が出た。

琴美を泣かせてしまった・・・。

高杉に琴美を取られなくてつい衝動的にやってしまった。

あー・・・俺って・・・ほんとバカ！

頭を抱えてしゃがみこんで見るけれど、

時間は巻き戻せるはずもなく・・・

ただただ落ち込むばかり。

模擬店に戻ると高杉が榎本さんに捕まっていた。

さっきは榎本さんが搜してるって言ったら面倒臭そうに返事をしていたのに満更でもなさそうだ。

まあ、高杉の周りにいるのは榎本さんだけじゃないけど。

コイツ・・・本当に琴美の事、好きなのか？

それから間もなくして模擬店は終わった。
。

装飾部隊が中心になってクラス全員で後片付けをする中、

「平野さんは？サボリ？」

と、榎本さんが言い出した。

“サボリ”って、琴美に店番押し付けて

コンテスト見に行ったヤツがよく言うよ。

「平野さんなら美術部の方に行ったよ。」

いつもなら藤村さんが答えるところを高杉が答えた。

「装飾班中心で後片付けやるはずなのに？」

すると榎本さんはその事が気に入らないのか、

おもしろくなさそうな顔をした。

琴美の行動も一々気に入らないみたいだ。

まあ、今日は特にコンテストで琴美と高杉が

しっかり手を繋いでいたところを見てるしな。

「じゃあ、自分はどうかんだよ？」

平野さんに店番押し付けてコンテスト見に行ってたんだろ？」

榎本さんがむっとした表情をしていると

店番部隊のリーダーの菊池が少し怒ったような口調で言った。

「平野さんもコンテスト出るの知ってたはずだろ？」

それなのに好意で店番引き受けてくれたのをいい事に

自分はそのまま遊びに行ったんだから、後片付けくらい

平野さんの分までやってもらわないとな。」

菊池は手を動かしながら冷たく言い放った。

クラスの中はシーンとなり、それでも菊池の言っている事が

正論だからだろう、誰も榎本さんを擁護する奴なんていない。

榎本さんは仕方なく黙って片付けを手伝い始めた。

そして、全部片付け終わった後も俺はしばらく教室で待っていた。

けれど、琴美は戻って来なかった。

ほとんどのクラスメイトが帰り、高杉も高杉派の女子も帰り支度を始めた。

もしかして教室には戻らずにもう帰ってしまったのだろうか？

そう思った俺は昇降口に行き、琴美の下駄箱を見てみた。

すると、通学用の靴があった。

まだ美術室にいるのかな？

俺はどうしてもさっきの事を琴美に謝りたかった。

「先輩。」

美術室に向かっていると姉川先輩と水本先輩が前から歩いてくるのが見えた。

俺は先輩達に琴美の事を聞こうと声を掛けた。

「琴美、見ませんでした？」

「まだ部室にいるぞ。もう琴美ちゃんしか残ってないはずだから行ってみるよ。」

姉川先輩はそう言つと「じゃな。」と軽く手を挙げ、

水本先輩もバイバイと手を振ってくれた。

琴美・・・まだ怒ってるだろうなあ・・・。

美術部の部室の前で立ち止まり、

軽く深呼吸をしてドアをノックした。

だけど、中からは何も反応がない。

あれ？

いないのかな？

ドアノブに手を掛けてそつとドアを開けてみた。

すると、窓際に立って外を眺めている琴美がいた。

なんだ・・・いるんじゃない。

琴美はボーツとしていた。

だから、ノックの音にも気がつかなかったのかもしれない。

そして・・・

琴美の視線の先には高杉の姿があった。

「また高杉の事見てんのかよ・・・。」

琴美は俺が後ろに居るとは思っていなかったらしい、

驚いた表情で振り返った。

「姉川先輩がまだ部室に琴美がいるって言うから来て見たら・・・。」

なんでまた高杉の事見てんだよ・・・。

「別に高杉くんを見てたワケじゃないけど？」

「でも今、高杉を見てただろ？」

「そんな事よりなんの用？」

琴美はさっきの事をまだ怒っているらしく、

ムツとしている。

「わざわざこんなトコまで来るくらいなんだから、

なんか言いたい事でもあるんじゃないの？」

「・・・さっきは、そのー・・・ごめん・・・。」

俺はとりあえず謝った。

すぐに許してもらえとは思っていない。

と、いうかもしかしたら許してくれないかもしれない。」

「悪かったよ……いきなりキスなんかして……。」

琴美はまだ俺と目を合わそうとしない。

「琴美は……やっぱり高杉の事が好きなのか？」

「……だから……宗には関係ないってば……。」

「いいから、ちゃんと答えろよ。」

琴美が高杉の事を好きでも、さっきの事で俺が嫌いになったとしても

ちゃんと琴美自身の口からはっきり聞きたかった。

「……好きじゃないよ。」

嘘ついでるのかな？

「ホントに？」

俺は琴美の顔を覗き込んだ。

「ホント。」

「・・・じゃあ、あのスケッチブックに描いてあったの誰？」

あれはどう見たって高杉だろ？

「・・・。」

だって、その証拠にまた黙り込んだ。

「やっぱり高杉なんだろう？」

俺がそう聞くと琴美はコクンと頷いた。

やっぱり・・・

「確かに高杉くんの事は好きだったよ。」

琴美は軽く息を吐き出して話し始めた。

「やっぱり、そうなんじゃん・・・。」

「中学の時、3年間ずっと・・・。」

3年間も・・・？

First Love - 本編宗視点・30 -

「宗が見たスケッチは中学の卒業前に描いたものだよ。」

「・・・今も・・・好きなんだろう・・・？」

「今はなんとも思っていないよ・・・宗と初めて会ったあの日にね

・・・フラれたんだ・・・高杉くんにも・・・。」

「え・・・3月14日？」

あの日には・・・？

「うん、そう。」

「でも・・・さっき、アイツ・・・」

「自分からフッておきながら今さら・・・だよな？」

“前に俺の事、好きって言うてくれたよね？”

さっき高杉がそう言っていたのはそういう事か。

「だから、高杉くんとは付き合うつもりなんて全然ないよ。」

「そのわりには・・・よく高杉の事見惚れてたりしないか？」

「それは見惚れてるんじゃないかって・・・なんていうか・・・

高杉くんの姿を見てもなんか中学の時みたいに

もう全然キュンとこないなーとか思ってたたりしてたの。」

「・・・ホント？」

本当にそうなんだろうか？

琴美は俺が顔を覗き込むと、

「ホント・・・てか、宗・・・顔近いっ！」

と、少し焦った様子で俺の顔を手で押し退けた。

「大丈夫だよっ！もういきなりキスしないからっ。」

「信じられません。」

「うー・・・。」

「ホント・・・信じらんない。」

「だから・・・ごめんてば・・・。」

「・・・。」

琴美は俯いたまままた黙り込んだ。

「琴美・・・？」

「・・・彼女がいるのに他の子とキスするのはなんて

信じらんないよ・・・。」

「高杉の事・・・？」

琴美も高杉のそういう場面を目撃した事があるんだろうか？

「宗の事言ってるんだけどっ？」

「は？なんで俺なんだよ？」

琴美の言ってる意味がさっぱりわからない。

「そりゃ、高杉くんもそうだろうけど、宗もさっき同じ事したでしよ？」

「誰とっ！？」

「だから、あたしと！」

「な・・・っ！あれは・・・っ。」

「宗も・・・高杉くんと同じじゃない・・・。」

「同じじゃねえよっ！」

何を根拠に？

「俺をアイツなんかと一緒にすんなよ！」

「……。」

「俺はアイツとは違う。」

「どう違うの……？」

「どっつて……」

全然違うっつーのっ！

「彼女がいたり、好きな子がいるのに他の女の子と

キスしてるあたりは一緒でしょ？」

「……。」

琴美……何言ってんだ？

「宗だつて……彼女いるんじゃないの？」

「いないよ……彼女なんて。」

俺に“彼女”がいると思ひ込んでるから

こんな事言ってるのか？

「……でも、好きな子がいるんでしょう？」

「うん。」

「……なら、同じだよ。」

「違うー！」

「なんでよ？」

「だから・・・っ！俺が好きなのは・・・」

「・・・聞きたくない。」

琴美はプイツと顔を背けた。

「なんで？」

「・・・。」

「いいから聞いて？」

「やだ。」

「聞けって。」

「やだって。」

「もう、いいから黙って聞け！」

ぎゅっと目を閉じて両手で耳を塞ごうとした琴美の腕を

俺は掴んだ。

聞いてもらわなくちゃ埒が明かない。

「俺が好きなのは・・・琴美だよ。」

「え・・・。」

琴美は俺の言葉が信じられないと言った顔で見上げた。

「俺・・・初めて琴美と会った時からずっと好きだったんだ。」

「うそ・・・。」

「ホントだって・・・。」

「・・・。」

琴美はそれでもまだ信じられないみたいだ。

「いきなりキスしたのは悪かったと思ってる……でも……」

俺はアイツみたいにゲーム感覚の恋愛はしない。」

「あんなにモテるのに？」

「そんなの関係ないだろ？」

意味わかんねーよ……。

「焦ってたんだ……。」

琴美は高杉の事、好きなんだと思ってたし、高杉も夏の合宿以来、

琴美を狙ってたみたいだし……。」

それに昨日、彼女と別れたって高杉自身の口から聞いたし。

「そしたら・・・今日、アイツが屋上で琴美に告ってたから・・・。」

「・・・で、いきなりキス・・・なの・・・？」

「・・・ごめん。」

やっぱ、いきなりキスはなあ・・・。

「琴美・・・今、好きなヤツいるの？」

「・・・いるよ。」

「え、・・・誰？」

もしかして・・・そいつともう付き合ってたりするのかな？

「言いたくない？」

「そうつワケじゃ・・・。」

「じゃ、誰？」

「・・・。」

琴美は黙ったまま俯いた。

「武田？」

「違うよ。」

「田中？」

「なんで田中くんが出てくるの？」

「昨日、一緒に校内廻ってたから。」

「あ、あれは・・・二人とも暇だったから・・・。」

「じゃあ・・・誰なんだよ？」

やっぱり、言いたくないのかな？

「・・・う。」

少しの沈黙の後、琴美が俯いたまま言った。

だけど、声が小さくて聞き取れなかった。

「え？・・・誰？聞こえなかった。」

すると、琴美は少し深呼吸をした。

「・・・宗。」

・・・へ？

「お、俺・・・？」

琴美は顔を赤くしてコクンと小さく頷いた。

「マジで？」

信じられなくてもう一度聞いた。

すると、今度はさっきよりも大きく頷いた。

「なんだよ、それー。」

琴美を抱きしめると体の力が一気に抜けた。

俺の全体重が琴美の体に押し掛かった。

「ちょ・・・重・・・っ！」

「・・・おっと。」

琴美が倒れる寸前のところで俺は体を支えた。

あぶない、あぶない。

「・・・俺達、実は両思いだった・・・？」

「そう、みたい。」

「えー、じゃ、なんでさっきビンタなんかしたんだよー？」

それって・・・殴られ損？

「だ、だって・・・宗がいきなりキスするから・・・っ！それに・・・」

「それに？」

「・・・初めてだったんだもん・・・。」

俺が顔を覗き込むと琴美は顔を真っ赤にして答えた。

「へ？」

初めて？

????

何が？

「ファーストキスだったのっ。」

「マジで？」

「・・・だから、あんな風にいきなりされたから・・・。」

「いっしょめん・・・。」

初めてがアレじゃな・・・。

「じゃあ、やり直す。」

「何を・・・？」

「ファーストキス。」

「え？ちよ、ちよっと待った！」

ファーストキスをやり直そうと琴美に顔を近づけると

いきなり“待て”と言われた。

「えー！なんだよー？このタイミングで“待った”？」

「こ、心の準備が・・・まだ・・・その・・・。」

「じゃ、何秒待てばいい？」

「な、何秒って、そんな・・・。」

「・・・なら、しばらくじっしてゐる。」

俺はもう一度琴美をぎゅっと抱きしめた。

ホント言つと、琴美が“待て”と言ってくれて助かった。

俺も心の準備がまだできていなかったから。

やべえ・・・心臓バクバク言ってる・・・。

部室の中は時計の秒針の音だけが静かに響いていた。

そして、ようやく俺の心臓も落ち着き始めた頃、

そろそろいいかな？と思って体を離れた。

琴美の澄んだ黒い瞳に吸い込まれるように顔を近づけると、

琴美がゆっくりと目を閉じた。

かわいい・・・。

緊張で少し手が震えた。

正確に言っていると俺はファーストキスではないけれど

好きになった女の子とすると言う意味ではファーストキスだ。

俺は目を閉じて琴美の唇にそっとキスをした・・・。

続編 - 高杉問題・1 -

初めてのキスの後 。

琴美がちよつと恥ずかしそうに俯いた。

可愛い・・・

マジ、鼻血出そーっ！

「琴美、写メ撮ろうぜ。」

俺と琴美の“両想い発覚記念日”。

琴美の肩を抱いて携帯のカメラのシャッターを切った。

・・・ピロリロリン 。

窓から差し込む夕陽のオレンジ色が

すごく綺麗に琴美を映し出していた……。

「……帰ろつか。」

「うん……。」

俺と琴美は手を繋いで美術部の部室を後にした。

「琴美はいつから俺の事好きだったの？」

「んー……、正確には初めて会った時かなあ……?」

「えーっ？でも、あの時俺の顔見えてなかったんだろ？」

「うん、でもなんて言うか・・・雰囲気というか・・・

そういうのですごく気になってた。」

「ふうーん。」

なんかよくわかんないけど一種の一目惚れか？

「んで、夏休みの前あたりからちよつとキュンと来て、

宗があの時出会った人だってわかってからは一気に・・・かな。

でも、まさか宗の好きな人があたしだなんて思っても見なかった。

」

「俺、結構“好き好き光線”出してたのになー。」

「えっ！？そうなの？」

「ホントにわかんなかった？」

「うん、まったく。」

俺の光線が足りなかったんだろうか？

それとも・・・琴美が鈍いのか？

まあ、いつか。

こうして琴美と付き合い合う事になったんだし

そうして手を繋いだまま駅までの道を歩きながら、

いつもよりゆっくり歩いていると

「平野さん。」と男の声がした。

誰だ？

俺と琴美がその声がした方に顔を向けると

高杉が立っていた。

すぐ後ろには同じクラスの安藤さんもいる。

「ちょっと話があるんだけど、いいかな？」

「え．．．う、うん．．．。」

琴美は戸惑いながら返事をした。

まさか．．．さっきの続きか？

「さっきの話なんけどさ……。」

高杉は俺が真横にいるにも拘らず話し始めた。

お、おいつ。

マジか？

つか、傍に安藤さんもいるだろう。

「あの話……忘れてくれる？」

……は？

「……へ？」

琴美は高杉が言った言葉の意味がいまいちわからないらしく、

反応するのに間があった上、首を傾げたまま固まっている。

「いや、実はさー、俺、安藤さんと付き合う事になったんだ。」

そう言うと高杉は安藤さんに「なっ？」と視線を向け、ニッと笑った。

よく見ると高杉と安藤さんはすでに手まで繋いでいる。

「だからー・・・勝手な事言っただけで悪いんだけど

あの話、忘れて？ごめん。」

高杉は申し訳なさそうに空いている片方の手を両手を合わせて謝るみたいに顔の前で縦にした。

「てか、俺らも付き合う事になったから。」

固まったままの琴美の代わりに俺が高杉に言うと

「あ、やっぱ、そうなんだ？」

と、にやっとした。

「平野さんと二ノ宮が手を繋いで歩いてくるのが見えたから

わざわざ言わなくてもいいかなー？とも思っただけど

まあ、一応言っただけがすっきりすると思って。」

「そっか。」

「んじゃ、そういう事だから。」

それだけ言つと高杉は安藤さんと一緒に俺達に手を振り、歩き始めた。

意外と高杉もこういう事には律儀と言っか、

きっちりしてると言っか・・・。

俺や安藤さんがいる前で琴美にわざわざこんな話をしたのも

多分、アイツなりに考えての事だろう。

まあ、とにかくこれで“高杉問題”はクリアしたワケだし。

・・・で、琴美はまだ固まってんのか？

「琴美？」

琴美の顔を覗き込むと目をパチパチとさせ、

「あー、びつくりした。」

と、俺と顔を見合わせた。

お、ようやく動いた。

「しかし、高杉も忙しい男だなあー。

琴美に告つたり、安藤さんと付き合い始めたり。」

「でも、安藤さん、前から高杉くんの事好きだったし。

これでよかったんじゃない？」

琴美は高杉と安藤さんの後姿をにこにこしながら見送った。

「へー、そうなのか？」

安藤さんが高杉派だという事は、前々から知っていた。

けど、彼女はどちらかというところ大人しい性格だし、

あの熱烈・・・いや、強烈？ “高杉ラブ”の榎本さんみたいに
ぐいぐい行くタイプでもない。

いつも高杉派の輪の中にはいるものの、

安藤さんから高杉に話しかけてる所も

あまり見たことがなかった。

「校外学習の時、あたし、高杉くんのグループから

替わったでしょ？あれ実は安藤さんと談合したの。」

「談合？」

「あたしが高杉くんと同じグループになって落ち込んだら

メグちゃんが同じグループの安藤さんが

どうしても高杉くんと一緒にいいって言ってるから

替わってもらったら？て話をつけてくれて、

それで替わったの。」

「あー、なるほどねー。」

「だから、あたしにとって安藤さんは“女神様”なんだ。」

「ははは、なんだそれ？」

「“救いの女神”。」

「てか、そんなに高杉の事イヤだったのか？」

「嫌って言うか・・・あの頃はとにかく

あんまり顔を合わせたくなかったの。

今はそつでもないけど。」

「ふうーん、なんで？」

「だ、だって・・・その2ヶ月前にフラれたばかりだったし、
てつきり別の高校に行くと思ってたのに

なぜか同じ高校で、しかも同じクラスって・・・。」

「まあ、確かにそれはあんまり顔をあわせたくないな。」

「でしょ？」

「けど、これで高杉も琴美にちょっかい出さなくなったし。」

「安藤さんとうまくいつてくれればいいね。」

「けど、アイツはなー……。」「

俺がそう言っつて琴美をちらつと横目で見ると

琴美も同じ事を思っていたのか苦笑いをしていた。

続編 - 高杉問題・2 -

夜、8時過ぎ。

晩ご飯を食べた後、部屋に戻ると携帯にメールが来ていた。

-
-
-
-
-

学園祭、お疲れ様。

二ノ宮くんが琴美の事ずっと

捜してたみただけど会えた？

-
-
-
-
-

メグちゃんからだ。

あたしは、すぐにメールを返した。

メグちゃんもお疲れ様。

宗には会えたよ。

それでね、宗と付き合う事になったよ。

詳しくは明日、学校で話すね。

$$\begin{array}{ccccccc} \cdot & \cdot & \cdot & R & R & R & \cdot \\ & \cdot & R & R & R & R & \cdot \\ & & R & R & R & R & \cdot \\ & & & R & R & R & \\ & & & & R & R & \\ & & & & & R & \\ & & & & & & R \\ & & & & & & \cdot \\ & & & & & & \cdot \end{array}$$

メールを返した後、すぐに携帯に着信があった。

「もしもし？」

『もしもし、琴美？これってホント？』

メグちゃんだ。

『二ノ宮さんと付き合っって・・・』

「あ、うん。」

『きゃああつ、やったじゃないっ!』

あたしが宗の事が好きなのを知っていたメグちゃんは

電話の向こうで興奮していた。

『まあ、あたしは二ノ宮くんも琴美が好きなのわかってたから

傍で見てて、すっごくじれったかったけど。』

「え・・・ウソッ!？」

『だって、あれだけ琴美に“好きです光線”送ってればわかるしー。』

メグちゃんは気付いてたの・・・？

あたしは全然気がつかなかったけど？

もしかして・・・あたしって、そんなに鈍かったのー？

『よかったね、琴美。』

「うん。」

『明日、また詳しく聞かせてね。』

「うん。」

『じゃ、おやすみ。』

「おやすみ。」

他の誰かに祝福されるよりもメグちゃんに

そう言つて貰える事がすごく嬉しかった。

高杉くんの事が3年間ずっと好きで結局フラれた事。

フラれた後に高校もクラスも一緒になつて

すごく気まずかった事。

“翡翠の人”の事が気になつていて

でも、顔も何もわからなくてモヤモヤしてた事。

そして、段々宗に惹かれて行つた事。

“翡翠の人”が宗だとわかつてその直後に

失恋したと思ひ込んでしまった事。

そんなのも全部・・・全部、メグちゃんは知っている。

てか、そういえばメグちゃん・・・

あたしが失恋したって思い込んでた時に

“ちゃんと告げてみたの？”とか言ってたな！。

翌朝。

いつものように駅の自転車置き場に自転車を停めて、
改札へ行くと宗がにこにこしながら手を振っていた。

あれ？

「おはようっ！」

宗は朝からやけにご機嫌だ。

「お、おはよ。」

そういえば昨日、ここで別れる時に

いつも朝は何時の電車に乗ってるか聞かれたなあ。

あれは待ち伏せする為だったのか・・・。

待ち伏せ場所が正門から改札に変わったというオチ？

宗と一緒に電車に乗り、登校していると

段々と生徒も増えてきて、女子の視線も気になり始めた。

だって、相手は『校内コンテスト』第一位のイケメンですよっ。

一緒にいて目立たないワケがない。

しかも、宗はそんな女子生徒達の視線にもお構いなしで

しっかりと手だって繋いでるし。

そして、

教室に入るとなにやら不穏な空気が漂っていた。

な、なんか・・・嫌な予感・・・。

「お、おはよう・・・なんかあったの？」

席に座ってメグちゃんと武田くんに聞くと

「おはよう、ちょっと琴美、大変よ！」と

メグちゃんが少し慌てた様子で言った。

ま、まさか・・・

もうあたしと宗の事がバレたのかな？

「なんか、高杉と安藤さんが一緒に登校してきたのを

榎本さんが目撃してさ、それで安藤さんに突っかかってんだ。」

武田くんはそう言つと、なんだかよくわからないと言つた顔をした。

むむっ？

あたしの“女神”がピンチ？

あたしはしばらく高杉くんと榎本さんのやり取りを遠巻きに見ていた。

安藤さんは高杉くんの後ろで泣きそうな顔になっている。

「高杉くんと付き合う事になつたつて、ホントなのっ？」

榎本さんは今までにない程の剣幕で安藤さんに食つて掛かっていた。

すると高杉くんが「本当だよ。」としれつとした顔で言つた。

「なんで？高杉くん、8組の佐野さんと付き合ってたんじゃないの？」

榎本さんの言うとおり、高杉くんは一昨日まで8組の佐野さんと付き合っていた。

「一昨日まではね。」

「別れたって事？」

「うん、それで今はまみと付き合ってる。」

「。。。。」

榎本さんはムツとした表情で黙り、安藤さんを一瞥した後、自分の席へと戻った。

“高杉派”の女子は“新恋人”が安藤さんだと知り、驚いた様子だった。

そして、例のごとく高杉くんの“彼女情報”はその日のうちに更新された。

続編　・高杉問題・3・

あたしと宗は付き合うようになったから

部活が終わった後、毎日一緒に帰るようになった。

ちなみに朝も一緒だけど・・・。

そして一週間が過ぎた日の放課後　　。

部活が終わり、美術部の部室を出て昇降口に行くと

安藤さんがいた。

お、女神だ。

「安藤さん。」

あたしが声を掛けると安藤さんは驚いた顔で振り返った。

「・・・あ、平野さん。」

「安藤さんも今、部活がおわっ・・・

どうしたのっ！？その手？」

安藤さんの右手からは血が流れていた。

それはたった今、怪我をしたかのように指を伝っていた。

「・・・な、なんでもない。たいした怪我じゃないから。」

安藤さんはそう言うと、慌ててポケットティッシュを出して傷口を押さえた。

だけど、傷が深いらしくなかなか血が止まらない。

「ちょっと見せて。」

あたしは安藤さんの右手を取り、傷を確認した。

すると、親指と人差し指、中指に切り傷があった。

しかも、ちょっとやさそつとの怪我じゃない。

「なんで、こんな・・・一体、どうしたの？」

あたしは安藤さんの顔を覗き込んだ。

それでも安藤さんは理由を話そうとしない。

どうして何も話そうとしないんだろ？

あたしはとりあえず、自分のポケットティッシュを出した。

安藤さんが持っていたポケットティッシュがなくなっていましたか
ら。

そして、ティッシュを安藤さんに渡すと彼女の下駄箱が目に入り、

そこにある開封された封筒とその中から何か光っている物が見えた。

・・・？

あたしはその封筒を手を取った。

「これ・・・っ!？」

封筒の中にあつたのは剃刀の刃だった。

多分、この封筒を開けた時に剃刀の刃が仕込んであつて

それで指を切ったんだろう。

封筒にも少しだけ血がついている。

「誰がこんな・・・。」

なんて悪質な嫌がらせ。

「あの・・・高杉くんには言わないで・・・。」

安藤さんはようやく血が止まりかけた傷をティッシュで押さえたまま言った。

そして「お願い、絶対言わないで・・・。」と、あたしの顔をじっと見つめた。

「うん・・・わかった。」

確かにこんな事、高杉くんにはあまり知られたくないよね？

だって、安藤さんが嫌がらせを受けたとなると・・・

だいたい犯人の予測がつく。

そして・・・

その犯人は　　。

「でも、安藤さん、気をつけたほうがいいよ？」

手紙とか置いてあっても、もう開けないほうがいいかも。」

「うん・・・ありがとう。」

安藤さんはコクツと頷いた。

しばらくしてようやく傷口から流れていた血が止まり、

あたしは持っていた絆創膏を貼ってあげた。

剃刀の刃が仕込んであった封筒を処分して二人で正門に歩いていくと、

宗と高杉くんが待っていた。

「「おつそーい。」」

宗と高杉くんはちょっとだけ口を尖らせた。

「ごめん。ちょっと昇降口で安藤さんが転んで怪我したから

救出してたら遅くなっちゃった。」

あたしがそう言つと安藤さんも苦笑いして「ごめんね。」と言つた。

「まみ、大丈夫？」

高杉くんが心配そうな顔で安藤さんに視線を移した。

「うん、平気。」

安藤さんは高杉くんに心配かけないようににっこり笑つた。

「帰ろ。」

宗があたしの手を取り、その言葉と共にあたし達四人は

駅に向かって歩き始めた。

「痛っ。」

安藤さんの声がして視線を向けると

高杉くんが手を繋ごうとしたらしく、

安藤さんの右手を握りかけていた。

「ごめんっ。てか、そんなに酷い怪我なのか？」

高杉くんは安藤さんの右手の絆創膏をじっと見つめた。

「そ、そんな事はないんだけど・・・」

安藤さんは高杉くんと目を合わせないように

ちよっただけ視線を外した。

「あ、あのね・・・思いつき手を地面についちゃったし、

さつき血が止まったばかりだから。」

あたしは咄嗟にそう言って誤魔化した。

すると、高杉くんは納得したように「そっか……。」「と言った。

そして高杉くんは手を繋ぐのを諦めると、その代わり自分の腕に安藤さんの腕を通させた。

おーっ、さすがチャラ男。

手が繋げないなら、腕を組むってか？

それから四人で同じ電車に乗り、安藤さんはあたし達が降りる一つ前の駅で降りた。

あたしと宗、高杉くんは電車の窓からバイバイと手を振った。

電車が発車して安藤さんの姿が見えなくなると

高杉くんがぐるりとあたしに振り返った。

「さてと・・・まみもいなくなった事だし、

本当の事を話しても貰おうか・・・平野さん。」

続編 - 高杉問題・4 -

「・・・え。」

「まみのあの怪我・・・絶対、転んだだけじゃないだろ？」

だいたい転んだんなら膝も擦りむいてるはずだし。

・・・で？ホントはなんであんなに絆創膏貼りまくってんの？」

高杉くんは探偵のごとく、鋭い所をついた。

う・・・。

気付いてたんだ・・・。

けど・・・ここは女同士の約束。

破るわけにはいかないもんっ。

「ホントに転んだのっ。」

「……。」

「あたしの目の前でっ。」

「……。」

「すってんころりんとっ。」

「……。」

高杉くんは頑なに本当の理由を言おうとしないあたしを見て、

ハアーっと大きな溜め息をついた。

「まみが俺に言っなって言った？」

「……。」

ハイ、その通り。

「……。」

宗はあたしと高杉くんのやりとりをただ黙って見ていた。

「あのさ……こーゆーのは初めてじゃないし。」

別に今さら驚かないよ。」

しばらくの沈黙の後、高杉くんはなんでもないような口調で言った。

「俺と付き合ってる子に変な嫌がらせされたり、

知らないところでイジメられてたり。

今までだって、そんな事はよくあったんだ。」

「そ、そうなんだ……？」

知らなかった……。

でも、考えてみればそんな事があるのも不思議じゃない。

「その度に彼女の愚痴を聞いて・・・まあ、

俺は面倒くさいから関わらないでいたけど。」

「それで別れたりとか？」

「うん。」

あたしの問いに高杉くんは即答した。

高杉くんて・・・そーゆートコあるんだ？

「安藤さんも同じ？」

「まみが嫌がらせに遭ってたらって事？」

「・・・うん。」

「そしたら・・・」

安藤さんもそんな目に遭っていると知ったら

高杉くんはどうするんだろうか？

やっぱり、面倒臭いから別れちゃう・・・？

「俺が護る。」

高杉くんはキッパリと言った。

その答えはあたしからしてみれば意外な答えだった。

宗も少し驚いた顔をしているという事は

あたしと同じように思ってたのかもしれない。

高杉くん・・・本気なのかな？

それでも、あたしは安藤さんとの約束があるから黙っていた。

高杉くんもそれ以上、何も聞いてこない。

電車が次の駅に到着してあたしと宗、高杉くんは一緒に降りた。

そして高杉くんは改札を出て別れる時、

「明日から、昇降口で待つ事にする。」

と、言った。

「まみが転ばないように、俺が傍にいて護る。」

高杉くんはさらに真顔で言うと、ニッと笑った。

「うん・・・。」

あたしが返事をする、高杉くんは「じゃ、また明日。」といつもの爽やかな笑みを浮かべてあたしと宗に背を向けた。

「琴美は平気？」

高杉くんの後姿を見送りながら宗が口を開いた。

「うん？」

「いや・・・琴美も誰かに嫌がらせとかされてないかなーって。」

宗は心配そうにあたしの顔を覗き込んだ。

「あたしは大丈夫だよ。」

今のところ、あたしは特に嫌がらせを受けてはいない。

毎朝、女子の視線が気になるくらいで・・・。

「ホントに？なんかあったら、すぐに言えよ？」

「うん。」

あたしはとりあえず、そう答えたものの、

もし、安藤さんのように嫌がらせを受けたとしたら

やっぱり、宗には言えないだろうな・・・と、思った。

続編 - 高杉問題・5 -

翌日。

安藤さんも高杉も至って普通の様子だった。

ただ、高杉はある人物の行動をじっと見ていた。

視線の先には・・・

榎本さん。

高杉は昨日の一件が榎本さんの仕業だと思っているらしい。

確かに榎本さんには動機がある。

でも、証拠は何もない。

榎本さんは高杉と安藤さんが付き合っていると発覚した日から前みたいに高杉にべったりくつつく事はしなくなった。

というか、それは高杉自身がそうさせているかのように

高杉派の女子全員がそうだった。

今まではこんな事、なかったのに。

高杉のヤツ、安藤さんの事本気なんだろうか？

安藤さんは利き手が右だから指を三本も怪我をしている所為で

ノートを取る時やお弁当を食べる時も不自由そうだった。

琴美も安藤さんと榎本さんの様子が気になるのか、

ちらちらと二人に視線を向けていた。

二週間後。

あれから、安藤さんへの嫌がらせはなくなったのか、

高杉も榎本さんの行動に目を光らせる事はなくなった。

ただ、相変わらず帰りは昇降口で安藤さんを待っているようだ。

その日の放課後、

「なあ・・・二ノ宮、ちょっと聞きたい事が

あるんだけどさー・・・」

部室で一緒に着替えていた3年生の先輩が

少し遠慮がちに口を開いた。

「はい、なんすか？」

「あのさ・・・ひょっとしてー・・・」

おまえと琴美ちゃん付き合ってたの?」

う・・・ついに聞かれてしまった・・・。

「あ、それ、実は俺も気になってたんだよな!」

ここ最近ずっとおまえと琴美ちゃん、

一緒に登校してきてるみたいだし。」

すると、武田も俺に視線を向けた。

バレてたか。

「はい、付き合ってますよ。」

別に隠す必要もないし、俺は素直に認めた。

「ええええーっ!？」

部室にいた部員全員が一斉に俺に視線を移した。

「マジでーっ？」

「マジっす。」

「いつからだよ？」

「学園祭の時からです。」

「おまえから告ったのか？」

「・・・え、まあ・・・」

てか、その後琴美からも“好き”って言うてくれたけど

「・・・ああ、俺等のアイドルが・・・。」

俺と先輩が話していると武田が肩を落として頂垂れた。

「・・・。」

そんな事言われてもなあ・・・。

すると、先輩は何かを思いついたように

“悪い顔”で俺にジリジリと近づいてきた。

「二ノ宮・・・。」

嫌な予感・・・

「お仕置きだあーっ！」

先輩のその言葉と同時に部員みんなが、

まだ着替えている途中の上半身裸の俺に襲い掛かってきた。

「うわあああああつっ！！」

「俺達の琴美ちゃんを独り占めしてる罰だ。」

数人で俺の体を押さえつけ、そして残った奴らが

一斉に櫓り始めた。

言い掛かりもいいところだーっ。

「うひっ！や、やめ・・・っ！あははははははははははっ！」

ゲラゲラと笑い続けている俺は、

誰がどこをどう操っているかさえわからない。

「あはっ、あはっ……あはははははははっ！！」

マ、マジ……もう……やめ……あーはははは！」

息も絶え絶えに笑いながら言ってみるけれど

一向に止める様子がない。

なんなんだよーっ!?

もう笑いすぎて頭がおかしくなりそうだ。

・・・と言っより死にそうだ。

ああ・・・そうだ・・・“笑い死に”っていうのは
きつとこんなコトなのかもしれない。

ふと、そんな事を思った。

そして、数分後、

ようやく、俺はみんなの“魔の手”から解放された。

死ぬかと思った・・・いや、本当に・・・

だって・・・

三途の川が見えかけたし。

続編 - 高杉問題・6 -

「・・・お、お待たせ・・・。」

部活が終わった後、正門で宗を待っていると、ヨロヨロとした足取りで宗が近づいてきた。

いつもなら、宗が先に正門で待っているのに今日は珍しくあたしの方が先だった。

しかも・・・

宗はなんでこんなスタボロになってるんだろ？

「宗、なんか・・・痩せた？」

てゆーか・・・やつれた？

「・・・そ、そうかあ？」

「うん、なんか・・・、こうー、疲れきった顔してるし、

・・・今日の練習そんなにキツかったの？」

「いや・・・まあ、ある意味キツかったかも・・・。」

「・・・？」

ある意味・・・？

「お疲れ様。」

なんだかよくわからないけれど、あたしがそう言つと

宗は手を繋ぐと右手をあたしに差し出した。

あたしは相変わらず優しくて温かいその手に自分の左手を重ねた。

宗はぎゅっとあたしの手を軽く握ると

「三途の川渡らなくてよかった、HP全快っ！」

と、にんまり笑った。

「あはは、何それー？」

「さっきはホントに死にそうだったんだよ。」

あたしが笑うと宗はちょっとげんなりした顔で言った。

「そういえば、さっき昇降口で高杉くんに会ったよ。」

高杉くんは安藤さんが嫌がらせに遭うようになってから

昇降口で安藤さんを待つようになった。

「高杉くん、相当安藤さんの事が心配みたい。」

あたしが昇降口に下りていったら安藤さんの下駄箱覗いてて、

『何してるの?』って声掛けたら、安藤さんが下駄箱開ける前に

怪しい物があつたら排除しておこうと思ってチェックしてたって。

」

高杉くんはあの事件以来、昇降口で安藤さんを待つ間、

毎日欠かさず安藤さんの下駄箱におかしな物が入っていないか

チェックしているらしい。

「へえー。安藤さん、あれからなんかあつたっぽい?」

「うっん、何もないみたい。」

安藤さんへの嫌がらせは、あの剃刀の刃が入った封筒があったぐら
いで

それ以降は何もないみたいだ。

だから高杉くんも最近は一応、下駄箱をチェックするものの、安心
している。

あれからもう二週間が経つ・・・

嫌がらせは本当に無くなったのかな？

翌日の放課後。

いつものように部活が終わって昇降口に行くと人影が見えた。

高杉くんかな？

あたしの目に映った人影は安藤さんの下駄箱を開けて中に何かを入れた。

・・・？

高杉くん、何をしているんだろう？

用事が出来て一緒に帰れなくなって置手紙でもしたのかな？

でも、それなら普通メールを送るだろう。

あたしはその人物に近づこうと足を一步踏み出した。

すると昇降口の扉が開き、誰かが入ってきた。

安藤さんの下駄箱の前にいた人物は昇降口の入口に行こうとしていた足を止め、

逃げるようにあたしの方にくるりと方向転換した。

そして、あたしがいる事に気がつくと驚いた顔で

あたしと視線を絡ませた。

「・・・あ。」

高杉くんじゃない・・・。

それは見かけた事のある男子生徒だった。

確か、安藤さんと同じブラスバンド部の人だ。

上履きの色を見るとどうやら二年生のようなだ。

あたしは何故こんなところに二年生の先輩がいるのか

不思議だった。

だって、ここは一年生の下駄箱しかない。

二年生と三年生の先輩の昇降口は別の場所だ。

「平野さん？」

あたしと先輩が見つめあうように黙ったまま立っていると

入口から入ってきた人物が声を掛けてきた。

高杉くんだ。

「・・・っ!？」

先輩はその声に少しだけ振り返り、足早に昇降口を出て行った。

「どうかしたの？」

高杉くんはあたしから離れていった先輩を不思議そうな顔で

見送りながら安藤さんの下駄箱を開けた。

あたしも急いで安藤さんの下駄箱を見に行くと、

あの剃刀の刃が仕込んであった時と同じ白い封筒が置いてあった。

・・・やっぱり、置いてあった。

という事は、あの時もあの先輩が・・・？

「・・・っ!？」

高杉くんは封筒を下駄箱から出し、

「もしかして、さっきの先輩が置いていった？」

と、あたしに尋ねた。

あたしはその言葉に頷いた。

すると、高杉くんは急いで先輩を追いかけ始めた。

続編　・高杉問題・7・

「琴美、遅いなあ・・・。」

俺は誰に言うでもなく、ぽつりと呟いた。

正門の門柱に寄りかかっていた体を離し、

目の前に転がっている小石を蹴って、

こんころりんと転がっていった先に目をやると

早足で一人の男子生徒が歩いていった。

そして、その後を高杉が追いかけてきた。

「ちょっと待てよ。」

高杉の呼び止める声にその男子生徒は顔を顰めながら振り返った。

「これ、返す。」

高杉は手に持っていた白い封筒をその男子生徒に差し出した。

「・・・なんだよ、これ？」

「知らばつくれんなよ、あんただろ？」

まみの下駄箱にこれ置いて行っただの。」

「知らねえよ。」

「さっき昇降口にいた女子があんたが置いて行っただの

見たって言うてたけど？」

高杉はそう言う男子生徒を睨みつけた。

なんだなんだ？

俺は高杉と男子生徒の顔を交互に見た。

この人・・・2年生か。

ブラスバンド部だったのか？

なんとなく、見たことあるな。

「高杉くんっ！」

すると、そこへ訳がわからず突っ立っている俺、

顔を顰めてお互い睨み合っている高杉と男子生徒の前に

琴美が現れた。

琴美は俺の方にはまったく目を向けず、

高杉の名前を呼びながら二人に駆け寄った。

えー？

俺は無視ー？

「先輩・・・その、封筒・・・」

琴美は少し息を切らせながら口を開いた。

琴美があの手簡の事を知っているという事は

さつき高杉が言っていた“昇降口にいた女子”は

琴美の事だったのか。

先輩と呼ばれた男子生徒は琴美に視線を向けた。

そして、もう一度高杉に視線を戻すと乱暴に封筒を奪い、

踵を返した。

だけど、高杉は逃がさないといった顔でその男子生徒の腕を掴んだ。

「待てよ、まだ話は終わってない。なんであんな事したんだよ？」

高杉は明らかに怒りをこもった声で静かに言った。

「……。」

「なんでだよ？」

黙ったままの男子生徒にさっきよりも大きな声で

高杉はイラついたように言った。

琴美は心配そうに二人を見つめている。

「……なんで、おまえなんだよ？」

「はあ？」

やっと口を開いたと思ったら、いまいち意味不明な

事を言った相手に高杉は完全にキレた様子で言った。

「俺はずっと安藤の事が好きだったのに、

なんでおまえなんかに取りられなきゃいけないんだよ？

校内コンテスト3位だかなんだか知らねえけど、

いい気になってんじゃねえよっ！」

男子生徒はそう言つと高杉に掴みかかった。

「んだとっ！」

そして、高杉も負けじと相手の胸倉を掴んだ。

もしかして・・・修羅場？

「どうせ無理矢理、安藤を・・・」

「なんでそんな事がわかるんだよっ！」

「そんなの、今までのおまえの噂を聞いてれば

誰だってそう思うだろうっ！」

男子生徒はそう言つと高杉を思いつきり殴り飛ばした。

「「っ!？」」

俺と琴美は驚き、高杉に駆け寄つた。

「高杉、大丈夫か？」

「高杉くん、大丈夫？」

高杉は俺と琴美に視線だけ向け、大丈夫だという風に軽く頷くと痛そうな顔をしながら立ち上がった。

「おまえがどう思おうが勝手だけど、それならなんで

俺じゃなくてまみに嫌がらせなんかするんだよ？

女子の誰かがやったと思わせたかったのか？」

「……。」

すごい剣幕で再び胸倉を掴んだ高杉の質問に男子生徒は何も答えず、
ずっと睨みつけていた。

「否定しないって事は凶星か？」

ふんっ……やる事がせこいんだよっ！」

高杉はそう言うときのお返しとばかりに男子生徒を殴った。

そして、その男子生徒を見下ろしながら

「俺とまみが付き合う事になったのは、

まみの方から告白してくれたからだ。」

と、言った。

「二度とまみにおかしな真似すんなよっ！」

殴られた口元を押さえながら立ち上がった男子生徒に

高杉は吐き捨てるように言つとくるりと背を向け、

安藤さんを迎えに昇降口に向かった。

男子生徒は口の中を切ったのか、血が混じった唾を

ペツと地面に吐き捨てながら、高杉の後姿を睨みつけた後、

俺と琴美を一瞥して帰っていった。

「……………」

俺と琴美は目の前で起きた出来事に啞然としていた。

「……………なんだっただ？」

「安藤さんに嫌がらせした犯人で、あの先輩だったみたい。」

「え、マジでっ!？」

なんとなく、高杉とあの男子生徒の会話を聞いていて
安藤さんに何かしたんだろうという事はわかっていた。

「てか、あの人・・・安藤さんに何したんだ？」

俺がそう聞くと琴美は安藤さんが昇降口で転んだと言って
右手に怪我をした日の事を話してくれた。

「それ・・・酷いな。」

高杉がキレるワケだ。

「あ、でも宗、この事は高杉くんには内緒ね？」

「ん？うん・・・て、もうバレバレだろう。」

さっき目の前でプチ修羅場があったんだし。

つか、そもそも最初からわかってたから

高杉も昇降口で待ってたワケだし。

「それでも、言わないで。」

「・・・わかったよ。」

琴美にとって安藤さんは“女神様”らしいから

約束を破りたくないんだろう。

俺はなんとなく可笑しくてちょっと吹き出した。

「もうっつ、ホントにわかってる？」

すると琴美は頬を膨らませた。

「わかってるって。」

指で膨れた頬を潰すとプーと音がした。

それがまた可笑しくてゲラゲラと俺が笑うと

「宗っ！」

と、頬を軽く抓られた。

そして、琴美はもう片方の頬も軽く摘むと

フニフニと俺の顔で遊び始めた。

「琴美ひゃん、やめなひゃい。」

両頬を左右に引っ張られているおかげで

上手く喋れない。

「宗、可愛い、おもしろーい」

琴美はにこにこしながら俺の顔をおもちゃにした。

まあ、その後俺も琴美の顔をぶにぶにしたのは言うまでもないけど。

続編 - 高杉問題・8 -

翌朝、駅の改札に高杉がいた。

「おいっす。」

昨日、あの先輩に殴られた口元には絆創膏が貼られている。

「おう。てか、何やってんだ？」

「おまえと平野さん、待ってた。」

「？」

なんで、俺達を？

「昨日の事、まみには内緒な？」

「正門ンところで一悶着あつた事？」

「うん、それ。」

「安藤さんには何も言っていないのか？」

「ああ、言っていない。」

「なんで？」

言っておいた方が良くないか？

「アイツさー、まみと同じブラスバンド部なんだよ。」

だから、嫌がらせしてたのとか昨日の俺との事言ったら、

まみが部活行きにくくなるから。」

「あー、なるほど。」

そこまで考えてたのか。

ちよつと、意外だなあ。

「でも、それだと逆に心配じゃないか？

部活の間、あの先輩に無防備で接してたりなんかしたら・・・」

別に俺の“彼女”でもないし、特にそこまで

気にする必要はないのかもしれない。

だけど、クラスメイトとしては昨日目の前で

あんな修羅場を目撃したワケだし。

それになにより、琴美の“女神様”だしな。

そう思っていると、

「それは大丈夫、もう手は打ってあるからさ。」

と、高杉はニツと笑った。

・・・？

「ブラスバンド部の部長てさ、俺の中学の時の先輩なんだよ。」

「へえー。」

「中学の時は俺と同じサッカー部だったんだけど、

その先輩、高校に入ってすぐ事故に遭って

足を怪我してからサッカー止めたんだ。

んで、友達に誘われたとかでブラスバンド部に

入ったらしい。

俺の事もよく面倒見てくれてた先輩だから、

今回も事情を説明したら協力してくれるって。

ちなみにその部長、平野さんも知ってるよ。」

琴美も？

あー、そつえば琴美と高杉は同じ中学出身だったのか。

「ふーん・・・ところで、ずっと聞きたかったんだけどさ・・・」

「ん？」

「高杉、なんで安藤さんと付き合う事になったんだ？」

安藤さんの方から告白してくれたって昨日言ってたけど、
今までの高杉なら断ってるだろう。

なのに琴美に告っておいて、その後告られた相手と

なぜ付き合う事になったのかどうしても腑に落ちなかった。

「琴美の事、好きだったんだろ？」

「ああ、好きだったよ。」

高杉はさらっと軽い感じで答えた。

“今カレ”の俺様を目の前にして言ってくれるじゃねえかあー。

「でも、今考えてみれば、まみの事がずっと好きだったんだと思う。」

「？」

なんだそれ？

「実はまみとは部活が終わるのが同じくらいでさ、

降りる駅も近いし、よく帰りが一緒になってたんだ。

んで、その時にいろんな話をしてさ、

なんとなく居心地が良いって言うか・・・、

落ち着くって言うか・・・、なんかずっと話してても

飽きないし、疲れないし、いいなって思った。

・・・で、そう思ってたら夏休みに入って合宿で

風邪ひいて平野さんにいろいろお世話になって

彼女にも興味を持ち始めたと言うか・・・。

でもさ、平野さんは俺が追いかければ追いかけるほど

逃げて行つてたし・・・脈がないのはわかってた。」

「・・・。」

俺はただ黙って聞いていた。

高杉がこんな風に正直に話すのなんて珍しい事だ。

だから、驚いていたというのが正しいのかもしれない。

「9月の半ば頃にさ、お前が俺と平野さんを二人きりにして

さっさと帰った日があったら？」

「ああ・・・うん。」

確か、バスケ部の練習試合の後の週明けだったけな。

「あの時にさ、俺、平野さんに携帯の番号聞いたんだよ。

・・・でも、教えてくれなかった。」

「へ？」

「あの時、お前がさっさと帰ったもんだから、

平野さん、すごく悲しそうで“心ここに在らず”って感じで、

俺との会話も全部生返事だったし。

だから、俺が“携帯番号教えて？”って言っても

結局、“うん。”って言ったつきりで教えてくれなかった。

まあ、教えてくれなかったと言うより、お前の事考えてて

俺の言葉がちゃんと耳に入ってなかったんだろうなあー。

で、その時にさ、平野さんはお前の事が好きなんだなって確信した。」

じゃあ、あの時琴美が元気がなかったのは俺の所為・・・？

「学祭の時に告ったのはさ、なんか・・・ハッキリさせたかったって言うか

フラれるのわかってて言ったんだ。」

あんなに自信有り気に言ってたのに？

「でも、もし琴美が付き合ってたって言うてたら？」

「それはないよ。まあ、例えそう言っても、

うまくいかなかったと思う。」

「なんで？」

「まみの事もずっと気になってたから。」

「ふうん。」

「一番最初の選択授業の時にさ、とりあえずのグループ分けで出席番号順で分かれた時にまみと一緒にのグループになったんだ。んで、その時から少しずつ話すようになって、

正式にグループを分ける時もまみと一緒にがいいなって思って

俺から声を掛けた。

そしたら、少し驚いた顔しながら“うん”って言った時の

まみの顔がさー、また可愛くて」

「それで好きになったんだ？」

「そそ。」

高杉はにんまりとした顔を俺に向けた。

“チャラ男な高杉”も案外こんなフツの事で

恋しちゃうヤツだった・・・と。

安藤さんの嫌がらせの件も片付き、

高杉が安藤さんと付き合う事になった謎も解け、

これにて『高杉問題』一件落着　　だなつ。

続編 - にいたん・1 -

12月。

冬休みに入ってからあたしと宗は学校に来ていた。

あたしは来年の2月にある絵画コンクールに出品する作品を描く為。

宗は部活。

そして、美術室で部員のみんなと一緒に作品を仕上げていると

ドアが僅かに開いていてその隙間から“何か”がちらりと

見えたのが視界の端に映った。

「……………」

あたしがドアの方に視線を移すと

その“何か”はサッとドアに隠れた。

（今、何かいたような……？）

「琴美ちゃん、どうしたの？」

あたしがじつとドアの方を見つめていると

秋川先輩が不思議そうな顔をした。

「あー、いえ……今なんか、いたようなー？」

「えっ？ 何が？」

秋川先輩はあたしが指差したドアの方を見た。

すると、ドアの隙間から見えていた“何か”が

またサッと隠れた。

「……」

あたしと秋川先輩は思わず顔を見合わせた。

その様子を見ていた姉川先輩は口に入差し指を当て、

あたし達に声を出さないように目配せした。

そして、そろりそろりと音を立てないようにドアに近づくと
一気に開け放った。

「え……」

あたしと秋川先輩、姉川先輩、他の部員のみんなは啞然とした。

だって、そこには……

小さな女の子が立っていたから。

少し茶色い髪のツインテールに赤い服とお揃いの
リボンをつけている可愛い女の子。

見た感じ5歳くらいだろうか？

「どこから来たの？」

姉川先輩は女の子の目線に合わせるようにしゃがみ、

優しい口調で話しかけた。

「……………」

しかし、その女の子は何も答えないで

じっとあたしの顔だけを見ている。

(う……………、なんかガン見されてるんだけど……………)

すると、女の子があたしの目の前にとことこと歩いて来て

「……………」とみちゃん……………」

と、言った。

(へ？)

「ど、どうして、あたしの名前知ってるの？」

あたしは姉川先輩と同じ様にその女の子の目線に合わせるようにしやがんだ。

「にいたんのおへやにしゃしんがあるのー」

女の子はそう言うと可愛らしい笑顔を浮かべた。

“にいたん”？

部屋に写真？

???

「んーと、 “にいたん” て、だあれ？」

「ありさのにいたん」

（この子、“ありさ”ちゃんて言うのかー。

……て、だから“にいたん”て、誰？）

「もしかして、長谷川先生のお子さんかな？

たまたま学校に連れて来てるのか」

姉川先輩はそう言うときとありさちゃんに、

「今日はパパと一緒に来たの？」

と、聞いた。

すると、ありさちゃんは、

「ううん、にいたんときたのー」

と、答えた。

んー？

長谷川先生が“にいたん”なワケないしー、

“にいたん”て誰ー？

いよいよ、謎になってきた。

さて、この子は一体何者なのか……？

それより、この子をどうするべきか？

今はそれが問題だった。

「亜理紗っ」

みなでこの子をどうしようかと考えていると

美術室の入口から声が聞こえた。

「あれ？ 宗？」

入口にいたのは宗だった。

「今、声が聞こえたから覗いてみたら……ここにいたのかー。」

もうー、突然いなくなったら心配するだろ？」

「だって、にいたん、ちつともあそんでくれないもん」

「仕方ないだろ？ 俺は部活があるんだし」

「やだあー、つまんない」

ありさちゃんはその言つと頬を膨らませた。

「あ、あのー、宗？」

「あー、ごめん、妹なんだ」

「宗の妹さん？」

「うん」

じゃあ、ありさちゃんの“にいたん”て宗の事だったんだ？

宗が妹の亜理紗ちゃんを連れて来ていたのは

急にお母さんが出掛けなきゃいけなくなつて

誰も亜理紗ちゃんの面倒をみてあげられる人が

いなくなつたかららしい。

それで仕方なく部活に連れて来たのだけれど

宗も練習で亜理紗ちゃんにかまってあげられなくて、

気がついたら亜理紗ちゃんがいなくなっていたんだとか。

きっと亜理紗ちゃんは退屈していたんだろう。

……で、学校の中を一人で探検していたら美術室で楽しそうに絵を描いている

あたし達を発見した……というワケみたいだ。

「亜理紗、体育館戻るぞ？」

「やだあつ、ありさ、ここでおねいちゃんたちと

おえかきするもんっ」

「だめっ、みんなの邪魔になっちゃうだろ？」

「いやー、ありさもおえかきするっー」

「亜理紗っ」

宗が少し大きな声を出すと亜理紗ちゃんはぎゅっと目を閉じて、ビクツとした。

「二ノ宮、俺達なら別に構わないぞ？」

すると、その様子を見かねた姉川先輩が口を開いた。

「このまままた体育館の方に連れ戻しても

また退屈していなくなっちゃうぞ？

それなら、ここで俺達と一緒に絵を

描いてるほうがおまえも安心だろ？」

「でも、迷惑じゃないですか？」

「そんな事ないよ。亜理紗ちゃん、ここなら

いい子にされてるよね？」

姉川先輩はニツと笑って亜理紗ちゃんの顔を覗き込んだ。

「うんっ」

亜理紗ちゃんは大きく首を縦に振った。

宗はしばらく考えた後、

「亜理紗、絶対邪魔しちゃダメだぞ？」

みんな大事な絵を描いてるんだから、

むやみに触ったりして台無しにしたら

お家に連れて帰ってやらないからな？

わかったか？」

と、亜理紗ちゃんに言い聞かせた。

そして亜理紗ちゃんが元気よく

「はぁーいつ」

と、返事をする

「じゃあ、よろしく願いします。」

宗は頭を下げて体育館に戻っていった。

続編 - にいたん・2 -

「琴美、ごめんな。大変だっただろ？」

部活が終わって、いつものように宗と帰っていると

亜理紗ちゃんの手を引きながら疲れた様子で宗が言った。

「そんな事ないよ？ 亜理紗ちゃん、

ずっといい子でお絵描きしてたし」

宗が部活に戻った後、亜理紗ちゃんは

あたし達と一緒に絵を描き始めた。

亜理紗ちゃんは絵を描くのが好きなのか

楽しそうにいろんな絵を描いていた。

宗の顔やあたしの顔、パパやママの顔、

部員みんなの顔も描いてくれた。

「わがまま言ったり、暴れたりしなかった？」

「うん、全然」

「なら、よかった」

宗はそう言つとちょっと安心したように笑った。

なんだか、今日は時間がゆっくり流れている。

亜理紗ちゃんの歩く速度に合わせてるからかな？

そうして、いつもより時間をかけて駅まで歩いていると

亜理紗ちゃんの歩くスピードがさらに遅くなった。

(……?)

「亜理紗、眠いのか？」

宗は足を止めて亜理紗ちゃんの顔を覗き込んだ。

すると、亜理紗ちゃんは眠そうな顔でゆっくりとコクンと頷いた。

「しょうがないなー、ほら、おんぶしてやるから」

宗は今にも寝てしまいそうな亜理紗ちゃんを負った。

亜理紗ちゃんは宗の背中にしがみつくと

すぐにスウスウと寝息を立て始めた。

最初は亜理紗ちゃんの“にいたん”が宗だとわかって意外だったけど

こうして亜理紗ちゃんをおんぶしている姿を見ると

やっぱりお兄ちゃんなんだなーと思った。

「そういえば、宗、あたしの写真、部屋に飾ってるの？」

あたしは亜理紗ちゃんの言葉を思い出した。

“ いたんのおへやにしゃしんがあるのー ”

「え……亜理紗がなんか言った？」

「うん」

「……」

宗は少しだけ顔を赤くして黙り込んだ。

「……」

で、なんとなくあたしも黙ってしまった。

「あたしも宗の写真、飾ってるよ?」

少しの沈黙の後、あたしが思い切って言うと

「え?」

と、宗が驚いた顔をした。

「学校で毎日会えるのにつて、この間誠に笑われたけど」

「……うん」

宗はちょっとだけ照れた様に返事をした。

電車の中でもあたしと宗はあまり言葉を交わさなかった。

今日は本当にゆっくり時間が流れている。

そして、電車を降りて駅の改札を抜けて別れる時、

「琴美、明日も学校行く？」

と、聞かれた。

「ううん、とりあえずコンクールの作品は

今日で仕上がったし、今年の部活はもう終わり」

あたしがそう答えると、

「そっかー……じゃあ、当分会えないのかー」

宗は残念そうに言い、

「琴美、こっち」

あたしを駅前の小さな公園の木陰に連れて行った。

(???)

「HPとMP回復させて？」

「へ？」

「キスしたい」

「ここです？」

「うん」

「こ、こんな人がいっぱいいるト」……」

「大丈夫だって、ここなら人目に付かないから」

(だから、あたしをこんなところに連れてきたんだ？)

「琴美……」

宗に名前を呼ばれ、顔を上げるとすでに顔が目の前まで近づいてい

た。

「しゅ……」

待つて……と言おうとした時にはもう唇を塞がれていた。

あたしはそのまま目を閉じた。

「あー、にいたんことみちゃん、チューしてるー」

「……っ!?!」

てつきり寝ていると思っていた亜理紗ちゃんの声がして

宗は咄嗟に唇を離れた。

亜理紗ちゃんを負ぶったままだったから、背中越しに見ていたのだ。

「亜理紗っ、起きてたのか?」

「いま、おつきしたー」

「今のは見なかった事にしろ」

「どうしてー？」

「いいから、他の人に言ったら“おしりペンペン”だからな？」

「あーい」

宗は亜理紗ちゃんにすっかり口止めをすると、

「じゃあ、琴美、またな」

と、苦笑いしながら亜理紗ちゃんと一緒に帰って行った。

続編 - にいたん・3 -

年が明けた最初の選択授業。

去年の12月の初めに陶芸をやった時に作った作品が手元に届いた。
あたしは宗に、宗はあたしに……それぞれ色違いのマグカップを作った。

そして部活が終わった後、“二人だけの交換会”。

「“せーの”で一緒に開けよう」

箱に入ったマグカップをお互い交換すると、

宗がわくわくした様子で言った。

「うん」

マグカップは作る前に色と形だけは決めていた。

しかし、出来上がった物を見るのは楽しみが減っちゃうから、

この瞬間までやめておこうと話していた。

だから、あたしも宗もお互いが作ったマグカップを

見るのはこの瞬間が初めてだった。

「「セーのっ」「」

宗と顔を見合わせて、一緒に箱を開けると、

宗があたしに作ってくれたマグカップは

とても綺麗なクリーム色だった。

「うわぁ、きれいっ」

「おおっ、すげえーっ！」

（宗、喜んでくれたかな？）

「琴美、ありがとう」

宗はあたしが作った碧いマグカップを

箱から出して手に取ると嬉しそうに言った。

「宗、ありがとう」

あたしもそう言っていると、宗はニッと笑った。

そして、正門を出ていつもの様に駅に向かって歩いていると

目の前をメグちゃんと西山くんのカップルが歩いていた。

「メグちゃんと西山くんだ」

「なんか……デカイカップルだな」

「二人ともバレー部だからねー」

「てか、藤村さんまた背伸びてない？」

「あ、わかった？」

「うん、なんとなく微妙にスカートの丈が短くなってるから」

「宗……どこ見てんの……？」

（まったく……）

「あ……いや、たまたまだって、

たまたま気がついたと言うか……」

「やらしー」

「ホント、たまたまなの」

「……」

あたしが無言で歩くスピードを速くすると

宗は焦った様子で

「てか、琴美も背伸びたよね？」

と、言った。

「全然、1mmも伸びてませんけど？」

「あ、あれえ？」

「……」

「琴美っ」

「……」

「琴美ちゃん？」

「……」

（宗のバカッ）

「ホントにたまたまなんだってばあ〜っ」

「……ホント？」

「ホント」

「じゃあ、許す」

「よかったー、琴美がそのまま許してくれなかったら

俺、死ぬトコだったよ」

「それはウソだって」

あたしは宗があまりにも大袈裟な事を言っただから

思わず吹き出した。

「マジで。だって許して貰えなかったら

話す事もできないし、一緒にも学校行けないし、

帰ってくれないし、それになにより……」

「？」

（なにより？）

「キスができないっ」

（え、それ？）

「て、事で“仲直りのチュー”」

「ちょ……っ、前にメグちゃん達いるし」

「えー、イギリスじゃキスなんてその辺でやってるよっ。」

「ここは日本だし」

「むー、イギリスなんて挨拶なのにー」

だから……

ここは日本だってばーっ！

宗はお父さんが日本人で、お母さんがイギリス人のハーフだ。

それに小学校にあがるまでイギリスで暮らしていた所為か、

キスの感覚が“外人”なのだ。

……ちょっと……困っていたりする。

続編 - にいたん・4 -

3日後。

朝、いつものように改札口に行くと

珍しく宗の方が遅く来た。

「おはよう」

あたしが宗に手を振ると

「……おはよ」

なんだかムスツとした様子で宗が言った。

「？」

（あれ？　なんか宗、機嫌悪い？）

宗は無言であたしの手を少し乱暴に握ると、
スタスタと歩き出した。

「宗……どうしたの？」

「……別に」

宗は短く返事をするそそれきり、前を向いて

あたしとは話そうとしなかった。

（どうしたのかな……？）

あたし、なんか怒らせるような事しちゃったのかな？

それから宗は学校でもずっとムスツとした顔をしていた。

普段は周りにいる女の子達も近づいたり話しかけたりしていない。

「琴美ちゃん、二ノ宮どうしたの？」

すると後ろの席からボソツと小声で武田くんが聞いてきた。

「それ、あたしも気になってたんだよねー」

メグちゃんも今朝から気になっていたらしく、

武田くんと同じ様に小声で言った。

「それがー、あたしにもよくわかんなくて……」

「琴美、なんにも聞いてないの？」

「う、うん」

「親とケンカでもしたのかな？」

「うーん、あたしもそう思ってるんだけどー……」

「まあ、明日になればフツーに戻るんじゃない？」

「だな」

メグちゃんと武田くんはそう言つと別の話題に移つた。

……だけど、それから更に三日が経つても宗の機嫌は直らなかつた。
。

日曜日。

今日は宗の誕生日の日。

しかし、宗の機嫌がまだ直ってなさそうだから

実はあんまり気が乗らないでいた。

そして午後１時に自転車で家を出て、駅に向かっていると

宗からメールが届いた。

- - - - -

ごめん、だいぶ遅れる。

- - - - -

「へ？」

（何かあったのかな？）

だいぶ遅れるって事は一度家に戻った方がいいのかな？

それとも駅で待ってた方がいいのかな？

(うーん……どうしよう?)

迷いながら、とりあえず駅に向かった。

駅でしばらく待ってみて、それでやっぱり

会えないって事になったら帰ろう。

駅に着いて、駐輪場に自転車を停めて駅前の小さな公園の前に行く
と、

ベンチに小さな女の子が座っていた。

(あれ? 亜理紗ちゃん?)

あの背格好とツインテールは亜理紗ちゃんに間違いない。

「亜理紗ちゃん……？」

声を掛けると亜理紗ちゃんはゆっくりと顔をあげ、

「……ことみ、ちゃん……」

と、あたしにしがみつき、わんわんと大きな声で泣き始めた。

（ええっ！？）

続編 - にいたん・5 -

亜理紗ちゃんが泣き止んで、ようやく落ち着いた頃、

「どうしたの？」

と、あたしが聞くと

「……ことみちゃん……、さがしてたの……」

亜理紗ちゃんは小さな声で答えた。

「あたしを？」

（なんで？）

「うん……、ことみちゃんがにいたんにあげた、

コップ……こわれちゃったの……」

「それってー……碧いマグカップ？」

「うん……」

選択授業で作ったあのマグカップだ。

「ありさ、そのコップ、つかいたくて、にいたんにおねがいたの……」

でも、にいたんがダメっていったから、ないしょでつかってたら、おっことしちゃったの……」

(あらら……)

「そしたらにいたん、ものすごくおこって……、」

ありさのことゆるしてくれないの……」

（それですつと宗の機嫌が悪かったんだ……）

「だから、ことみちゃん、おんなじコップうつてる

おみせ、おしえて……？」

亜理紗ちゃんは目に涙をいっぱい溜めていた。

「……ごめんね、亜理紗ちゃん、あのコップ、

売ってないんだ……」

「もう、ないの？」

「うーん……えつとね、あれはお店じゃ買えないの」

すると、亜理紗ちゃんはシュンとして俯いた。

「あ、でも、大丈夫だよ、きつとにいたん、

もう許してくれるよ」

「うん、にたん、ありさとずっとおくちも

きいてくれないもん……」

「大丈夫、にいたんきつと許してくれるよ。」

それより、亜理紗ちゃん、もしかして一人で来たの？」

「うん」

「お家の人にはちゃんと言って来た？」

あたしが顔を覗き込むと亜理紗ちゃんは首を横に振った。

きつと今頃、宗の家では亜理紗ちゃんがなくなって大騒ぎしているはずだ。

さつき宗がメールで遅れると言ったのは亜理紗ちゃんを捜しているからだろつ。

「じゃあ、にいたんにお迎えに来て貰おうね？」

「……」

すると亜理紗ちゃんは不安そうな顔であたしの顔を見上げた。

「大丈夫、あたしがついてるから」

亜理紗ちゃんの小さな手を握るとひんやり冷たくなっていた。

10分後。

「亜理紗っ！」

自転車に乗ったまま宗がベンチに近づいてきた。

その声に亜理紗ちゃんはビクツとして、両目をギュッと閉じながら

「……ごめんなさい……」

と、泣きそうな声で言った。

「あー、宗、待ってっ」

宗の顔は完全に怒っている時の顔だった。

亜理紗ちゃんに何かを言おうとして口を開きかけたところを

あたしに止められ、眉間に皺を寄せた。

亜理紗ちゃんは宗に怒鳴られると思ったのか、

あたしに抱きついたまま、グスン、グスンとまた泣き始めた。

そして、その様子を見た宗は溜め息をつきながら

自転車を降りて亜理紗ちゃんの隣に腰を下ろした。

「亜理紗ちゃんから聞いた」

「……………」

「亜理紗ちゃんね、宗が怒ってるのすごく気にしてて

それで、どこのお店に行けば同じマグカップを売ってるのか

あたしに聞く為にここであたしを捜してたんだって」

あたしがそう言うのと宗は驚いた顔で泣いている亜理紗ちゃんに視線を移した。

「にいたん……………」
「ごめん、なさい……………」

「亜理紗、あれはな、琴美が作ってくれた

世界でたった一つのマグだったんだぞ？」

「じめん、なぞ、い……」

「宗、亜理紗ちゃんの事、もう許してあげて？」

「……」

「宗？」

「……わかった。もう、いいよ、亜理紗」

宗はあたしが顔を覗き込むと、少しだけ表情を柔らかくした。

「……ほんと？」

亜理紗ちゃんは宗の顔を少しだけ見上げた。

「うん……だから、お家に帰ろう。お父さんとお母さんが心配して

る」

宗は亜理紗ちゃんの頭を優しく撫でて親指で涙を拭くと手を繋いだ。

亜理紗ちゃんを家に連れて帰った後、宗はまたすぐに

あたしが待っている駅前の小さな公園に戻って来てくれた。

「亜理紗のやつ、今頃こっ酷く叱られてるだろうなー?」

「だ、大丈夫なの? 放っておいて」

「まあ、今回の事は俺がずっと亜理紗と

口利いてやらなかった所為もあるから、

母さんにはあんまり叱らないでやってくれとは

言っておいたけど黙っていなくなっちゃったからなー。

一時間くらい説教されるんじゃないか？」

「宗、そんなに怒ってたの？」

「だって朝、あのマグカップでコーヒー飲むの

楽しみにしてたのに、俺が学校行ってる間に

こっそり使ってて割ったとか言われたら誰だって怒るだろ。

しかも、俺まだ3、4回しか使ってなかったのにー」

「そうだけど、弟や妹ってお兄ちゃんやお姉ちゃんが

使ってる物を自分も使いたいわって思うのよ。

あたしだって今までにどれだけ誠におもちゃとか

食器とか壊されたか……。

今だってあたしのシャーペンとかよく勝手に
持って行ったりするんだよ？」

「他の物ならともかく、琴美が作ってくれた

初めてのお揃いのマグでお気に入りだったし、

亜理紗に使わせたら絶対割られるってのが

わかってたから使っちゃ駄目だって言ってたのに、

勝手に使っし、予想通り割るし」

宗はそう言うところとただけ頬を膨らませた。

その頬をあたしが指でつついて潰すと宗はちよっただけ笑いながら

「琴美、それより今日はどこに行く？」と、言った。

いつもの宗の顔に戻った。

続編 - にいたん・6 -

「おい、二ノ宮、お前今日何個貰ったんだ？」

部活が終わり、いつものように部室で着替えていると

武田が興味深そうに聞いてきた。

「……」

武田がこんな事を聞く理由はただ一つ。

今日は2月14日。

バレンタインデーだからだ。

「あ、それ、俺も興味あるな」

「学校一のイケメンの収穫率は一体どれくらいなのか」

「で？ 何個？」

一緒に着替えていた先輩達もそう言いながら俺に視線を移した。

「多分、10個くらいです」

俺がそう答えるとみんなは「え、そんなもん？」と、意外そうな顔をした。

確かに今朝、駅で琴美を待ってる時も昼休憩も

部活に行く前も女の子がチョコを渡しに来た。

でも、俺は全部断った。

断ることが出来なかった物……勝手に下駄箱に入ったり、

机に入ったりって言う物に関しては仕方なく受け取ったけれど。

「琴美ちゃんからはやっぱ手作りの貰ったんだろ？」

武田はもぞもぞと着替えの続きをしながら言った。

「……………」

しかし、実は琴美からはまだ貰っていなかった。

「え……まさか、琴美ちゃんからもまだ貰ってないのか？」

返事をしない俺に武田は意外そうな顔を向けた。

「う、うん……」

「えー、俺、てっきり朝一で貰ったんだと思ってた」

（俺もそう期待してた）

朝一でくれたら嬉しいなー、なんて思っていた。

けど、琴美は朝一どころか今日一日、まるでくれる気配がなかった。

「ひょっとして、他の子からいっぱい貰うから

あげなくてもいいって思ってたたりして」

武田は笑いながら冗談っぽく言っただけど、

俺は結構本気でそうなのかも……と思ったりした。

着替え終わって、いつものように正門に行くと

琴美の方が先に待っていた。

「ごめん、待った?」

「うっん、全然」

そう言うと琴美は俺と一緒に普通に歩き始めた。

(なんか……ホントにチョコをくれる気配もないんだけど?)

もしかして、琴美の事だから今日がバレンタインデーだって事、
思いつきり忘れていたのかもしれない。

あー、そうか、そうか。

それなら全然有り得る。

だって琴美だもん。

「宗、どうしたの？」

いろいろ考えていると琴美が不思議そうな顔で俺の顔をじっと見ていた。

「なんか、眉間に皺寄せて考え事してるのかと思ったら、

突然、閃いた様な顔して一人で納得したような顔してるし」

「え、俺、そんな一人百面相してた？」

「うん、してた」

琴美はクスツと笑った。

俺はその屈託のない笑顔を見て思った。

（あ、こりゃ完璧忘れてるわ）

俺は諦めてバレンタインデーの事は忘れることにした。

「宗、ちょっとだけ時間……あるかな？」

電車を降りて改札で別れる時、琴美が少し遠慮がちに言った。

「うん？ 全然あるよ？」

俺と琴美は駅前のあの小さな公園のベンチに座った。

「あのね……宗」

「ん？」

「こ、これ……」

琴美は恥ずかしそうに少し俯きながら、俺に何かを差し出した。

それはさっきまで琴美が大事そうに持っていた紙袋だった。

「？」

「今日、バレンタインデーだからー……」

（え？）

紙袋の中身は透明なギフトバッグの中に薄いイエローの

ペーパーパッキングが詰められ、その中には先日、亜理紗が壊したはずの

あのマグカップがあった。

「琴美……これ……」

「授業で作った時と違う粘土と釉薬使ったから、あのマグカップとは

まったく同じにはならなかったけど」

琴美はそう言ったけど、俺の目にはあの碧いマグカップそのものに見えた。

（わざわざ作り直してくれたんだ……）

そして、そのマグカップの中には小さなハート型のチョコレートがいくつか詰められていた。

きつと琴美の手作りだ。

「ありがとうっ、琴美」

「おいしくないかもしれないけど」

「そんな事ない。絶対、琴美のが一番美味しいよ」

（てゆーか、琴美のチョコしか食べる気ないけど）

「ところで、もう一つあるけど？」

紙袋の中には、もう一つあった。

碧いマグカップと同じように透明なギフトバッグの中に白いペーパーパッキン、

その中に桜色のスープレマグと丸い小さな手作りチョコが詰められている。

「あ、そっちは亜理紗ちゃんに」

「亜理紗に？」

「うん、気に入ってくれるといいんだけど……」

「しかも、チョコ付き？」

「だって、今日バレンタインデーだし」

「亜理紗は女の子だからチョコは俺が貰うっ」

「えっ！？　ダメだよっ」

「なんで？　大丈夫だよ、亜理紗にはこっちのチョコやるから」

俺は琴美以外から貰ったチョコを見せた。

こっちは元々全部亜理紗に“処分”してもらうつもりでいた。

「むー、せっかく亜理紗ちゃんに作ったのにー」

「もちろん、ちゃんとスープマグは亜理紗にあげるよ。

ホントは俺が使いたいくらいだけど。

でも、琴美のチョコは全部俺が食べるのっ」

「にいたん”意地悪だね?”」

琴美はアハハッと笑いながら言った。

「にいたん”言うなー”」

琴美のおでこをツンと軽く指で弾いた。

そして、少しの沈黙の後、

琴美は恥ずかしそうに俯いて、

「……宗、好きだよ」

と、言った。

すごく小さな声だったけど確かに聞こえた。

「俺も……好きだよ」

（木陰に連れて行けばよかった……）

ベンチじゃなかったら間違いなく、琴美にキスしてたのにな。
。

続編 - にいたん・6 - (後書き)

これにて続編『にいたん』は終わりデス(´・`・´)
さらなる続編は・・・また妄想が湧いたときに

応援ありがとうございました。 m (´・`・´) m

続編 - 1 on 1・1 - (前書き)

久しぶりの続編です。
新学期、二年生になった琴美と宗のお話。
長くならない予定です。

入学式の前日。

1年3組の最後のHRで新2年生のクラス替えの振り分けが
プリントで配布された数十秒後……

「ノオオオオオオオオーウツ!!」

宗の声が教室に響いた。

「「っ!?!」」

あたしとメグちゃんは思わず顔を見合わせ、宗に視線を移した。

……というより、クラスのみんなが宗に視線を移した。

すると宗はプリントを両手で持ったまま涙目でゆっくりと

あたしの方に顔を向けた。

(……え?)

何か言いたそうに、訴えるようにあたしを見つめている宗。

そして無言でプリントを指差した。

「？」

不思議に思いながらあたしはプリントに目をやった。

だけど別に変わった箇所はない。

至って普通のプリントだ。

もう一度、宗の方に視線を向けると今度は机に顔を伏せていた。

(なんで宗、あんなに落ち込んでるんだろ?)

あたしは再びプリントに視線を戻した。

そして、その後すぐに「あつ、俺、琴美ちゃんとまた同じクラスだ」

後ろから武田くんの声がした。

「あたし9組だ」

隣からはメグちゃんの声。

（みんな見つけるの早いなー）

あたしの目はちょっと乱視も入っている。

だからこんなびっしりと名前が並んだ名簿の中から

自分の名前を探し出すのは苦手だったりする。

「武田くん、あたし達何組だった？」

武田くんと同じクラスと言うことは武田くんに聞いたほうが早い。

「5組だよ」

（5組か……。……。あれ？ てか、さっきメグちゃん9組って……。）

「えー、メグちゃん9組ー？ あたし5組だよー？」

「うん、違うクラスになっちゃったね」

「うわーんっ」

「てゆーか……。琴美」

「うん？」

「二ノ宮くんとも離れちゃったんだね」

「……。え？」

（うそっ！？）

あたしは慌てて5組のクラス名簿の中から宗の名前を搜した。

（な、ない……）

宗の名前がない。

「あー、二ノ宮は1組かあー」

再び、武田くんの声が後ろから聞こえた。

1組のクラス名簿には確かに宗の名前があった。

「……」

（じゃあ、宗が落ち込んでるのって……）

宗の方をちらつと見るとまだ机に顔を伏せたままだった。

春なのに、あたしと宗には“真冬”がやって来た。

HRの後、新2年生になったあたし達はさっそくそれぞれの新しい教室へ。

「宗くん、一緒に教室行こ」

そう言っただけで数人の女子に囲まれる宗。

しかし、宗はその声にも無反応で2年1組の教室へ向かって歩き始めた。

「恵」

そして教室の外では西山くんがメグちゃんを待っていた。

メグちゃんと西山くんは同じクラスになった。

（いいなー、メグちゃんと西山くん）

ちなみに高杉くんと安藤さんも同じクラス。

榎本さんとは違うクラスになったみたいだけど。

「琴美ちゃん、一緒に行こ」

宗やメグちゃんの後姿を見送っていると武田くんに声を掛けられた。

「う、うん……」

スタスタと歩く宗。

その後を追いかける女の子達。

その少し後ろにメグちゃんと西山くんが楽しそうに一緒に歩いて、さらにその後ろに高杉くんと安藤さんが歩き、それを追いかける高杉派の女子と榎本さん。

とっても変な行列だ。

その変な行列の最後尾はあたしと武田くんだけど……。

2年5組の教室の中は意外と静かだった。

……いや、今までが煩過ぎたのかもしれない。

宗と高杉くんのイケメンコンビのおかげで教室の中はいつも

女の子達がいっぱいいた。

休憩時間には他のクラスからも来て、予鈴が鳴っても

授業が始まるギリギリまで二人の周りに居たし。

しかし、今はそれぞれが喋っている程度。

寧ろこれが普通なのだ。

（宗はさっそく囲まれてるんだろうなー）

翌日、入学式の後。

新入生との対面式で、琴美はいきなり注目の的になった。

今年の二月に行われた絵画コンクールで琴美が出展した作品が佳作に選ばれた。

その時の受賞式の様子と作品が部活紹介の時に多目的ホールのステージの大画面に

スライドで映し出されたのだ。

受賞式の後、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに受け取った賞状と盾を持って

カメラ目線で笑っている琴美。

そして、その後に佳作に選ばれた作品が映し出されると感嘆の声が聞こえた。

満天の星空。

その宙を舞う女の子。

星の一つ一つが丁寧に描かれ、今にも動き出しそうな女の子の紅く長い髪の毛も

一本一本綺麗に描かれている。

でも、この絵を生で見た奴はこの中に何人いるだろうか？

俺は春休みに琴美と一緒に受賞作品の展示会を見に行った。

その時、俺の脳裏に去年の夏の合宿の時に見た星空が浮かんできた。

「これ……湘南？」

俺がそう聞くと、琴美は「うん、よくわかったね？」と驚いていた。

「俺も見たんもん……あの星空」

「そっか……」

その後、しばらく手を繋いだまま一人でこの作品を見た。

穴が開くほど。

大画面のスライドで見る作品も悪くはないけど、やっぱり生で見るのとは違う。

それを生で見た俺はちよつと優越感。

しかも作者と二人で見た俺はもつと優越感。

さらに言つと作者は俺の“彼女”。

（かなり、優越感）

放課後。

部活に出ると、なにやらものすごい数の女の子達が第一体育館の中に集まっていた。

（なんだ、なんだ？）

俺達が使っている第一体育館はいつも女子バレー部も一緒に使っている。

だからてっきり女子バレー部の入部希望者かと思っていた。

しかし、その女の子達は全員男子バスケット部のコートの前にいる。

そして、俺がコートの前に行くと耳を劈くような黄色い声が沸きあがった。

「きゃーっ！」

「来たあっ」

「カッコいいっっ」

一斉に俺の顔を見て騒ぎ始めた女の子達。

（え？）

俺がポカンとしているとクスクス笑いながら武田が傍に来た。

「相変わらず、モテるねー」

「何あれ？」

「おまえのファン」

「は？」

「今日の部活紹介の時に流れたバスケット部のスライドにさ、

おまえが映ってたじゃん？」

「うん」

「それを見た新生の女の子達がマネージャー希望で来てるんだよ」

「こゝ、こんなに？」

「パッと見ただけで優に20人以上はいる。」

「え……で、まさか、全員マネージャーで入るの？」

「マネージャー希望とか言ったって、どーせおまえ目当てなんだし、彼女がいるって知ったら、さっさと辞めちゃうんじゃないかなあ
！。」

今、部長が岡嶋先生を呼びに行ってるけど多分全員断るんじゃないか？」

そういえば、確か去年も同じ様な事があった気がする。

その時も岡嶋先生は「マネージャーはいらない」と言って女の子達を一蹴した。

10分後。

新部長の加納先輩が男子バスケット部の顧問・岡嶋先生と一緒に戻

ってきた。

「集合ーっ！ マネージャー希望の女子も来てー」

加納先輩の集合命令で部員達とマネージャー希望の女子達が岡嶋先生の前に整列した。

「えー、マネージャーの件だがー……」

岡嶋先生は部員全員と女子達の顔を見回しながら口を開いた。

「ずばり、いらない」

そしてキッパリ言い切った。

……やっぱり。

「そういう訳でマネージャーがやりたいんなら他の部に行ってくれ」
そう言った岡嶋先生の言葉に部員達は誰も異議を唱えない。

みんなもマネージャーなんていないと思っているからだろう。

しかし、一人の女子が食い下がってきた。

「でも、私、バスケ部のマネージャーがやりたいんです」

「じゃあ、女子バスケ部の方に行けば？」

「私は女子じゃなくて男子バスケ部のマネージャーがやりたいんです。」

それに私達の話も聞かないで断わるなんて」

「君だって話をちゃんと聞かないで来ただろ？」

部活案内では入部希望者は各顧問に申し出るように言っていたはずだ。

それなのにどうして直接第一体育館まで来たの？」

「そ、それは……」

「まあ、その辺は他の女子にも同じ事が言えるけど。

とにかく、うちの部はマネージャーはいらないから」

岡嶋先生がそう言つと女の子達は男子バスケット部のマネージャーを諦め、

次々と第一体育館から出て行つた。

そして、去り際に聞こえた一言。

「サッカー部行ってみよ」

今度は多分……いや、間違いなく高杉目当てだな。

どこまでも不純な動機だ。

部活が終わって、正門に行くと琴美の方が先に待っていた。

「琴美ー、お待たせー……て、え？」

しかし、何故か数人の生徒も一緒にいた。

(?)

そして、俺と琴美が歩き始めると後ろからその子達も一緒についてきた。

(……んん?)

「こ、琴美……後ろの子達は何なのかな？」

「えっと……美術部に入部した一年生なんだけど……」

「へー、さっそく入部希望が来たんだ？」

「うん。なんか、部活案内の時に流れたスライドであたしの作品に感動したとか言って……」

「おおっ、すごいじゃん。それって琴美のファンで事だろ？」

「そうなのかな？」

「くつついて来てるって事はそうだろ」

「ちょっとづいけど。」

「てか、そんな動機でよく長谷川先生が入部を許可したなー？」

「うん。長谷川先生は『部員数が増えてラッキー』とか言ってたし」

「はは、そうなんだ？」

「でもあたしの作品に感動して入ってきた子より、秋川先輩目当てで入ってきた男子の方が多いんだよ？」

「うっひゃ」

さすが全校で第二位だけはある。

「その子達も長谷川先生、入部OKしたの？」

「うん」

部員が増えるなら何でも有りなのか。

……てなことを話していると後ろがなんだか騒がしくなってきた。

振り向いてみると秋川先輩と十数人の男子達だった。

「噂をすれば……で、あれ全部、今日入部した奴ら？」

「うん」

「バスケ部とはえらい違いだな」

「バスケ部には入部希望者来なかったの？」

「いや、来たよ。マネージャー希望の女子がわんさか」

「あはは、さすが校内一のイケメンがいるクラブは違うねー？」

琴美はからかうようにププツと笑った。

「でも、全員岡嶋先生が断った」

「そういえば、去年の今頃もそんな事がなかった？」

「うん、あった」

「なんでいつも岡嶋先生、断っちゃうんだろー？」

もしかしたら本気でマネージャーやりたいって子がいるかもしれないのに」

「あー、それ俺も去年聞いたなー、なんかさ、昔同じ様な事があったんだって。」

背が高くて、運動神経抜群で、頭も良い超イケメンがバスケット部にいてさ、

それでその人目当てにマネージャーになりたいっていう女子が殺到して、

とりあえずその子達全員の入部を許可したのはいいんだけどなんせ人数が多いし、

目的がその人目当てだからちよつとでも他の子が抜け駆けしたらすぐ喧嘩になって大変だったらしい。

しかも、マネージャーは部員全員の面倒をみなきやいけないのにそのイケメン君の言う事しか聞かなくて他の部員から大ブーイングで、

結局、その女子達はバスケット部から追い出されたんだって」

「ふーん……、だからなんだ」

俺はこの時、美術部にも同じ様な事が起きなきゃいいけど……なんて思っていた。

数日後。

美術部にはさらに新入生が入部した。

俺と琴美の後ろにくっついて帰る子がまた増えていたのだ。

全員女子。

しかも、その女子というのが先日バスケット部への入部を断られた内の三人で

さらにその中には岡嶋先生に食って掛かってた子がいた。

結局、あの女子達はサッカー部でも同じ様な理由でマネージャーを断られたらしい。

（それで何故に美術部？）

マネージャーがやりたいと言ったからには野球部とか男子バレー部に行くと思っていたのに。

……なんだか嫌な予感がした。

そして、さらに三日後、俺の予感が見事に当たった。

その日の帰りは久しぶりに琴美と二人きりになった。

ここ最近、ずっと美術部に入った新入生達が俺と琴美の後ろをついて来ていた。

しかし、今日は一人も居ない。

「今日“ファンの皆さん”は？」

「……全員、辞めちゃった」

溜め息混じりに答えた琴美はなんとなく元気がなかった。

「全員っ！？　なんで？」

「んー……新入生の子達ね、喋ってばかりで全然真面目に部活してなかったの。」

そりゃあ、あたし達だって部活中に喋る事はあるけど他の人の邪魔にならないように

小声で喋ったり、集中してる時が多いから必要以上に話し掛けたりしないんだけど、

新入生の子達はまったくそういう事気にしてなくて、部長に何度も注意されてたの。

だけど、全然静かにしてくれないし、絵を描いたりとか部活らしい部活もしないから

部長から長谷川先生に言って注意してもらったの、そしたら全員辞めちゃった……」

「そっか……」

(やっぱりな)

「でも、なにも辞めることはないのになー？」

「長谷川先生が『やる気がないんなら、真面目にやってる部員達の迷惑になるから辞めてくれ』って……」

「うおっ、長谷川先生も言うねえー。まあ、でも何回も注意してたんだから当然か。」

てか、琴美のファンはやる気あつたんじゃないの？」

「んー、それがそうでもなかったみたい」

「ふーん……なんかよくわかんねえ奴等だな」

まあ、何はともあれ、うざいのがなくなっ
てよかった、よかった。

翌日、この日の六時限目の授業は体育だった。

今日は第二体育館の方で苦手なスポーツの一つのバスケットボール。

……で、そもそも運動神経自体がないから全てのスポーツが苦手な訳だけど。

男子と女子で分かれて、更に出席番号順で二つのチームに分かれて試合。

あたしは相変わらずチームのみんなの足を引っ張っていた。

パスが回ってきててもすぐに相手チームにボールを奪われ、

ドリブルをしている途中でも奪われ、珍しくシュートを打てたとしても

“確実”に外す始末……。

ふと、隣で跳び箱の授業をやっている一年生のクラスの方に目をやると

その中には昨日、美術部を辞めた三人組の女の子達がいた。

こちらの方を見てクスクス笑っている。

なんだか私の下手くそなバスケットを笑われているみたいで嫌だった。

（あゝあ……早く授業終わらないかなー）

そして授業が終わってボールを片付けようと用具倉庫に行くと
ちょうど跳び箱を片付け終わったあの三人組もいた。

「ねえねえ、平野先輩のあの運動神経、ヤバくない？」

（え？ あたしの話？）

「あの人、バスケやった事ないのかな？」

「さあ？？」

「てか、なんであんな人が二ノ宮先輩の彼女なんだろう？」

「ホント、ホント」

「絵を描く事しか取り得がないのにねー？ どこがいいんだろう？」

そりゃあ、確かに運動は超苦手だし、周りから見ても誰よりも下手くそだってわかる。

“絵を描く事しか取り得がない”

すごくショックだった。

だけど本当の事だから何も言えない。

「二ノ宮先輩の彼女が美術部にいるって聞いたからどんな人かと思
ってたけど

全然たいした事ないじゃん」

「顔だってフツーだし」

「あれで去年の『校内コンテスト』三位だっていうんだから不思議
だよなー？」

「うんうん」

「美術部も辞めて正解。二ノ宮先輩の話とかもつとっぱい聞きた
かったのに

あの先輩クソ真面目に黙々と部活やってるし」

（あの子達、そんな目的で美術部に入ってたんだ？）

そういえば、やたらと宗の事を聞きたがっていた気がする。

(……てか、嫌な会話聞いちゃったな)

あたしは三人に気付かれないように踵を返した。

すると、いつの間にかあたしのすぐ後ろに武田くんが立っていて
思わずぶつかりそうになっていると「おい、おまえら」と三人組を
睨んだ。

武田くんの声に三人組の女の子達は同時に振り向き、あたしの顔を
見て

「あ、平野先輩いたんですか？」と含み笑いをした。

どうやらあたしが後ろにいるのがわかってて言っていたみたいだ。

「バスケット部のマネージャー断られたからって美術部に入ってまで
人の彼女の品定めかよ、サイテーだな」

武田くんはまるで自分の彼女が悪口を言われたみたいに怒っていた。

「別にそんなつもりじゃ……ねえ？」

「うん、うん」

女の子達は武田くんの怒った顔と口調が怖かったのか、ちょっとたじろいだ。

「やっぱ、おまえらみたいなのがバスケット部のマネージャーになんなくて正解」

武田くんは吐き捨てるように三人組に言い、用具倉庫を出て行った。

そしてあたしもなんとなく逃げるようにその場を後にした。

教室に戻ってから武田くんはまだ怒っているみたいだった。

ただ、あたしに「さっきの奴らの言う事なんか気にしないほうがいいよ」

とだけ言ってくれた。

ちなみに武田くんの席はあたしの隣だ。

そんな訳でHRの間もずっと無言で、ものすごい“不機嫌オーラ”が隣から漂っていた。

“絵を描く事しか取り得がない”

あたしはあの子達に言われた言葉が頭から離れないでいた。

顔も至って普通……いや、もしかしたらそれ以下なのかもしれない。

去年の『校内コンテスト』だって、まぐれかなんかだし。

頭はバカと言うほどではないけれど、ズバ抜けて良い訳じゃない。

運動神経も皆無。

絵を描くことだって小さい頃から好きでずっと描いていたから
みんなよりちょっと上達しただけ。

あたしより可愛い子はいっぱいいる。

あたしより頭のいい子も運動神経がいい子も。

あたしは本当に“絵を描く事しか取り得がない”のだ。

宗はこんなあたしなんかのどこがいいんだろうか？

その日の部活。

武田は部室に入ってきた時からずっと不機嫌そうだった。

部活中もムスツとした顔で、いつもは俺や他の奴がシュートを外したり

何かミスをした時は「ドンマイ」と声を掛けてくれるのに今日は無言だ。

しかし、部活が終わって一緒に部室で着替えていると徐に武田が口を開いた。

「二ノ宮ってさー……」

「あん？」

「琴美ちゃんのどこが好き？」

「は？」

（またコイツは……唐突に何を言うのかと思えば）

「どこってー、全部」

「ふーん」

「……」

「……」

「……で、おい、それだけかよっ」

「いや、在り来たりな答えだなー、と思って」

（悪かったな。“在り来たりな答え”で）

「おまえ、琴美ちゃんとバスケットした事ある？」

「琴美と？ あー、そういえばないなー」

琴美とはほぼ毎週末、駅で待ち合わせをしてデートしている。

デートコースはだいたい二人で街ぶらして疲れたらカフェで一休み。

後は観たい映画があれば見に行ったり、動物園や水族館に行ったり。

「それってー、琴美ちゃんが嫌がるから？」

「いや、ただ単に俺も琴美も“バスケやろう”とか言った事がないから」

「ふーん」

「……」

「……」

「……て、さつきからおまえ何が聞きたいんだ？」

今日の武田はなんかおかしい。

「今日さ、体育の授業でバスケやったんだ」

「へー」

「……」

「……で？」

「いや、まあー、それだけ」

「はあ？」

絶対おかしいっ。

「何？　もしかして、琴美があまりにバスケが下手だったから

ドン引きしてんのか？」

「別に引いてるわけじゃねえけど」

「琴美、運動神経ないもんなー」

琴美ははっきり言って運動系はまるで駄目だ。

物作りに関してはあんなにすごいのに。

「一緒にバスケやりたいとか思わないの？」

「んー、たまにはまあ、そういうデートもいいとは思っけど。

別にバスケじゃなくても琴美となら何やってても楽しいし。

てか、なんでそんな事聞くんのだ？」

「……いや、別に」

「つーか、おまえ今日部活の最中ずっと機嫌悪くなかった？」

「まあな」

「それって今の質問と関係あるのか？」

「……なくもない」

聞いてはみたものの、実はよく意味がわからなかった。

武田が不機嫌だった理由と俺と琴美。

一体、どう繋がるんだろうか？

それから武田は、俺が考えている間に謎だけを残して帰ってしまった。

「ねえ、宗はあたしのどこがよくて付き合ってるの？」

そして琴美と一緒に帰っていると、なぜか武田と同じ様な事を訊かれた。

（ひょっとして、琴美のクラスでこの手の話題が流行ってんのか？）

「どこって全部だよ」

そう答えた後、なんとなく琴美の様子がおかしい事に気がついた。

「……」

今朝は普通だったのに、なんか元気がない。

「なんかあった？」

「……ううん、なんでもない」

何か嫌な事があったのかもしれない。

でも、琴美は俺に何も言おうとしなかった。

「ならいいけど。あ、そうだ、明日のデートはさ、動きやすい格好で来てね？」

本当ならちゃんと話を聞いて元気付けてあげられればいいのだけだ、と、

本人が何も言おうとしないし、一緒にバスケでもして汗を流せば

少しは元気が出るかもしれないと思った。

それにさっき武田と話してて琴美と一緒にバスケをやってみたくなつたし。

「???」

「あ、後、タオルも持って来てね」

俺がそう言っていると琴美は不思議そうな顔をしながら「うん、わかった」と言った。

翌日。

昨日、宗に言われた通り動きやすい格好とタオル持参で待ち合わせ場所に行った。

ちなみに今日の待ち合わせ場所はいつもの駅じゃなくて、

あたしの家と宗の家のほぼ中間地点にある大きな公園の噴水前。

場所は知っているけれど来た事のない公園だ。

「琴美っっ」

噴水前に行くと宗の方が先に来ていた。

何故かバスケットボールを小脇に抱えている。

(?)

「バスケやるっ」

「へ？」

「琴美とバスケやりたい」

あ、そうか。

だから今日動きやすい格好で来いだのタオルを持って来いだの言っ
たんだ？

宗の後についていくと噴水から少し離れた場所にフェンスで囲まれた
バスケットコートがあった。

「ここ、俺がいつも練習で使ってるトコなんだ。道路からは見え難
くて

あんまり利用する人がいないから、ほぼいつも貸し切り状態」

「あはは、そうなんだ」

バスケットコートの中には同じ様にフェンスで囲まれたテニスコートがあった。

そっちの方も道路から見え難いからか使っている人はいない。

「琴美、行くよー」

軽くストレッチで体を解した後、宗はバスケットボールを手にして言った。

「な、何すればいいの？」

「1 o n 1」

「それって一対一の勝負って事？」

「そ」

宗は短く返事してニツと笑った。

「え……無理でしょ」

だって、あたしはただでさえまともにバスケ出来ないんだから

宗の相手が務まるわけがない。

「いいから、いいから」

宗はタンタンとボールを数回ドリブルさせてあたしにパスを投げた。

「そこからシュートして」

「？」

いきなり普通の 1 on 1とは違う気がするけれど……しかし、それよりも問題はそんな事じゃない。

「と、届かないと思う」

だってあたしが今立っている位置はフリースローライン。

ここからシュートしてゴールに届いた例がないのだ。

「……え」

すると宗はさすがにちょっと引いたみたいだった。

そしてあたしがとりあえずシュートをしてみせると案の定、ボールはゴールまで届く事無く

バウンドを数回繰り返してフェンスに当たった。

（やっぱりこんなじゃ、いくら宗だって一緒にバスケやりたいなんて気を失くしちゃうよね……？）

きつと呆れてるんだろぅな……と思っていると、

「もう少し頑張れば届きそうじゃん。琴美の場合は、まずボールをもう少し胸のあたりに持って来て、

そこからシュートを打ってみて」

宗が優しい口調で言った。

(……え)

意外だった。

「う、うん」

あたしは宗に言われた通り、顔のあたりから投げていたボールの位置を胸のあたりに下げてシュートした。

すると、今までゴールに届いた事がなかったボールがバスケットのリングに当たった。

（届いたっ）

「ほら、ちゃんと届いただろ？」

「うんっ」

「じゃあ、今度は腕だけで投げるんじゃないかって少し腰を落として膝も使う感じで」

「うん」

そしてまた言われた通り、少し腰を落として膝を意識してシュートしてみた。

すると今度はバグボードに当たってあたしの目の前に跳ね返ってきた。

「今、結構力入れてた？」

「うん」

「じゃあ、今度はあんまり力を入れずに打ってみて」

「……？ うん」

今まではずっとただバスケットを目掛けて力任せに投げていた。

それでもボールが届かず、一体みんなはどれだけ力があるんだろう？

なんて思っていたくらいだ。

しかし、今度は力を入れずにとわれた。

あたしはさっきよりも力を半分くらいにしてシュートした。

ポスンッ、

「あ、入った」

あたしが放ったボールはゆっくりとバスケットに向かって飛んでいき、

するんとリングの中を通った。

「やった ナイスシュート！」

宗はそう言つとあたしにハイタッチを求めてきた。

両手で宗とハイタッチ。

何度も、何度も。

初めてまともに出来たシュートが嬉しくて、宗もきつとシュートを決めた後は

こんな風に気持ちいいのになって思った。

宗がバスケットを好きな理由が少しだけわかった気がした。

続編 - 1 on 1・7 -

夕方6時半。

やっとの事で家に辿り着いた。

(じ、地獄……)

「……た、ただいま……」

玄関のドアを開けると夕飯のいい匂いがしていた。

死ぬほどおなががすいている今日はメチャメチャ美味しく食べられそうだ。

(あうう……疲れた……)

あれから宗はドリブルやパスのやり方も教えてくれた。

後は最初に言っていた1 on 1も。

もちろん、宗は全然手を抜いていた。

だって宗が本気を出したらあたしはきっとその動きの速さについて行けなくて

突っ立っているだけ。

こんな風に疲れることもないだろう。

「どうしたの？ 姉ちゃん」

二階にある自分の部屋を目指して重い足を引き摺るように階段を上っている

下から誠が不思議そうな顔で見上げていた。

「……バスケ、してきた」

「バスケ〜ッ!? 姉ちゃんが？ 誰とっ？」

誠は普段あたしがまったく運動なんてしないのを知っているからすごく驚いた。

「宗」

「え、シュウさんと？ それなら俺もやりたかったー。てか、姉ちゃん

よくシュウさんの相手が出来たね？」

(うつ……)

「宗がちゃんと手加減してくれたし、丁寧に教えてくれたもん」

「シュウさんの特別レッスン？」

「うん」

「えー、いいな、いいなー」

「それより誠、背中押して……」

「はあ？」

「足が重くて……上るのが辛い」

「……姉ちゃん、普段どれだけ運動不足なんだよー？」

そんな事を誠に言われつつ、何も言えないあたしは、今はただ階段を上る事で精一杯だった。

そして、その日の夕食、

「「おかわりーっ」「」

いつもは誠の声だけが響く食卓に今日はあたしの声も響いていた。

……しかし、

“ 本当の地獄 ” はその翌朝にやって来た。

「 おっはよ
」

駅の改札の前に行くと宗は相変わらず爽やかな笑顔で手を振っていた。

「 ……お、おはよう
」

「 あれ？ 琴美、どうしたんだよ？ なんか動きがおかしいぞ？ 」

ヨロヨロとまるでロボットのようになぐしゃくした動きで現れたあ

たしを見て

宗がちょっと嘔き出した。

「き、筋肉痛……」

「え、まさか昨日のバスケットで？」

「そう……そのまさか」

「……」

宗は何も言わなかったけれど、思いつきり呆れていた。

だって、いかにも「嘘だろ？ あんな程度の運動で？」と言った感じの顔をしているから。

「もうやりたくない？」

「うっん、そんな事ないよ」

宗と一緒に何をやってても楽しいし。

それに何より“絵を描く事しか取り得がない”なんてあの子達に言われっぱなしじゃ悔しいもん。

「でも、宗はあたしが相手じゃつまないんじゃない？」

「全然、すっげえ楽しいよ」

宗はにんまり笑って即答した。

その笑顔であたしは吹っ切れた。

“宗はあたしのどこがよくて付き合ってるのかな？”

そんな事を考えるのはもうやめよう。

宗が“楽しい”って言うてくれてるんだし。

「じゃあ、また今度一緒にバスケやろうぜ」

「うんっ」

「琴美の筋肉痛が治ったらだけど」

そして宗はその後、「しかし、筋肉痛で……どんだけー」と大笑いしていた。

続編 ・デザート・1・（前書き）

久々の続編です。

例によってあまり長くはありませんがお楽しみ頂ければと思います。

（´、`）

こちらの続編は500,000hit御礼企画の『もう一つのFirst Kiss【First Kiss特別番外編】』を先にお読み頂く事を推奨致します
<http://www.cherry-sozai.com/kiss1.html>（本家サイトに繋がります。PC用のサイトですので携帯からご覧の方はご注意下さいませ）

続編 ・デザート・1・

俺と琴美が付き合い始めて半年が過ぎ、早くも七ヶ月を過ぎようとしていた

六月のある日の事。

「琴美、さっき明日の練習試合の場所、メールしたんだけど届いた？」

「うん、見たよ」

「場所わかる？」

明日は他校と練習試合がある。

前回とは違う高校で私立F高校。

今回は俺達の方がその私立F高へ出向くのだ。

俺達バスケット部は全員で一台の貸切バスで行くけれど、応援に来てくれる琴美は

試合開始時間に合わせて公共の交通機関で来るのだが……果たして彼女は

一人で来られるのだろうか？

「武田君に地図描いてもらったから大丈夫だと思うよ？」

「え……武田に？」

（せっかく俺がちゃんと教えようと思ったのに……）

「これだよー」

そう言っつて琴美は武田が描いた地図をカバンから出して俺に見せた。

「……っ」

俺はその地図を見て絶句した。

「こ、琴美……まさかと思うけど、これで場所が理解出来たとか言

わないよな？」

「うん、わかったよ？」

「んな、アホなっ！？」

だって、武田が描いたというその地図には最寄駅とF高校までの道が一本と

いくつかの目印しか描かれていなかったからだ。

いくらなんでも初めて行く場所なのにこれで理解出来る訳がない。

（俺でもわかんないぞ？）

「大丈夫だよ、お昼に武田君とパソコンルームでちゃんとした地図を見ながら確認したから」

「……二人で？」

「うん」

「なんで俺んトコに来ないんだよ？」

「だって、宗、女子に囲まれてたもん……」

「来たの？」

「うん、宗に訊こうかと思って行っただけど女の子達がいっぱいいたし、

武田君から相手高校の学校名を聞いてたからパソコンルームで場所を調べようと思って行ったら、

武田君も来たの」

（……て事は、俺は一步も二歩も出遅れてたのか）

翌日、午後二時。

俺達が貸切バスで会場入りすると、試合会場のF高校の体育館前には既に数人の女の子達が集まっていた。

「俺らより早く会場入りって……」

隣で武田がぼそりと言う。

「つーか、おまえが窓際に座ってないからかな？俺、すんげー睨まれてんだけど？」

「気のせいだろ」

「だって、みんなおまえの方見て手振ってるし」

「……」

（てか、琴美早く来ないかなー）

そして、体育館に入ってF高バスケ部と顔合わせ。

今日の相手は去年のインターハイ予選では当たらなかったチームでデータはまだない。

今年のインターハイ予選が来週から始まるからお互いデータを集めるにはいい機会だ。

「二ノ宮先輩」

試合開始直前、ストレッチをしている俺に後輩が声を掛けて来た。

「これ、平野先輩からっす」

そう言って渡されたのは琴美からの差し入れ。

いつものレモンの蜂蜜漬けだ。

これが俺の元に届けられたという事は無事に琴美が到着したのだらう。

「サンキュー」

今日もタッパ―三つ分。

本当なら全部一人で食べたいところだけど。

(てか、琴美、どこにいるかな？)

一階のコートの周りは大勢の女子共で埋め尽くされている。

おそらくこの中にはいないだろう。

そう思い、二階に視線を移すと数人の女の子とうちの記録係の部員達がいて、その隣に琴美がいた。

「琴……」

「琴美ちゃん！」

俺が琴美に手を振ろうとしていると、横から武田が出て来た。

(む……)

「お？ 二ノ宮、それ、もしかして琴美ちゃんから？」

しかも目敏く俺が持っている差し入れを見つける武田。

「お、おう」

俺がそう答えると武田はまた琴美に「差し入れありがとー！」と手を振っていた。

その声ににこにこ笑って手を振り返す琴美。

またしても俺は出遅れた。

「いやあゝ、圧勝、圧勝」

そう言ってヘラヘラしているのは、前半にちょこつとだけ試合に出た武田。

F高チームは毎回地区予選で敗退しているだけあってそんなに強くはなく、

今日は運良く大差で勝てた。

「琴美ちゃんの差し入れのおかげかな」

そう、この日もフル出場だった俺は琴美の差し入れに救われた。

これから段々暑くなってくるから、出来れば毎日でも作って欲しいくらいだ。

（そうだ、差し入れのお礼ちゃんと言わなきゃな）

二階を見上げると、既に琴美の姿はなかった。

（あれ？ もう帰ったのか？ 少しだけでも話したかったのに…）

「二ノ宮、琴美ちゃんは？」

武田も琴美の行方を捜しているらしい。

「帰ったっぽい」

「えー、大丈夫かなあ？」

「？」

「いや、行きは多少わかんなくても、おまえ目当てに来る女の子の後ろについて来ればよかったけど、

帰りはなー……だってほら、まだほとんどの女の子が残ってるし」

「それもそうだな……ちょっと電話してみる」

琴美はものすごい方向音痴という訳ではないけれど、初めて来た場所だからちよっと心配だった。

発信履歴からリダイヤル。

しかし、聞こえてきたのはコール音の代わりに“ただいま電話に出る事が出来ません”という音声。

どうやらマナーモードにしているらしい。

「出ない」

「あらま。けどまあ、地図も持ってるし大丈夫かもな」

人を不安にさせておきながら立ち去る男・武田。

(いっ、いっ……)

そして、武田の背中を睨んでいると背後から俺を呼ぶ声がした。

「宗」

(琴美っ)

俺はてつきり琴美が片付けが終わるまで待っててくれたんだと思い、にやけた顔で振り向いた。

「あ……」

だけど、そこに立っていたのは……、

「やっぱり、宗だ　久しぶり！　あたしの事、憶えてる？」

俺のファーストキスを奪った女・横川千尋だった　。

続編・デザート・2 -

練習試合が終わった後、少しだけでも宗と話がしたくて体育館の外で待っていると、

中にいた女の子達がそろそろ出てきた。

（宗、もう後片付けとか終わったのかな？）

体育館を覗くと相手のF高校の部員達とうちの高校の部員達が仲良く雑談をしていた。

しかし、その中に宗の姿はない。

（あれ？ 外にいるのかな？）

外の水道で顔でも洗っているか、着替えているのかもしれない。

そう思って体育館の周りをぐるりと回ってみると、体育館と校舎の間の陰から話し声が聞こえてきた。

（宗？）

ボソボソとしか聞こえないけれど一人は宗の声、もう一人は女の子の声だ。

（わざわざこんな人気のない所で話してるって事は、告白でもされてるのかな？）

私は二人に気付かれないように、そーっと覗いてみた。

（あの子、確か……）

宗と一緒にいたのは相手チームのマネージャーの女の子だった。

とても親しそうに話をしている。

（友達だったんだ？）

宗に女の子の友達がいたなんて……ちょっとショック。

だって、あたし以外の女の子と宗が普通に話すのって、メグちゃんと安藤さんくらいだから。

（………帰る）

話の邪魔をしちゃ悪いし、これ以上待っても今日は一緒に帰れない。

あたしは二人の姿を見なかった事にして逃げるように踵を返した。

（こ、困った……）

あの場から早く立ち去りたくて、正門を出る女の子の集団の後ろにとりあえずついて行ったのはいいけれど……、

しばらく歩いたところで、はたと気が付いた。

“ここはどこだろうっ？”

辺りを見回しても行きとは違う道らしく、全然見覚えのない景色が広がっていた。

そつ……あたしは迷子になっていたのだ。

前を歩いていた女の子の集団もいつの間にかいなくなっていた。

武田君に描いてもらった地図を出しても、最寄り駅からの道と目印しか描いてないから役に立たない。

引き返すにしてもどこをどう通って来たのかわからない。

(どこどこお?)

周りは知らない建物ばかり。

しかも住宅地で案内標識もない。

勘を頼りに大きな通りを目指して右往左往してみるけれど、歩いても歩いても

大きな道に出る事は出来なかった。

しかし、唯一の救いは歩き疲れて途方に暮れかけたその時、目の前に小さな公園が視界に現れた。

「はぁー……」

溜め息を吐きながらベンチで一休み。

そして、しばらくすると、あたしの目の前に誰かが立ち、頭上から声を掛けて来た。

「君……、応援に来てた子だね？」

（え？）

思わず顔を上げてみる。

すると、目の前に立っていたのは練習試合の相手チーム・F高の人だった。

「やっぱりそうだ。君、二階にいたでしょ」

「は、はい……どうして知ってるんですか？」

「眼鏡かけてたから憶えてたんだ」

（……？ そんなに特徴的な眼鏡でもないけどなー？

てか、他にも眼鏡かけてる子はいたし……）

「こんな所で何してるの？」

「あ……えーと……」

（「迷子になりました」なんて言ったら、きっと笑われちゃうよね？）

「うちの学校の子じゃないよね？」

「は、はい」

「もしかして……迷っちゃった？」

「……じ、実は……」

「あはは、やっぱり。この辺りは慣れてないと迷いやすいからね。駅まで行くの？」

「はい」

「じゃあ、俺が案内するよ」

「えっ、いいんですか？」

「うん、そんなに遠くないし」

「ありがとうございますっ」

こうして、あたしは突然現れた救世主によって救われた。

あたしを窮地から救ってくれたその人は市川^{いちかわ}円^{まどか}と名乗った。

バスケ部のキャプテンで一つ年上の三年生。

試合でも宗と同じ様にフル出場していた人で一番多くシュートを決めていた人だ。

「市川さん、ありがとうございます」

駅に着いてあたしが市川さんにお礼を言つと、

「どういたしまして」

彼は柔らかい笑みを浮かべた。

「琴美ちゃん、携帯の番号とメアド訊いてもいい？」

「はい」

親切な救世主にあたしは何の疑いもなく返事をした。

カバンから携帯を出して開くと着信アイコンが出ていた。

（あれ？ 電話鳴ってたんだ？ メールも？）

試合中に着信音が聞こえるといけないと思ってマナーモードにしたままカバンに

入っていたから全然気がつかなかった。

市川さんと赤外線通信で番号とメアドを交換した後、電話とメールの着信履歴を確認すると宗からだった。

（宗はもうみんなと一緒にバスで帰ってるかな？）

「時々、電話とかメールしていい？」

「はい」

この時もあたしは特に何も考えずに返事をした。

「それじゃあ、気をつけてね」

「はい、ありがとうございました」

あたしと市川さんは駅の改札の前で別れた。

市川さんは駅には何も用事はなかったのに、あたしの為にわざわざ寄ってくれたのだ。

さすがは部長。

みんなの上に立つ人は優しいし、親切だ。

- - - - -

ちゃんと迷わずに帰れた？

- - - - -

ホームに下りて電車を待つ間に宗からのメールを見ると、あたしが迷子になっていないか

心配しているみたいだった。

- - - - -

何度も電話やメールくれてたのに

ごめんね。

マナーモードにしてたから

気が付かなかった。

なんとか駅には辿り着いたよ。

-
-
-
-
-
-
-

宗からの返事はすぐに返ってきた。

-
-
-
-
-
-
-

そっか、よかった。

俺達はこれから今日の試合の

反省会。

また夜に電話するよ。

-
-
-
-
-
-
-

（あんなに点差をつけて勝ったのに反省会するんだ？）

夜、

宗から電話が掛かってきた。

「試合、お疲れ様」

『終わった後、少しだけでも話したかったんだけどなー』

「外で待ってたんだけど、結局帰っちゃった」

（親しそうに話してた女の子の事、訊いてみようかな？）

『あ、そうだ、差し入れありがとな』

「うん」

『琴美の差し入れのおかげで今日も勝てた』

電話の向こう、宗のとても嬉しそうな声が聞こえた。

「あはは、勝ったのは宗とみんなの実力だよ」

それでもやっぱり喜んでくれるのは嬉しい。

だから、あのマネージャーの女の子の事も訊くのはやめた。

だって普通は親しい女友達がいてもおかしくないもんね。
。

宗との電話を終えて携帯を閉じるとメールが来た。

（あれ？ 宗からかな？）

何か言い忘れた事でもあったのかもしれない。

そう思い、再び携帯を開くとそのメールは予想外の人物からだった。

- - - - -

市川です。

あれから無事に帰れたかな？

大丈夫だと思ったけど、

ちょっと気になったから。

- - - - -

本日の救世主・市川円さんからだった。

（市川さん、心配してくれてたんだ）

- - - - -

心配してくれてありがとう

ございます。

無事に家に辿り着きました。

- - - - -

あたしはすぐにメールを返した。

すると、市川さんから間もなくして返事が来た。

- - - - -

そっか。

それならよかった（＾－＾）

安心して寝られるよ。

おやすみ。

- - - - -

-
-
-
-
-
-
-

おやすみなさい。

-
-
-
-
-
-
-

そして、その日から数日おきに彼から電話やメールが来るようになった。

続編・デザート・3 -

七月、夏休みも近づいて来た頃、

「最近、二ノ宮ってマメにメールしてるよなー？」

部活が終わって部室で着替えていると、ふと武田が妙な事を言った。

「やっぱり違うクラスになって寂しいからか？」

「????」

武田の言っている事がさっぱりわからない。

「何の話？」

「おまえと琴美ちゃん」

「俺と琴美？」

「いや、最近よく休憩時間にメールしてるから」

「誰が？」

「琴美ちゃんが」

「誰と？」

「だから、おまえと」

「……俺っ？」

今の武田の話を整理すると……

『最近、休憩時間に琴美がよくメールしている』

『武田は相手が俺だと思っている』

『だけど、俺はしていない』

『つまり、琴美は俺以外の誰かとメールしている』

『考えられるのは藤村さん』

『だが、彼女なら直接教室に行くだろう』

『じゃあ……誰だ？』

「……………」

藤村さん以外の人物で琴美にメールしそうな人物を思い浮かべる。

しかし、もし仮にいたとして武田が“最近、よくメールしているなあ？”と思うほどの回数か？

いや、そもそもそれこそ教室まで行って話す方が早いし。

「なあ、それって休憩時間の度にメールしてるのか？」

「自分でしておいて訊くかあ？」

武田はまだ俺だと思っているらしい。

「てか、俺……休憩時間に琴美にメールする事ってほとんどないんだけど……」

「え……」

「で、そのメールって休憩時間の度にしてるのか？」

「う、うん……まあ……」

「……」

（誰だ？）

「ひょっとして……琴美ちゃん、浮気してるっばい？」

「っ!？」

「あ、いやいや……ま、まさかなー？ 琴美ちゃんに限って……」

そう…… “うちの子に限って” じゃないけれど、 “琴美に限って” 浮気なんて有り得ない。

そう思いながらも俺はその後、数日間琴美に事実を確認出来なかった。

数日後。

「……なあ、琴美」

相手が誰なのかわからないまま、いつまでも悶々とした気分での
のが嫌になり、

帰りに思い切って訊いてみる事にした。

「最近……よく休憩時間にメールとかしてない？」

「うん、してるよ？」

琴美は『よく知ってるね？』と言わんばかりの顔で答えた。

（あっさり認めたって事はやっぱり相手は女子で浮気じゃないのか
も？）

「誰としてるの？」

「んつとね、この間、宗達と練習試合した高校のキャプテンの人」

「え……っ？」

琴美の口から出た相手の正体は思いも寄らない人物だった。

あの横川千尋がマネージャーをしているバスケット部の部長だ。

「あの人、知り合いだったのか？」

（俺と横川さんみたいに同じ中学だったとか？）

「ううん……あの日ね、実は帰りに迷っちゃって公園のベンチで途方に暮れてたら、

たまたまそこを通り掛かった市川さんが駅まで連れて行ってくれたの。

やっぱりキャプテンをやるだけの人ってそれだけ人に対して気配りっていうか、

親切に出来る人なんだねー？」

「それ……絶対、ナンパだって」

「まさかあゝ？　だって、ナンパならもつと可愛い子に声を掛けるでしょ？」

そう言つて可愛らしく『あはは』と笑う琴美。

（おいおい、自分が“全校三位”だっていう事、忘れてないか？）

琴美は自分が可愛いという自覚がまったくない。

だからいつも無防備だし、誰に対してもこんな可愛い笑顔を向けるんだ。

「でも、現に携帯の番号とか訊かれたんだろ？」

（それとも琴美から訊いたのか？）

「うん、駅で別れる時に訊かれたから教えたんだけど」

（やっぱ、それナンパじゃん……）

「ちなみに……なんだけどさ、どんなメールしてるんだ？」

「朝は普通に『おはよう』とか、授業が終わった後とかは『さっきは数学で眠かった』とか」

（他愛もない話か……）

「もしかして……電話も掛かって来てたりする？」

「うん、時々」

「……」

黙り込んだ俺の顔を琴美は『どうしたの？』という感じで覗き込んだ。

「電話も他愛のない話？」

「うん」

「例えば、会う約束したりとか……は？」

「それは言われた事ないなあ」

「そっか……」

「ただ、何れきつと言ってくる。」

「もし……『会いたい』って言われたら……どうする？」

「どうするって、もちろん断るよ？　だって、市川さんと会うより宗と会いたいもん」

「琴美は『そんなの当然でしょ？』という風に柔らかい笑顔を浮かべた。」

「……そっか」

琴美がアイツの事をなんとも思っていないとわかり、とりあえずホッとした。

「でも……あんまり、親しくして欲しくない……。後、思わせぶりな事もして欲しくない」

「思わせぶりな事って……？」

「例えば『会いたい』って言われて、『会う気はあるけど用事があるからダメ』とか」

「うん、わかった」

そう言うてにっこり笑う琴美。

（ホントにわかってんのかな？）

「もしさ、断りきれずに会う事になったりした時は、ちゃんと俺に

言って？」

「うん」

「俺が琴美を守るから」

「市川さんは全然チャラ男じゃないから大丈夫だよ？」

「そりゃ、俺だってあの人の事、チャラ男だとは思ってないけど……」

（はあ……やっぱり、全然警戒心持ってないや）

もうすぐ夏休み。

琴美は今年も八月いっぱい湘南に行く事になっている。

七月いっぱい警戒しておけば、とりあえず心配はないだろうっけれど……。

しかし、武田が教えてくれなかったら全然気が付かなかったな。

(ふうーっ、あぶない、あぶない)

続編・デザート・4 -

その日の夜。

- - - - -

週末、どこか遊びに行かない？

- - - - -

市川さんからそんなお誘いのメールが来た。

（えーと……“会つ気はある”って言っちゃダメなんだよね？）

あたしは宗に言われた言葉を思い出しながら返事を打った。

- - - - -

ごめんなさい。

用事があるんです。

- - - - -

（これならいいかな？）

送信ボタンをポチッとな。

すると、市川さんからの返事はすぐに来た。

- - - - -

そっか、残念。

じゃあ、また今度。

- - - - -

“ また今度 ”

その言葉がなければ多分、あたしは返信していただろう。

だけど“また今度”という言葉に“はい”と答えてはいけない気がしてそのまま携帯を閉じた。

それから、さらに数日経ち、あたし達の学校は夏休みに入った。

あたしは例によって八月いっぱい、湘南にある親戚の民宿へお手伝いに行く為、

早々に宿題を片付けようと朝から晩まで机に向かっていた。

その間にも市川さんからメールが来ていた。

そして七月の終わり・三十一日の夜、市川さんから電話が掛かってきた。

『急なんだけど、明日会えないかな?』

「ごめんなさい……あたし、明日から湘南の親戚の家にお手伝いに行くんです」

『湘南に? いつまでそこにいるの?』

「八月いっぱいです」

『そんなに長く? じゃあ、もしかしたら向こうで会えるかも知れないね?』

「え?」

『俺達も今年の合宿は湘南でやるんだ』

「そうなんですかつ？」

『向こうで会えればいいね』

弾んだ声で市川さんが言う。

「……そうですね」

あたしはその声にただそう答えるだけだった。

『ところで“お手伝い”って親戚の家、何か商売でもしてるの？』

「はい、民宿をやっていて中学の頃から夏休みは毎年お手伝いに行ってるんです」

『そっか、民宿のお手伝いで行くなら忙しくて会う暇がないかもしれないね？』

「そうですね」

（よかった……諦めてくれそう）

本当はそんなに忙しくはないのだけれど、あたしはそういう事にしておいた。

八月。

あたしが親戚の民宿へお手伝いに来て三日が経った頃、厨房の窓からお隣の民宿の前に

貸切バスが止まったのが見えた。

どうやら新しい団体客が来たようだ。

バスのドアが開いてそろそろと高校生の男子生徒達が降りてくる。

（あれ？ あの人、見たことあるなあ？）

顧問の先生らしき人がバスを降り、なんとなく見覚えのある気がした。

（どこで見たんだっけ……？）

そして一番最後にバスから降りてきたのは……

（っ！？）

あの練習試合の日、宗と一緒に話していた女の子と市川さんだった。

（市川さん達の合宿って、お隣の民宿でやるんだ……）

その日の夜、

あたしがお風呂に入っている間に市川さんからメールが来ていた。

- - - - -

今日から湘南で合宿だよ。

琴美ちゃんの親戚の民宿って

どのあたり？

- - - - -

（“お隣”って答えない方がいいよね？）

市川さんの事、なんだか宗は気にしていたし、メールとか電話はともかく、

会って話したりするのはあんまりしてほしくなさそうだった。

だから、あたしは市川さんのメールには返さないでいた。

しかし、翌朝、

「琴美ちゃんっ？」

厨房のすぐ隣にある食材庫から出たところで誰かの声がした。

その声の方に顔を向けると、お隣の民宿の二階の窓から市川さんが手を振っていた。

「あ……」

（いきなり見つかった……）

「おはようっ、琴美ちゃんの親戚の民宿って隣だったんだねっ、びっくりした。でも嬉しいよ！」

そう言うてにつこり笑う市川さん。

「市川さん達もお隣で合宿だったんですね」

「これなら、いつでも会えるね」

「忙しくなければ……」

だけど幸い昼はずっと練習があるだろうし、夜も今日から宗達が合宿に来る事になっているから

一緒にいれば市川さんと電話やメールをしたり会う事もないだろう。

（あ、でも……）

市川さん達のチームには宗の友達がマネージャーとして付いて来ている。

（宗、あの子と会ったりするのかな？ あんまり会ってほしくないな……）

午前十時　。

宗達バスケット部を乗せた貸切バスが到着した。

玄関の方が騒がしくなり、大勢の足音は二階の大広間へ。

今年もここが彼らの寝室兼会議室になる。

「琴美
」

午後十二時、バスケット部の部員達が昼食を摂りに食堂に入って来て宗の声がした。

食事の用意をしながらあたしが手を振ると、彼も嬉しそうに大きく手を振った。

約二週間ぶりの再会だ。

（去年はまさか宗達がここで合宿するなんて思ってもみなくて、すつごく驚いたつけ）

あたしは一年前の事を思い出していた。

宗は昼食を食べ終わった後もずっと食堂のテーブルに座って頬杖をついて、にこにこしながら

あたしが後片付けをしている様子を眺めていた。

「宗、お昼寝しなくて大丈夫なの？」

午後二時からさっそく練習がある。

去年は確か大広間に戻ってみんなと一緒に昼寝をしていたはずだ。

「今日はまだ初日だし、全然疲れてないから平気」

……結局、宗は武田君が呼びに来るまでそうしていたのだった。
。

続編・デザート・5・

その日の夜。

風呂からあがると携帯にメールが来ていた。

- - - - -

今から会えない？

- - - - -

横川さんからだ。

（今からなんて無理に決まってるっしょ？）

だって琴美と会ったもん。

俺は返信もせずに携帯を閉じて一階へ下りた。

ちなみに沖縄に行ったはずの横川さんが何故都内の高校に通っている

るのかというと、

父親の転勤で再び東京に戻って来たかららしい。

それで携帯番号やメアドもこの前の練習試合の時に、すっごくしくしく訊かれ、

仕方なく俺は教えたのだった。

「琴美」

民宿の前の海辺に行くと、彼女の方が先に来ていた。

今夜から合宿が終わるまでここで毎晩会っ事になっている。

時間は特に決めていない。

琴美の方もいろいろお手伝いがあるし、俺も急なミーティングが入る事もあるからだ。

琴美は俺の声に嬉しそうに振り向いて手を振った。

「待った？」

「うっん、あたしも今来たばっ……」

……RRRRR、RRRRR、RRRRR……

琴美がそう言いかけたところで彼女の携帯が短く鳴った。

「あ……」

メールを開いて小さく声を発した琴美はすぐに携帯を閉じた。

「誰から？」

「市川さん」

「もしかして……『会いたい』って……言ってきたの？」

俺の質問に琴美はコクンと首を縦に振った。

（やっぱり……）

なんとなく、そんな気はした。

それは今日の昼間の練習の時の事、俺達が使っている体育館に横川さんが現れたのだ。

それでF高も隣の民宿で合宿している事を知った。

だから、昼はともかく夜は絶対「会おう」って言うてくると思っていた。

「メール、返さないのか？」

「だって、なんて返したらいいかわかんないもん。

今は無理って返したら『じゃあ、何時頃ならいい？』ってメールが来そうだし……」

「それもそっか……」

（まあ、俺もさっき同じ様な事を考えて返さなかったしな）

「それより、食後の“デザート”食べたい」

「デザート？」

俺は『そんなどこにあるの？』といった顔の琴美に不意打ちでキスをした。

「宗っ、誰かに見られちゃったらどうするのっ？」

「大丈夫だよ、ここなら俺達がいる大広間の窓からは見えないし」

「……わざわざメールで民宿から微妙に離れた場所を指定したと思ったら……そういう事だったの？」

「当たり前じゃん　それくらいの事は常に考えてないと琴美とチ

ユー出来ないだろ？」

「……」

呆れ顔の琴美。

こついう彼女の顔もまた可愛いんだよな！

「デザート”おかわり」

そう言って今度はさっきよりも長いキスをした。

「これが食後のデザート？」

「そ」

琴美は苦笑いしたけれど、これが俺にとっての何よりの“デザート”なのだ。

数日後。

せっかく同じバスケット部が隣の民宿に來ているという事で、またまた昼からF高と

練習試合をする事になった。

「宗」

試合前、琴美とは違ふ声に呼ばれ、俺が振り向くと横川さんが駆け寄って來た。

「呼び捨てやめれ」

「またそれ〜？」

横川さんはうんざりした顔をした。

それはそうだろう。

夏休み前の練習試合の後も『宗』と呼び捨てにした彼女に『呼び捨てはやめろ』と

何度も言っただから。

久しぶりに会ったと思ったたら開口一番こんな事を言われたら誰だっ
てうんざりした顔を

するだろう。

わかってはいるけれど、それだけ俺は琴美以外の女子から呼び捨てにされたくないんだ。

「マネージャーが自分のチームを放つたらかしにして、こんなトコで敵チームの選手と

話してちゃマズいんじゃないのか？」

俺はちょっと冷たく言い放った。

もうすぐ試合が始まるから俺自身も集中したいし。

「大丈夫、後の準備は一年生部員に任せて来たから」

「……」

「ねえ、ちょっと耳貸して」

そして、横川さんは突然何を思ったのか俺に耳を貸せと言い、右手を俺の首に掛け、

左手で耳たぶを軽く引っ張った。

「ちょ……っ」

仕方なく横川さんの口元に耳を近づける。

すると彼女は耳たぶから左手を離して首に回し、俺にキスをした。

（っ！？）

両腕を思いつきり首に絡ませている所為でなかなか離れない。

……カサッ……、

背後で微かに物音がした。

(っ!?)

その音が聞こえたのか横川さんはようやく俺を解放した。

すぐさま横川さんから離れ、振り向いてみる。

すると、そこにいたのは……

「……琴美」

一番見られたくない人に見られてしまった。

「……」

琴美は今にも泣き出しそうな顔で俺を見つめていた。

「琴美、今のは……」

「……宗のバカッ!」

琴美は俺が言い訳をする前に走り出した。

「琴美!」

俺もすぐに後を追おうとした。

だけど、それを横川さんが制した。

「離せよっ!」

何か言いたそうな横川さんの腕を振り払い、俺は琴美を追いかけた。

「琴美っ!」

彼女が走って行った方向に向かう。

けれど、既に琴美の姿は見えなくなっていた。

「お、いたいた、二ノ宮っ」

そこへ武田が俺を呼びに来た。

「もうすぐ試合始まるぞ、先生が集合しろって」

「……」

「ほら、早くっ、遅くなると怒られんぞっ？ おまえスタメンなんだし」

「あ、ああ……わかった……」

琴美の事は気になるけれど、練習試合とはいえスタメンに選ばれている俺が

私情を挟んでこのまま彼女を追いかける事は出来ない。

俺は仕方なく武田と共に体育館へ戻った。
。

続編・デザート・6 -

宗達バスケット部が合宿に来た数日後。

今日はまたあの私立F高校と練習試合をする事になった。

市川さんがキャプテンで宗の友達がマネージャーをしているあの高校だ。

市川さんからは毎晩『会いたい』というメールが来ていた。

時には電話も。

しかし、あたしはそれを無視していた。

だから、このタイミングで練習試合はちょっとしてほしくなかったりする。

午後二時。

「琴美ちゃん」

試合開始三十分前、武田君が食堂に入って来た。

「二ノ宮見なかった？」

「大広間でお昼寝してると思うけど、いなかった？」

「うん、俺も隣で寝てただけど起きたらもういなかったんだ。

そろそろ先生から集合が掛かると思っから捜してくれって

部長に言われたんだけど……」

「携帯は鳴らしてみた？」

「部屋に置きっぱなしにしてるみたいなんだ」

「じゃあ、あたしももうすぐここが片付くから捜してみるね」

「うん、よろしく」

武田君はそう言って軽く手を挙げて食堂を後にした。

「宗っっ」

武田君が去った後、あたしもすぐに宗の搜索を開始した。

まずは、毎晩一緒に眺めている海辺に行ってみる。

……ザザアー……ンッ……

しかし、聞こえてくるのは波の音ばかり……。

（ここにはいないか……）

もしかしたら、試合前に集中しようと一人で海を眺めているかもし

れないと思ったけれど、

その予想は外れたようだ。

そして試合開始時間が迫ってきた頃、体育館の裏あたりで一人でウオーミングアップでも

しているかもしれないと思い、行ってみた。

すると、今度は見事予想が的中した。

体育館の裏側に宗の姿があった。

でも、一人ではない。

（あ……）

宗と一緒にいたのはまたあのマネージャーの子だった。

その女の子はあたしの存在に気付いたのか、一瞬こちらに視線を移した後、

宗の首に腕を回した。

(……え？ 何？)

彼女の唇に顔を近づける宗。

(……噓っ!?)

一瞬、目の前で起こっている事が何なのかわからなかった。

でも、次の瞬間、宗と彼女がキスをしているんだと理解した。

思わず後退る。

すると、あたしが立てた微かな物音に気がついた宗が振り向いた。

「……」

あたしは、何も言えなかった。

と言っか、何も言葉が出て来なかった。

「琴美、今のは……」

顔面蒼白になる宗。

「……宗のバカッ!」

そう言って逃げ出すのが精一杯だった。

「琴美っ!」

宗があたしを呼び止める。

だけど、あたしはただその場から逃げ出たくて足を止める事無く走り続けた。

「あ、琴美ちゃん、二ノ宮いた?」

途中、武田君に会った。

けれど、あたしは彼の横を素通りした。

涙が溢れて止まらなくて武田君の声にも応えず走り去った。

「……………て、琴美ちゃんっ?」

(宗のバカッ、宗のバカ……………ッ!)

宗は見た目はチャラ男だけど、付き合い始めてそんな人じゃないって思った。

すごく純粋で可愛いところがあって……………、

でも……………、

さっきの光景は……………どう見ても宗からキスしてた……………。

気が付けば、あたしは荷物を纏めて電車に飛び乗っていた。

（宗と話したくない、宗の顔も見たくない、宗がいる湘南にはいたくない……っ）

要するに逃げ出したのだ。

東京へ戻る電車の中、あたしの頭の中にはずっと宗とあの子のキスシーンがちらついていて

離れなかった……。

（宗……あたしの事、もう飽きちゃったのかな……それとも、嫌いになったのかな？）

時間が経てば経つほど、宗から離れれば離れるほどあたしの心の中

はマイナスな事で

いっぱいになって、それがまた涙になって溢れ出していった。

家に帰ってからベッドへ倒れ込んだまま動けずにいた。

宗は練習試合が終わったのか何度も電話してきている。

（宗のバカ……ッ！）

心の中でそう叫ぶ度に引っ込んでいた涙が溢れて来る。

…… R R R、 R R R、 R R R……、

そして、市川さんからメールが来ていた。

あたしは宗の電話も市川さんからのメールも見ずにこれ以上携帯が鳴る事に耐え切れず、

電源を切った。

「姉ちゃん、ご飯だよ」

夜、誠があたしの部屋に来た。

「……………いない」

「食欲ないの？　てか、姉ちゃんなんているの？　叔母さんのトコじゃないの？」

「……………」

「ひょっとして体調が悪くて帰って来たの？」

「誠……明日から民宿のお手伝い、ピンチヒッターお願い……」

「えーっ！？ 俺、今日合宿から帰ってきたばっかだよっ？」

「少しは家でゆっくりしたいよ」

「宗がいるよ……」

「へ？」

「今、叔母さんのトコで宗達が合宿してる……」

「ホントッ？ あれ？ でも……それなら、なんで姉ちゃんが帰ってきたのか、

尚更わかんない」

「……」

「ねえ、そんなに体調悪いの？ おなかが痛いのか？」

おなかは痛くない。

胸が痛い。

心が痛い。

ギュッと締め付けられてるみたいで苦しいだけ。

「……行くの？ 行かないの？」

「行く！ 行くけどさ……姉ちゃん、大丈夫かよ？ 後で母さんに
そうめんでも茹がいてもらおう？」

「うっん、いない……」

「うーん……じゃあ、食べられるようになったら下りて来いよ？」

結局、あたしは誠に民宿のお手伝いを押し付けてしまった。

続編・デザート・7 -

翌朝。

「おはようーございますっ」

食堂の厨房の中にいたのは満面の笑みを浮かべた琴美の弟・誠だった。

「あれ？ 確か……君、琴美ちゃんの弟の……」

武田も隣で不思議そうな顔をしている。

「はいつ、平野誠ですっ！ 姉ちゃんがいつもお世話になってます！」

「へえーっ、平野さんの弟があっ、似てねえーっ」

「けど、可愛い系の顔は似てるかな？」

みんなが口々に言う中、武田が俺が一番気になっている疑問を口に
した。

「てか、琴美ちゃんは？」

そう、琴美だ。

昨夜も夕食の時に厨房にいなかった。

というか、昨日の“キス強奪事件”以来、姿が見えない。

あの事件について弁明もしたいのはあるけれど、どこへ消えたのか
心配だった。

「姉ちゃん、体調が悪いみたいで……昨日も帰って来てからずっと
ベッドで寝てて、

晩ご飯も全然食べなかったんですよ。それで、今日からは俺がピ
ンチヒッターっす！」

（え……琴美、帰ったのか……？）

俺は愕然とした。

「琴美ちゃん、帰っちゃったのかー……てか、カップルってリンクすんのかな？」

二ノ宮も昨日から調子悪いし」

「えっ、シュウさんも？」

「昨日、隣の民宿に俺達と同じ様に合宿に来てる他校のバスケット練習試合があっただけだよ、

前はボロ勝ち出来たのに、昨日は全然ダメ。こいつの調子が悪くてもうボロ負け」

「俺の所為かよ……て、まあその事に関しては言い訳しねえけど……」

確かに勝てるはずの相手だった。

だけど、俺の調子が悪かった……というよりは琴美の事が気になっ

ていて

全然試合に集中出来なかったのだ。

自分でもこんなにメンタルが弱い奴だったなんて思わなかった。

「シュウさん、大丈夫？　俺も昨日まで合宿やってたからわかるけど、」

いつもより練習キツイから食べないとバテちゃうよ？」

「そうだよ、おまえ昨夜もほとんど食べてないし、今日はちゃんと食べないと」

「あ、ああ……」

誠と武田からそう言われ、俺は無理矢理朝飯を口に押し込んだ。

そのおかげで俺は午前中の練習をなんとか乗り切り、昼飯も二人に言われて完食だけはした。

その日の夜。

俺は一人で海辺に来ていた。

…… R R R、 R R R、 R R R……

短い着信音が鳴り、メールが来た事を知らせる。

けど、琴美からじゃない事だけはわかっていた。

- - - - -

どうして、いつも電話に

出てくれないの？

メールの返事もくれないし。

- - - - -

横川さんからだ。

(当たり前だろ)

そもそも番号もアドレスも教えたくて教えたんじゃないんだから。

しばらくして、また彼女からメールが来た。

- - - - -

昨日、キスした事、

怒ってる？

- - - - -

（だから、当たり前だっつーの！）

好きでもない女の子からよりもよって恋人の前であんな事されたら
普通怒るだろう。

横川さんからのメールを無視して琴美に電話をする。

しかし、聞こえてきたのはやはり例の音声。

“電源が入っていないか、電波の届かない場所に……”

（琴美……）

がつくりと肩を落とす。

合宿が終わって俺が東京に戻ったとしても、琴美は湘南に来るだろう。

となると、下手をすると新学期まで会えないかもしれない。

「はあー……」

「シュウさん」

俺がどうしようかと溜め息を吐いていると、後ろから誠の声がした。

「……姉ちゃんと、なんかあったの？」

いつも琴美が座っている場所に誠は腰を下ろして遠慮がちに訊いてきた。

「二人共風邪じゃなさそうだし……食欲がないのはわかるんだけど……、」

もしかして、喧嘩？」

「……」

意外と鋭い誠に俺は否定する事も出来なかった。

「姉ちゃんには電話してみた？」

「……電源切ってるっばい」

「じゃあ、まだ話せてないんだね……」

「うん……」

「シュウさん、今、携帯持ってる？」

「ああ、持ってるよ」

「ちょっと貸して？」

誠はにこっと笑った。

「？」

不思議に思いながら、とりあえずポケットから携帯を出して渡す。

すると、誠は慣れた様子でボタンを押してどこかへ掛け始めた。

（どこに掛けてるんだ？）

「あ、母さん？ 誠だけど」

（母さん？）

「姉ちゃん呼んで」

誠はそれだけ言うと、電話を切らずに俺に携帯を返した。

「シュウさん、ファイト」

そして、俺に軽くウインクすると民宿へ戻って行った。

どうやら、俺の為に家の方に電話して一肌脱いでくれたみたいだ。

『……もしもし、誠？ どうしたの？』

しばらくして電話の向こうから元気のなさそうな琴美の声がした。

「……あ、の……」

『誠？』

「……琴美、俺……なんだけど……」

『え………宗？』

「う、うん……なんか、誠が電話掛けてくれて……その……切らないで」

聞いてほしいんだけど……」

『…………』

「昨日の事なんだけどさ……その、なんて言うか……あれは事故と
いうか……」

『…………宗の方からキスしてたのに?』

「違うよ! あれは横川さんに耳貸せて言われて、耳を引っ張ら
れたから

仕方なく耳を近づけたら……あんな事に……」

『えっ!? そ、そうなの……?』

「うん、それに俺が浮気なんかする訳ないだろ?」

『…………』

（返事をしてくれないって事は、俺が浮気をしたと思ってたって事か…………）

「俺…………琴美が好きだ。琴美と離れたくない。だから…………戻って来て？」

『…………』

「お願いだから…………」

『…………』

「琴美…………俺の事、嫌いにならないで…………」

『…………』

結局、琴美は何も答えてはくれず、そのまま電話は切れてしまった。

（駄目だ……完璧に嫌われた……）

俺は大きな溜め息を一つ吐いた。

翌日。

この日もF高と練習試合をする事になった。

今日も俺はスタメンで行けと先生に言われた。

本当なら今すぐにでも琴美に会いに行つて誤解を解きたい。

だけど、そんな自分勝手な事は出来ないのは重々わかっている。

（こんなんで俺、勝てる自信ないよ……）

そして、試合は一昨日とまったく同じ展開になっていた。

前回、俺が全然ダメダメだったからか、今日はそんなにぴったりマ
ークはされていない。

だけど、雑念が多過ぎて俺は回ってきたパスにも反応出来ず、当然
シュートも決めていなかった。

その所為でまだ第二クォーターだというのにかなりの点差で負けて
いたのだ。

ハーフタイムになり、タオルで汗を拭きながら先生の指示を聞く。

しかし、その指示すらも俺の耳にはまったく入って来ていない。

当然、いつも琴美が作ってくれるレモンの蜂蜜漬けもないからHPの回復も出来ないでいた。

第三クォーターが始まり、いきなり俺にパスが回された。

ドリブルでボールをキープしている間に周りを囲まれる。

いつもなら囲まれる前に動いてるはずだ。

なのに簡単に囲まれるなんて。

当然、あっさりボールを奪われた。

しかも、よりにもよって市川とか言うあのキャプテンにだ。

俺はなんだかこのまま琴美の事も奪われてしまう気がした。

俺を嫌いになった琴美が市川のところに行ってしまう……そんな気がしたんだ。

だけど、次の瞬間……、

「宗一っ、負けたらこれからずっと“デザート”なしだからねーっ
っ」

琴美の声が聞こえた。

続編・デザート・8・

「こっ、琴美っ!？」

宗は試合中だというのにあたしの方に振り返った。

コートのだ真ん中で固まっている。

「宗、試合っ!」

「あ、ああ、うんっ!」

宗は返事をしてボールを奪い返すべくダッシュした。

30 vs 18

うちの部が負けている。

夏休みの前にやった練習試合では同じ第三クォーターではうちの部が40点が入っていた。

それなのに今日はまだ18点しか入れていない。

（宗つ、頑張つて……っ！）

第三クォーターが終わり、得点は34 vs 24とまあまあ追いつけた。

でも、まだ油断は出来ない。

短いインターバルの間にメンバーはあたしが差し入れたレモンの蜂蜜漬けを

口に放り込んでいた。

「今日のレモン、いつものよりよく漬かってるね？」

部長の加納先輩はなかなか鋭い。

それは一昨日の練習試合の時に差し入れようと作った物だったからだ。

「一昨日はこれがなかったからスタミナ回復出来なくてさ。」

けど、今日は二ノ宮の調子も戻ったみたいだし、第四クォーター頑張れば勝てるかも」

そう言っつて、蜂蜜漬けをパクリと口に入れてあたしから宗にちらりと視線を移したのは武田君だ。

その宗はと言うと、引き続き第四クォーターも出るらしく、先生の指示を真剣に聞いていた。

(さっきまでは全然試合に集中していなかったのに……)

宗は試合中、今まであたしの声に反応して顔を向けた事なんてなかった。

練習中も。

最初は聞こえていないのかとも思ったけれど、この間宗に訊いたら

『琴美の声は一応耳には入ってる』と言われた。

それでも反応しないのはそれだけ試合に集中しているという事だろう。

そして、なんとなく視線を感じてその方向に目を向けると、相手チームのマナージャーが

あたしの事をじっと見ていた。

いや、睨みつけている感じだ。

（もしかして……あの人、宗の元カノなのかな？）

だって、試合中もスコアをつけている手もすっかり止まっていて、自分のチームメンバーより

宗の事を目で追っている。

この間はスポーツドリンクを渡したり、タオルを渡したりと忙しそうに動いていたのに、

今日は何も手がつかないという感じだ。

それから間もなくして第四クォーターが始まった。

円陣を組んで気合いを入れてコートに入るメンバー。

宗はあたしの方に顔を向ける事はなかったけれど、その背中は覇気に満ち溢れていた。

「琴美ちゃん、もう体の方は大丈夫なの？」

宗の姿を目で追っていると武田君が話し掛けてきた。

「う、うん……」

（体調不良というか精神的に参ってただけどね……）

「そっか、二ノ宮も一昨日は全然晩飯食べなくてさ、昨日と今日は俺と誠君が食べないと」

バテるぞって言って半ば強引に食わせたし。今考えると琴美ちゃんが帰ったのが

余程ショックだったんだなー」

（え……）

「あいつ、琴美ちゃんの顔を見た途端に元気なったし」

（宗……あたしが帰ったの、そんなにショックだったの？）

“琴美……俺の事、嫌いにならないで……”

昨夜、宗が電話の向こうで泣いているような気がした。

微かに震えた声で言われ、あたしは胸が苦しくてなんて答えていいのかわかんなくて

電話を切ってしまった。

それでも今朝、目が覚めてからも宗の声が耳から離れなくて、宗とちゃんと会って話がしたくて

気がつけばまた電車で飛び乗ってここへ戻って来ていた。

「ナイシューツ！ 二ノ宮！」

武田君の声にハッと顔を上げると、シュートを決めた宗がコートの中で仲間達と

ハイタッチをしていた。

（宗ってシュートを決めた後、すっごくいい顔で笑うんだよね）

あたしと一緒にいる時の笑顔も好きだけど、シュートを決めた後の笑顔はもっと好き。

だけど一番好きなのは、あたしとキスした後に見せる嬉しそうなの……でも、ちよっと照れたような笑顔。

だから……

“ 琴美……俺の事、嫌いにならないで…… ”

（あたしが宗の事を嫌いになるなんてないんだよ……？）

「よし！ 後二本シュートが決まれば同点！」

「同点だとうなるの？」

「普通に延長戦だよ」

「延長戦か……」

少し苦しそくに息をしている宗。

（宗……大丈夫かな？ ご飯、あんまり食べてないって言ってたし……バテてないかな？）

しかし、そんなあたしの心配を余所に彼は二本ともあっさりシュートを決めた。

「よっしゃーっ！ 同点ーっ！」

武田君はまるで自分がシュートを決めたみたいに両手でガッツポーズをして喜んだ。

その直後、第四クォーターの終了を告げるホイッスルが鳴った。

続編 ニデザート・9 -

“ ああ…… 今日もまた負けちゃうのかな？ ”

そう思いながら雑念だらけの状態で試合をしていると突然、琴美の
声がした。

「 宗ーっ、負けたらこれからずっと “ デザート ” なしだからねーっ
！」

（ っ！？ ）

驚きのあまり、思わずその声の方に振り向くと体育館の入口に琴美
が立っていた。

「 っっ、琴美っ！？ 」

（ 琴美がいる…… 戻って来てくれたんだっ ）

「宗、試合っ！」

琴美に言われ、ぼう然としていた事に気付く。

(……そうだっ、負けたらもう二度とキスしてくれないんだ！

そんなの絶対絶対絶対嫌だー！ー！ー！っ！！)

俺は無我夢中でボールを追いかけて、可能な限りのシュートを放った。

そのおかげで第三クォーターは34 vs 24まで追い上げ、第四クォーターは42 vs 42で

同点で終了し、延長戦に突入した。

(ここからは五分間の勝負！)

延長戦、相手チームのキャプテン・市川と、うちの部長・加納先輩のジャンプボールで

試合開始。

市川がボールをタップし、F高チームにボールが渡った。

すかさず市川にパスが回される。

しかし、そこで俺が素早くパスカットに出た。

（これ以上、ボールには指一本触れさせないっ！ 琴美にもこれ以上指一本触れさせないっ！）

一度他のメンバーにパスをして素早くスリーポイントラインまで移動する。

（ちまちま普通のシュートを決めていたんじゃすぐに追いつかれるっ）

俺はスリーポイントシュートを狙っていた。

チームメンバーから加納先輩へ、加納先輩から俺へパスが回され、シュートの体勢に入る。

……ガコーンッ！

だけど、俺が放ったボールは惜しくもバスケットのフレームに当たり、弾き返された。

（くそっ）

リバウンドボールが相手チームの手に渡る。

奪い返そうとするけれど、すぐにパスされ、市川の手に。

ボールには指一本触れさせないと誓ったのにさっそくこの様だ。

市川も必死らしい。

簡単にはボールを手放してはくれない。

そして、その市川がフリースローラインの辺りからシュートを放つ

た。

……ポスンッ、

（入りやがった……っ！）

市川が放ったシュートはきれいに決まり、4 4 v s 4 2 になった。

（まずい……っ、このままじゃ、本当に琴美と一生キス出来ないっ！）

それどころか、琴美まで市川に奪われてしまう気がする。

琴美があっさり市川に乗り換えるとは思えない。

だけど、今の俺はスリーポイントも決められず、目の前で市川にシュートを決められてしまった。

俺の中でモヤモヤとなんとも言えない感情が渦巻いていた。

（琴美は俺の“彼女”だっ！ 絶対、誰にも渡さないっ！）

パスが俺に回われ、再びスリーポイントを狙い、ゴールに向かってダッシュする。

（落ち着け、俺っ）

ドリブルをしながら深呼吸をする。

その間にもF高の奴等がボールを奪いに来る。

試合時間は後、一分。

ここで絶対スリーポイントシュートを決めないと負けてしまう。

（絶対、決めるっ！）

スリーポイントラインの手前、俺はシュートの体勢に入った。

しかし、そこで市川がボールを奪いに来た。

（くそっ、もう時間がねえんだから邪魔すんなよっ！）

「二ノ！」

後ろから加納先輩の声がして一度パスを出す。

（後50秒……）

加納先輩から他のメンバーへ。

（後、45秒……）

俺の前には市川ともう一人F高の奴がいる。

このままじゃ、俺にはパスが回って来ない。

（後、40秒、こうなったら普通にシュートを決めてやる！）

俺は市川達のマークを外して前に出た。

すかさずパスが回される。

「おらぁー！ーっ！！」

気合いとともにボールをバスケットに押し込む。

シュートが決まり、これで44 vs 44。

（よっしゃーっ！ 同点っ！！ 後30秒、もう一回シュート出来るか？）

F高のスローインでコートに戻って来たボールは俺の目の前にいる奴の手に渡った。

すぐそばには市川がいる。

こいつは他のF高のメンバーよりも背も高いし、動きも早い。

シュートも確実に決められる奴だからボールが渡ったら厄介だ。

（後20秒つ）

俺はパスカットでボールを奪おうと市川の前に出た。

しかし、何故か市川にパスは出されず、別のメンバーにボールが渡った。

（ええーっ？　ここは普通市川にボールを回すだろっ？）

やや呆然……。

（て、後15秒だ！）

ボールを持っている奴はパスの判断を迷ったのかすぐに俺達メンバーに囲まれた。

高くボールを投げ上げ、パスを出すけれど大きな孤を描いてゆっくり落下してくるボールは

小学生にだって取れる。

「二ノ！」

そのボールを加納先輩がキャッチし、俺にパスが出された。

（後5秒……！）

立っている場所はちょうどスリーポイントラインの位置だ。

別に同点なんだから無理にスリーポイントを狙う必要はない。

だけど、すぐ後ろには市川がいるし、周りもF高の奴等ばかりだ。

決まれば勝ち、外しても同点。

だが、これ以上の延長はいろんな意味でキツイ。

（一か八かつ！）

俺はそのままそこからシュートを打った。
。

……ピッ、ピッ、ピーーーーーッ!!

ホイッスルの音が体育館中に反響し、試合終了が告げられた。

「さっすが二ノ宮！ あそこでスリーポイントを決めるなんて！」

あたしの隣にいる武田君は嬉しそうに両手でガッツポーズをしていた。

コート中央では両チームが整列し、礼をした後、握手をしていた。

宗が笑顔でこちらに戻って来る。

でも、みんなとハイタッチをしてあたしの目の前に来るとすごく不安そうな顔になった。

そして、宗が何か言おうと口を開きかけたその時……、

「宗、ちょっと来てっ」

いきなり後ろからF高のマネージャーが現れ、宗の腕を引っ張った。
しかし、宗は何故か咄嗟にあたしの手首を掴んだ。

（えええっ!?!）

「宗っ、なんでその子まで連れて来てるのっ?」

ぴたりと足を止めるマネージャーの女の子。

（そ、そっだよっ）

「琴美の前で横川さんにはつきり言っておきたい事があるからだよ」
宗はなんだかムッとしている。

その様子にマネージャーの女の子は何も言えず、再び歩き始めた。

「横川っ」

体育館から離れ、海のすぐ近くまで来たところで市川さんがあたし達の後を追って来た。

「一体、どうしたんだ？」

どうやらただ事ではないと思って追いかけて来たみたいだ。

「……」

だけど彼女は無言で前を向いたまま歩く。

砂浜の手前でやっと足を止めて振り返るけれど、あたしと市川さんが一緒にいる事で

なかなか話を切り出せないようだった。

「「「……」」」

あたし達は彼女が口を開くのを待った。

「宗、なんであたしの電話に出てくれないの？ メールも……」
しばらくしてやっとマネージャーの女の子が話を切り出した。

（この子、宗の携帯の番号知ってるんだ……）

宗は絶対に女の子には番号やメアドを教えない。

でも、彼女は知っている。

「そもそも教えたくて教えたんじゃないんだし」

「……それ、どういう事？」

“教えたくて教えたんじゃない”という宗の言葉に首を捻っている

と、

市川さんが不思議そうに二人に訊ねた。

「夏休みの前に練習試合をした時、横川さんと再会してその時に番号とメアドを

しつこく訊かれたんですよ」

「無理矢理聞き出したのか？」

市川さんは呆れたようにマネージャーの女の子・横川さんに言った。

「無理矢理っていうか……確かなかなか教えてくれませんでしたけど、

照れてるだけなんだと思ってたんです。宗、あたしがプレゼントしたタオルを

まだ使ってくれてたから、きっとあたしの事が好きなんだと……、

今日だってそのタオル使ってるし」

「え……」

顔を引き攣らせる宗。

市川さんは『どうなんだ？』という顔を宗に向けた。

「……確かに、このタオルは横川さんがあの時プレゼントしてくれた物だけど、

普通に使ってるだけ」

「じゃあ、あたしの事は……好きじゃないの？」

「ああ。なんか……俺の所為で勘違いしたなら、ごめん。俺が好きなのは琴美だけだから」

「っ」

市川さんは宗の言葉に一瞬、顔を顰めた。

「宗とその子、付き合ってるの?」

怪訝な顔で訊ねる横川さん。

「ああ」

「えっ!?!」

宗がはつきり答えると、市川さんが声を発して驚いた。

「でも、あなた、市川キャプテンと電話したりメールしたりしてるんですよ?」

キャプテンの事、からかっているのっ?」

すると、横川さんが鋭い口調であたしに視線を向けた。

「か、からかうだなんて……」

「キャプテンが眼鏡フエチだから？」

（え……“眼鏡フエチ？”）

「待てよ」

宗はあたしを庇うように横川さんの前に立ちはだかった。

「市川さんは琴美が俺と付き合ってる事、知らなかったんですか？」

「あ、ああ」

「てか、琴美も言ってなかったの？」

「だ、だって……そういう事、訊かれなかったから……」

「……そっか……彼氏いたんだ？　なんか……ごめん、彼氏がいるのに頻繁に電話とかメールして。」

あの時、琴美ちゃんがすんなり携帯の番号とメアドを教えてくれたから、てつきり俺……

自分に好意を持ってくれたんだと思って……」

「えっ？　ち、違いますっ」

あたしは思わず慌てて否定をした。

「最近、全然電話に出てくれなくなっだし、メールも返って来なくなっただから、

嫌われちゃったのかと思ったんだけど……彼氏がいたなら納得。

あんなにしつこくされたら困るよね？　ごめん」

市川さんは申し訳なさそうに言った。

「い、いえ、あたしの方こそ、ごめんなさい……」

今回の事は市川さんだけが悪いんじゃない。

あたしが何も考えずに番号なんか教えてしまったからこんなややこしい事になったのだ。

「電話もメールも、もうしない」

市川さんはそう言うのとポケットから携帯を出して、ポチポチと何か操作をした。

「琴美ちゃんの番号とメアド、消したから。琴美ちゃんも俺の番号とメアド消して？」

（え……）

「琴美、携帯貸して？」

あたしがきょんとしていると宗に言われた。

「う、うん」

ポケットから携帯を出して宗に渡すと、市川さんと同じ様に操作した後、

あたしに携帯を返してくれた。

「琴美の携帯から市川さんの番号とメアド消したから」

宗はあたしに『これでよかったんだよね？』という顔を向けた。

「うん」

「次は横川さんの番。横川さんも俺の番号とメアド消して？」

俺の方は横川さんの番号とかメモリーには入れてないから」

「え……」

横川さんは宗からそう言われても、なかなか携帯を出そうとしなかった。

「横川、無理矢理番号を聞き出した相手に掛けたって出てくれないんだし、

それならいっそキレイさっぱりメモリーから消した方がスッキリするぞ?」

市川さんは俯いている横川さんに優しい口調で言った。

「はい……」

渋々携帯を出した横川さん。

それを今度は市川さんが彼女の手から携帯を取り上げ、ポチポチと操作し始めた。

その様子をちよつと悲しそうに見つめる横川さん。

「ほら、最後の削除の確認ボタン、自分で押せ」

市川さんは完全に削除する前に横川さんに携帯を返した。

……ポチリ。

しばし画面を見つめた後、彼女はゆっくりとボタンを押して携帯を閉じた。

「消したよ」

小さな声でそう言った彼女に宗は「うん」とだけ返した。

そして……、

「後、呼び捨てもやめね。“宗”って呼んで欲しいのは琴美だけだから」

彼はそう言つと、あたしの手を引いて踵を返した。

その日の夜、

「……宗」

俺がいつもの場所で琴美を待っていると、後ろから琴美の声が聞こえた。

「よかった……来てくれた」

横川さん達と別れた後、俺はすぐにチームのところへ戻らなくちゃいけなくて、

まだちゃんとした仲直りが出来ていなかった。

だから、琴美が来てくれるかどうか不安だった。

「琴美……ごめんな」

「……」

ここへまた戻っては来てくれたけれど、やっぱりまだ怒っているのか琴美は

黙ったまま俯いていた。

「俺が油断してたからキスなんか……」

「……」

「ごめん……」

なかなか顔を上げてくれない琴美の肩を抱くと、小さな声で「宗……」と、

俺の名前を呼んだ。

「もう、あたしの事……好きじゃなくなっただんだと思った……」

そう言って泣き始めた琴美の肩を俺はギュッと抱きしめた。

「そんなの有り得ない」

「だって……」

「俺の方こそ、もう琴美に嫌われちゃったんだと思ってた……」

「そんなの有り得ないよ」

琴美はそう言っていると俺の背中に腕を回した。

いつもより強い力で。

「俺の事……好き……？」

「うん……好きだよ」

「俺も琴美の事……大好き……」

琴美の頬に掌を当てると彼女の涙が俺の手に伝って流れ落ちた。

「もう二度と、琴美を泣かせるような事はしない」

琴美の涙に誓って泣き顔の琴美にそっとキスをする。

「宗……一つだけ訊いてもいい？」

唇を離すと、琴美は少し体を離して躊躇しながら俺の顔を見上げた。

「うん？」

「横川さんて……もしかして、元カノ……？」

「ううん、ただの友達だよ」

俺は即座に否定した。

「でも……」

「中二の時にさ、横川さんが転校して来て、その時に俺が教科書を貸したりとかして、

ちょっと仲良くなったんだ。でも、その後彼女の家、すぐにまた沖縄に引っ越す事になってさ、

引っ越す時にいろいろ世話になったからって、スポーツタオルをプレゼントしてくれたんだ。

そのタオルをずっと使ってた所為で横川さんが勘違いしたみたいで……でも、俺は本当に

何も考えずにそのタオルを使ってた……」

「そうだったの……」

けど、俺は横川さんがファーストキスの相手だとは言わなかった。

だって、俺の中では本当の意味でのファーストキスの相手は琴美なんだから。

「よかった……“デザート”なしにならなくて」

俺は再び琴美を抱き寄せた。

「最後のスリーポイントシュート、カッコ良かったよ」

琴美は俺の腕の中でやっと笑ってくれた。

「ねえ……もし、負けてたら、ホントに“デザート”なしになってた？」

「うん」

琴美はちよつと意地悪そうに微笑んだ。

その笑顔で本当は負けたとしても、今みたいに俺のキスを受け入れてくれたんだと確信する。

「えーっ、それ無理。俺、禁断症状が出て死んじゃうよっ」

「大袈裟ー」

「本当だってば。だから俺、あんなに頑張ったんだよ？」

確かに“死ぬ”のは大袈裟な表現だったかもしれない。

だけど、あの時“デザート”なしになるのが嫌で必死に頑張ったのは本当だ。

「宗はいつも一生懸命じゃない。練習でも試合でも。だから、本当は負けてても」

“デザート”なしにはなかったよ」

「」

それを聞いて安心した俺は再び琴美にキスをした。

今度は何度も何度も。

だって、一昨日と昨日の分もしないと俺の気が済まないんだから。

「あ、やっと帰って来た！」

二人で民宿に戻ると、誠が玄関ホールで俺達を待ち構えていた。

「姉ちゃんっ、俺、シュウさん達の合宿が終わるまでここにいてもいい？」

練習とか見学したいんだっ」

「え……そりゃ、叔母さん達のお手伝いはあたし一人で充分だから、後は叔母さんがいって言うてくれれば……」

「それなら大丈夫つ、さつき訊いたら好きなだけいてもいいって」

「先生は？ 見学してもいいって？」

「え、えつと……それなんだけど……まだ訊いてなくて……」

なるほど。

多分、誠は俺からその話を切り出して欲しいのかも。
それで待っていたのか。

「なら、俺から頼んでみるよ」

「いいの？ 宗」

「ああ、今回は誠のおかげで仲直り出来たしな

大丈夫、見学くらいなら先生もきつとOKしてくれるよ」

「やったあ」

誠は琴美によく似た可愛らしい笑みを浮かべた。

食堂へ行くと先生が民宿の息子で琴美と誠の従兄弟・貴裕さんとビールを飲んでいた。

（呑んだ暮れ発見っ！）

「先生、お願いがあるんですけど」

声を掛けると先生はやや赤い顔を俺達に向けた。

（お？ もう酔っちゃってる？）

「明日から誠が俺達の練習を見学したいって言ってるんですけど、いいですか？」

「ほー？ 誠君はバス部なのか？」

「はいっ、来年は姉ちゃんと同じこの高校を受けるつもりですっ」

「じゃあ、受ければうちの部に入るんだろう？ だったら見学だけなんて言わないで練習も参加しちゃえ」

先生は酔って気が大きくなっているのか気前のいい事を言っている。

「い、いいんですかっ？」

「うん、だけど中学生がいきなり高校生と同じ合宿メニューだと体を壊しかねないから、

無理はせず、こまめに休憩を取る事」

（酔ってるけど、こっついう指示はちゃんと出せるのか）

「はいっ、ありがとうございますっ」

誠は嬉しそうに返事をしておじきをした。

「よかったな」

「シュウさん、ありがとうございます！」

こうして、翌日から誠が俺達の練習に参加する事になった。

しかし、ここから予想外の展開へ。

「ところで平野さん、試合の時、デザートがどうか言ってたけどあれ何？」

「え……っ」

先生にそんな質問をされ、返答に詰まる琴美。

かく言う俺も心の中でギクリとした。

「あ、もしかして姉ちゃん、あれだろ？ たまに作ってくれてるシヤーベット！」

「何っ、そんな素敵な物が作れるのかっ？」

俺は思わず食いついた。

「うんっ、夏になるとよく作ってくれるんだ」

にんまりと笑って答える誠。

「琴美っ！ それ、俺も食べたいっ！」

「え……で、でも……材料が……」

「あー、それなら大丈夫だよ」

すると、先生と一緒に呑んでいた貴裕さんがニツと笑った。

「俺も久しぶりに琴美のシャーベット食べたいし、明日の朝一番に業者に電話すれば、

昼には食材が届くから、夕食の後にみんなに出せるだろう?」

「うん、うん」

「よっしゃーっ」

先生の一言と誠のおかげで俺はもう一つのデザートをげつとした。

今回はみんなにも食べさせる事になるけれど俺だけの“とっておきデザート”はある訳だし、

ま、よしとしよう。

続編・デザート・11・（後書き）

これにて続編終了です。

ありがとうございました。

m ((m

番外編・誠の恋・1・

“恋は突然に”

今までそんな言葉を耳にしてもあまりピンと来なかった。

一目惚れなどした事がなかったし、する事はないと思っていたから。
。

俺がシュウさん達の合宿にお邪魔させてもらって三日。
。

食堂で男子バスケット部のみんなと昼食を摂っていると、また新たに団体さんが合宿に来たらしい。

ゾロゾロと食堂に入ってきて来た。

「琴美っつ」

と、思ったらその団体の中に姉ちゃんと小学校の頃から仲の良
い藤村先輩がいた。

という事は姉ちゃんとシュウさん達と同じ高校の女子バレー部だ。

「メグちゃん」

姉ちゃんは女子バレー部のみんなの分のおかずを用意しながら小さ
く手を振った。

（お？）

そして藤村先輩の少し後ろに背の高い女の子がいた。

ポニーテールで目がクリツとしている子だ。

多分、三年生から順に並んでいるから後ろの方にいるという事は一
年生だろう。

（……か、可愛い）

「誠、どうしたんだ？」

隣で一緒にご飯を食べているシュウさんが箸が止まった俺の顔を不思議そうに覗き込んだ。

「あ……いや……なんでもないっす」

慌てて平静を装い、彼女に見惚れていたと自覚する。

そう……、俺はあの子に一目惚れをしてしまったのだ。
。

昼休憩が終わって体育館で午後の練習が始まった。

半分はシュウさん達男子バスケ部が、もう半分は藤村先輩達女子バレー部が使う事になった。

シュウさんの話では学校でも同じ様に体育館を半分ずつ使っているのだとか。

「誠、そろそろ休憩取らないと」

そして午後の練習開始から一時間が経過した頃、シュウさんに言われた。

「はい」

正式に入部すれば走り込みを繰り返して基礎体力を作るからみんなと同じ様に練習が出来るけれど、

まだ中学三年生の俺は基礎体力が他のみんなと違うからという事で一時間毎に休憩を取っている。

毎朝の走り込みも民宿の回りをみんなは二十周しているけれど俺は十五周で終わり。

俺的にはシュウさん達と目一杯一緒に練習したいところだけど顧問

の岡嶋先生からの命令だから仕方がない。

俺はタオルで汗を拭きながら何気なく隣で練習をしている女子バレー部に視線を移した。

すると、セッターの藤村先輩がトスを上げ、アタック練習をしていた。

次々とコートにボールが打ち込まれていく中、あの子の順番が回ってきた。

トスが上がり、高くジャンプをしてアタックをする。

（ほわぁ……すげー……）

そもその身長が高いというのもあるが、彼女は他の部員よりも明らかにジャンプ力があって打点も高く、

そしてなによりアタックの威力が半端なかった。

ボールを打つ瞬間の音だけを聞いていてもわかる程だ。

（もしかして、エースアタッカーなのかな？）

そのままジーンと見ていると彼女が俺の視線を感じたのかパツと振り向いた。

（おおっと！？）

俺は慌てて視線を外した。

（やべえ、やべえ）

「誠、何してんの？」

すると、いつの間にか姉ちゃんが俺の背後に立っていた。

「おわっ！？　ねねねね、姉ちゃんっ？」

まさか姉ちゃんがいるとは思わなかった。

一気に変な汗が出てくる。

「何でそんなに慌ててんの？」

不思議そうな顔を浮かべて何かを抱えている姉ちゃん。

その後ろには俺の従兄弟でここの民宿の跡継ぎの貴兄もいる。

「べ、別に慌ててないよ。それより、どうしたの？」

「バスケット部とバレー部のみんなに冷たいおしぼりと地元の燻製屋さんから切り落としのハムを買ったから、

それでチャーハンを作っておむすびにして来たの」

親戚がやっている民宿では、よく地元の企業から切り落としや試食品、後は形が悪くて製品に出来なかった物なんかを買ってくるらしい。

それを叔父さんや叔母さんがこうして差し入れという形でお客様に提供しているのだとか。

「へえー、美味しそう」

「誠、岡嶋先生に『民宿からの差し入れです』って伝えて来て」

「りょーかい」

俺がそう返事をする姉ちゃんは隣の女子バレー部の方へおむすびとおしぼりを運んで行った。

「うん、美味しい」

バスケ部全員の手に冷たいおしぼりと温かいおむすびが渡ると、シユウさんはおしぼりで手と顔を拭いた後に

おむすびにパクついて幸せそうな顔でにんまりと笑った。

（シユウさん、子供みてえー）

バスケットをしている時はものすごく真剣な顔をしているのに。

姉ちゃんはこのギャップにやられたのかな？　なんて思ってしまった。

おむすびはハムとレタスと玉子のチャーハンを握ったシンプルなものの。

味付けもハムの旨味とレタスと玉子の素材の味を生かすように塩コショウだけ。

多分、練習中の俺達には喉が渴きそうな濃い味付けよりも適度にお腹も満たされて塩分補給を出来るようにと

気を遣ってくれたのだろう。

（うまつ）

姉ちゃんは女子バレー部の方で藤村先輩と一緒に談笑していた。

「これ、琴美が握ってくれたおむすびかなあ？」

そんな事を言いながらまた一口おむすびに嚙り付くシュウさん。

俺はこの合宿に思わぬ形ではあるけれど参加させて貰って姉ちゃんとシュウさんの関係を羨ましいと思うようになった。

俺が初めてシュウさんと会ったのはもう一年以上前の事。

練習試合の帰り、電車に乗って帰っていると姉ちゃんとシュウさんが通う高校の最寄り駅で二人が一緒に乗ってきた。

その頃はまだ“ただの友達”だったけれど俺にはわかっていた。

“シュウさんはきつと姉ちゃんの事が好きなんだ”

帰宅ラッシュで混雑する電車内で姉ちゃんが他の乗客に押し潰されないよう庇うようにして立っていたシュウさんの姿を見てそう思った。

尤も、当の本人・姉ちゃんの方はそんなシュウさんの気持ちなんてまるで気付いてないみたいだったけれど。

でも、今は二人を見ていて“とてもお似合いのカップル”に見える。なんだかんだ言ってお互いがお互いの事を思い合ってる。

だから、そんな二人がとても羨ましく思えるんだ。

数日後の夜。

夕食が終わってシユウさんが姉ちゃんと会っている間、俺も外の風に当たろうと民宿の玄関を出ると、

隣にある体育館からボールを打つ音が聞こえてきた。

（まだ誰か練習してるのかな？）

そつと開いている扉から覗いてみる。

（……あ）

すると、それはあの子だった。

一人で壁打ちをしている。

「……？」

彼女は俺に気が付くと壁打ちを止めて顔を向けた。

「あ……、なんか音が聞こえたから、まだ誰か練習してるのかなー？　って」

「一年生はお風呂に入る順番が一番最後だから待っている間に練習しようと思って」

「練習キツいの、疲れてないんですか？」

この高校の女子バレー部はインターハイの常連で常に上位の成績を収めている。

半端な練習量ではないはずだ。

「疲れてない訳じゃないけど、少しの積み重ねが大事だと思うから」

確かにそうだ。

そして、彼女が再び壁打ちを始めると傍に置いてあった彼女の携帯が鳴った。

…… R R R R R R、 R R R R R R、 R R R R R R、

「はい……うん、わかった。すぐ戻るね」

そう返事をして電話を切った彼女。

「私、お風呂に行くから。じゃあね」

「あ、はい」

バレーボールを抱えて靴を履き替える彼女。

すると、何を思ったのか俺の方に振り向いてこう言った。

「おせっかいだとは思っけど……君も休んばかりいないでまともに練習に参加したら？」

どうして岡嶋先生や部員のみんなが何も言わないのか、私には不思議でならないわ」

「ああ、えつと、俺……」

事情を説明しようとしている間にもスタスタと民宿の方に戻って行く彼女。

（ええー？ 人の話も聞かないでなんで行っちゃうかなあ？）

なんとなくムカついた。

ついさっきまでのあの子への感情がなくなり、メラメラと燃えるような対抗心に変わる。

……所詮は一目惚れだったのだ。

翌朝。

「あれ？ 誠、これ十六周目だぞ？」

いつものように朝のロードワークを始めて十六周目。

俺がそのまま走っていると隣を走っているシュウさんが苦笑いをしながら言った。

「今日からみんなと一緒にメニューにするっす！」

「大丈夫か？」

「はい！」

だって、自分が練習熱心だからかどうかは知らないけど、まるで俺が練習を本気でやってないみたいな言い方をされては

どうにもムカつく。

俺だって本当はみんなと一緒に同じ練習メニューがしたい。

それをこなすだけの体力だってあると思っているんだから。

番外編・誠の恋・2・

「あれ？ 宗、誠は？」

一日の練習が終わり、メグちゃん達バレエ部が一足先に食堂で夕食を摂っていると、

宗達バスケット部も食堂に入ってきた。

しかし、いつも金魚のフンみたいに宗の後ろをくっついていて誠の姿がない。

「うーん……それが、誠のヤツ、疲れたのかメシを食う元気もねえって言って大広間で休んでる」

「え、ご飯も食べられないって……おかしいな」

「今日は朝から飛ばしてたからなー、のぼせてなきやいいけど」

宗はそう言つと武田くんと一緒に夕食を食べ始めた。

そうして、宗と武田くんがお風呂に入ろうと大広間に入浴セットと着替えを取りに行った直後、

「琴美！ 誠が熱出したー！ーっ！」

宗が食堂に飛び込んで来た。

「ええっ！？」

あたしは宗と一緒に、すぐさま男子バスケット部が使っている大広間へ行った。

すると、畳の上で誠が茹でダコみたいに真っ赤な顔で寝転んでいた。

「誠、どうしたのっ？」

あたしがおでこに手を当てるとジューと音がするくらい誠のおでこは熱かった。

「姉ちゃん……俺、死ぬのかなあ……？」

「そんな訳ないでしょ。さっき宗に聞いたけど、先生との約束破つてみんなと同じメニューの練習をしてたんだって？」

きつと約束破ったバチが当たったんだよ」

「だって……」

ぐったりしたまま頬を膨らませる誠。

「向かいの個室にお布団敷いてあげるから、そこまで歩ける？」

そう言つて誠の上半身を起こそうとすると、

「いいよ、琴美、俺が負ぶつて連れて行ってやるよ」

宗がそう言ってくれた。

「宗、ありがとう」

誠を個室まで連れて来てくれたお礼を言つと宗は「どういたしまして」と小さく笑つた。

「姉ちゃん、お腹空いた……けど、しんどくて食べられそうにない……どうしたらいい?」

布団の中で辛そうにゆっくりとした口調で空腹を訴えた誠。

しかし、辛くて食べられそうにないとは……一体、どうしろと?

「そうめんか冷やむぎとかは?」

すると、宗が苦笑いしながら言つた。

「それがいいかも……」

久しぶりに見るへ口へ口の誠。

「わかつた。じゃあ、作つて来てあげるから」

どうしてこんなになるまで頑張ったのかわからないけれど、本人なりに理由があるのだろう。

「琴美、誠くん、大丈夫なの？」

食堂に戻るとメグちゃんが声を掛けてくれた。

どうやら心配してくれていたみたいだ。

「うん、なんか練習を頑張り過ぎちゃったみたいで……のぼせたみたい」

「昨日まではちゃんと無理のないように休憩取りながらやってたのにね？」

やっぱり中学生には高校生と同じメニューはキツイんだね」

「一緒にやってるうちに楽しくなって我慢出来ずにフル参加しちゃったんじゃないかな？」

「誠くん、バスケット好きだもんね」

「誠は小さい頃から野球とかサッカーとかいろいろやってたけど、バスケットだけは一番真剣にやってるからね」

「晩御飯、まだ食べてないんでしょう？ やっぱり食べたくないって？」

「おそうめんか冷やむぎなら食べられるって」

「そう……それならまだ安心だね。熱で何も口に出来なかったら悪化しちゃうしね」

「……と、そんな会話をしているメグちゃんの隣の隣の席では比嘉さんが青い顔で俯いていた。」

（気分でも悪いのかな？）

「比嘉さん？　大丈夫？　冷たい麦茶あげようか？」

「……あ、いえ、大丈夫です、ありがとうございます」

すると彼女はパツと顔を上げて言った。

（あたしの気のせいかな？）

何か考え事でもしていたのかもしれない。

あたしはそのまま特に気に留めず誠のおそつめんを茹で始めた

。

……コン、コン、

「誠、おそつめん持って来たよ。開けるよー？」

そう言って部屋の中に入ると誠はお布団の中で苦しそうに息をしていた。

宗と武田くんはお風呂に行ったのかいなかった。

「起きられる？」

「……………うん」

ゆっくりと瞬きをしながら返事をした誠は座椅子と小さなテーブルを用意してやると、

もぞもぞと起き上がって座椅子の背凭れにやや体重を預けながら座った。

「食べられそう？」

「うん……………お粥とか雑炊でも良かったんだけど……………、なんかフウフウするのにも体力使いそうで……………」

「……ねえ、誠、なんでそんなに頑張っちゃったの？ 昨日まではちゃんと岡嶋先生の言う事聞いて

無理なくやってたじゃない？」

「……男の意地」

誠はおそめんを数本ずつお箸で摘み、口に運びながら力なく答えた。

「なんか、よくわかんないけど……その“男の意地”とやらは、もう少し体力つけてからにした方がいいね」

「うん……俺も、案外ヘタレだって自覚した……」

「あのね、誠はみんなと違ってまだ中学生なんだから、いくら一年生部員と一歳しか変わらないと言っても、

やっぱり部活のやり方とかも中学と高校じゃ全然違うと思うし、特にうちの高校のバスケット部は都内でも

結構優秀な成績を収めてるからそれなりに練習もキツいと思うの。

そこにいきなり参加したんだもん、みんなと同じメニューをこなしてたら体がどうにかなるのは当たり前だと思うよ？」

「……うん」

「あたしは姉だからって訳じゃないけど誠はヘタレなんかじゃないと思ってるよ？」

誠が頑張ってるのはバスケット部のみんなもわかってる事だし、誠自身が楽しくなくなったら

何の為に合宿に参加させて貰ってるのかわかんなくなってきたやうじゃない？」

「うん……」

「大丈夫、今夜一晩ゆっくり寝てたら明日には熱も下がるよ」

「うん……」

誠はあたしの話に力なく返事をしながら、ゆっくりだけとおそめ
んを完食した。

「後でまた様子見に来てあげるから、大人しく寝てるのよ？」

「うん……姉ちゃん」

「うん？」

「喉渴いた……」

誠は熱が出ている所為で口で呼吸をしているのか、おそめんを食
べる時も麦茶を飲んでいたにも拘わらず、

喉が渴いたと訴えた。

まるで体全体から水分が蒸発しているみたいに。

「じゃあ、すぐに何か飲み物持って来てあげるから、横になってて」

「うん……」

そう言って静かに目を閉じた誠。

いつもは騒がしいとさえ思っ弟の弱々しい姿を目にするのはなんか複雑な気分だ。

そうして、部屋を出ようとドアの取っ手に手を掛けると、向こう側に人の気配を感じた。

……ガラ　ッ、

そうつとドアを開けてみる。

「あ……っ」

すると、そこに立っていたのは比嘉さんだった。

「あ、あの……っ」

あたしが訊ねるよりも前に口を開いた比嘉さん。

「うん？」

「ごめんなさいっ、私の所為なんです……っ」

そう言って、申し訳なさそうな顔でぺこりと頭を下げた比嘉さん。

「????」

あたしは何が何だがさっぱりわからず首を捻った。

「実は……昨日、」

比嘉さんは、ゆっくりとした口調で昨日の夜の事を話し始めた。

誠があたしの弟で、ましてや中学生だとは知らず、この合宿も岡嶋

先生から一時間毎に休憩を取る事と

無理はしない事を条件に特別参加している事。

それを知らずに心無い事を言ってしまった。

その所為できつと誠が無理をしてしまったんだと。

「本当にすみませんでした……」

シユンとしている彼女の手にはスポーツドリンクのペットボトルがあった。

「これ……弟さんに渡してあげて下さい」

そう言っであたしにそのペットボトルを差し出す。

「それ、比嘉さんが直接誠に渡してあげて？　誠、喉渴いたって言うってたから、きつと喜ぶと思う」

「え……、で、でも……」

「誠が眠っちゃう前に早く、お願い」

あたしがそう言つと比嘉さんは躊躇いながらコクンと頷いて、部屋に入った。

番外編・誠の恋・3・

姉ちゃんが部屋を出て行ってしばらくした後、

「あ、あの……」

俺が目を閉じて横になっていると女の子の声が聞こえた。

（姉ちゃん……？ でも、声が違う……）

流石に毎日聞いている姉の声は仮令熱に浮かされていたとしても判別出来る。

（……誰？）

ゆっくりと目を開けてみる。

すると、そこには“あの子”の姿があった。

「あ……」

「えっと……よかつたら……これ、飲んでっ？」

そう言つてスポーツドリンクのペットボトルを差し出す。

「あ、ありがとう、ございます……」

とても喉が渴いていた俺は半身を起こしてそのペットボトルを受け取った。

（……美味しい……）

彼女が持つて来てくれたスポーツドリンクを一口、また一口と飲むとまるで体に浸み込んで行くみたいに喉を通つていった。

「あの……ごめんなさい……何も知らないのに昨日、あんな事を言つたりして……」

そして俺がスポーツドリンクを半分くらいまで一気に飲んだところで彼女が申し訳なさそうに言った。

「いえ……そんな……傍からみればそう感じるのは当たり前でしょうし……」

確かに俺はあの時、彼女の言葉にムカついた。

だから今日一日、みんなと同じメニューで頑張ったのだ。

……頑張った結果が、まあ、この様だけど……。

「でも……」

「……あ、それより……俺、まだあなたの名前、訊いてない……名前、教えてくれますか？」

彼女が沈んだ表情になり、何か話題を変えようとして咄嗟に思い付いた。

「えと……比嘉蘭子……君は？」

「平野、誠……です」

「誠、くん」

「はい……」

「本当にごめんね？ 私……」

……と、比嘉さんが言い掛けたその時、

「誠ー、大丈夫かー？」

シュウさんが入って来た。

「「っ!？」」

思わず驚く俺と比嘉さん。

「あれっ？ 比嘉さん、どうしたの？」

「え、いえ……ちょっと通り掛かって……」

よくわからない言い訳を口にする比嘉さん。

「ふーん？ まあいいや、それより誠、汗かいたまま風呂に入れなくて気持ち悪いだろ？ 体拭いてやるよ」

シウさんはそう言うと、数枚の蒸しタオルが入った洗面器を俺の傍に置いた。

「あ、それじゃ、私、行くね」

そそくさと立ち去る比嘉さん。

「あ、ありがとう、ございました」

彼女が……比嘉さんがこうしてお見舞いに来てくれるとは思っても見なかった。

俺は嬉しくて体を動かすのもしんどいけれどおじきをした。

（やっぱり、比嘉さんて良い人なのかも……）

翌朝。

「おっはよーございまーす！」

すっかり回復した。

顔を洗って食堂へ下りると岡嶋先生と女子バレー部の顧問の先生がお茶を飲みながら新聞を読んでいた。

「お、元気になったか？」

顔を上げて小さく笑みを浮かべる岡嶋先生。

「はいっ、ご迷惑をお掛けしてすみませんでした！」

「もう一日くらい休んでいた方がいいと思っていたんだが、その様子なら大丈夫そうだね。」

でも、これまで通り朝のロードワークは十五周までと一時間毎に休憩を取る事」

「はいっ」

そう返事をして、俺はシュウさん達と合流してロードワークに出掛けた。

そして、十五周で一足先に俺がロードワークから戻ると女子バレー部がロードワークに出掛ける前のストレッチをしていた。

ふと俺が比嘉さんの方に視線を移すと比嘉さんも俺の方に振り向いた。

軽く会釈すると、比嘉さんが小さく笑みを返してくれた。

（朝っぱらから可愛いなあ）

……てっ！？

（俺……実はまだ比嘉さんに一目惚れ継続中　　？）

その日の夜　　、

いつもは夜七時までである午後の練習が一時間早く切り上げられた。

またまたご近所の精肉屋さんから大量の肉を安く譲ってもらったらしく、

今夜はみんなで外でバーベキューをしようという事になったのだ。

精肉屋さん曰く、大量発注したお客様が突然キャンセルされたんだそう。

山のように積まれた肉と野菜、それに魚介類。

大きな炊飯器の他に鉄板も用意してあるという事は後で焼きそばも作ってくれるみたいだ。

「琴美が焼きそば作ってくれたらいいんだけどなあ」

シュウさんは姉ちゃんの焼きそばが食べたいらしく、肉よりも寧ろそっちが楽しみみたいだ。

「それじゃあ、始めちゃってくださいーい！」

従兄弟の貴兄がそう言うのと、みんなは待ってましたと言わんばかりに肉や野菜、ソーセージ、海老やイカを

一斉に焼き網の上に乗せて焼き始めた。

「琴美、こっちこっち」

いつもはシュウさん達バスケ部がご飯を食べている間、姉ちゃんは

厨房にいて一緒には食べられない。

だけど今日は叔父さんや叔母さん、従兄弟の貴兄も姉ちゃんもみんな一緒にバーベキューだ。

だから、シュウさんは姉ちゃんと一緒に食べたいのだろう。

にこにこしながら姉ちゃんに手招きをした。

姉ちゃんは藤村先輩の方に行きかけていた足を止めてこちらに近付いて来た。

基本的に姉ちゃんは、みんなの前ではなるべくシュウさんとは一緒にいないようにしているみたいだ。

シュウさんはそんなのお構いなしみたいだけど。

「誠、お肉ばかり食べてないで野菜も食べないと」

そして、しばらくすると肉、肉、海老、イカ、肉、肉……という一口一口を繰り返していた俺に姉ちゃんが言った。

（バレた……）

「サンチュに包んで食ったら美味しいぞ？」

すると、それを横で聞いていたシュウさんが苦笑いしながら言った。

「そういえば、シュウさんて好き嫌いなんですか？」

シュウさんは肉をサンチュを巻いて食べたり、キャベツやピーマン、人参、玉ねぎもバランス良く食べている。

「あるよ、椎茸が苦手かな。ある程度細かく切ってあったら食べれない事もないんだけど、

今日みたいにほぼそのまんまのは無理」

そう言ってバーベキューの食材の中にある椎茸を指した。

石突きと軸の部分を取り除いてあって傘の表面に飾り包丁が入れている。

「誠は野菜嫌いなのか？」

「野菜だけじゃなくてお魚も嫌いだよー?」

シュウさんの質問に姉ちゃんが勝手に答える。

(う……)

「けど、俺も中学まではそんな感じだったぞ?」

「シュウさんはどうやって克服したの?」

「克服というか、俺は師匠のお言葉が切欠で何でも食べるようになったかな」

「シュウさんの師匠って誰っすか?」

(てか、何の師匠だろ? やっぱバスケかな?)

「親父」

「へ……？ て、お父さんですか？」

「うん、俺の“人生の師匠”。んで、その師匠がさ、『好き嫌いが多いと損するぞ』って。

親父曰く、『好き嫌が多いとせつかく好きな女の子が何か料理を作ってくれても美味しく食べられないぞ』って。

心から『美味しいよ』って言ってあげられないだけじゃなくて、

肉ばっか食ってたらそのうちデブになるから女の子に嫌われるのがオチだって」

「なんか深いっすね」

「だから誠もデブにならないように何でもバランス良く食べた方がいいぞー？」

「はいっ」

（そうだよな、比嘉さんが“デブ専”じゃない限りこのままでは嫌われてしまう）

俺は今まで手を付けていなかった野菜に箸を伸ばした。

「まったく……あたしやお母さんがいくら言っても聞かなかったのに、宗の言う事なら素直に聞くんだから」

隣では姉ちゃんが苦笑いをしていた。

しれ〜っと目を逸らしながら比嘉さんの方に視線を移す。

すると、比嘉さんはサンチュに肉と人参を巻いて食べていた。

美味しそうに頬張って、ご飯もモリモリ食べている。

（あー、いいなあー、いっぱい食べる子って）

うちの姉ちゃんは運動をまったくしないからか、そんなに食べない。

ご飯もおかわりはしないし、茶碗も普通サイズだ。

だから余計にいっぱい食べる女の子に憧れるのかもしれない。

番外編・誠の恋・4・

そうして、みんなで焼きそばを作り始めた時、

「わーっ！？ 比嘉ちゃん、それ、どうなってんのーっ！！」

藤村先輩の声が聞こえた。

「す、すみませんっ、実は料理、苦手で……っ」

俺が振り向くと比嘉さんが鉄板の前でワタワタしていた。

「誠、メグちゃん達の方を助けてやって」

シユウさん達の焼きそばをワサワサと作りながら姉ちゃんが言う。

「あいよっ」

これで堂々と比嘉さんの傍に行ける。

俺は彼女の所へ飛んで行った。

「俺、代わります」

そう言って比嘉さんが持つているコテを受け取る。

だけど、焼きそばを混ぜようとするとキャベツや肉、麺が鉄板に焦げ付いていた。

どうやら、そもそも油を引いていなくてこうなったようだ。

ならば、まずは油を足さなければ。

「誠くん、上手いねー」

油を足して具材と麺を混ぜて炒めながら塩とこしょうで軽く下味をつけていると藤村先輩が横から覗きながら言った。

「いつも姉ちゃんに手伝わされてますからね」

俺は姉ちゃんがご飯を作る時によく助手をやらされている。

そのおかげで今では簡単な料理はだいたい出来るようになったのだ。

「完成っす!」

「『『『『『わー』』』』』」

焼きそばが出来ると鉄板の周りにいた数人から拍手が沸き起こった。

(いやいや、そんな拍手する程の事じゃないし)

「誠くんも一緒に食べるでしょ?」

みんなのお皿に焼きそばを取り分けていると藤村先輩が俺の分の新しい取り皿と割り箸を用意してくれた。

「はい」

もちろん、俺はその取り皿を受け取った。

だって、比嘉さんと一緒に焼きそばが食べられるんだもん。

「美味しい」

俺の隣では比嘉さんがにこにこしながら焼きそばを食べていた。

（やった　大成功！）

俺は心の中でガッツポーズをした。

その日の夜　、

大広間の窓から海を眺めているとシュウさんがどこかへ歩いて行くのが見えた。

（あ、そっか、今から姉ちゃんとデートだ）

シュウさんと姉ちゃんは毎晩一緒に海を眺めている。

けど、大広間の窓からは見えない場所で会っているあたりはシュウさんの計算だろう。

だって、姉ちゃんにはこういう計算は出来ないから。

（俺も外の風に当たって来よっかなー）

民宿の玄関を出ると潮の香りがした。

いや、正確に言うと民宿は海の目の前にあるから常に潮の香りはしている。

それが外に出るとより一層強く感じられるのだ。

（小さい頃は貴兄とよくここで釣りをしたなあー）

釣った魚を叔父さんと叔母さんが捌いてくれて刺身や煮付け、塩焼きなんかにしてくれて食べさせてくれた。

その新鮮な味を知っているから普通にスーパーで売っている魚はあまり好きじゃないのかもしれない。

「いや……食材は元より、調理をする母さんの腕に問題があるのか？」

「……で、そんな事言ったら可哀想だな」
ポロリと出た独り言。

「誰が可哀想なの？」

すると背後から声がした。

一瞬、母さんかと思ったけれど、そんな訳はない。

「あ……比嘉さん」

「隣、座ってもいい？」

「は、はい」

俺がそう返事をすると思嘉さんは俺の隣に腰を下ろした。

「二ノ宮先輩は？」

いつも俺がシュウさんにくっついてるから、比嘉さんは俺が一人でいる事に疑問を抱いたらしい。

「シュウさんなら姉ちゃんと多分あっちの方でデートしてますよ」

「平野先輩と？」

「シュウさんと姉ちゃん、付き合ってるんすよ」

「えっ、そうだったの？全然知らなかった。だから平野くんがこの合宿に参加してるんだ？」

「あ、いえ、最初から参加してた訳じゃなくて、姉ちゃんのピンチヒッターで俺が呼ばれて、

姉ちゃんが復活して俺は家に戻るはずだったんですけど、シユウさん達がちょうど合宿してたから、

練習を見学させてくださいって先生にお願いしたら『練習にも参加していいよ』って言うてくれたんです」

「岡嶋先生、太っ腹」

「俺が来年、姉ちゃんと同じ高校を受けたいって言ったら、それならって参加させて貰える事になったんです」

「うちの学校受けるの？」

「はい、他に行きたい高校もないし、だったらシユウさんと一緒にプレイしたいから、

受けようかなーって」

「二ノ宮先輩、姉弟で好かれてるんだ？」

クスッと笑う比嘉さん。

「去年、姉ちゃんがシュウさんの練習試合を観に行く時に一緒に連れて行って貰ったんですけど、

その時に初めてシュウさんのプレイを観て感激したんですよ」

「二ノ宮先輩、上手いもんね。じゃあ、来年からは私とも同じ体育館で部活する事になるんだね？」

「でも、それって俺が入試に受からないと駄目ですよ？」

「そうだけどー……、じゃあ、受験勉強を頑張れるように時々、励ましてあげる」

「へ？ どうやって、ですか？」

「電話とかメールとか。平野くんの携帯番号とメアド教えて?」

そう言つて携帯電話をポケットから出した比嘉さん。

「えーと……俺……、携帯持ってないっす。まだ、中学生なもので……」

「あ……そつか。えーと、じゃあ、パソコンとかは?」

「姉ちゃんと一緒に使ってるのならありますよ」

「そっちのメアドは?」

「一応、自分専用のはあります」

「じゃ、それ教えて?」

「は、はい」

なんだか、とんでもなく嬉しいんだけど驚きの展開だ。

数日後、

今日でシュウさん達のバスケット部は合宿終了。

本当なら俺も明日は家に帰るところなんだけど、実はここの民宿とも古い付き合いがある

地元の親子二代で漁師をしているおじさんが、ぎっくり腰で漁に出られなくなったとかで

貴兄がヘルプでそのおじさんの代わりに三日程船に乗る事になったらしく、

俺が貴兄の代わりに民宿のお手伝いを叔父さん達に頼まれた。

こんな風に地元の人達で助け合っているから、食材を安く譲って貰ったり出来るのだろう。

「了解！ 貴兄程役には立てないだろうけど頑張る！」

俺は民宿のお手伝いを二つ返事でOKした。

それに俺の我が侘でシュウさん達の合宿にも参加させて貰って散々お世話になったし。

何より、比嘉さんと一緒に居られる。

まあ……本音は主に後者の方なんだけど。

そして夜、シュウさんがやけにシュンとしていた。

「どうしたんすか？」

気になって声を掛けてみる。

「はぁ……、明日からまた琴美と会えなくなるんだと思うと憂鬱で……」

「なぁ～んだ、そんな事っすか」

「何言っただよ、誠！ これは大問題だぞっ！」

ズズィッと顔を近付けて訴えるシュウさん。

「いいよなー、誠は。家に帰れば琴美に会えるんだから……」

……で、また溜め息を吐くシュウさん。

「琴美が作った料理も食べ放題だし」

（シュウさんで、本当に姉ちゃんの事が好きなんだなー）

弟の俺にとってはいつも口うるさい姉。

だけど、確かに姉ちゃんは料理は上手い方なんだと思う。

よく母さんと一緒にご飯を作っているし、休みの日もたまにクッキーとか焼いてくれる。

そっいう意味ではちょっと自慢出来る姉かな？

絵も上手いし。

ただ、いろんな意味でものすごく鈍いけど。

そして俺は比嘉さんとは特に何もないうまま三日が過ぎ、家に戻った。

（夏休みの宿題の続きやんなきゃな……）

宿題は民宿にも持って行っていた。

しかし、シユウさん達の合宿に参加させて貰う事になり、その後、貴兄のピンチヒッターをしていたから

殆ど捗っていなかった。

問題集なんかはなんとかなるとして、自由研究をどうするかが俺にとって大きな問題だった。

“自由研究”というだけあって何を題材にするかも自由。

でも、それが逆に何をどう研究していいのかわからないのだ。

こんな時はネットで調べるのが一番。

俺は姉ちゃんと共同で使っているノートパソコンの電源を入れてインターネットのブラウザを起動させた。

念の為、メールもチェック。

すると、新着メールのアイコンが出ていた。

（あれ？）

俺のパソコンのメアドを知っている人間は限られている。

一緒にメアドの設定をした家族と学校の友達、後は比嘉さん。

けれど、家族から態々パソコンの方にメールは送らないだろう。

それに今までだって新着メールを確認したらスパムだったというオチは何回もある。

今回もどうせスパムメールだろうと思っていると、

“こんにちは、比嘉です”

タイトルが目について驚いた。

（比嘉さんっ？）

俺はすぐに本文を開いた。

- - - - -

合宿と民宿のお手伝いお疲れ様。

もうそろそろお家に着いた頃かな？

私の方は今、お昼ご飯を食べた後の休憩中。

今日はカレーだったよ。（＾－＾）

平野くんも食べてから帰れば良かったのに。

r a n

- - - - -

（やった！ ホントにメールくれた）

- - - - -

ふっふっふっ

実はそのカレー、俺も今朝食べたんすよ。

て言っても、民宿を出る前に食べたから

遅い朝食ですけど。

でも、家に帰って見たら母さんが

カレーを作っていました（笑）

インド人並みにカレー好きだから

全然有りなんですけど、

びっくりしました。

m a k o t o

-
-
-
-
-
-
-

俺は嬉しくて即行返事を返した。

-
-
-
-
-
-
-

あはは（＾・＾）

じゃあ今夜もカレーなんだね。

私もカレー大好きだよ。

平野くんがうちの高校に

合格したら二人でカレーの

食べ歩きに行こう！

r a n

- - - - -

すると彼女からまたすぐにメールが来た。

(やったあ)

そして、

この日から俺と比嘉さんは時々メールをするようになった。
。

番外編・誠の恋・4・（後書き）

これにて番外編は完結です。

ありがとうございました。 m ((m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0595e/>

First Kiss

2011年9月22日00時03分発行